我が道を行ったら明後日の方向だった

てぃしぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我が道を行ったら明後日の方向だった

【Ｎコード】
Ｎ３２５７Ｘ

【作者名】
てぃしぃ

【あらすじ】
　某所に投稿していた作品ですが、移転してきました。
輪廻転生システムのエラーで弾かれた主人公は、願いを幾つか叶えて貰った上で転生する事に。ネギまの世界へ生まれ出た主人公は、自らの為に原作ブレイクを狙い始めた……

第０１話（前書き）

当作品は、原作ブレイク、オリジナル設定、転生オリジナル主人公、ＴＳ要素、百合要素、ハーレム要素、アンチ要素、チート要素を含みます。これらが苦手な方にはお勧めいたしかねます。

話の大筋は既に決まっておりますので、趣味の合わない方は黙って回れ右するのをお勧めいたします。

ハーレム要素と１５禁要素はありますが、基本的には描写は薄いので御勘弁願います。

派手な戦闘描写を望む方のご要望には応えられないかと思います。

複数の作品から能力を持って来てますが、ご了承下さいませ。

以上の事項を承知で読み進めて下さる方に心から感謝の意を表します。

なお某所にて掲載していた部分に改訂を加えておりますが、それでも以前に見て反発や嫌悪を覚えた方はスルーなされるのをお勧めいたします。

第０１話

「お主には転生して貰う」
妙に目がチカチカする見た事が無い殺風景な景色に驚いている私に、不意に話しかけてくる声があった。
「転生ですか。って、ええっ！？」
「何を驚いてる。まさか自分が死んだのも把握しておらなんだか？」
白いシーツみたいなのを被った白髪白髭の御老人が無茶振りしてくるが、私に心当たりはとんと……とんと……とんと……って、ああっ！
「ようやく思い出したか。周りを見ていないバカップルに車道に押し出されて転び、携帯電話に夢中で前方不注意な運転手の乗るトラックに勢い良くひき潰された挙句に、後続の都市間バスに弾き飛ばされて電柱に貼り付いた肉餅と化した童貞Ａ君」
「妙に生々しい表現はともかく童貞はちょっち勘弁して貰えますかねぇ」
「ではヘタレで良いかのう」
「……で、本題は？　けなしに来たとか言われるとやさぐれますよ」
主に私の心が。
もっと図々しく生きられたら、多分未だ死んでなかったでしょうし。
「お主が転生するに当たって１０個の願いを叶える事になった。さっき１つ叶えたから残り９個だな」
「（童貞呼ばわりを止めるってだけで１個ですか）その願いって何でも良いんですか？　転生後に得られる能力とか生まれた環境とか」
「そういう風に使うのが普通だな」
「漫画や小説のキャラクターの一人と同じ能力と技術と知識が欲しいって願いは１つで大丈夫なんですか？　それとも３つ分になりますか？」

「それは原則として1つだな。初代ウルトラマンやバオーやガイバーなどのように共生関係な場合は複数と数える事も有るが」
なるほど、それは融通が利きそうだ。
それを考えると、さっきいきなり1個減ったのが痛いがチート過ぎる能力盛り沢山で人生順風満帆というのも思わず右手が痛くなってしまうからなぁ。って、そういうチート能力添付できるって事は荒事のある世界に転生するって事か！？
「ところで私はどんな世界に転生する事になるんですか？」
「基本的にはこちらがランダムで選ぶ事になっているが、願いを使えば希望する世界、例えば漫画や小説などの舞台に酷似した平行世界に送る事もできるぞ」
すると世界観を大きく逸脱した能力を手に入れると立ち回りに気をつけないと拙い事になりそうだし、下手な世界に送られて手詰まりになっても厳しいから、ある程度知ってる作品の中で割りと過ごし易そうな世界に転生しておくべきかな。
「分かりました、ありがとうございます」
そうなると実質的に使える願いは8個か。うち1個は親への恩返し、1個はＨＤＤの中身含む所有してる萌えアイテムの処分に使いたいから、残りは6個……何にしよう。
こういうので定番ネタな《王の財宝》やら《無限の剣製》やら《文珠》やらは便利で強力な能力だけど、ありがちだから右に倣うのは気が進まないし。
……良し、決めた。
実用性重視で、かつ他人が余り選びそうにない趣味に走ったパターンにしよう。
「じゃあ願いを言いますけど、良いですか？」
「うむ」
「先ず一つ目は、残してきた家族が幸せに人生を送れるようにして欲しいです」
私がそう言うと、老爺は心の中を読んでいなかったのか驚きの表

情を浮かべた。
「いきなりがその願いか。うむ、承知した。……最近は自分の願いばかり優先した挙句に家族への気遣いを忘れる輩が多いからな。感心感心」
　別に感心されたくて願ったわけじゃないんだけどね。しょせん自己満足の類だし。
「二つ目は、私の部屋にある書籍・ＣＤ・ＤＶＤ・ゲーム・ＰＣの中身を全部私の記憶に移して自由に閲覧できるようにして欲しいです。その際、転写元のデータは全部破棄して欲しいんですけど大丈夫ですか？」
　書籍と言っても漫画やライトノベルが大半なんだけどね、実のところ。
「本来なら願いを二ついただくところなんだが、サーヴィスしといてやろう」
「三つ目は、さっきの願いで閲覧可能なものの続きと、新規で私が見たりしたものを記憶して同様に閲覧できるようにして欲しいです」
「うむ、承知した。全く問題ない」
「四つ目は【魔界都市ハンター】の“ドクター・モヒカン”の能力……特に彼の医療技術とメス捌きを修得したいです」
「……承知した」
　これが通ったのか。割と無茶な人物なんだけどな、この御方ってば。なら、さっき思いついた願いで引っ掛かりそうなのは残り一つかな？
「五つ目で【烈火の炎】の“幻獣朗”、六つ目で【鉄鍋のジャンＲ】の“秋山醤”、七つ目で【まじしゃんず・あかでみぃ】の“魔導師ファルチェスク”、それぞれの人物についての能力と技術と知識を修得したいです」
「うむ、承知した。……しかし今まで風の噂に聞いた者達とはだいぶ違う希望だな」
「戦いたいと思うかどうか不明なのに、戦闘特化の能力ばかり貰っ

ても勿体無いじゃないですか」
「道理ではあるな。で、残る願いはなんだ？」
「八つ目は【ディル・リフィーナ世界】で神の墓場に捨てられた神格者級魔神……できれば機工女神の神核と、それに付随する能力が欲しいです」
ディル・リフィーナ世界というのはエウシュリーというエロゲレーベルが出してる【戦女神】や【幻燐の姫将軍】とかの舞台となっている世界の事で、神格者ってのはある種の超人みたいなものである。が、世界設定的にこれでもかとばかりに死にまくってるので神の名を冠するくせに意外と有難味が薄い存在でもあったりする。今回は覇権に破れた上に話に残っているかどうかさえ怪しい神を狙っているから、尚更かもしれないけど。
「……承知した。しかし、お主ニッチ狙いが好きだな」
「性分でして。で、最後の願いですが、私を【魔法先生　ネギま】漫画版の世界に酷似した平行世界へ転生させて欲しいです」
「ふむ。最後は転生先の指定か、堅実であるな。承知した」
老爺がそう答えると、私の意識はいきなり遠くなっていく。
これが転生なんでしょうかね？

「ようやく処理し終わったか。今度のは少々手強かったのう」
ねじくれた杖をバットの如く振るって人魂を打ち飛ばした老爺が、ホッと一息吐く。
輪廻転生システムにある些細な欠陥により、ごく僅かな割合の魂が地獄の魂処理工程からこぼれ落ちて輪廻の輪にすぐさま戻せなくなるのは珍しくもない出来事だ。
しかし、１０個と提示した願いを９個に減らしたにも関わらず抗議しなかったり、願いの数を増やす願いをしなかったり、転生先の基準で身に余るような願いばかりを並べたりしなかった者は、実に

久しぶりの事であった。
願いが大きければ大きいほど、転生先の世界の理から外れていれば外れているほど、処理工程の欠陥のせいで溜め込んでしまった“力”を魂ごと消耗させ、輪廻の輪に戻し易くなる。だが、対象世界が【ネギま】で、あれしきの願い事では魂を消耗させて自爆的に早死にさせるどころか、取り込まれた“力”の全てを使い切らせる事さえ難しかったのだ。
溜息を吐きたくなるのも道理とは言えよう。
ともあれ、先発の転生者が原作に影響のある事をやらかす前に逝去した【ネギま】の平行世界のうちの一つに転生はさせ終えたので、彼のやるべき仕事は終わりであった。
後はこっちの世界に手出しをして来なければ、死ぬまで放置である。
不始末の詫びと言うよりも、寧ろ産業廃棄物処理に近い転生作業はこれにて終了した。
以後、本作でこの死後の世界が出て来る事は無い予定であるが決定ではない。

言葉にできないほど出鱈目な苦痛。骨の髄まで容赦なく刻み込まれる匠の技、心臓をぐりぐり抉られる方がマシじゃないかと感じさせられつつ会得していく特殊な能力、頭が破裂しそうなほど痛めつけられながら劇的に容量が拡大されてゆく記憶領域。
真っ暗闇の中で苦悶しながら段々と前世の記憶が消えてゆく恐怖を味わう日々は、圧し潰されて意識が飛んでしまったほどの狭苦しさを経て、ようやく区切りを迎えた。
周囲はぼんやりと明るくなったり暗くなったりを繰り返し、生乳か哺乳瓶かと思われる感触のもので授乳され、堪える事もできずに

大小共に垂れ流し、なけなしだろう筋肉は酷使を訴えて熱く痛み続ける日々に変わっただけなんだけど。

それでも、もう記憶が消えていかないみたいなのが少しだけ安心できた。

さて、私は誰なんだろうか。

未だ耳が良く聞こえないから私の立ち位置が全然分からない。

それが分かっても赤ん坊のうちはロクに行動できないので、何を知ったところで意味が無いかもしれないけどね。

第０１話（後書き）

リリなのとどっちにするか迷いましたが、原作持ってるネギまの方を採用したです。

いや、テックレベル障壁が大きくて支障が出るゼロ魔や恋姫無双なんかと違って、行く世界の希望変えるだけでＩＦルートにできるのですけどねｗ

◎注釈

ドクター・モヒカン：医の道を極めたとまで絶賛された男。メス捌きはもはや神業。

幻獣朗：麗十神衆の一人で、幻術と心霊医術のエキスパートな外道爺い。

秋山醤：負けず嫌いの凄腕中華料理人。その料理知識は中華のみに留まらない。

ファルチェスク：天才アイテムメイカーな魔導師。魔法の腕自体は並み以下。

神格者：字義通り神の格に至った者。不老や高い身体能力や再生能力などが特徴。

機工女神：人造の神で、能力はピンキリ。神々の戦争に負け、大半が姿を消した。

第０２話

首が多少なりとも据わってくる頃には、生まれる前から続いていた寄せては返す津波の如く全身を激しくさいなんでいた筋肉痛や頭痛や幻覚症状が治まってきたので、ようやくちゃんとした考え事に集中できる余裕が出てくるようになった。

今も生理現象の合間に思考してるようなものだけど。

ともあれ重要なのが『今が何時かで、何処にいるか』という事だ。

耳はともかく目が未だはっきりとは見えないので情報が推測し難いのだ。

漏れ聞こえる話し声が日本語だから、日本語圏なのは確かだろうけど。

身に備わった機工女神としての特殊能力を使って機械と融合して内部データを読み取ろうにも、周囲にあるのはベビーベッドぐらいみたいだから無理だしなぁ。

明治維新よりも前だったら歴史改変に乗り出しつつ麻帆良の地を確保しとくべきだろうし、そうでなくても表の戦争に関われる年代なら動きようは幾らでもある。

転生直前に貰って詰め込まれた知識の中には未来的な科学知識までもが混ざっているみたいなので、その気になれば室町時代に蒸気船の建艦技術を普及させたり、日露戦争の時代に長距離爆撃機を登場させたりなんて無茶な技術振興もできそうだからだ。

原作より３０年以上前に出現していたなら、被災者の救援などで魔法世界に赴くのも考慮に入れるべきだろう。大規模戦争の混乱に乗じて色々とやらかし易いし、役に立ちそうな人脈を作れる機会もあるかもしれないしね。

２－Ａの面々やネギと同年代に生まれたんなら、やはり原作時期……つまりネギが来日する前に麻帆良の学校のどれかに通っておきたいと思う。あの美少女揃いの方々を見逃すのは惜し過ぎるからと

いう理由なのは言うまでも無い。
そして最後……超が生まれた本来の時代である原作の１００年後だった場合、超と協力して時間逆行に同行できるようにするべきだろう。魔法世界が崩壊して、中に住む人間が火星の荒野に放り出される未来を阻止するという目的は共有できそうだし。
でも……
とりあえず……
身体が成長して、ある程度動けるようになるまでは殆ど何もできないに等しかったり。
赤ん坊の身体の不便さを嘆きつつ、私は今日もオムツの中に湿ったブツを垂れ流す。
泣き声ならぬ、溜息を漏らして。

そんなある日のこと、突然お乳が貰えなくなった。おしめが換えて貰えなくなった。
滅多にはやらない泣き声を上げてみても誰も来る気配が無い。
棄てられたかも、と思わず氷柱が背を撫でるような心地になってしまうが、未だそうと決まったわけじゃない。
自前の声帯じゃ普通に声が出せないので、泣き声を幻術で呪文詠唱に変えてマジシャンズ・アカデミイ形式の探索魔法を発動させる。すると上手く発動してないのを示す不鮮明な画像で、階下の茶の間に倒れ伏している若い女性、この身体を産んでくれた人……つまり私の母さんが、いるのが見えた。
疲れて倒れてるのか、それとも……
もしもの可能性に思い当たり、私は今まで自重して親の前では普通の赤ん坊をやろうとした考えをすっ飛ばし、幻術を用いて自力で

動き回れるぐらいの身体……小学校低学年ぐらいだろう姿に変身して階下の茶の間へと急行した。

母さんは、息をしていなかった。
紙オムツの包みを手にしたまま冷たくなっていた。
でも未だできる事はある。
やってみるべき事はある。
私がチートな手段で受け継いだ“ドクター・モヒカン”の技が彼の域の端っこぐらいにまで届いているのなら、未だ母さんを助ける術は残っている。
何せ彼の医術は神業……死者をも甦らせられる程の業なのだから、死後それほど経ってない傷一つ無い母さんを蘇生させるぐらいなら、今の私でも可能な筈なのだ。
外道爺いである幻獣朗だって優秀な心霊医師ではあるから、彼を由来とする能力も併用すれば、私の未熟な医療技術の補助くらいにはなるかもだしね。

そして、私はチート技術をフル活用して、母さんの胸から毒々しい精霊を摘み出して捨て、心臓を再び脈打たせて、脳の活動を再開させ、心停止中に受けたダメージの軽減措置を終わらせ……らせ……
あれ？　ま、まだ部屋を片付けて母さんの記憶……を……

起きたら何故か母さんに連れられて電車の中だった。
ぼんやりとした視界に映るものと聞こえてくる音からして間違って無いと思う。
大きなトランクケース2つに詰められた古文書と曰くありげな勾玉、そして呪詛返しの御札2枚と探索封じの札2枚が私と母さんの道連れだ。

……って事は、母さんって裏の関係者!?
どうやら、そう暢気にもしていられないらしい。
原作で私のような人間はいないとなれば、誌面に出てる場面の裏であっさり死んでても不思議なんかじゃないんだから。
しかし、大技使い終わったら即座に気絶ってのは何とかしないとなぁ。
母さんを呪って心臓を止めてくれやがった奴等が押し込み強盗も用意してたらロクな抵抗もできずにあの世行きだった可能性が高かったし。アリバイ工作でも企んで死亡推定時刻近くにウチの近所をうろつくのを避けたからなんだろうけど。
こんな事を0歳で心配する破目になるとは、本当に物騒な世の中だ。
ちなみに、マジシャンズ・アカデミイ形式の魔法と幻獣朗の幻術と心霊医術は魔力を使う技術で、ドクター・モヒカンの医術は気を使う技術らしく、使うと精神力や生命力がごりごりと削れていくようなのは気絶する前にやらかした自重抜き行動で確認できた。
今度ディル・リフィーナの魔術も何処まで使えるか、使うとしたらどんなコストを消耗する事になるか調べておかないといけないだろう。急場でいきなり使って気絶したり、発動できなかったり、威力の加減に失敗したりしたら面倒な事になるからなぁ。
追っ手の有無やら今後の生活やら私と母さんの身の安全やら、心配事は他にも色々あるけど赤ん坊ボディじゃ魔法の連続行使どころか、長時間の思考にすらついてこられない。
てなわけで、おやすみなさ……

起きたら、やたらと濃い緑の気配が私達親子を迎え入れてくれた。
雲に届けとばかりに屹立する巨木、あれは恐らく世界樹と呼ばれているモノだろう。

と言う事は麻帆良学園にでも来たのだろうか？
色々と複雑な心境である。
しばらく母さんが移動するに連れて変わる光と影を楽しんでいたら、どうやら建物の中に入ったみたいだ。麻帆良の結界領域に入ってからできるだけ目立たない為に魔力を使わないようにしてるので、今の私では具体的に何処にいるかまでは良く分からない。
建物の中を移動して何処かの部屋に入ると、其処には大きな机に座った妙にデッサンの狂ったように見える怪人物と、私の視力だと特徴が良く読み取れない人物が立っていた。
「良く来たな八束（やつか）くん。ワシら関東魔法協会は君達を歓迎する」
「ありがとうございます」
そんな挨拶から始まった怪人物と母さんの会話を聞いたところ、私の生家である八束神社は日本の魔法使いを束ねる2大組織のどちらにも属さない独自流派の魔法使いだったのだが、国がダム建設の為に神社を氏子のいる村ごと取り壊す計画を立てたのを機に関西呪術協会に強引な勧誘をされていたらしい。即刻立ち退いて家伝の秘術の全てを差し出せば末席ぐらいには加えてやるなどという愚劣な言い草が勧誘の名に値するならだけど。
父さんは『八束神社は遥かな昔に先祖が倒した強力な蛇妖を封じ続ける為の重石であるから立ち退きはできないし、秘術を他家に渡すなんてとんでもない』と国側の担当者に返答しに行った帰り道で、何者かに襲撃されて帰らぬ人となってしまったらしい。
母さんが呪詛をかけられて死にかけたのは、その襲撃とほぼ同時だったそうだ。
私に対する呪術攻撃が無かったのは、母さんに呪詛をかけた当人が血縁関係をでっち上げて私の親権握った挙句に、神社の敷地はダム用地の一部として国に売り払って両親の保険金と一緒に自分のポケットに入れ、家伝の秘術書や古物は残らず強奪し、然る後に私を秘密裏に処分してしまうつもりだったのだろうか。……考え過ぎかもだけど。

ともあれ、西の長の部下掌握能力の低さには溜息が出る。
父さんの遺体を引き取りに行くのを諦めると呟いた母さんの言葉が酷く重かった。

その後、母さんが関東魔法協会を通じて国に売却した八束神社の御社の地下にある要石で封じていた蛇妖を、国からの委託を受注して封印の調査に赴いていた関西呪術協会の調査団が復活させてしまったそうな。多分意図的に。
蛇妖は復活したばかりで弱っていたにも関わらず、退治しようと襲い掛かった調査団をあっさり返り討ちにし、すぐさま派遣された討伐部隊の先遣隊も壊滅しかかったが、西の長直々に率いる本隊の増援を得て、ようやく再封印されたらしい。
その被害は関東魔法協会が把握しているだけでも、術者と剣士を合わせて十数人が食い殺され、その2倍以上の人数が大怪我を負うという大損害だったそうだ。それでも蛇妖が封印される前に受けた手傷の回復を優先したのか余り動き回らなかったせいで、一般人への被害が殆ど無かっただけマシな状況なんだけど。
おかげでダム建設の方も中止になったみたいである。
水を操って災害を引き起こす蛇妖の封印をダム湖の底に沈めて保守作業ができなくしてしまうなんて危険な真似は、流石の馬鹿旧家どもでも強行できなくなったようだ。
向こうの愚鈍どもは母さんがウチにあった秘術書を全部持ち出したのが被害の原因だと騒いで賠償請求しようとしているものの、国に売却する際に封印の扱いと蛇妖に関する資料のコピーは土地の権利書と一緒に国側の担当者に渡してあるので、単なる言いがかりである。こちらが提出した資料が出鱈目だと勝手に思い込んだ向こうの過失なのに……。
寧ろ暗殺を恐れて麻帆良の外に出れなくなったせいで未だに父さ

んの遺骨すら取りに行けず、そのせいで評判を落としてしまっている母さんに向こうが謝罪と賠償を行うべきであると思う。向こうの情報操作で生命保険は受け取るが遺骨は受け取りにいかない鬼嫁なんて題材でワイドショーが取材に来るよう仕向けられたせいで、産後間も無い母さんが心因性の体調不良で倒れてしまう破目になったのだから。せめて何か喋る事ができれば母さんを励ましてあげられるかもしれないのに……半端なチート能力と0歳児に過ぎない私の身体が恨めしい。

数日後、麻帆良大学病院に入院していた母さんは、赤ん坊なので行動に制限がある私が手を尽くす隙すら見つけられぬ間に、二度と手の届かない場所に行ってしまった。

今の私の技量と体力じゃ、火葬された後の骨と灰から人間を蘇生させるなんて荒業は到底無理な相談なのだ。

私が生まれてから二ヶ月も経たない1月の初めの寒い日の出来事だった。

第０２話（後書き）

関西呪術協会が暴走してます。でも、西の長の目が届くところならともかく、そうではないところだと普通に血生臭い事態も起こってると思うのですよ。

神鳴流の裏とかの事も真面目に考えると、どうしてもねぇ。

あと、首が据わるのが早いのはチート能力の影響です。

第０３話

先日、両親が関西呪術協会に所属する旧家の一派に殺された。
死因は、父さんが魔法関係の暗殺者による刺殺で、母さんが出産と呪詛による体調不良に心労が拍車をかけた三重苦による衰弱死だ。
家族愛を育む間も与えられないまま死別したので、面倒ごとを承知で私と母さんを受け入れてくれた関東魔法協会に多大な迷惑をかけてまで報復したいとは思わないが、いずれ機会が巡ってくれば徹底的に叩き潰すつもりである。
魂を焦がすほどの憎悪のせいで復讐を終わらせなければ前に進めないという心境なら話は別だろうが、私の場合はそうじゃないし。
ならば何を目標として努力を積み上げるべきだろうか。
テレビかラジオかは知らないが、以前にニュースの音を漏れ聞いた限りでは今は１９８９年の1月下旬らしい。つまり、私はネギまの３－Ａの生徒達と同年代な訳だ。彼女等が原作漫画と同様な日に生まれているならという条件がつくけれど。
それは、私が対処できそうな事件が絞られるという事でもあった。
原作では触れられてないので知らない事件や原作とは別の事件に化けてしまう事件とかも起きそうではあるけれども、全く見当もつかないよりは準備の目算は立て易くなる。
故にこそ考えてしまう。
いつ、何処で動くべきかを。
候補は幾つかある。
先ず二次創作小説的に最もありがちなタイミングは、ネギの住むウェールズの村が悪魔の群れに襲撃される事件への介入であろうか。
しかし、少し考えてみて没案にした。
先ず第一のデメリットは事件へ対処する難しさだ。原作通りに起こるならば、私が小学2年生の冬の出来事である。小学生の身で関与するには、英国の片田舎は麻帆良から余りに遠過ぎるのだ。

第二は、麻帆良学園都市の上部組織であるメガロメセンブリア、その元老院の一部が襲撃の黒幕である可能性が高いという事である。彼等に目をつけられて良い事なんて何も無いだろうから、時が来るまで極力は目立たないようにしておきたいのだ。

第三は、練達の魔法使い集団の駐屯地である村を一戦で全滅させるほどの悪魔の軍勢と戦って勝てる見込みが大きくないと言う事である。あれだけの群れを単独で圧倒できる出鱈目な強さに届くには、私の能力の方向性では些か荷が重そうなのだ。

ひるがえって得られそうなメリットは、ネギのトラウマ回避と村人の石化阻止ぐらいだろうが、正直言って私の能力ならば石化された村人を治した方が早い。おまけに此の事件が起きなければネギが闇の魔法を修得するのは無理だろうから、決戦時における彼の戦力が大きく削げ落ちるかもしれないのだ。

私の都合から見れば、防ぐのは百害あって一利無しに等しい有様だった。

次に良くあるタイミングは、近衛木乃香が幼少の時に川で溺れたのを助ける事だ。

が、これは今の私の立場的に非常に問題がある為できない相談である。私にとっては関西は敵地も同然。彼女が麻帆良に来た後に仲良くなるならともかく、京都にまで出向くのは現状では不都合が多過ぎるし、不自然過ぎて妨害されてしまうだろう。

その次に候補に挙げられるタイミングは、龍宮真名のパートナーを助ける事だ。

しかし、これには年齢の壁が立ちはだかる。あと１０歳……いや、５歳年上ならば問題無くＮＧＯに参加できただろう。しかし、真名と同年代の私が海外渡航して手伝おうとしても迷惑にしかならないのは目に見えている。選べる選択肢では無かった。

アスナの保護者であるガトー氏や明石裕奈の母親を助けるという案もあるが、魔法世界への渡航の難しさに加え、小学校入学前に行動を始めなければならないという詰みっぷりを考えれば目標から外

しておいた方が賢明だろう。紅き翼のメンバーや現役エージェントすらも不覚を取るような相手にそれだけの準備期間で挑んでは私が瞬殺されかねない。

助けると言えば、委員長こと雪広あやかの弟ならば助けられる可能性はある。……医療に関する知識と技術だけを問題とするならばの話だが。

ネックとなるのは、やはり私の年齢だろう。小学生の医師なんて胡散臭いものに頼るように仕向けるなんて難題は、１０歳の子供先生に子供を預けるより難しいと私も思う。

学園長先生を味方に抱き込めれば、年齢詐称薬と偽造戸籍なんかで敏腕医師としての顔も持てるようになるかもしれないので、これについては要検討である。

チート能力を生かしたアイテムの作製や複数の魔法技術を効率良く組み合わせる方法の研究もしたいが、これは当面は他の目的を達成する為の手段とした方が良い気がする。あまり大々的にやってメガロメセンブリア元老院の注意を引き過ぎたくないのだ。

魔法世界で戦災孤児を助けて回る案も没だ。助けに行くのが困難なだけじゃなく、助けた後に責任を持てそうにないのも大きい。あのフェイト・アーウェルンクスの半分も甲斐性の無い状態で行動する事になるだろうし、他の難民救助をしてる方々の足手まといにもなりかねないのも減点材料だ。残念ながら私には不向きだろう。

では、魔法世界そのものを救うというのはどうか？

理論的には恐らく可能である。

要は魔法世界を維持するのに必要な魔力が不足しているだけなのだから、それを供給する為の何らかの手段を開発して列強各国に提示する事で“完全なる世界”の活動を抑止しつつ魔法世界崩壊を防ぎ止める事は充分に成算のある皮算用だ。ネギま世界固有の魔法工学技術に純粋科学を援用しただけでも恐らく数百年以上もの魔法世界の延命はできるだろうし、私が知り得た異界の技術をも投入すれば半恒久的な延命すら見込みがある。

片や“完全なる世界”の救済手段は、魔法世界の総人口１２億人全員を救えるこちらの腹案に比べて結果的にメガロメセンブリア人６７００万人しか救えない上、一人一人をそれぞれの為の夢想の世界に封じるという手段だ。この方法では、人口そのものは減ると言えど一人当たりの魔力消費は現状よりも劇的に増え、下手をすれば破局を早めてしまうだろう。こんな愚策は何としても阻止したいものだ。

もっとも、私にとって最悪最低の愚策は、機工女神の特性を全開で使って魔法世界と火星の通常空間を強引に融合させ、新しい魔法世界を生み出してしまう事なのだが。流石にそんな無茶をやらかしたら私が死んでしまうし、魔法世界の住人や動植物などにも非常に大きな被害が出るのが確実だから絶対にやりたくないのだ。

とにもかくにも壮大で遠大な目標ができたところで、そろそろ現実に立ち向かおう。

ようやく最近になって知った私の今の名前が“八束千歳（やつか・ちとせ）”という女性名で、前世では男だった記憶を持つ女の子として生まれてきたという現実と。

女性として生まれた原因は多分、私があの時に願って手に入れた『機工女神の神核』が胎児段階の私の身体に強く影響したせいだろう。つまりは自業自得である。

このまま肉体に引っ張られて心も女性化してゆくのかもしれないが、心だけは男のままという事も有り得るので悩ましい問題だ。ほぼ完全な性転換の方法に心当たりが幾つかあるので、性同一障害に陥る心配とは無縁なのが幸いだけど。

もう一つは、今の私が自衛手段も無ければ生活手段も無い役立たずだという事だ。

０歳児だからしょうがないなんてのは言い訳にならない。

現に一度は裏技を駆使しまくったと言えど、呪詛で心肺停止に追い込まれた母さんを蘇生できたのだ。私にもっと力があれば……大

技に費やされる魔力と気の消耗に耐えられる鋼の精神と強靭な体力があれば、母さんを死なせずに済んだかもしれない。

だから私は、私自身が赤ん坊だからって鍛錬を怠るような真似が許せない。

と言っても魔力も気も使わなければ、発声練習がてら意味の無い音を出してみたり、寝返りを打ってみたり、手足をジタバタさせてみたり、首を左右に向けてみたり、寝てしまわないよう苦労しながら仰向けで瞑想にふけるぐらいしか無理なんだけど。

ちなみに今の私は麻帆良学園都市内にある２４時間営業の保育施設に終日預けられているようだ。なので、魔力と気を練習するのは自力で外出できるようになるまで待った方が賢明だろう。

なお、この保育施設には、どうやら私が母から引き継いだ財産からかなりの金額が支払われているらしく、何故か大口出資者に名を連ねていたりする。後見人と財産管理人を兼務してくれている学園長には、機会があれば小一時間ほど問い詰めてみたいものだ。

八束家秘伝の術が記された古書と先祖伝来の勾玉の行方と共に。

さて、かれこれ無い知恵絞って色々と考えてはみたけれど、結局のところ今の私のとりあえずの努力目標は、赤ちゃん言葉とハイハイだろうか。

ちょっとやそっとのチートで、それをくつがえすのは無理だと改めて思い知った昼下がりのベビーベッド上での一人脳内討論会はこうして呆気無く終わりを告げた。

第０３話（後書き）

皮算用と現状認識の回です。ＴＳものですが、男に恋する事は多分無い……と思いたい気もする作者であります。男としての意識も一応残ってる状態ですしね。

第０４話

生まれてから5年ほどの月日が経った。
よちよち歩きができるようになって、ようやく保母さんと監視カメラと警備魔法の目を盗んで魔力と気の鍛錬を多少なりともできるようになったので、魔力と気を敢えて相反させたままで等量ずつを対消滅させつつ柔軟体操をしたり馬歩と呼ばれる姿勢を保つ足腰の鍛錬をしたりという普通で無い訓練もするようになってから2年以上が過ぎたある日。
ほんの些細なこと、そう、ちょうど目の前を通りかかった快活そうな可愛い女の子に見惚れて『いいな』って、いつもの魔力と気の対消滅鍛錬をやってる最中に心の中で呟いただけなのに……なんでか知らないけどできちゃいました。魔力と気の合一。
もっとも、魔力と気を合成した咸卦の気を私が維持できたのはほんの一瞬だけ。何でできたのか自分でもコツが解らないので再現もできそうにないって間抜け過ぎるにも程があるアクシデント。
でも、私の隠し事の一端がバレるきっかけには充分過ぎた。
ちょうど近くにいたらしい巡回の魔法先生が私の居所を探り当てるには、その一瞬だけでも充分だったのだから。
「何をしているのかね？」
私に話しかけてきたのは、くわえタバコにオールバックにした黒髪、サングラスに黒いスーツが特徴の２０代後半から３０前半ぐらいに見える厳つい男性だった。
「ひっ……」
両肘を軽く曲げて腰に当て、私から見て2倍以上の魔力を瞬時に練り上げ、見下ろすかの如く隙なく平常心で問い掛けてこられ、私の咽喉がごく自然に情け無い声を絞り出して腰が引けてしまう。
「どうした？」
彼が一歩……怪訝そうにか心配そうにかは知らないが踏み込んで

くると、思わず二三歩ほどもつれ気味に後ずさってしまう。
今の私は、ネギまの西洋魔法も陰陽術もウチの家伝の秘術も知らないから使えない。
マジシャンズ・アカデミイ形式の魔法（以後『学園式魔法』と略）も、世界樹という強大な魔法存在が間近にある影響のせいで些細な効果の初等術以外は効果の誤差が怖くてロクに訓練できていない状態だ。術者を補助する機能がある魔導機杖の用意も無い現状で魔法先生と撃ち合ったなら、まず間違いなく負ける。
ディル・リフィーナの術で今の私が使える可能性があるのは、秘印術の一部と性魔術と魔導鎧砲撃だ。しかし、どれもこれも練習不足だったり、準備不足だったり、術式の改変が必要だったりで、実戦で使い物になる段階じゃないので見せるだけ損である。
ドクター・モヒカンのメス捌きや秋山醤の包丁捌きは、刃物が無いので使えない。
まともに戦闘で使えそうな手札はというと、まだまだ練習不足だが他の術よりは幾分マシな幻獣朗式の幻術と、魔力か気のどちらかによる初歩的な身体能力強化と、知識として知ってはいるものの未だ全然私の身になってくれてない格闘技術ぐらいだろうか。
しかも、麻帆良の退魔結界によって全力発揮を阻まれた有様でだ。
「こ…こな……こないでぇ……」
つまり、私が半ば涙目で逃げ腰になってしまっているのは、外見が怖いというより、どう足掻いても現状では勝ち目が無いと本能的に悟ってしまっているからなのだ。
目の前にいるグラサンにヒゲのおじさんが原作で出てきた神多羅木先生だという保証も無いし、この時期の彼が良い人だったという保証も無いという事もあるけどね。
内容が内容だけに人目の少ないところで練習してたのを後悔しつつ、私は何とか逃げる隙だけでも無いものかと様子をうかがい始めたのだった。

〔ｓｉｄｅ：神多羅木〕

私は今、とても困っていた。

巡回中に強力な魔力の気配を感じて現場に向かってみると、そこにいたのが話しかけてみても怯えて要領を得ない幼い少女一人だったからだ。

年の頃は恐らく５～６歳。腰まである黒髪を背中で一本にまとめ、麻帆良の小学校指定ジャージの校章が刺繍されてる部分に布を縫い付けて装飾にしている物を着ている。

黒い瞳がじわりと潤んで、上目遣いに様子をうかがっている仕草が、私を更に追い詰めている。この問題、上手く切り抜けねば私の教師生命始まって以来の汚点となると。

裏の事情を知らない一般人に目撃されては非常に面倒な事になりかねない。

裏の事情を知ってる者の中にも何人か早とちりして問題を起こす者の心当たりがある。

そして、少女が裏の事情を知ってると確証を得られるまで、こちらから裏に関して直接的な質問をするのは好ましくない。

つまりは手詰まりだ。

「あー、怖がらせて悪かった」

少女の足下付近の草が、彼女を中心に押し倒されて円を描いていたので、恐らくは少女が無意識に魔力を放出してしまったのだろうと見当を付け、このまま強引に事情聴取したり捕縛したりするよりも、隠れて追跡して正体を特定する方が適切だと結論付けた。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕

緊張に満ちた睨み合いは終わりを告げ、魔法先生は私の前から転

進して行った。
　気配はそんなに離れていないみたいなので多分そこらに身を隠しているのだろうが、認識阻害系の魔法を使っているのか具体的に何処にいるのかまでは私には解らない。
　私が侵入者か学園生か分からないので追跡してみる気だろうか？
　仕方無い。未だ学園側に実力見せる気も無いから、鍛錬切り上げて帰るかな。
　私が誰かは知られてしまうだろうけど、そっちの方は元々隠してないしね。

　その後、保育施設に帰宅するまで魔法先生らしき気配は付かず離れず付いて来た。
「あら。今日は早かったのね、ちとせちゃん」
「うん、怖いおじさんいたから」
「あらあら。気をつけてね。お姉さんも院長先生に言っとくから」
　入り口近くで他の子供達の面倒を見ていた保母さんと軽く挨拶と世間話をしてから、私に割り当てられた部屋に向かう。大口出資者だから特別待遇で個室ってのは保育設備的にどうよと思わなくも無いけど、都合が良いから私は気にしない。
　ポテンとベッドに飛び込んで、私は直近の課題に辟易しながら目を閉じたのだった。

　一晩考えて、早急に取り組まなくてはならない課題が何か明確になった。
　逃げ足を含む自衛能力の低さである。
　特に学園側に対して見せ札にできる能力の少なさと弱さは致命的で、現状のままなら魔法先生どころか魔法生徒にすら対処が難しい有様だと思い知らされたのだ。

体力や気は一朝一夕に増えるものじゃないし、魔力総量は基本的には生まれつきの資質に依存するものなので効率化を志向するのが定石である。

しかし、魔力使用の効率化に関しても短期間で劇的に変わるものではない。

早期の戦力アップを狙うなら、今の時間が許す限りひたすら基礎鍛錬に励むという修行方針を変える必要があった。

それを成す為に私が向かった先、其処には……世界最大の図書館、知の迷宮、難攻不落の地下城塞、図書館島が威風堂々とそびえ立っていたのだった。

小学校就学前の幼児である私が立ち入りを許可されたのは、図書館島の地上部分のうち関係者以外立ち入り禁止になっている職員用の区画を除いた全域であった。

この図書館島は下層になればなるほど貴重な本が所蔵されており、それにともなって設置された警備用の罠や迷路じみた経路などを踏破する難易度も上がると言う、古き良き地下迷宮探索ゲームのノリで運営されているらしい。

それが代々続いた伝統ゆえなのか、地下の奥底に住まう伝説の司書とやらの仕業なのかは私には分からないけど。

だから魔法について知りたいなら深い階層に下りて蔵書を漁る必要がある……と思う人の方が普通なのかもしれない。

でも私は疑ってみた。

古代魔法について記載された希少本とかならばともかく、魔法使いとしての初歩の初歩を学ぶ為の教本や魔法学校の平均的な授業で用いられる程度の資料本の類がわざわざ深い階層に置かれているものだろうかと。

だから時間がかかるのを覚悟で私が立ち入りを許可されている区画全てをざっと回ってみて、書棚ごとの蔵書の種類の傾向や魔法のかかった本や認識阻害されている場所を『内部空間が歪んでいる可

能性を考慮に入れつつ』マッピングするなんて根気を要する作業をメモ帳片手にやらかしてみた。

そしたら捜索を始めてから13日目に、2階の図書室のうちの一つの林立した書棚が作り出した物陰で入り口から見えずらくなっているところに、壁と見間違うような認識阻害がかかってるけど普通に出入りできる通路があると気が付いた。

ここかもしれない。

そう判断し、真偽を確かめるべく私は隠し書庫へと無造作に足を踏み入れた。

監視の目があるだろう事を百も承知の上で。

そして見つけた。

物心ついたばかりの幼児に西洋魔法の基礎の基礎を教える為の教本と、小学生相当の年齢の魔法学校生に西洋魔法の初歩を教え込む為の教科書が並んでいる書棚を。

攻撃魔法は多分《魔法の射手》しか載っていないだろうが、そんな事はどうでも良い。

とにかく早急に見せ札として使える魔法を修得したいのだから、基本となる魔法の覚え方と使い方さえ掲載されてるなら当座の用には充分なのだ。

それに西洋魔法の基本術理を類推できる材料が充分に揃えば、学園式魔法やディル・リフィーナの魔法を此の世界で使うのに適した術式に編纂し直す事もできるかもしれない。

西洋魔法の発動にラテン語や古典ギリシア語の詠唱を要するなんて条件は、無詠唱呪文がある以上は何らかの抜け道が用意できる可能性はある。精霊との意思疎通と魔力運用さえどうにかなれば詠唱に使う言語そのものは枝葉末節なのかもしれないのだ。

ちなみに教本を読んだからと言って、一般人は西洋魔法が使えるようになったりはしない。魔法を使う為の媒介である杖を入手できないからだ。

また、一度軽く目を通しただけで教本の内容を覚え切れる人間も

滅多にいない。
しかし、私は杖が無くても魔法や幻術などを一応使えてるし、一度読んだ本の内容を脳内に記録するというチート能力まで持ち合わせている。
この場では流し読みして記録するだけにして、後で脳内に記録した教本を精読して内容を理解し、然る後に人目につかないところを見つけて練習してみるのが得策だろう。
ここに踏み入れた事で今後訪れるかもしれない厄介ごとから努めて目を逸らしつつ、今のところは牙を砥ぐのが先決と心中で開き直ってみる私だった。

第０４話（後書き）

チート能力を貰ったからって使いこなせるとは限らない。特に世界が違う魔法を選んだからには……という事で訓練編を書いてみたです。神多羅木先生は少し不憫ですが、たまにはこんな巡り合わせのよろしくない時もあるって事でｗ

学園式魔法：神魔に比べて能力が劣る人間が魔力を使う為の裏技の集大成。

秘印術：六大元素を核とした魔術。ネギまの西洋魔法との親和性は高いと思われる。

性魔術：精神戦による強制支配や生命力の授受などに長ける。強制支配は諸刃の剣。

魔導鎧砲撃：魔導工学技術で作られた特殊鎧に装備された魔弾発射機を操る砲術。

第０５話

私の西洋魔法の練習は、正式な練習用の杖ではなく、そこらの林で拾った枯れ枝を肥後守という折り畳み式小刀で樹皮を削って簡単に形を整えた短杖を使って行う事にした。

まず初めはセオリー通り初歩中の初歩の呪文《火よ、灯れ》からの挑戦だ。

万物に宿るエネルギーを深呼吸と共に体内に取り込んで、前に振り下ろす動作に併せて腕を伝わせ、指を伝わせ、杖に勢い良く流し込んで先端に集中させる！

「プラクテ・ビギナル・アールデスカットぉ」

え？

「うわっちゃあああああ！！！」

一気に目の前が真っ赤になり、私は思わず杖……だったものを取り落とした。

「あたたたたたた……い…痛ぁ……っ……」

小さな松明もどきとなって地面で炎を上げる杖だったものを見詰めながら、私はこの緊急事態に対処しようと思う。思うけど、痛さが頭を駆け巡って全然体が動かない。

左手で右手を押さえたまま、涙で歪んだ視界で火を見詰めてるしかできない。

結局動けたのは、火が消えてしばらく経って、痛みが少し引いてきてからだった。

火傷した右手は、川の水に浸して冷やしてから左手から作り出したエクトプラズムを人造皮膚に変換、幻獣朗式の分身の術《別魅》

で作り出したもう一人の私に気を込めた肥後守で焼け爛れた皮膚と肉を削ぎ取って貰ってから人造皮膚を移植。拒絶反応が起きないよう馴染ませてから、はみ出た余分なところを切除するという術式で治してしまった。

ここまで出来ても私の医術知識の基礎となっているドクター・モヒカンが達している神域には遠く及ばないのだから恐れ入るしかない。あの作家様の書く世界での超一流の人材は出鱈目に凄いので、精進不足で実践不足の私では未だ足下にも及ばないのだ。

もっとも高位の霊的存在の力を弱める麻帆良の退魔結界の影響範囲内でなければ、この程度の負傷なら１０分もしないうちに跡形も無く治し切れる自己再生能力は持ち合わせてるんだけど。神格者級魔神の力は伊達じゃ無いのだ。

ちなみに周囲には一応ながら【まじしゃんず・あかでみぃ】の学園式魔法で軽度の認識阻害と人払い用の結界を展開済みなので、一般人に見られてしまった恐れは多分無い。

人通りの殆ど無い森林区域の奥まったところを練習場として選び、小・中・高校の授業がある時間帯を狙って始めたので、見つかる心配は少ないはずだからだ。

でも魔法先生達になら見つかったかもしれない。というか、ここまで派手に魔力の火を出してしまった以上は、多分見つかってしまっただろう。

麻帆良を外敵から守り続けている実力は、甘く見て良いものではないのだから。

「……失敗したなぁ」

これで自由に泳がせては貰えなくなるかもという不安に襲われながら、私は炭と灰に化けた私の最初の魔法の杖に土を被せて埋めておいたのだった。

だが、しかし、私に学園長や魔法先生が接触して来る気配は何日経っても無かった。

保育施設の庭に植えられた木の一つに背を預けて、無邪気にか能天気にか遊んでいる同年代の子供達を眺めながら、ぼうっと考え事をしてても放っておかれた。

気が付いたら薄く笑っていたっぽいので、もしかしたら不気味がられていたのかも。

ともあれ、気に病んでても時間の無駄なので、前回の魔法練習で色々と思い知らされた問題点について私なりに一つ一つ解決を試みてみる事にする。

真っ先に挙げなきゃならないのは、不意に受けた強い痛みのせいであっさりと行動不能になってしまった点についてだ。辛うじて認識阻害と人払いの魔法が維持できてて、延焼して野火にもならなかったから今回は大事にはならなかったけど、いざ事が起こった時に同じ様な事になれば私が危ない。神核が超強力な霊的打撃で破壊されなければ死なない神格者級魔神の能力を得ているとはいえ、封印呪文で行動不能にされてしまえば無力化するのに変わりはないのだ。

有効な対処手段は一つしか思いつかなかった。

痛さに慣れ、どんな時でも冷静な思考を保てるように特訓する事だ。

魔法で鎮痛処置をするのは一手遅れる上に不意討ちに対応できず、痛覚自体を消してしまうと触覚や味覚や気配察知が鈍くなる上に自分が受けたダメージが把握できなくなるので様々な不都合を被ってしまうので旨くない。

なので、下手をしたら被虐趣味の変態さんに目覚めてしまう危険を承知で、茨で舗装された正攻法を歩む事にしてしまったのだ。

一応は保険として《何があっても気が狂えないようにする魔法》をかけておき、《痛みを万倍に増幅する幻術》を重ねがけしてから、私は恐る恐る幻術を用いて秋山醤の知識から再生した彼の修行時代

に受けた体罰の苦痛を追体験してしまった。

その後の記憶は、草むらに寝転んでいるところから再開した。

どうやら私は余りの痛さに気絶してしまったらしい。

気が狂わないようにするだけじゃなくて、気絶しないようにもしなくてはならなかったのを失念していたせいだ。

幸いにも認識阻害や人払いの魔法が未だ全部持続している最中だったので、先程かけた呪文を再度かける前に《何をどうしようと気絶できない魔法》を追加して、仰向けの姿勢のままで両手を胸の前でパンっと！　と、と！　と！　とととととぉっ！！

テ…うで……いた……

辛うじて物が考えられるようになったのは、魔法の効果が切れた３００秒後……5分よりも随分経ってからだった。思っていたよりも数段危険な修行法のようだ。

しかし、これを乗り越えられないと如何なる力を身につけても危地で役には立たないだろうし、身を守る事さえもできないかもしれない。

この世には理不尽がはびこり、力及ばぬ者は呆気無く殺されかねない日々を送る。

生まれながらにして裏……魔法の世界に関わる宿縁を持ち、裏に生きる奴等に両親を殺されてしまった私には、妥協して一般人の普通の幸せを得るなんて道は無いのだ。

そう思い込んでた。

だから耐えられた。

だから耐え切った。

皮膚が裂けるほど激しく背中を打ち据えられる痛みにも。

自分で胸を切開して、血管を引き千切って心臓を摘出する痛みにも。

全身を業火で焼かれ、生きながらにして身体のあちこちが炭と化

す痛みにも。
　己が四肢の全てをもがれ、無力感と脱力感と共に感じた焼け付く如き痛みにも。
　己が身体に麻酔も無しで異物を埋め込まれ、神経が徐々に侵されてゆく痛みにも。
　氷点下２００度を超える極低温に晒され、微塵に砕かれる痛みにも。
　私は耐え切った。
　耐え切れてしまった。
　恐らくは機工女神の製造目的である兵器としての性質のせいで強い痛みに適応できるよう無意識に自己改良をしたのだろうけど、やはり副作用も発生してしまった。
　どうやら肉体的な痛みがほぼ制御できるようになった代償に、肉体的な刺激だけでは快楽に浸れないような身体になってしまったらしいのだ。
　要は不感症の一種である。性魔術を併用すれば他者との交接で不自由せずに済む見込みがあるだけ未だマシな状況ではあるのだけど。
　そして、そこまでやってしまってから、止せば良いのに私は気が付いてしまった。
　せっかく要りそうな知識の持ち合わせが揃ってるのだから、私自身に適切な強化改造手術を施してしまえば、あんな苦痛に溢れた修行をせずに済んだ話だったのだと。

　斯様に問題だらけながら第一の問題を何とか片付けた私は、その余勢を駆って次の課題の「着火呪文の暴走」について取り組む事にした。
　教本通りの要領でやったはずの初歩の初歩の呪文であんな騒ぎでは、下手をしたら西洋魔法が全部使いものにならないという有様に

なりかねないからだ。
そして、そうであるかどうか確かめる為には実験あるのみである。
私は魔力を集中させる量の加減を探りつつ、ときおり怪我を負いながら、様々な初級魔法を気力の続く限り唱えてみて、実験と練習を積み重ねてゆくのだった。

そんなこんなで１２日間かけて教本に載ってた初歩的な西洋魔法を何とか一通り暴走させずに発動できるようになり、ようやく私自身の状態や魔法適性などについて、おぼろげにであるけれども把握できるようになった。
まず魔力総量であるが、これは学園結界の拘束力と私自身の魔力制御能力との間の妥協点とも言うべきもので決まっているらしい。
それがハッキリ解ったのと同時に、魔力総量が大幅に抑えられてる代わりに魔力を回復するのに世界樹から常時放散されている魔力が利用できるというメリットもあると自覚できたのだけど。
魔力の運用効率は、現時点でさえ此の世界の平均的な魔法使いよりも高いと思われるものの、一流どころの得意技の水準には未だ達していない程度だろうか。明らかに魔法的才能で神や悪魔に劣る人間が工夫を重ねて編み出した学園式魔術の知識と、捕獲した霊的高位存在を人為的に改造して作り出した魔法兵器“機工女神”の神核は、それほどの優位を私に約束してくれたのだ。魔法体系を擦り合わせつつ私に使い易いよう改良し、修め直すという七面倒臭い作業と引き換えにだけど。
属性的な適性は、光と火が飛び抜けて相性が良く、後はほぼ普通に使えるようだ。
つまり、あの失敗は普通の初心者が集められっこない量の魔力を、得意属性の呪文に惜しみなく大量に注ぎ込んでしまった結果起きた当然の成り行きだったという事だ。
種別的な適性も、攻撃と付与と治癒が若干向いてるが、特に不得意な物は無かった。

良く言えばオールラウンダー、悪く言えば器用貧乏な素質らしい。
もっとも杖も呪符も無しに魔法が発動できるだけで異能とは言えるかもしれないが。
ともあれ、光と火の西洋魔法を独自アレンジで魔改造したものを中心にして使おうと決めて、ふと八束家に伝わる秘術の存在に気が付いた。
とは言うものの、それがどんな術体系なのか解らないので当分放置するしかないとの結論に達するまdでは大して時間がかからなかったのだった……。

第０５話（後書き）

魔法修行編です。素質と知識がチートでも本作では簡単には強くなれませんよ～というだけの話でもあります。

第０６話

私の調べたところ西洋魔法は、魔力を直接運用して効果を得る術と、呪文詠唱などを介して精霊を使役して効果を得る術の２種類で成り立っている。

前者の代表例は身体強化や瞬動術などで効果発動が早く、後者の代表例は魔法の射手や武装解除などで消費する魔力の割りに威力が高いと言う良く考えられた術法体系だ。

私が貰った能力で使える魔法も、此の世界で使用できるものは此の２種類に比較的類似したものか、魔力の代わりに気を用いるものであった。陰陽術は大技以外は気を使うものが多いらしいので、どれも概ね世界観から逸脱してはいないようだ。

ちなみに使用不可能な魔法はというと、この世界にはいない神や魔王や幻獣らの力を借りる呪文や、ネギま世界とは異なる世界の法則を利用して行使するような呪文という、使えない理由が納得するしかないような代物ばかりであった。

ともあれ、そこまで解ったところで、私は確信した。

『これって別系統の魔法にしなくても良いよね？』

と。

そして、私が転生する際に貰った能力で使える魔法を、西洋魔法の魔改造発展型と見れなくもないように弄り倒した統合混成魔法術式がでっち上げられたのだった。

まあ、【烈火の炎】の“幻獣朗”が体得していた幻術や心霊魔術は魔力を直接運用する術なのでそっくりそのままだし、【魔界都市ハンター】の“ドクター・モヒカン”の医療術や【ディル・リフィーナ世界】の性魔術は気を直接運用する術なので此方もほぼそのままで用い、【まじしゃんず・あかでみぃ】の学園式魔法は安全装置となる口語での詠唱部分を変えただけ、【ネギま】の西洋魔法は呪

文詠唱をラテン語だけでなく日本語でもできるように形式と安全措置を手直しするという、どれもこれも小手先の変更点で済ませた統合とは名ばかりの寄せ集めなんだけどね。

それでも裏の人間になら見せても多少は誤魔化しが効くようにできたのは、いざって時に支払わされるリスクが減らせる可能性が高くなるという意味で大きい。

もっとも派手な大技とかについては練習もできてないから、ちゃんと起動できるのか不安な術もあるんだけどね。どれもこれも理論的には大丈夫なはずなんだけど。

私が魔法学校で必須呪文として教えられているラテン語詠唱の西洋魔法を脳内に記録した教本をアンチョコにしなくても唱えられるようになり、その中の一部については無詠唱でも発動できるようになり、統合混成魔法術式の方についてもある程度カタチにできてきた頃には、ちまたで節分の豆まきなんぞをやらかしていた。

麻帆良の節分は、非常識な怪力で豆を投擲する者やら豆を射出する空圧式機関銃やら鬼の着ぐるみの中で魔力で身体強化してる者やら着ぐるみに見せかけたマジものの召喚鬼やらが平気で闊歩しているので、うかつに超人的な技を披露して向こう側だと悟られると逸般陣の馬鹿騒ぎに巻き込まれてしまって危険な目に遭う行事である。

それでも、そんな油断できない逸般陣の連中にも一応は、ただの一般人を舞台に上げないように気をつけるぐらいの良識の持ち合わせはあるらしいけどね。

そんなこんなの行事なので、私が住む保育施設でも早々に豆まきを済ませ、大きい子達は祭り見物……もとい野外大豆まき大会へと勇んで出かけて行った。

普段は修行漬けで特に仲の良い友達がいない私は、一人出遅れた組だ。

さて、どうしよう。
外がこの有様じゃ、幻術と認識阻害を使っても派手な魔法の修行は少々厳しいし、普通に体力作りの鍛錬をやるにも向いてない。かと言って、あの乱痴気騒ぎに混じるのも寿命が縮みそうなので避けたいところだ。とは言え、施設の中で小さい子達の相手をしてあげるほど母性に目覚めてる訳でも精神年齢が低い訳でも無いしなぁ。
とりあえず外をぶらついてみようか。
一人で考え込んで答えが見つかるものじゃないしね、こういうのは。

表通りは派手な火力戦。
裏通りは玄人志向の塹壕戦。
校舎を利用した室内近接戦があるかと思えば、何処からともなく狙撃される人もいる。
麻帆良の節分は今回も乱痴気騒ぎのようだ。
良く見てみたら、野良の動物の皆様も逃げ遅れて巻き込まれていて可哀想である。
なので、勝手に野戦動物病院の開業でもしてみようかと思いついた次第。
お客は流れ弾ならぬ流れ豆に当たって怪我した野良犬や野良猫や野鳥などの皆様で。
「いたいのいたいのとんでけー」
多少の打撲で済んでる子達には患部に手を当てて無詠唱で《治癒(クーラ)》の魔法をかけてあげるだけで大丈夫だけど、血が出てたり骨が折れてる子はそうもいかない。おまじない一つで治してしまうと流石に目立ってしまうからだ。
なので、そういう時は小刀と縫い針と百円ライターの出番だ。
鬱血したり膿んでたりする患部を小刀で切って悪いものを追い出してから、要所だけに絞って治癒魔法をかけ、気を物質化して作っ

た糸で皮膚を縫い合わせ、糸を患者に馴染ませるのを兼ねて気の流れを整えてやれば、深めの傷でも魔法を使ったとバレ難い様に治してあげられるのである。

ライターは小刀と針の消毒用だ。……実際には火で軽く炙る時に魔力で血糊や汚れを弾いて綺麗にしてるので、割と傍目対策の部分が大きいんだけどね。

骨折の子は、折れた骨を元の位置に戻してから治癒魔法で仮固定。小刀で削って作った添え木を草で編んだ紐で縛って患部を固定し、気の流れを整えて骨が治り易くしたら措置終了だ。だいたい全治2～3日ぐらいだろうか。

病気の子は、心霊治療のスキルで病魔を身体から摘み出して、性魔術の応用で其の病魔から魔力を吸い尽くして消滅させたら、それだけで大抵治る。

変なモノを食べてお腹の具合が悪い子は、お腹か背中をさすって口か尻から出させてあげれば大抵何とかなる。出した物の始末に黒ビニール袋とスコップが大活躍だ。

でも、寄生虫に悩んでる子は今日の装備じゃ勘弁。虫下しの薬は持ち歩いて無いし、それ用の魔法も覚えてないからね。心霊治療で虫を摘み出すのは、手元がちょっと狂ったら虫と患者さんを合成してキメラにしちゃいそうだから、できればやりたくないし。

って、いつの間にか患者の動物さん増えてるし！

なになに？　口コミで聞いて来たですって？

野良の動物の皆さんのネットワーク恐るべし。

野良犬さんと野良猫さんと野鳥さんとかが仲良く順番待ちしてる図って、なかなかに壮観である。妖怪さんとか、幻獣さんとか、どっかの魔法使いさんの使い魔さんが混じってて統制してくれてるのかもだけど、都合が良いので気にしない方針で。

薬草摘みして足りない薬を補充するしかないかな？

獣医さんや薬屋さんに頼るのはおこずかい的にピンチだしね。

あれ？　ちょっと考え事してたら患畜さんの輪を取り囲むように

女の子達や親子連れさん達が寄って来て皆に手を伸ばして……
「すみませんですー！　怪我が治ってない子たちばかりなんで！
そっとしといてあげて欲しいですー！」
ちゃんと解ってる人でも手負いの子達に触るのは危ないし、傷口開いたりしたら元も子もないもんね。注意しとかないと。
あ、治療終わった子は帰って良いですよ。広場から離れるまで近くの子を襲っちゃダメですよ。治療が未だの子達は、また明日の昼過ぎにです。……ごめんなさい、お薬が足りないので今日は治すの無理なんですよ。
「「「か、かーわいー！」」」
えー、周囲の人垣さんに大声で注意してから、私の声が鳥のさえずりに聞こえるように調整した《動物との会話》呪文で患者の皆さんに解散を促してたら、なんか黄色い声を浴びせられてしまった。
皆が一斉にコクコクと頭を上下させてる姿がツボにハマりでもしたのでしょうか？
三々五々逃げる皆をかき分けて迫る女性陣の皆様が少し怖かったので、私も退散する事に……あれ？　逃げ道が……なんで木の上にも人が？　皆を踏み潰すわけにもいか……むきゅー！　は、針が、小刀……血が、血が、ら、らめぇ……

ひ、酷い目に遭った。
お年頃の女性陣特有のあのパワーは、女性になった今世でもついてけないかも。
小刀や百円ライターなどを仕舞うのは間に合わず、無惨な残骸をそこらに晒している。
けど、余計な怪我を負う動物や人がいなかったのは素直に喜びたいところだ。
私をもみくちゃにした人達だけど、恨んでる訳じゃないからね。

ん？
「災難じゃったのう、ちとせちゃん」
この声は……
「こんにちはです、学園長のおじいちゃん。何の御用ですか？」
私の後見人をやってくれてる近衛のおじいちゃん。後頭部がちょっと人類の範疇を超えて長い、仙人のような貫禄の御老人だ。
私が着てるものが動物達の血で汚れたよれよれのブラウスとジーンズ、手には道具の残骸も入れたゴミ袋なんて格好なので、学園長直々の来訪に少々気後れしてしまう。
「ふむ。ここで面白い事をやってる子がいると聞いて見に来たんじゃよ」
「そうですか。それで面白い子は見つかりましたですか？」
対象が自分で無いのを願いながらとぼけてみる。
「うむ。それでどうじゃ、そこらで茶でも飲まんかのう」
しかし、どうやらとぼけても無駄だったようだ。
「ごめんなさいです。用事があるので失礼しますです」
ならば逃げるが勝ちというか、患者の皆との約束を果たすべく薬草摘みに行くのを口実に離脱を図る。早く行かなければ施設の門限までに帰るのが難しいからだ。
「まあ、待ちなさい。用事が何かは知らぬが話しておかねばならぬ事があるのじゃ」
くっ！　私が逃げの一手を打とうとしたら、すかさず足への金縛りと認識阻害を無詠唱魔法で瞬時にかけてくるとは流石は学園長。
「魔法については知っておるようじゃな」
「はいです。今、学園長のおじいちゃんがかけてるのが其れですね？」
「うむ。では、魔法が一般には秘匿……つまり隠しておかねばならない事も知っておるかね？」
「はいです」
「では、何故あのような真似をしたのかね？」

「ご、ごめんなさい。麻帆良に住む動物さん達に人間を嫌って欲しくなくて。豆をぶつけられて痛がってる皆を見て、いてもたってもいられなくなって。それで……」
「しかしのう、だからと言って何をやっても許される訳じゃないのじゃよ」
思わず涙目になって上ずった声で抗議されると、学園長の表情には困惑が浮かんでるような気もしなくもないが、視界がぼやけて詳しくは読み取れない。
「でも、でも魔法使ってると普通の人に解らないように治してるです。ちゃんとナイフで切開したり添え木したり傷口縫ったりヨモギ汁塗ったりしたですよ」
威圧的雰囲気に押されて口早に言い訳を並べてみるが、どれもこれも一応本当の事だ。
道具と薬さえちゃんと揃ってれば魔法を併用しなくても済んだのは置いとくけど。
「それはホントかのう？」
「は、はいです」
魔法抜きなら治癒効果は落ちるけど、見た目だけならさっきと同じ治療行為はできるので、今度の質問には多少気楽かつ自信を持って答えられた。
しょっちゅう練習台にしてる猫の縫いぐるみさんには感謝だ。
「よし分かった。今回はちとせちゃんを信じるぞい」
おかげで学園長が引き下がってくれたのだから。
まあ、今回は魔法バレしてないみたいだってのも大きいのだろうけど。
とはいえ、今日の分を目こぼしして貰うだけじゃ駄目なんだよね。
「ありがとうございますです。明日も治療するって皆と約束してるんですけど見に来ますですか？」
良い機会だから明日の治療の認可も取っておかないと。
「ほ？」

「学園長のおじいちゃんは忙しそうですから……ダメ、ですか？」
さっきの涙が残ったまま上目使いでじっと見詰める私。
「んー、そうじゃな。時間にもよるんじゃが、何時頃かね？」
その威力が効いたのか、それとも私の獣医技術の見極めをするつもりなのか、ありがたくも前向きな返事が貰えた。
「昼過ぎです」
なら、この機会に私の腕を印象付けておくべきだろう。
魔法生徒扱いが避けられそうにないなら、その範囲内で私にとって都合が良い環境を要求してみたところでバチは当たらないと思うのだ。
「ならワシの代わりに誰か迎えにやらせるわい。それでええかの？」
「はいです。では失礼しますです」
色好い回答が得られたので、私は今度こそ薬草集めに向かったのだった。
自転車と競争ができそうな速度で急いで。
……麻帆良学園都市内じゃなかったら、多分確実に不審がられた行動だと思ったのは心の棚の上に積み上げておく。

翌日、約束の場所に現れたのは昨日に約束した方々より増えた患者の動物の皆様と、基督教の尼僧姿のお姉さまだった。
「初めましてです。八束千歳と言いますです」
ペコリと挨拶と自己紹介。
「こちらこそ。シスター・シャークティと呼んで下さい」
私が有する神核は、どうやら唯一神の統制を外れた天使を捕獲して改造した機工女神のものだったらしいので、現役のシスターさんに挨拶されるのは少々違和感がある。
とは言え其れ以上の不都合は無いので、顔色を変える事も無いんだけど。
「ここに来てくれた子達の治療を始めますので、何か気が付いた事

があったら言って下さいです。何か注目もされてるようですし」
幻術で台詞の裏側に呪文詠唱を乗せて認識阻害魔法と人払いの魔法を発動してから、昨日森で採取して刻んで混ぜておいた薬草を入れたタッパー2個をボストンバックの中から取り出す。
お待たせしたです。薬を配るので残さず食べて下さいね。食べたら直ぐに出したくなるので我慢しちゃ駄目ですよ。
昨日と同じく鳥のさえずりを模した呼びかけに応じて、私の前に列を作る皆様。
うーん、実に訓練されてるなぁ。
「言葉が通じているのですか？」
「みんなの頭が良いんだと思うです。私の言いたい事を読み取ってくれてるのかもです」
それぞれに合わせた適量の薬草を食べさせつつ答えてると、いつの間にか昨日の患者さん達は少し離れた草むらの方で凄い臭いをさせ始めており、残ったのは口コミでやって来た患者さんだけになった。
なので、昨日と同じ様にパッパッと手早く無詠唱魔法を混ぜて処置していく。
西洋魔術の《治癒》と東洋医学的な気の流れを整える的な技術に外科的療法を適宜混ぜるという私らしいごちゃ混ぜ治療だけど、処置の的確さには少しだけ自信がある。
これで終わりです。皆さん、お大事にですー。
私の挨拶と共に解散して行く動物達を横目に見ながら、シスター・シャークティに向けてペコリと頭を下げる。
「わざわざどうもでしたです。おかげで治療がちゃんとできましたです」
「いえ、こちらこそ素晴らしいものを見せていただいたわ」
後は慌てず騒がず現場を離脱するのみ。
現場離脱自体は上手くいった。

だが、保育施設に戻ったら学園長からの呼び出し通知が来ていた。
どうやら気楽な修行漬け生活はここまでになってしまうのかも。

第０６話（後書き）

ようやく準備の準備が終わった所でしょうか。ここまでやっても未だ主人公は実力を出し切れる状況じゃなかったりします（麻帆良の結界が無くても）。戦闘面では魔導機杖と魔導鎧、医療面では愛用のメス、料理面では調理用具と練習の機会が必須ですね。

もっとも、貰い物チート能力をちゃんと使いこなせる様にするには更に経験を積まないといけないんですけどね。願い事で転生先の身体に合わせた調整してないですし、色々な人物から能力貰ったので其の擦り合わせとかも必須ですので。

第07話

誰の趣味か分からないが女子校エリアの真っ只中である麻帆良女子中学校にある学園長室に呼び出された私を出迎えたのは、学園長を含めた6人の男女だった。

「こんにちはです、学園長のおじいちゃん、シスター・シャークティ。そして初めましてです皆さん。八束千歳と言いますです」

「こんにちはじゃ、ちとせちゃん。こちらは、シスター・シャークティから順に、神多羅木君、明石君、弐集院君、ガンドルフィーニ君じゃ」

学園長の紹介に続いて口々に出てくる挨拶に相槌を打ちながら、この場に集められた魔法生徒や魔法先生についての共通点を考えようとして、直後に放棄した。

データが足り無過ぎてロクな答えに成り得ないからだ。

あと、以前遭った“怖いおじさん”は神多羅木先生で間違いないらしい。

「ちとせちゃん。おぬしは魔法を使って世のため人のために働く気はあるかのう？」

真剣な眼で問い掛けてきた学園長に、私も本音でぶつかってみる。

「世の中のためはともかく、人助けはしてみたいです」

人助けと言っても所詮は自己満足の延長なんだけどね。世の中のためなんて言ってメガロメセンブリア元老院の駒扱いされるのなんてゴメンだから、正義の御旗を掲げて行動する気なんてこれっぽっちも無いし。

「では、ちとせちゃんを魔法生徒に任じるものとする！　指導担当は弐集院君じゃ」

「よろしくお願いするです」

「よろしくお願いするよ」

私と恰幅の良い青年との挨拶が重なった。

……って、他の人って何でここにいるんだろ？
「さっそくじゃが仕事じゃ。弐集院君と協力して麻帆良学園都市内の野犬全部に予防接種をやってくれたまえ。犬を集める担当はシスター・シャークティ、神多羅木君、ガンドルフィーニ君の3名、動物病院での立会いは明石君とする。式鬼が混じってるかもしれんで慎重にな」
「「「はっ」」」
そういう事か。って、そういう事に“学校の先生”や“生徒”を使うのはどうかと思うのだけど、魔法関係のトラブルの種が混じってる恐れがあるなら仕方無いのかな。
私に関しては、節分での有様見ての抜擢だと思えば腹も立たないし。

私の初仕事だからと気張って取り掛かってはみたものの、いざ蓋を開けて見れば拍子抜けしてしまうほどスムーズに予防接種が終了した。
例年に無いほど諜報用の式神が寄生してた犬が少なかった事と、私が注射すると犬が痛がらないせいか暴れる子がいなかった事が順調に終わった主な原因らしい。
……そう言えば節分の時に猫さんや鳥さんに仕込まれてたモノまで含めて、かなりの数の“何か”を体内から摘み出して処理したなぁと思い出した。
仕事が終わった後、肩を並べて犬さん達の治療をした一般人の獣医の皆様に飴を貰ったり、バイトに来ないか真剣に勧誘されたりとかあったが些細な出来事である。
ちなみにバイトの件は丁重にお断りさせて貰った。獣医師免許も無いのにお金を貰って治療してたりなんかしたらトラブルの種になりかねないからだ。
ともあれ、今回ので私に動物関係担当の肩書きがついたのは間違いないと思う。

本職って訳じゃないんだけどなぁ、『動物のお医者さん』は。

「学園長のおじいちゃん。八束家の古文書はどこにあるです？」

初仕事を終えた私は、学園長室で今まで訊ねたくてうずうずしてた質問を飛ばした。

家伝の知識と魔法を受け継ぐ事は、私にもできる数少ない供養だと思っていたからだ。

魔法生徒じゃないとはぐらかされるのがオチなので、今まで我慢していたのである。

「ほっ。何故そんなものがあると思うのじゃね？」

「思うじゃなくて知ってるです。初めて麻帆良に来た時の記憶、切れ切れだけどハッキリ残ってるです」

眼だけが笑っていない学園長との睨み合いを制したのは、私だった。

いや、向こうが真偽を確かめるだけのつもりだったからだろうけど。

「図書館島の地下３２階、そこの特別書庫の一つに保管しておる。閲覧許可はワシから話を通しておこう」

「ありがとうです」

って事は、ウチの家伝の魔法術式は既に解析済みかなぁ。

あの司書のアーティファクトで母さんの人生を蒐集されてたら厳重な封印が掛けられてたとしても無意味だし、内容次第では私に見せずに封印するだろうからね。

基本的には良い人よりの行動したがる関東魔法協会とはいえ、組織防衛の事を考えたら当然の処置だから仕方無いんだけど。

何とか首尾良く閲覧許可は得られたものの、保管場所が選りにも選って人外魔境同然の図書館島下層部……地下迷宮と言っても過言じゃない地帯である。

治療や認識阻害や人払いの呪文の習熟を優先し、戦闘用の呪文や瞬動の鍛錬を余りしてこなかった私にとり、現状では到達が非常に困難なフロアと言えよう。

ならば、どうするか？

答えは簡単。其処に到達できるだけの実力を手に入れれば良いのだ。

この難題に私は自身の持つアイテムメイカーとしての技術を使って魔導機杖を始めとする各種マジックアイテムを用意し、戦力の底上げを図るという回答を弾き出した。

学園長は長い時間掛けて修行させて、私が西洋魔術師としてのスタイルを固めてしまうまで閲覧できないようにしたつもりなのかもだけど、そうは問屋が卸さない。

予算と時間と環境と世界の違いという制約はあれど、私にしか使えない仕様で当座の間に合わせ程度の性能のアイテムならば、何とか製作は可能そうだからだ。

正直言って最初は半端な性能のアイテムの製作なんて気が乗らなかったのだが、自らの製作技術を練磨する為の習作造りやネギま世界に合わせて調整してみた技術の検証試験と考え直してみれば、途端に有益な行動に早変わりである。

私が工学関係の大先輩達に混じって回収待ちゴミの山の中から使えそうな材料を漁って部屋に持ち帰り、工作魔法技術の確認がてら何とか新品同然の状態に修理できた玩具を何個か保育施設に寄贈したのは、アイテム作りを思い立った翌日の出来事であった。

そんなこんなしているうちに、いつの間にか施設の子供達が壊し

てしまった玩具の修復だけじゃなくて、倉庫に仕舞ってた古い家電機器の修理まで引き受けてしまっていた。

まあ、あと一ヶ月ぐらいで部屋を引き払って初等部女子寮へと移るので、今まで世話になった恩返しと思って無償でやっているんだけどね。

おかげで当初の目標である魔法機杖を始めとした戦力向上に寄与し得るマジックアイテムの製作はなかなか進まず、余禄的な小物が３つできたに留まっている。

一つ目は、廃棄されていた旧式パソコンとＣＤラジカセとファミコンなどの部品を寄せ集めて魔改造し、カラー液晶モニタとＤＶＤ－Ｒと大容量ＨＤＤとＵＳＢ端子を備えてる上に１０年後でもハイエンドＰＣを軽く上回るだろうほどの鬼性能にはできたものの、変形機構を含む魔法行使機能の組み込みに失敗してしまった魔導機杖試作壱号あらため卓上電脳ＭＺ。独特の形状をしたモニタ一体型のデスクトップパソコンだ。

二つ目は、装着者に対して簡易防御魔法を付与する機能を盛り込むのには失敗したものの、耐久性の向上と自己修復機能の魔法術式を組み込んであるのに加え、光触媒による半自動洗浄機能までも備えた紺色のリボン。

最後は、携帯型カセットテープレコーダーの中身を、着脱可能な容量８ギガバイトのＵＳＢフラッシュメモリと其れに記録した音を再生できるようにしたデジタルプレーヤーと入れ替えたものだ。使用者が詠唱した呪文を録音し、僅かに遅れて再生する事で輪唱効果を発生させて魔法の威力を増大させる支援装備の試作品だが、呪文詠唱どころか単独では普通の音さえ録音できず、普通の音楽の再生専用機になってしまった失敗作だ。データ圧縮用のプログラムを未だ作って無いのでＭＰ３プレーヤーほどの曲数は入らないけど。

……あれ？　改めて羅列してみると現時点では間違いなく麻帆良の外に出せない出鱈目な性能の逸般品ばかりなのに小物呼ばわりしてたってどういうこと？

確かに当初に予定してた性能を発揮できてる装備品は一個も無いんだけど。

私も麻帆良の感覚に毒されてきたのかな？　気をつけないと。

普通の人間は小刀の先端でシリコン板に多層集積回路を刻んだり、銅板とガラス板をナイフ一本でハードディスク用の円盤に加工するなんてできないって事ぐらい忘れない程度の常識は保っておかないと痛い目を見ちゃいそうだしね。

こうして日々が過ぎていったのだが、一つだけ私にとって残念な……麻帆良の外での常識通りの事が起きた。

私が学園長宛てに出した医者としての活動願いが却下されてしまったのだ。

そこらの二流医大卒業生の平均よりも間違いなく私の技量と知識の方が魔法抜きでも上のはずなのだが、まだ6歳の子供に医者の激務をさせるのを躊躇するのも理解できるので余り腹は立たない。

しかし、私にとって不都合な事態ではある。

雪広あやかの弟が天に召されるのを防ぐ手段が限られてしまったからだ。

しかも迂闊な策を強行すれば学園上層部すら敵に回しかねない。

最悪の場合は見殺しにする事を含めて、色々考えとかないと。

第０７話（後書き）

ここまでで初等部入学前のイベントは終了ですね。

第０８話

なんだかんだあったが、ついに麻帆良学園本校女子初等学校に入学した。

私のクラスには、いいんちょ（雪広あやか）、ラッキー仮面（椎名桜子）、元気娘（明石裕奈）、触覚星人（早乙女ハルナ）などが集められている。

悪乗りした時の五月蝿さでは幼稚園時代から定評がある面子が多いらしく、弐集院先生が担任に決まった後で愚痴を色々とこぼしていた。……明日菜が転入した時に彼女を紹介していた先生は女性だったので、地味に原作改変が起こってるのかも。

まあ、あのメンバーが全員揃う中学入学以降は騒がしさが更にアップするんだけど。

役職的には、私は保健委員になった。

ちなみに学級委員は、いいんちょさんである。

あ、言うの忘れてたけど、ここって初等部から女子校と男子校に別れてるらしい。

それを考えると原作でのネギへの警戒心の無さが分かるような気は少しするかな。

あの性犯罪者で魔法犯罪者なガキへの警戒心を捨てる気は、私には無いけどね。

ひょんな事で公衆の面前で女の子を裸に剥いたり、相手をパーにするのを厭わずに記憶消去の魔法を使ったりなどする、ある意味で第一級の危険人物だからな、彼は。

もっとも、私に迷惑をかけないでくれれば、面と向かってとやかく言う気は無いけど。

他人に胸を張って偉そうな事を言えるほど御立派な人間じゃないからね、私は。

今生では女性の身体なのに、意識して男性的な思考と嗜好を保っ

てる辺りが。

入学式と言う名の面通しが過ぎ、ようやく今年度からの我が住まいへと帰って来た。

数日前に同じく麻帆良学園都市内にある保育施設から移って来たのは、麻帆良学園本校女子初等学校付属寮……初等部女子寮の一室だ。

ちなみに初等部は全寮制ではなく、自宅から通学して来る児童が大半である。

しかし、麻帆良学園が幼少の留学生や孤児の受け入れを行っている都合上、こういう施設が存在しているのだ。……多分、魔法世界の住人をも受け入れてるせいだろうが。

本来なら1部屋を2人から4人で使う事になってるんだけど、何故か私は一人でキッチン・シャワー・トイレ完備の上、間取りが広めの部屋を使う事になっていた。

そりゃ、こういう申請を学園長に出したの私だけどさ。

立派なキッチンと料理する腕があっても、食材を買うお金が無いと無用の長物なんよ。

しばらくは寮生なら無料で食べられる寮の食堂のお世話になるしかないかな。お小遣いは貰って無いし、魔法生徒としての活動はボランティア扱いだし。

どうにかして自分の裁量で使えるお金、増やさないとなぁ。

確かに武闘派も混じってはいたものの、ただの一般女子中学生如きがネギと仮契約しただけで、フェイトの配下と互角に渡り合える程に強くなれる基礎が固められていた。

普通に考えれば、とてもおかしな事としか言えない現象である。

その疑問は麻帆良初等部で体育の授業に参加した途端、ピークに達した。

私の前世の記憶が確かならば、かなり鍛えた大人でないとできそうもないような真似を楽々とクリアする様な娘さんが多々いらっしゃったからだ。

ボール遊びでも物凄い剛速球さえもバンバン飛び交ってるのに、まともに直撃されても何故か大怪我にはならなかったりする。

何故なのだろうか？

私は世界樹……神木・蟠桃が常時放っている多大な魔力の影響だと仮定した。

恐らくは下手な霊山よりも濃密な魔力は、其処で暮らす人々の心身に作用して能力を多少なりと引き上げ、それにより魔力や気への親和性を知らず知らずのうちに鍛え上げているのではないかと睨んだのだ。

この理屈ならば、麻帆良以外の学校の運動部の上位陣に人外な能力の持ち主がいなくても麻帆良の外でならば充分に勝負が成立する余地が発生する。

そんな理屈をこねつつも、私は引きつった目で１０段もの高さに積み上げられた跳び箱を見詰め、溜息を吐いた。

小学一年生の女子に飛ばせる高さじゃないよね、常識的に考えて。

……でも、既に飛んでる同級生がいるんだよなぁ。

９段まで飛び越えられた時点で常識だの何だの言う資格無いのかもしれないけど。

体育の授業で魔力や気を使って身体強化するのはズルだと思うという自分なりのこだわりを内心罵りつつ、私は私なりの努力の成果を試すべく助走を始めた。

……そして、踏み切り損ねて真正面からぶつかり、転倒して頭を打ちそうになった。

受け身が間に合ったのは、修練の成果と言うより運が良かったからだろう。

保健委員が保健室に運び込まれるハメにならなくて助かった、羞恥心的に考えて。

無論、皆が皆運動が得意という訳でもない。

そういう人間でも、頭が良くなったり、技術が身につけ易くなったり、身体を壊しづらいようそれとなく守護されていたりとかで世界樹の恩恵を受けられているようだ。

なので普通なら調子を崩してしまうような練習や生活習慣とか、危険な実験とかも気軽かつ比較的安全に行えるようになり、修練の効率が上がっているみたいである。

麻帆良の内外で１０年単位での技術格差があるようにしか見えないと言う現象は、恐らくは其の関係もあるのだろう。

その不条理を肌身で感じられるようになった私は、ちょっとだけ自重を止めてもメガロメセンブリア元老院に睨まれるほど目立たないんじゃないかと少しだけ楽観的な考えを持てるようになり、麻帆良大学の研究棟へと出入りしてみる事にしたのだった。

そして、入学から二ヶ月余りが経ち、学園祭がやって来た。

うちのクラスの出し物は各々が思い思いに作った製作物の展示だったのだが、私は皆の描いた絵や工作を手製の有機ＥＬモニタで映し出してみた。

そう。青色発光ダイオードの投入である。

この展示に先立ち、日本を含めた世界各国への特許も申請手続き済みだ。

麻帆良大学工学部の名前で発表されてはいるが、工学部が得る純益の半分は開発者（つまり私）のものという契約を結んでおり、多大な利益が期待できると思われる。

調子に乗って他の近未来技術的な工業製品の製造に必要な情報の取り引きや特許請願とかもやってしまいたくはなったが、今のところは流石に自重した。

日本の精密工作技術が未だそこまで追いついてない可能性も考えられたし、手札を一度に出し過ぎても怪しまれ過ぎると思ったからだ。

寧ろバブル経済の崩壊で株価が落ち込みまくってる日本企業を幾つか買収して経営を左右できるようにしたり、仕手戦で稼げるようにしておいた方が良いかも。

……桜子ちゃんの協力が欲しいとこだけど、それも自重やね。

ともあれ展示会は無事に済み、学祭の振り替え休日中に早くもライセンス契約が幾つかまとまったそうで、契約料の一部が私の懐に入って来た。

フットワークが一番軽かったのはとある米国企業だったが、独占契約でないと絶対駄目だと譲らなかったので、二番目に来た企業との契約になったらしい。……ちなみに二番目に来たのも米国企業だったりするのが彼等らしいと言えばらしいのだろうか。

日本企業の出足は鈍い。彼等に比べれば中国や韓国の企業の方が早かったのだが、私は彼等にライセンスを与えるつもりは毛頭無いし、かの国々やロシアに私が開発した部品を生産する拠点を置く予定の企業に許諾を出す気も無い。

中国は大市場、ロシアは資源大国と自画自賛しているが、どちらも約束を破る事に罪悪感を持たない侵略国家であり、謀略と弾圧が大得意な国である。

彼等と手を組んだら始めのうちは多少の利益を出せるかもしれないが、ノウハウを盗んだら直ぐに無許可で複製品を作られ、損害を受けてしまうのが目に見えているのだ。

それに高性能電子部品を国内で生産する手筈を整えれば、日本の

就職氷河期を早期に終わらせる一助くらいにはなれるかもとの思いもある。

バブル期に高騰した人件費を縮減したい気持ちは分からなくは無いけど、新規採用減や派遣社員化は技術継承の妨げだし、海外移転や過度の給料切り下げは国内景気の急冷にも繋がる大問題だから歯止めをかけないとならんと言うのに。

……果たして、ちゃんと先が見える経営者や政治家がどれほどいる事か。目先の欲に飛びつく愚物に軒並み潰されてなきゃ良いけど、本当に。

あと、麻帆良大学病院にも毎日ではないが顔を出し始めている。

「おうおう、ちとせちゃん。よう来たのう」

「今日は饅頭を用意してきたでな。たんとおあがり」

「ありがとうございますです」

患者のお爺ちゃんやお婆ちゃんの話し相手や其れをきっかけにした肩揉みやちょっとした指圧なんかのマッサージなんかをやるためにだ。

治癒呪文抜きのマッサージでも肩凝りや腰痛などの軽減、軽い体調不良の解消ぐらいなら今の私の技量と筋力で何とかできる。流石に重篤な病気や重い怪我には傍目にも医療行為に見えたり、魔法治療をやってるとバレるような行為をしないといけないが、そういうのは基本的に医師免許持ちや看護士に任せとけば私が問題にされる事は無いだろう。

下手に凄い治療をやらかすと魔法の秘匿義務違反でオコジョにされちゃう可能性が高いから気をつけないとね。精神的な病気や栄養的な衰弱とかはともかく、身体的な病気や怪我は魔法が使いたい放題使えたら、私みたいなチート技術の持ち主じゃなくても高確率で何とかできちゃうからなぁ。

孫の嫁にならんかとの誘いを笑顔を作って断りつつ、今日も私は

自分の部屋で淹れて魔法瓶に入れて持って来た焙じ茶をプラスチック製のコップに注いで回り、お爺ちゃんやお婆ちゃんが聞かせてくれる様々な昔話とか先人の知恵に耳を傾けるのだった。

第０８話（後書き）

小学校入学から、しばらくの間の出来事です。主人公が政治経済状況について愚痴っておりますが、この作品はあくまでフィクションであり、現実の人物や団体や国家などとは全く関係ない事を改めて明記しておきます。……ホントダヨ。

あと、麻帆良には共学の学校もちゃんとあります。

第０９話

一学期が終わり、明日から夏休みに突入するという日に私は宿題を全部終わらせた。

いや、それなりに厚いプリントの束だったので配られた時の教室は阿鼻叫喚の巷だったんだけど、所詮は小１相手の基準なので前世の記憶とチート能力を併せ持つ私にとっては問題を読む時間と答えを書く時間があれば充分片付けられる量だったのだ。

日記系の必須課題が無かったのは幸いだけど、これって多分どうしても出張が多くなる魔法先生達の負担軽減を狙ってるんじゃないかと思う。あくまで邪推だけど。

自由課題は、色紙で外装を作った手製のカラクリ茶汲み人形だ。手の盆に湯飲みを載せたらゼンマイ動力の車輪で前に動くというだけのオーソドックスな仕組みだが、小学生の工作としては麻帆良以外じゃ過度に高度な代物である。

そうして後顧の憂いを断った私は、早速に次の仕事に取り掛かった。

中枢部に魔法行使支援用の魔導電脳を組み込んだ試作型魔導機杖の作成だ。

もっともアップデートや試作部品のデータ取りが容易なユニット構造にするので、とりあえず最低限の機能を発揮できる中枢部ができたら一段落なのだけど。

この杖の魔導電脳には半導体の小札に刻んだ積層式集積回路と立体魔法陣を組み合わせた複合チップを使う事にした。採用の決め手は、性能の割りに消費電力と発熱量が少ない事ではなく、今の私が使える工具や設備や技術や魔法でも作成できるからだ。

量子コンピュータが麻帆良大学工学部で既に開発されていたら、そっちを搭載したのだけど、残念ながら１９９５年現在、麻帆良に量子コンピュータは存在していない。

これは学園のメインサーバーが茶々丸一人で容易に陥落させられた事や、麻帆良の外での技術水準などから見て納得できる点だ。茶々丸たちに搭載されている量子コンピュータは、恐らく超鈴音が持ち込んだ未来技術なのだろう。

閑話休題。

宿題が終わったとは言え、使える時間の全てを道具の製作に注ぎ込める訳でもない。

1週間に2日は麻帆良大学工学部で魔法を使わずに近未来技術を作る方法の研究、2日は麻帆良大学病院で御近所の老人達との歓談、1日は自然公園で動物の皆さん相手に獣医の真似事をやらかしてるので、私が1日丸々自由に使える日は週に2日だけなのだ。

だが、私にはチート技術と其れで作った超高性能パソコンがある。

工学部通いと老人会への顔出しを学校がある日々と同じぐらいに抑えれば、日課である体力と魔力の鍛錬を続けながらアイテム製作に勤しむのは容易い事なのだ。

……いざとなったら分身すれば良いんだしね。

「ふう。これで一段落です」

2週間余りが経ち、ようやく魔導機杖の中枢部分が一応仕上がった。

一応と付けてるのは、未だ起動したばかりなので精霊化魔法を利用した形態変化機能が使えないので、最終調整ができてないからだ。

それでも最低限の機能は使用可能なので、私は今の今まで杖を加工するのに使っていたメスを机の上に置き、簡素な丸い灰白色のブローチっぽい魔導機杖を手に取った。

そして、裏蓋を開けて主動力をスイッチオン。

「……み？」

しばしの時を置き、ブローチから可愛らしい鳴き声のような電子

音が聞こえてきた。
私が作り出せた最初の魔導機杖の産声である。
「機能自己診断開始です。データはこっちにも寄越すです」
「み！」
私が有する特殊能力を以ってすれば、手に持った電子機器が処理している最中の自己診断データと現物との差異を照応するなど朝飯前なのだ。
これがつつがなく終われば、作り直しをしなくても動作に問題が無い可能性が高いと言う事なので、そこで改めて命名する予定だったりする。
「みっ！」
と、考え事してたらいつの間にか終わってたな。
どれどれ……ふむ。変身以外の全機能正常。変身機能はチャンバーへの魔力充填が終わる72時間先まで使用不能……か。私の検査結果と同じでホッとした。
さて、この子に何て名付けようか。
悩むなあ。
下手な名前つけて言霊に引っ張られても嫌だしなぁ。
あらかじめ候補絞っとけば良かった。
……良し、決めた。
「汝が名は“アリア”です」
「み！」
『詠唱』という意味の名前を与えられた私の杖は、元気そうな返事をしてくれる。
彼女が精霊化アイテムになれば、さぞかし愛らしい姿を見せてくれる事だろう。
麻帆良学園都市全域に張り巡らされた退魔結界のせいで、魔導機杖の精霊も弱体化せざるを得ないものの、それでも手乗りサイズの人形の姿を保つぐらいは余裕だ。
その上で実用的な護身能力や自律的行動力なんかを持たせられる

かとなると少々難しいんだけど。魔力に頼る部分が大きい能力ほど退魔結界の影響が強いからね。

日課である魔法の訓練のついでにアリアの能力を軽く試してみた私の次の目標は、図書館島地下にある八束家伝来の秘術書が保管されている書庫への到達である。

アリアが世界樹などの強い魔力存在による影響を考慮した術式補正の計算を手助けしてくれるおかげで学園式魔法由来の術が使い易くなり、危険な図書館島地下の迷宮へと挑戦する用意がようやく整ったのだ。

「さて、行きますかです」

アリアが完成した翌々日に図書館島へと赴いた私の姿は、一見して徒手空拳。

だが、アリアという魔導機杖をブローチ代わりに付けているだけで、この学園の魔法先生のうち半数くらいになら太刀打ちぐらいはできるに違いない。

……結界の外なら、もう少し何とかできるんだろうけど、燃費悪いからなぁ。

地下迷宮として名高いだけあって、一般生徒の立ち入りが禁止されている地下４階以降は本の隙間から矢が飛んで来たり、落とし穴があったり、本棚が倒れ込んできたり、金ダライが落ちて来たり、はたまたパズル式の鍵がかかった扉があったりと、体力知力ともに問われる難所がポツリポツリと私に襲い掛かってきた。

罠の配置されている間隔がこれまた絶妙で、一回引っ掛かって気を引き締めた直後に次のが来る事は滅多に無く、常人ならば気が緩むであろう時期を見計らっているかの如き巧緻さで設置されてるのには感心すら覚えたものだ。

しかし、これでも私は魔法使いの端くれ。
戦闘用の強化魔法である《戦いの歌》は覚えてないし、場所柄から考えて得意系統の一つである火の魔法も自粛中だけど、それでも魔力による身体強化や簡易防御魔法はアリアの助けもあって普段より楽に使えるし、《風楯（デフレクシオ）》を身体の周りに常時展開してるおかげで罠の半分くらいは防げたりする。
楽勝とは言わないまでも、これなら何とか大丈夫かなと思った其の時、足下でカチリという音がした。
イヤな予感がする。
背後でゴトンという音が鳴ったか鳴らないかというタイミングで、私は迷わず眼前の本棚と本棚の間に作られた一本道の先へと走り始めた。
欲を言えば上へと逃げたい気がするのだが、あいにく天井まで2mもない。
走りながらアリアの力を借りて振り向かずに確認した後ろの音源の正体が、こちらに転がってくる直径2m弱の金属球なので、私の選択は図らずも割りと良かったようだ。
仕掛けを作動させなかった方が良いに決まってるんだけど、それはそれで。
って考えてるヒマあったら其の分走れ私っ！
「《風楯（デフレクシオ）》っ！」
古典的な罠でありながらも、迫力で陳腐さをひき潰しているかのような巨大鉄球を足止めするべく進路上に風の楯を発生させてみるが、得意系統じゃない風術なせいか呆気無く突破されてしまった。
勢いもそんなに落ちてないようだ。
拙い、このままじゃペシャンコだ。
連動罠が作動でもしたのか、直線道は終わる気配すらないし。
……終わる気配が無い？
そう言えば床が傾いてもいないし、これは何かの魔法トラップ！？
空間を歪めてる系列の罠ならば必ず何処かに急所とも言うべき特

異点が……って、そうか！？　この空間で唯一特異で、かつ罠にはまった者の技量を試し易いモノ。

それは……

「アリア。コーラス３、ディレイ２」

「み！」

「ロジカル・マジカル・テクニカル！　（光の精霊１１柱　集い来たりて敵を撃て）ウンデキム・スピリトゥス・ルーキス・コエウンテース・サギテント・イニミクム！　《魔法の射手・連弾・光の１１矢》サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス！」

振り向き様に放った１１本の光の矢は、私を執拗に追いかけてくるデスローラー……巨大金属球に見事に着弾し、見事に砕いてのけた。

と、その瞬間、私を不思議な感触が包んで光景が一変する。

どうやら罠のスイッチを踏んだ場所に戻って来たらしい。

いや、そもそもが幻覚系の罠にかかったと言う事なのだろう。

実に巧妙な仕掛けだと感心させられてしまった。

全文詠唱してもアリアが輪唱効果でサポートしてくれないと未だ実戦レベルで使えない魔法の矢まで撃たなきゃならない破目になるとは……図書館島恐るべしである。

それでも今更後には引けない。

地下３２階まで、あと１７階。

寮の門限まで、あと５時間半。

帰りにかかる時間も考えればギリギリの戦いが私を待ち受けていた。

とりあえずは、私のお腹からの抗議を自作の焦がしニンニク入りラー油おにぎりで鎮めるのが先だろうけど。

コツコツ、コツコツと靴音が鳴る。

本棚と書籍で彩られた地下迷宮はまだまだ容赦無く続くものの、

私の目的地は眼前だ。
対象となる存在の周囲の可能性を操作し、幸運度を3倍にする《祝福》の魔法をかけたおかげで、かなり最短に近い経路を罠にかからず踏破できた賜物である。
そうでなければ、門限まで残り2時間を切った今になっても20階辺りをうろうろしていた可能性は高過ぎるほど高い。
小学校一年生の女児が、地下32階まで徒歩で到達できてる時点でアレなんだけど。
エレベーターがありそうな区画に入れなかったのが痛いけど、毎日の鍛錬の賜物か魔力での身体強化のおかげか、未だ疲労でバタンキューとならずに済むようだ。
さてさて、ここか。
鍵はしっかりかかってるし、タチの悪そうな罠も仕掛けてある……と。
これ突破できるような腕を身につけなきゃ中の本は読ませないって事だろうなぁ。
西洋魔術にある程度熟達しなきゃ歯も立たない性質の強力な呪縛で扉が封印されているみたいだけど、この封印の仕方なら私には通用しない。
探索魔術で調べてみたところ封印されてるのは出入り口の扉だけなので、メスで壁に私が通り抜けられる穴を開けてしまえば解決できるのだから。
……力技にもほどがあるけどね。
さて、侵入できたところで早速我が家に伝わる古文書の捜索だ。
ここでは頭数が欲しいので、幻術を使って私自身と同等の能力を備える分身《別魅》を4体作り、特別書庫の書棚に収められている書籍を次々にチェックさせる。
私本人は、開口部と出入り口を中心に周辺の警戒だ。
そして30分ほどが経って……
「ようやく見つけたです」

ついに私は八束家秘伝の古文書のうちの一冊を見つけ出した。
その古文書を見つけた分身には内容を速読させといて、他の分身にはウチの古文書が他にも無いか残りの書棚を調べさせる事にした。
そしたら、もう二冊……家系図と縁起伝が見つかったので、それも手分けして読み流させておく。……読んだという事実があれば脳内図書館に内容が記録されるので、理解するまでじっくり読み込むのは後でも充分なのだ。
書棚全部は見終わった段階で分身が1体残っていたので、探す課程で見つけた西洋魔術の上級書と言うか戦闘魔術が多々載っている呪文書を読み込ませておく。
ここに来る途中でも思ったが、今の私は力不足も良いとこなのだ。早期に八束の術を修めておきたいとの思いが無ければ、早々に逃げ帰っていただろう。
しかし、私はここに到達できた。
恐らくは学園長や伝説の司書の手のひらの上での出来事なんだろうけど。

メスで切り取った壁は帰る際に魔法で接着して修理しておいた事、門限に間に合わなくて寮母さんに怒られてしまった事を此処に追記しておく。

第０９話（後書き）

主人公の愛用武器登場です。最後まで使い続けるかについてはネタバレにつき秘密。

第１０話

八束家の古文書を精読した結果、我が家秘伝の魔術は護符を媒介に精霊へと働きかけて行使する方式で、対魔結界構築・瘴気の浄化・妖魔の封印・護符の武器化の４つの術しか記載されてない事が判明した。

身体強化は気を使って行う方針らしく、武器化した護符が備えているらしい気の増幅効果と合わせれば、それなりの戦闘能力が期待できるみたいである。

しかし、気を用いた基本的な身体強化法は記載されていたものの、瞬動や浮遊術みたいな戦闘補助技術については記述無し。

一通りの仕事はできるが、飛び抜けた戦闘力には至り難い代物と言えるだろうか。

まあ、短時間しか顕現させておけないとは言え、他人にも渡せる魔法の武器を創り出せるアイテムを作れるんだから、有用っちゃ有用なんだけどね。

なので、予定通り全部一通り覚えてしまう事にした。

事前に護符を作っておく必要があったり、護符が原則として消耗品だったり、護符一つにつき魔法を一つしか込めておけないなどという欠点があるにしても、いざ使う際に大仰な呪文詠唱が要らないと言う利点は実に大きなものだからだ。

ちなみに護符の形状は特に定型が決まっておらず、呪文が書かれた紙の札の他、祓い串や破魔矢や木刀や勾玉などに術式を刻む方式でも作れたりする。

こうして作った護符を使用できる回数は恐らく素材の魔法的な耐久力に依拠してるんだと思われるけど、未だ実験していないから定かではない。

さて話は変わるが、まがりなりにも魔導機杖としての要件を満た

してるのが実戦証明された自作の杖アリアのおかげで、私のできる事の幅が大いに広がった。

元々が此の世界のものじゃない術式体系を使う際は世界の違いによる補正を加えなきゃならないのだが、アリアが補佐してくれる事で格段に其の負担が軽くなったのだ。

より高度で複雑な魔法が行使できるようになった私が真っ先に求めたのが、できるだけ目立たずに魔法の練習ができる環境である。

そう。エヴァンジェリンが所有する別荘と似たような代物が私には要るのだ。

なので自分で作っちゃいました。

棚に飾ったボトルシップの亜種みたいな箱庭を。

かのレーベンスシュルト城が如き気品ある城塞と多彩な環境は望むべくも無いまっ平らで無機質な床が延々続く超巨大ドームではあるが、外部で1時間が過ぎる間に内部で24時間を過ごせる機能は抜かりなく常備する事に成功した。

加えて内外の出入りに特製の鍵を要する事で部外者の侵入を困難にしてあるのと、元々が学園式魔法を機軸としたアイテムなのに西洋魔法の産物だと誤認する幻覚魔法を仕組んであったりする。

……幻覚を仕組む過程でリアリティを出すべくダイオラマ魔法球の作成技術を調べ、その結果として正攻法でも作れそうなぐらい知識が溜まってしまったのはご愛嬌だが。

ともあれ、人目を殆ど気にせずに派手な見た目の魔法を練習できるようになった効果は大きいし、現代技術とかけ離れた物の置き場所にもちょうど良い。

作ったばかりで別荘は、私の生活に無くてはならない物にまでのし上がってしまったのだった。……当初の予定通りに。

これでようやく順風満帆と思いきや、突如病院で仲良くして貰っ

てたお婆ちゃんのうちの一人が夏風邪をこじらせてお亡くなりになってしまわれた。

魔法の秘匿を守らず、自重も捨てて私が持てる全力で治療すれば死なせずに済んだかもしれなかった病状だったらしいんだけど、知らせを受けた時には既に遅過ぎたのだ。

落ち込みつつも香典を持ってお葬式に出席してみれば、お婆ちゃんが私に遺産の一割を残してくれたみたいで遺族の人の一部……2～3人ぐらいに凄い剣幕で怒られた。

『遺産目当てで近いづいたんでしょ、この泥棒猫が！』

って、小学校1年生の女児に向かって吐く台詞じゃないと思う、絶対。

自分達の取り分が少なくなるからって、大人気無さ過ぎる。

罵倒されたせいで辞退する気を無くす私も人の事は言えないんだけどね。

お葬式から帰ったら学園長に弁護士紹介して貰って、遺産相続手続きと寄付先の選定を手伝って貰わないと……。正直言って面倒だけど、難癖つけられると困るからなぁ。

とか何とか考えていた帰り道。

街灯が灯る車の交通量に比べて人通りが少なめの道路の歩道で、私はチンピラですって看板をぶら下げたサンドイッチマンのよーに見える若い特定自由業従事者が3人ほど、私の後ろから無言で掴みかかってきた。

まあ、軽くスキップして避けたんだけど。

麻帆良学園都市の結界外に出る用心としてアリアを起動状態で体内に融合しておいたので、首を動かさずに全周囲警戒するなんて朝飯前だし、しょせんはメスガキ相手だと高を括ってるチンピラどもの油断を利用するのも容易い事なのだ。

「てめっ！　こら待てっ！」

そのまま振り向きもせず遅滞無く走り出した私だが、麻帆良の外での基準で不審に思われない程度に抑えたスピードでは流石に足の

長さの分だけ分が悪い。
直ぐに追いつかれそうになるが、裏路地に飛び込んで間一髪難を逃れる。
秘匿の関係で魔法も気も抜きで対処しなきゃないない事態だと、やはり体力が物を言うのが暴力沙汰の世界であり、チンピラの皆様は曲がりなりにも其の道のプロだ。
真っ正直に追いかけっこを続けていたら、ほどなく捕まって何処かの事務所に連れ込まれて痛めつけられるか売り飛ばされるか処分されてしまうのがオチだろう。
だから私は分身を囮に幻術で姿を消し、息を殺してチンピラをやり過ごした。
囮にはチンピラの目を引きつつ逃げさせ、物陰に隠れさせた瞬間に消す予定である。
あの外道爺……幻獣朗のスキルって何気に使い勝手良いので重宝だ。
「おい、そこのガキっ！」
予定は未定だった。
うん。
姿を消してるというのに私に向けて声を張り上げてるのは、さっきのチンピラよりは身なりの良いスーツ姿で、手にトランプか呪符の束かを構えた染色式金髪の青年だった。
認識阻害魔法が作動してるんじゃなかったら、凄くイタイ人認定だ。
なので、分身の要領で其の場に僅かな気配だけを残し、私自身の姿は消したまま気配をできるだけ消した状態で魔力強化してイタイ人の頭上を飛び越え、ついでに広い車道も飛び越えて向こう側の歩道に音も無く着地した。魔力強化すげー。
っと、さっさとどっか探して幻術解かないと。
麻帆良の結界外だから私の総魔力が増えてるとはいえ、回復力はいまいちだからねぇ。

この若い身空で男漁って精気をすすって魔力を補充するなんて真っ平だし。
早く帰ろっと。

弐集院先生経由で学園長に報告を上げておいたので、自由業の人達は少々困った事になるんじゃないかとほんの少しだけ思った。
麻帆良の学生に手を出す＝関東魔法協会に喧嘩を売るって事だからね。

そんな目には遭いはしたけど、それでも懲りずに病院通いは止める気は無いし、特許料で懐がウハウハになっても工学部通いも止める気は毛頭無い。
私の脳内にある技術的産物を、私以外の人が魔法的手段抜きでも再現性のあるカタチで製造できるようにすれば、青色発光ダイオードのように一般公開する事もできる。
その為に身内へのセキュリティが甘めな麻帆良の伝統的な気質を利用して、現代技術よりも進んだ研究成果の数々を学ぶのを止める必要を感じているからだ。
私なら助けられたかもしれない。
そんな後悔は母さんが死んだ……いや、殺された時に捨てた。
魔法が使えないならば、チート医術を振るえないならば
魔法じゃなくても、私じゃなくても、一人でも多く助けられる手段を見つけ出す。
助けたいと思う私が自己満足に浸るために、だ。
決してマギステル・マギなんて呼ばれたいが為じゃない。
いや、そう呼ばれたくて頑張る人自体は否定しないけど。
名誉欲も正義かぶれも立派な人の欲望だからね、うん。

図書館島地下への挑戦も月に2〜3回ぐらいのペースでやる事にした。

図書館探検部には関わらず、ソロでの探索だ。

未だ覚えてない魔法や戦闘技術などについて記述された文献が目当てなのも集団に参加するのを躊躇する原因ではあるけど、それよりも私の迷宮踏破法が魔法の行使を前提としている事の方が理由としては強い。

麻帆良学園の認識阻害結界に胡坐をかいて秘匿意識を忘れるのは拙いのだ。

英雄の息子であれば見なかった事にされるミスでも、私なら容赦なくオコジョにされると思っておいた方が私の身のためになるしね。

迷宮の仕掛け人との知恵比べと実戦に準じたトレーニングとしても有用だし。

そうこうしてるウチに見つかったのが西洋魔法の上級戦闘教本。

私としては治癒系魔法の上級教本が欲しいとこなんだけど、どうやら私が閲覧許可を得てる範囲内には置いてないようだ。

まあ、医学を修めずに魔法だけで出来る治療に制限あるのは分かるけど。

……これならいっそ自前で術式構成しちゃった方が良いんだろっか。

人を治すより人を傷つける方がはるかに簡単とは言え、やるせない気分になる教育環境ではあるなぁ、ネギまの西洋魔法使いって。

しかし、蔵書に「一ヶ月でできる神鳴流」とか「超解！　御庭番式小太刀二刀流」なんて入門書が置いてあったけど、ツッコミを入れておくべきだったんだろうか？

思わず読み込んで練習してみてしまったんだけどさ、物は試しで。

……無論、ちゃんとは身に付きませんでしたとも。

多少は参考になったんだけど、そうでなくても色々ごちゃごちゃ

と覚えてるせいで教本通りにしても奥義が形にならんというか何と言うか。

結局、基本的な技術の幾つかを除いては我流になりそうだったり。チートで覚えたのを下地にした戦闘技術全部捨てて神鳴流や小太刀二刀流を覚え直す気までは流石に無いし。かなり強い剣術流派なのは分かるんだけど、私が今から剣一本に打ち込んだところで、桜咲刹那や月詠より弱そうな気が凄くするからね。

第１０話（後書き）

とうとう家伝の魔法を修得しました。が、効果は微妙ｗ
主人公にラカンやナギほどの武才が無いのも今回露呈しました。

第11話

しばらくの時が経ち、とうとう私のクラスに超重要人物が転入して来た。

秘密結社“完全なる世界”の策謀によって滅ぼされた魔法世界最古の王国ウェスペルタティアのアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア姫。

つまりは神楽坂明日菜だ。

順当に原作展開通り推移するならば、完全なる世界が彼女を使って魔法世界の全魔力を消去し、其処に住む者達を醒めない夢の楽園に封印しようと企んでると言う、文字通り魔法世界の命運を握っている人物『黄昏の姫御子』である。

魔法世界の最後の鍵たるグレートグランドマスターキーを復活させるのに最適な人材でもあるだろうから、一歩間違えば完全なる世界のやらかす時代遅れで脳味噌の足りない大ポカのせいで魔法世界に住む全てに死滅の危機が訪れかねないのだし。

正直言えば血縁とは言え魔法の秘匿も制御もできない、考えの足りない子供先生としてネギが麻帆良に来たならば、決して近づけてはいけない類の人物だと思う。

少なくとも彼女が記憶を失った状態のままではね。

世界樹の放つ魔力の気配と広域認識阻害魔法に紛れてはいるけど、それでもかなり強い魔法が使われてる気配が濃厚に漂ってくるので、恐らく記憶封印魔法がかけられてから余り時間が経ってないんだろうけど……ムチャするなあ、ホント。

記憶した事を思い出し難くしたら馬鹿扱いされちゃうだろうに。

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ氏の死は、こんなに強烈な魔法で強制的に忘れさせなきゃならないほど彼女にとってそんなに重いのだろうか？

いや、違うな。

これは寧ろ『口封じ』じゃないかな。
思い出せない記憶は他人に話される事も無いので、秘密が厳守できると思ったのかも。
でも、乗り越える機会も時の流れに埋もれさせる事もできずに封じられた記憶は、大きなトラウマとなって彼女を苛み、無意識に行動を縛るに違いない。
ガトウ氏の面影に似てくるタカミチや、ナギに似たネギに惹かれるなどして。
早期に治療してあげたいところなのだが、恐らく学園上層部の厳重な監視がついてるだろうから、私が単独で事に当たるのは無理過ぎる。
その気になれば学園そのものとも対峙できるエヴァみたいな有力な味方が欲しいところだが、現時点でのエヴァとの接触は私に対する学園からの疑念を呼ぶのに加え、最も助力が欲しい時期に彼女が学園に留まっていない可能性をも招来し、なおかつ私がエヴァの情報を知ってるのが不自然というトドメまで刺さっていては動きようが無い。
結局、しばらくはアスナと距離を置く事になりそうだ。
もしかしたら魔法無効化能力を発現してる彼女に触られると、半ば以上魔法生物な私は絶大なダメージを受けてしまうかもしれないしね。
初対面でさっそく始まってしまったアスナといいんちょの喧嘩を見ながら、そんな事をとりとめとなく考えていた。

「これで大丈夫です？」
持参した私物の救急箱から出した消毒液や湿布を手に、ついさっきまで取っ組み合いをしていた二人の少女の傷の手当てを手早く的確に終わらせた。
あまり癒し過ぎると身体が貧弱になるので、魔法も治験中の新薬

も使わず、普通に治すよりも若干だけ予後が良くなる程度の治療に抑えてある。
しかし、それでも保健室に行った時より早く痛みが引くらしく、ウチのクラスだけじゃなく近隣クラスとかからも手当てを頼みに来る場合があるのはどうしたものか。
薬や湿布や包帯なんかはタダじゃないんだから、学園長に言って保健室とかから補充分を貰えるようにしておくべきだろうか？
「……大丈夫」
おっと、物思いにふけってたらアスナから無表情に返事が返ってきた。
「いつもながら見事な手際ですわね、ちとせさん」
いいんちょは優雅な仕草で感心してくれてるけど、鼻の頭に絆創膏が貼られたままの状態では少々こっちの笑いを誘う。
「傷は浅いですけど、お風呂は夜7時以降にして下さいです」
「……何故なのよ？」
私の言葉にいいんちょさんは苦笑混じりで肯いたけど、私に手当てされるのが初めてなアスナは素直に疑問を口にする。
「お湯が傷に染みて、無駄に痛い目に遭うです」
まあ、答えは単純明快なんだけど。
「わかったわ」
本来ならば恐らく頭の回転が良い娘であろうアスナは直ぐに納得してくれて、それで此の騒動は無事に終了した。
……と思いきや、何故か弐集院先生経由で私が学園長に呼び出されてしまった。
「何です、学園長？」
学園長に呼び出される覚えは、実はたくさんある。
生徒なのに養護教諭がやるような応急手当てをやらかしてる事、大学の工学部と組んで先進的な機器や素材の科学的生産法を模索してる事、
脳内知識にあった治療薬や医療機器のうち科学的手段で生産でき

たものの一部を大学病院で臨床試験して貰っている事、
興信所に近場で経営が傾いてる企業や町工場を探す依頼を出した事への質問、
学園所属の魔法生徒としての業務連絡、
などなどだ。
……小学校1年生の女児に似合わな過ぎる項目が並んでるが気にしちゃいけない。
「うぉっほん。実はじゃな、ちとせちゃんにやって欲しい事があるのじゃよ」
「ものによるです」
「タカミチ君が出張で家を空けている間、彼が面倒を見ている女の子を一人預かって欲しいのじゃよ」
タカミチがいない場でアスナを預かれって話を出すって事は、何か企んでるのかな？
それとも急な出張仕事が入ったせいで学園長に預けて行ったのに、学園長の方もアスナの面倒を見れるような状態で無くなってしまったのか。
「その子の分の生活費を貰えれば引き受けるです」
とはいえ此れは私には余り不利にならない話だろう。
速攻で記憶の封印を解いたら流石に学園に睨まれるだろうけど、そうじゃない手段でアスナの能力を底上げできれば、後々非常に楽になる効果を期待できなくもないからだ。
「じゃあ任せたぞい」
気軽に任せてくれちゃったけど、学園長って自分の外見が人間離れしてるせいか他人の容姿にも無頓着になってるんじゃないだろうか？
内部の時間の流れが速い“別荘”を多用してる影響を加味しても未だ7歳になってない女児に、ほぼ同年代の子供を預けて世話させようというのだから。

「改めまして初めましてです。八束千歳です。これからよろしくです」
「よろしく」
放課後になった途端に私とアスナが二人して職員室に呼ばれたので何かと思えば、アスナが今日から学生寮の私が使ってる部屋で暮らす事に関する学園長直々の連絡だった。
一刻を争って出張に出たらしいタカミチをバックアップしなきゃならない学園長がわざわざこちらの学校に来てくれてるのだから、充分な誠意を見せてると言える。
「タカミチ君の部屋の鍵は教職員寮の寮監に開けて貰いなさい。ちとせちゃんの部屋の鍵の予備は初等部女子寮の寮監に用意させとるから、そちらの方で受け取ってくれい」
「分かったです。呼び方はアスナ……で良いです？　部屋に案内するです」
無言で首肯するだけで答えるアスナを引き連れ、私は一路帰宅の途につく。
ホントにこの子と仲良くやっていけるんだろうかと不安を感じつつ。

「この部屋が私が住んでる部屋で、今日からアスナも住む部屋になるです」
初等部女子寮でも広めな部屋なので、同居人が増えても生活空間では困らない。
かさばる物とかは大方“別荘”に詰め込んであるしね。
「お邪魔するわ」
「こういう時は『ただいま』です。ここに長居したくないなら別なのですが」
「そういう意味じゃない！」

間違いを指摘されたと思ったのか頭に血が昇るアスナの姿に記憶封印の副作用の影を感じつつも、それでこっちも沸騰するほど単純にはできていない。

「ごめんなさいです。でも、日本語は大変ですからゆっくり覚えるです」

軽く頭を下げて追撃を躊躇させると、私はキャスター付きトランクケース2つと背負子1つを下駄箱の横から手早く引っ張り出して装備する。

廃棄資源の回収活動を始めて1年近くになるので、もはや手馴れたものだ。

「さ、アスナさんの荷物を回収に行くです」

「分かった」

無愛想な少女を後に引き連れ、女子校エリアの外にある教職員寮へと電車を利用して向かう。

さて、今夜の献立は何にしようかな。

着替えを含めた荷物が持ってったトランク1つでも納まり切ったところに改めてタカミチの育て親としての資格への疑義を抱きつつも、そんなのに構ってる暇は無いとばかりにとんぼ返りした私は、荷物の整理はアスナ自身に任せ、すぐさま夕食の支度を始めた。

荷物の量の割りに時間がかかったのもあり、比較的手早くできる物を選ぶ。

御飯はタイマー設定付きの炊飯器で炊いてあるから、干し貝柱の旨みを染み込ませた豆腐を具にした海鮮風チャーハン、その干し貝柱の出汁を使った揚げ豆腐が具のスープ、自家製の冷凍シューマイ辺りで良いかな。

もうちょい時間があれば、もっと凝った料理で歓迎しても良いんだけど、主賓を長く待たせて空きっ腹を我慢させる方が忍びないしね。

で、食べて貰った感想はと言うと
「あんたって料理上手かったのね」
であった。
「それほどでもないです」
まあ、凄腕料理人のスキル貰って半年も慣らせばこれくらいは多分誰でもできる。
今回はスキルの基になった作品中で出てきた料理を再現しただけだし。
「私は洗い物してるですから、テレビでもゲームでもシャワーでも好きにしてれば良いですよ。洗濯物あったら後で纏めて洗っときますので、脱衣場のカゴに入れとくです」
はーいと答えつつアスナは食卓兼用の電気こたつでまったりとし始めた。
冬場に座椅子にこたつは危険な組み合わせなのかもしれない。
みかんを入れた籐編みの籠を天板に載せれば更に危険になりそうだけど。
体型まで丸くならないよう運動とかに誘ってあげないとピンチかもね。

第１１話（後書き）

とうとうアスナ登場です。そしてルームメイトに。
学園側へのアンチ臭がするのは仕様ですってか、真面目に考察すると突っ込みどころが目立ち過ぎて困るｗ

第１２話

いよいよ雪広あやかの母親が麻帆良大学病院に担ぎ込まれたと聞き、私は医療補助の為に幻影で変装して手術中の医師団に紛れ込もうと企図した。

未だ学園長から人間相手に直接の医療活動を行う許可が得られていないので、そうする事でしか此の手術に立ち会える見込みが無かったからだ。

しかし、流石は雪広財閥総帥の奥方。

複数の西洋魔法使いと其の従者だけでなく、腕利きの忍者集団までをも動員した警護体制を敷かれていた為、潜入するどころか近寄る隙すらも見つけられなかった。

私が麻帆良女子初等部の制服を着てる魔法生徒で、御老人方の相手などをしてるおかげで病院関係でも有名でなければ、今頃は不審人物として捕縛されてたかもしれない。

ともあれ、近づけぬならば無事を祈るしか私にできる事は無い。

すごすごと引き下がって続報を待つ事にした冬の終わり際の出来事であった。

後日に医学部の関係者から聞いた話によると、雪広あやかの弟は治験中の人工胎盤による救命措置が成功したおかげで死産だけは何とか免れたそうだ。

そのせいでアスナが飛び蹴りで雪広あやかを激励するイベントは消滅したらしい。

手術室に潜り込んで手伝うのを失敗した私としては、胡散臭げな新技術に頼ってでも新たな生命を救おうとしてくれた担当医の英断には敬服せざるを得ない。

私がホムンクルス技術を応用して開発した人工胎盤は、臨床例が少ないので無事に成長してくれるか先行き不透明なのだが、できれ

ば健やかに育って欲しいものである。
　人工胎盤自体の致命的な欠陥を洗い出し切れてない可能性に加え、母体から移す際にミスがあった可能性、母体内で既に重度の障害が残る状態になっていた可能性などの危険要因について、私は未だ全くと言って良いほど情報を揃えられていないのだから。
　あと、この人工胎盤はへその緒ができた後の胎児を対象とした物なので、受精卵段階からの体外出産は無理だ。技術的困難だけじゃなくて宗教的な反発も怖いから、私は子宮を全く使わない人工胎盤は作る予定もつもりも無いし。
　まあ、一部の宗教人は既に開発者（つまり私）を教敵に指定してるかもだけどね。

　そして時は至極あっさりと流れた。
　いいんちょの弟は無事退院できたらしいが、その後どうなったかは未だ良く解らない。
　手術後半年、人工胎盤から出られるようになって四ヶ月ちょいの現段階では、よほど拙くないと普通の子供との差異がはっきりしないので仕方無いのだが。
　それはさておき、アスナが後のバカレンジャーレッドの片鱗を見せつつもクラスに溶け込んでゆくのに引きずられて私も級友達の輪にお邪魔させて貰えるようになり、休み時間や放課後を使って行われる遊びの数々に誘われるようになっていた。
「アスナー！　ちとせちん！　あっそぼー！」
　元気ハツラツで誘ってくれてるのは、元気が似合う少女“ゆーな”こと明石裕奈だ。
　しかし、私は昼休みならともかく放課後は毎回空いてる訳じゃない。
「ゴメンです。今日は病院に顔出す日なんで無理です。アスナはど

うするです？」
「病院行く」
なら、何故に私にまで声を掛けてくれるかと言うと……
「あっちゃー、ふられちゃった。……今日は御菓子の差し入れ無しかぁ」
と言う訳である。
放課後に集合する際やアスナの出迎えに行く時の手土産に、私が手製の御菓子を持って行くのが最近は半ば慣習化しており、それ目当てという面も少なからずあるらしい。
そのおかげか、“さっちゃん”こと四葉五月とも料理談義に花を咲かせたり、料理人向け筋力トレーニングと身体のケアについて語らったりもするようになった。
1年生の上半期の私と比べて格段に友達が増えたのは良い事なのだけど……
私の事情をそれなり以上に話せるような娘は、やはり私の周りにはいない。
アスナの記憶がちゃんと思い出せるようになってたり、いいんちょやゆーなとかが親から裏の事情を話して貰ってれば話は別だったんだけど、仕方無い面もあるんだよなぁ。
なので私は同室のアスナにも隠れて魔法生徒ライフを過ごしてるのである。
まあ、非常識をおかしいと感じられなくなる麻帆良の認識阻害結界のおかげで、其の辺に関してはだいぶ楽に誤魔化せるんだけどね。
閑話休題。
何はともあれ麻帆良大学病院での寄り合いにアスナともども行くと決まったので、先ずは差し入れのお茶菓子を用意すべく自室へ戻る。
隣にアスナがいなければ“別荘”で留守番させてる《別魅》……分身に料理を作らせてから転移魔法で手元に出すって手も使えるんだけど、幾らなんでもそれは拙過ぎる。

なので、普通に走って戻って買い置きしてある食材や下ごしらえして冷蔵庫に入れてある物で手早く一品二品作りながら、淹れ立てのほうじ茶を魔法瓶2本に注ぐ。

今日は醤油の香ばしい匂いが食欲をそそってくれる焼き煎餅に挑戦してみた。

「アスナ、味見付き合うです？」

「うんっ！」

表面がパリッとしてるのに口の中でふんわり溶ける……か。想定通りにできたなぁ。味の方は普通に醤油味の煎餅だから、冷めて湿気ったら安物以下になりそうだけど。

でも、作りたての状態を普通より少々長く保たせられる魔法がかかったバスケット2個に詰めて運ぶから、ほぼ焼きたての風味を味わって貰えるだろう。

これをアスナと二人で分担して持ち、料理に使った道具を簡単に片付けて準備完了。

「勝負はいつもの通り？」

「いつも通りです」

勝負ってのは寮の門から病院の敷地までの競走だ。

妨害と器物破損は不可、コースは自由、半分ずつ持ったおやつを駄目にしたらアウトというレギュレーションである。

「……負けないわよ」

「望むところです」

ちなみに此れは賭けレースで、勝った方が夕食かデザートに好きなものを一品だけ注文でき、負けた方も勝った方も其れを食べ切らないとならないという決まりなのだ。

アスナが意気込むのも無理は無いと思う。

そして、今日の勝負の行方は……私の勝ちだった。

ゴールしたのはアスナの方が早かったんだけど、老人の歯にも優しくサクサクパリッと仕上げた煎餅は手荒な扱いに耐え切れず、大

部分が割れてしまっていたのだ。
こっちが大人気なく無詠唱《戦いの歌》で身体強化してるのにも関わらず戦績がほぼ五分なので、多分アスナも無意識に身体強化使ってるんだろうけどね。
……ってか無意識の強化だけで呪文使ってるこっちと互角って何なの？　ウェスペルタティア王家の血の出鱈目さ加減には本当に呆れるしかない。
私だってチート能力貰って生まれた時から頑張って修行してきたはずなんだけど、これが公式チートの実力ってヤツなのだろう。世界観すり合わせの手間とか、戦闘力特化でないのとか、退魔結界の効果とかも影響しているのかもしれないけど。
落ち込んでても仕方無いから、私は私のやれる事をやらないと。
先ずは病院の一角を占領してのお茶会の開催を。

病院でのお茶会が終わると、商店街に寄って買い物してから帰宅の流れになる。
アスナが他の友達と遊んでる時は差し入れがてら迎えに行くけど、今日は終始一緒だ。
「「ただいま～」」
部屋に戻ったら私はさっそく夕食の支度に取り掛かり、アスナは宿題かテレビ視聴かテレビゲームに取り掛かるのが常である。
お菓子作りに使った道具類は、直ぐに使う物は洗い直し、直ぐ使わない物は後でまとめて洗う為に脇に避けて置く。
で、今回は何を作ったかと言うと、カツ丼のあんかけ風味と吸い物だ。
これにしたのは、私が何となく食べたかったからで他意は無い。
ちなみに肉や魚はともかく、米や野菜は実は自給可能になってたりする。
それもこれも“別荘”様々と言えよう。

もっとも、正確には私専用に調整した亜空間の内部に農園と糧食保管庫の役目をするダイオラマ魔法球を計5基設置し、自作の半自律作業機で世話しているおかげなのだが。

味噌や醤油や味醂なども自家生産を目論んでるけど、未だ試作品の熟成が終わってないので食卓には上ってない。早くても来年までは無理だろう。

ちなみに此のダイオラマ魔法球の材料を入手する為の資金の一部は、まほネットの通販で私が開発した発明品の一部を売って稼いだものである。

いや、ふと思いついて、幻術と認識阻害と解析妨害の魔法を織り込んだ、武装解除魔法を受けても服を着ていると見せかけられる“脱衣避けの組み紐”を販売してみたら、魔法世界などで爆発的なヒットをしたらしく、とにかく売れまくったのだ。

おかげでネットの回線がパンクしかけたのは良い経験になった。抗議のメールやF5連打荒らしとかも結構きたのは苦笑せざるを得ないけどね。

そんなこんなの対処で困ったので、学園長に紹介して貰ったメガロメセンブリアのとある企業に生産ライセンスを出して、技術使用料を徴収する方向に切り替えた。

収益率は落ちたけど面倒も減ったので、取り敢えずはめでたいと言うべきだろう。

で、収入のもう一つの柱にする予定なのが表社会での企業経営だ。

とりあえず経営がピンチだった町工場3つと中小企業2つを買収して統合整理し、従業員のクビを極力切らずに収益を伸ばす方向を目指している。余剰な土地や社屋や設備を売り払ったり、ゴミを私が引き取って処理費用を浮かせたりなんかはしてるけどね。

目指せ“夢釣人”で“遊駅2”打倒！

あのゲーム機が競争相手に負けた原因はある程度解ってるから、仕様と経営戦略に口出しできるようにして、技術面で色々テコ入れすれば勝てる見込みは無いでもない。

コスト高の原因たる機能の盛り込み過ぎを見直したり、問題が出そうな部品を改良したり、一世代前のハードである“土星”との互換性を持たせたり、通信対戦ゲームを開発したりなど、案は色々あるからね。

……ちょっと仮想戦記ものっぽい印象があるのは、此の際あっちに置いておく。

些細だけど大きな歴史改変の試金石には丁度良いと思うからね、これは。

色々考えてるウチに夕食もキッチンの後片付けも終わったので、食休みが終わったアスナと連れ立って寮の外へ身体を動かしに行く。

認識阻害魔法で隠れてトレーニングをしてるところをアスナに見られて以来、こうして一緒に鍛錬をやるようになったのだ。

私だけ隠れて特訓を積むのは『ずるい』らしい。

魔法と気の鍛錬については、表社会でも調べられる基礎の基礎の修練法と、魔力や気を使った攻撃の危険さだけは、アスナにも教えて一緒にやっている。

魔力は外気、気は内気と言う表現にして、気功法の一種と説明しているんだけど。

麻帆良学園の一般生徒の中には、アスナ以外にも魔力や気で身体強化してたり我流で必殺技的なものを使えたりする人もいるので、多分これくらいなら大丈夫だろう。

戦闘技術も一応教えてはおいた。

以前に見た神鳴流の基礎を記した本の記述とアスナがハリセンを振り回してるフォームが割りと一致しているようなので、恐らく近衛詠春に基礎を教え込まれているのだろう。

もしかしたらクルト・ゲーデル少年と一緒にしごかれてた事もあるのかもしれない。

なので、アスナにはやはり神鳴流を覚えて貰うべきだろう。

とか思っていた事もありました。
「ちっ……です！」
「いいかげん当たりなさいよっ！」
試しに互いにハリセンを持って組み手をしてみたら、意外や意外。最初の頃は私が連戦連敗に近い勢いで負け越してたのだから、積み上げられた実戦経験の差って言うのは恐ろしいものだ。
平和ボケが進んだ中2の頃を基準に考えてたなんて、正直言って甘く見過ぎてた。
今になってやっと守勢での競り合いができるようになってきたけど、今までのこっちの勝ちって奇襲的な戦法でしか拾えてないからなぁ。

今夜は、アスナがすれ違いざまに私の顔面を横薙ぎにして勝負がついた。キュウ……

気が付いたら寮の大浴場にいた。
ここまで背負ってきてくれたアスナが私を床に降ろした拍子に目が覚めたらしい。
芝生の上に放置じゃなくて感謝感激だ。
ともあれ、2人とも汗まみれで私に至っては土ボコリで酷い有様だろうから、素直に身体を洗っていきたいけど、着替えもバスタオルも無いのは正直困る。
「アスナ、着替え持って来ませんかです？」
魔法を使えるなら如何とでもできるんだけど、秘匿を考えれば常識的な行動が一番だ。
「わかったわ」
その後は特に書くような事も無く、就寝時間に突入した。
お風呂場でのアレコレなんて既に慣れ切ってるし、宿題を片付け

るのも朝食の仕込みも鼻歌混じりで片付けられるようになっちゃってるから山も何も無いのだ。

そして、アスナが寝静まった頃を見計らい、私の秘密の日課がスタートする。

こっそりと起き出して《認識阻害》と《対探知防御》の魔法をかけて覗き見を封じてあるトイレの中で、目の前に《シフト・ポータル》…私が“別荘”として使っている亜空間への出入り口の門を開く。

次いで《別魅》……分身を1体出して門を潜らせ、代わりに向こうに駐在させておいた分身1体を呼び戻して私に抱きつくような姿勢を取らせる。

その分身を機工女神の権能の一つである融合の力で吸収して、向こうでやっていた魔法練習の経験やアイテム試作などに絡むあれこれの記憶などを自分のものにしてしまう。

分身の記憶と経験を整理して本体に馴染ませてる間に《シフト・ポータル》の門を消してしまえば、後の用事はトイレ本来の用途ぐらいのものだ。

これについては私が別の意味で秘匿しておきたいので、記すのはここまでとする。

第１２話（後書き）

主人公が小学1年生の後半から小学2年生前半ぐらいまでの出来事ですね。咸卦法無しでもアスナは現時点でかなり強いってのは独自考察です、いちおう念のため。

◎脱衣避けの組み紐

幻術と認識阻害と解析妨害の魔法を織り込んだ組み紐で、主として腕輪やネックレスとして装備する、ある意味で対武装解除魔法のアイテム。認識阻害魔法で「このアイテムは防御力が無いので装備解除しなくて良い」と精霊に誤認させると共に、幻術で服を着ているように見せかける事で効果を成立させている。解析妨害魔法には複製防止の意味もあるが、幻術を破り難くする工夫でもある。組み紐自体を物理的に切断されてしまうか、極度に高出力の魔法解除呪文を受けてしまったら、脱衣避けの効果は消失する。

第１３話

１９９６年の冬が来た。

我がクラスは麻帆良体育祭で大活躍したものの、続く中間テストでは討ち死に多数を出して壊滅、補習と言う名の処刑場に引っ立てられて行く者を寂しく見送る事となった。

その中に記憶の引き出しの立て付けが悪くさせられてるアスナも含まれてたのは、ことさら言うまでも無い事であろう。可哀想だけど。

表稼業の会社経営は苦戦中。社屋の一つを改装して野菜を水耕栽培したり、安値で作れる割りには発電量が多い太陽電池を作ったりと従来の守備範囲以外にも手を伸ばしはしたものの、折からの不況もあって情勢は芳しくない。某ゲーム機へのテコ入れ計画が上手くいかなければ、不本意ながら将来的には合理化に踏み切らざるを得なくなるだろう。

それはさておき、以前発売した『脱衣避けの組み紐』のせいか、私宛てに世界各国の有名魔法学校から勧誘の手紙が舞い込んで来たそうな。

原作で聞いた覚えがあるメルディアナ魔法学校とかジョンソン魔法学校とかからも来てるそうなので名誉なのには違いないけど……学園長経由で全部断っておいた。

私が私の目標を達成するには、ここ麻帆良が一番の近道だからだ。マギステル・マギ選考に有利なんぞと言う程度の理由で離れるのは願い下げである。

表向きは父母の墓が近い麻帆良から動きたくないと説明しておいたのだが。

とは言え、魔法生徒である私が普通の小学生としてだけ振舞えるはずも無く……

「のう、ちとせちゃん。通信教育でも良いから魔法学校の授業を受

けてみんかのう？」
　こげな提案を突きつけて下さった。
　ううん、面倒だけど仕方無い、か。
「恐らく魔法学校で私が学ぶ事は無いです。魔法学校の教科書なら図書館島にあったのを暗記してるですし、実技関係も必修と書いてあった分は全部できるです」
　でも少し腹が立ってるので、学園長も多分把握してる事実を最初に突きつけておく。
「ですが、肩書きがあった方が有利な場合があるのも確かです。卒業資格授与を含む厳正な編入試験が行われると言うのであれば話を受けても良いのです」
「ふぉっふぉっふぉっ、よかろう。準備させておく」
　学園長の内心がどうだか知れたものではないが、冬休みを利用して英国はウェールズにあるメルディアナ魔法学校へと編入試験を受けに行くハメになったのだった。
　アスナの本来の保護者であるタカミチと学園長に彼女の事をくれぐれも頼んでおいて。

　向こうの方から派遣された女性に案内されてメルディアナ魔法学校に着いた。
　漫画で外観は一応見た事はあったが、実物はやはり貫禄が違う。
　感嘆のあまり、思わずほぅと息が漏れてしまった。
　まあ、これを見れたのが唯一の収穫じゃなきゃ良いんだけど。
　編入試験は明日実施と言う事で、本日は学生寮に案内された。
　ちなみに今のところはルームメイト無しだそうな。

　ネギともアーニャともネカネさんとも遭遇せず、メルディアナの学校長との面談も無いまま、どっかの空き教室で試験突入である。

先ずは筆記試験……って、魔法学校の入学試験問題とは舐め切ってるな。こちとら教科書全部が脳内に詰まってるチート能力者なんだから、ペン先の強度の限界に挑む勢いで全問正解して差し上げようか。

「簡単過ぎです。これじゃ参考にもならないんじゃないかと思うです」

5分もかからず全問回答し、ついでに脳内の教科書複数と照合までして答案を提出。

然る後に向こうの出方を待つ。

出迎えにも来てくれた女性教諭…決しておばさんと言う気は無い、怖いから…は、頬をピクピクさせつつも怒りを爆発させる事無く採点の為に教室を出て行く。

そして、しばらくして戻って来た時には、こめかみをあからさまに引きつらせながら分厚い紙束を小脇に携えていた。

「どうやら先程の問題では不足だったようですので、これをやって貰います」

豪快に其の紙束全部を私の机の上にドンと置いて下さりやがった。

「了解です」

ま、手間が省けて良いか。

そして1時間半くらい経って筆記試験は終了した。

問題内容から類推するに魔法学校7年間でやる定期考査全部らしい。

正答率は9割以上。全問正解で無いのは、倫理関連の問題で宗教観と信条に合わない回答を強いるものがあったせいで、出題者が求めている正解が解らなかった訳では無い。

……これで難癖つけるような学校なら、こっちからお断りだ。

魔法使いの癖に某一神教に帰依しないと正解できない問題を出す教師に迎合したいなんて露ほども思えないからねぇ。曲がりなりにも神社の娘だから、私は。

何はともあれ、提出した答案の束を抱えて無言で出て行った赤毛の女性教諭は、私を教室に残したまま全然帰って来なかった。
次の予定も何も聞いてないので下手に動けなくて困る。
しょうがないから《物を動かす魔法》と《人を感知する魔法》を組み合わせて、この教室に人が来たらメッセージボードをミニ精霊が提示するようにセットしとこう。
ではでは、お花摘み～。

結局、昼休みが終わるまでの2時間近くに渡って誰も来なかった。
本気で大概にして貰いたいものだ。
来たら来たで実技試験が明日以降になるから今日は終わりだって連絡だけだし。
ほんっと段取りが悪いったら。

英国名物の不味いメシで仕方なく腹を膨らませた後に、2日目はスーツを着た英国紳士風な男性教諭の監督で実技試験の日になったと聞かされた。
《火よ灯れ》に始まり《魔法の射手》《占いの魔法》《魔法解除》《風楯》などのラテン語で詠唱する呪文の数々の実践、決められたコースを杖にまたがって飛行するタイムトライアル、カカシと呼ばれている魔法で動く的を魔法の射手で撃つという簡単過ぎる魔法訓練が初日の試験科目だった。
無論ながらタイムトライアルを除いて全部が全部クリア確実だ。
タイムトライアルも基準タイムが解らないだけで、多分合格ラインを越えてるとは思うけど。
3日目は魔法薬学と薬草学の実技だ。とある効能を持つ魔法薬を学校周辺の敷地から集めた材料で作ったら合格と言う内容だが、実に20種類と言うのはイジメの疑いを掛けても正当だと思う。おま

けに今は冬だから薬草の入手難易度はかなり高いんだし。
しかし、未だ私にとっては甘い。
占い魔法と探索魔法で必要な植物の根や種が埋まってる場所を探り当て、植物の生育を促進する魔法で即刻収穫できるようにし、採取した後は元の根や種になるまで生育促進魔法でライフサイクルを進めてから土に滋養を与える魔法を掛けて埋め戻しておいた。
これで魔法薬の材料が揃ったので、多種類の料理を同時並行してやる要領で手順良く薬の精製に取り掛かる。工程をちゃんと理解して、作業を混同しなければ２０種類をいっぺんにやっても然程難しくない作業だしね。
試験結果は後日に発表するそうな。それはまあ理解できなくも無い。物が薬だし。
４日目は魔法工芸の試験だ。何を作っても良いとの事だったので、そこらで拾った木の枝をナイフで加工した正統派の魔法の杖と、同じくそこらで拾った適当な石を球形に削り出して表面にルーン文字とラテン語で守護魔法の術式を刻んだ護符をはめ込んだペンダントの２つを制限時間として与えられた３時間半以内に完成させてみた。
呆気に取られてアゴがカクンと落ちた男性教諭の顔は、本当に見物だった。
５日目は校長室に呼び出された。何の用だろう？
「八束千歳、入室させていただくです」
ノックして入室し、挨拶。
「うむ」
鷹揚に肯くのは貫禄あるヒゲの魔法使いといった風情のご老人だ。
「今回はわざわざ私一人に骨を折って下さって有難うです」
「別に特別な措置ではないぞ。成績の方は特別じゃがのう。……コノエモンから話は聞いておったが、正直ここまでとは思っておらなんだ」
「お褒めいただき有難うです」
「ところで、何故に『正義の名の下に悪の手先をこらしめる』のを

否と答えたのかのう」
「この世に普遍的な正義は無く、自己正当化の道具ないし自省する為の秤の役目でしかないと信じてるからです。だから『その例の場合は、相手をこらしめるのが自分にとって都合が良いと思う』と書いたです」
「なるほどのう」
その日は其処までで面談は終了した。
嘘言っても多分見破られるだろうから本音を加減してぶっちゃけたけど、大丈夫かな？

答えは翌日にまたもや呼び出された校長室で受け取った一巻の文書筒であった。
中に入ってたのは、メルディアナ魔法学校の卒業証書だ。
其れに浮かび出てきた修行は、なんと『強力な呪いに悩んでる人を助けること』。
何故か『何処で、誰を』との指定がなされてない課題である。
そこで私は麻帆良への帰還を決意した。
私が知る限りで最も強力な呪いに縛られた幼女……もとい、誇りある女魔法使いの縛鎖を彼女が許容できる程度にまで緩める事が可能か否かを試してみる為に。

「で、こともあろうに見習い魔女如きが私の呪いを解いて下さろうと言うのか」
「はいです」
麻帆良学園に帰還し、さっそく学園のデータベースをハッキング。
闇の福音と名高い金髪幼女吸血鬼“エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル”が関東魔法協会が把握してる中では最も強力な呪いで縛られてる事を確認すると共に、彼女の現住所を調査し

てみた。
　それが原作…本来あるべきだった歴史…と同じ麻帆良郊外のログハウスだと確認したところで、卒業証書片手に直接会いに行ってみる事にしたのである。
　で、挨拶と簡単な事情説明が終わったところで出た台詞が先のものだ。
　まあ気持ちは解るので腹は立たないけどね。
「即座に呪いを解くとまではお約束できないですが、少なくとも現状を改善する事は約束するです。強制証書で誓っても良いです」
「ほほう。そう言う事を言ってると鵬法璽で契約させるぞ」
　鵬法璽とは絶対遵守の呪いがかかる強力なマジックアイテムだが、今回は関係無い。
「契約の前に私とエヴァンジェリンさんが合意した内容の文面だと確認させて貰えれば構わないです」
　彼女に貸しを作ろうと考えてるのだから、不利益になる行為をするなんて非合理的な行動をしても私に得が全く無いのだ。
　それに、彼女を害してタカミチや学園長が敵に回ったとしたらガチで死ねるからね。
　真っ直ぐ彼女を見てる私の目を、睨みつける様に覗き込まれる。
　６００年の長きに渡る英知が、私の性根を見定めているのだろうか。
「よかろう。面倒だから証書は無しにしてやるが、解呪を何処でやるかはこちらで指定させろ。良いな？」
「はいです。準備はできてるので今からでも良いです」
「ならば案内してやろう。私のテリトリーにな」
　クルリと踵を返し、玄関払いする気満々だったであろう客……つまり私を案内する先にあるのは、どう見ても地下室以外の何物でもない。
　その真ん中に鎮座ましましているのは、かの有名な“別荘”。
外の１時間が中の２４時間になる個人所有では最高級に近いダイオ

ラマ魔法球だ。
「凄いです。私が作ったのより技術的に数段上に見えるです」
ちなみに私が作ったのは時間設定が6倍のヤツ4つと1／8760のヤツ1つだ。後者は糧食保管庫として作ったもので、時間が24倍速で進む亜空間に設置してあっても中での1日が亜空間の外での1年に相当する特別製である。
「ダイオラマ魔法球を自作してるだと……。いや、あのナギのかけた呪いを解こうなんぞと言い出すヤツが普通のはずもないか」
良く解らない納得をされながら別荘内へ移動。
そこで私達を出迎えてくれたのは、エヴァンジェリンの最も古い相棒、殺戮人形のチャチャゼロであった。当然の如く両手でナイフを抱えるように構えて下さっているのは敢えて気にしない事にする。
「診察をするですから、エヴァンジェリンさんが全裸になれる所に案内して下さいです」
「全裸……だと？」
「はいです。相手はあのサウザンドマスターの呪い。彼の出鱈目過ぎる魔力と荒過ぎる術式構成から考えて、どこにどんな不具合が潜んでても致命的に成り得るのです」
私がただの西洋魔術師や陰陽術師であったら即座に土下座して前言撤回せざるを得ないほどに圧倒的な呪いの気配を漏れ感じられると言う時点で、甘く見れる要素は皆無だ。
何か一箇所でも見落としただけで容易に致命傷になるだろう。
甘く見る気なんて元から更々無いが。
「まあ、あの馬鹿の呪いだからな。よかろう、ついてこい」
エヴァンジェリン、私、チャチャゼロの順番で塔に入って行く。
ときおり出くわす茶々丸の姉に当たるのだろう人形たちは、多分別荘の維持管理用であろう。それが2体ばかりチャチャゼロの後に続く。
「ここだ」
何の変哲も無い石造りの部屋に案内される。

内装はシンプルだが豪華だ。
「では始めろ」
部屋に見とれている間に、エヴァンジェリンは従者に手伝わせて着衣全てを思い切り良く脱ぎ捨てていた。
……まあ、私の今の性別が女だから羞恥心も何も無いか。
「では診せていただきます」
さて、いったいどんな馬鹿な呪いをかまされてるんでしょうかね。怖いような楽しみなような不思議な心地ではあるが、それでも私の心は不思議と澄んで鎮まっているように思えるのであった。
……気のせいかもしれないと言う台詞は、扉付きの棚に上げて封紙を貼って忘れ去ってしまった事にしているせいかもだけどね。私の精神衛生的に考えて。

第１３話（後書き）

メガロメセンブリアに目をつけられるの嫌とか言いながら、既に目立ってしまっております。実に馬鹿やりましたねぇｗ　メリットは無いでも無いのですが。

第１４話

豪奢な洋館の一室と言う風情の部屋で、丈深い柔らかな絨毯の上に微動だにせず立っている西洋人形の如き硬質な美を備えた幼い少女。

その白磁にも例えられるべき柔肌は、今や隠すものすら無く私の視線に余す所無く晒されてはいたが、不思議と扇情的な生臭さを欠いてるようにも感じられた。

まあ、私の後ろでナイフを構えて監視してるチャチャゼロから、抑え切れずに漏れてきている殺気を浴びせられているので、エロい方面に頭が回らないせいかもしれないが。

部屋の中にはチャチャゼロの他にも従者人形が2体ほど待機しているものの、限定的ながらエヴァンジェリンが真祖の吸血鬼としての力を振るえる現状では、ただの雑用係の役目でしか無いだろう。

戦闘特化魔法使いの頂点の一人たるエヴァンジェリンに取り、戦闘力に限って見れば私は吹けば飛ぶ程度の雑魚も同然なのだ。

だが、取り敢えず彼女は其の絶大な魔力を私に向けては振るわない。

チャチャゼロ達、殺戮人形達もその刃を振るわない。

私が彼女を裏切ったり、彼女の期待に沿えなかったと判明するまでは。

誇りある悪を自負する彼女の矜持が、利用するだけ利用した挙句に裏切って切り捨てるなんて下衆な行為を忌避するだろうからだ。

故にこそ、私の運命は今からやる診察次第！

「では診せていただきます」

さてさて、いったいどんな馬鹿な呪いをかまされてるんでしょうかね。

「な！　おまっ！」

一応一声かけてから、形無き病魔を摘出できる心霊医術の技を用

い、エヴァンジェリンのささやか過ぎる胸の谷間へズブリと右手を手首まで突っ込む。
「お静かにです」
物理的な傷を一切つける事無く体内を手探りで調べ、体外から無理矢理に押し込まれたと思しき硬質な魔力の手触りを手繰りゆく。
比較的露呈させ易い呪いの浅い部分だけを引っ張り出して処理を試みるならば、触診してみたところ解決は力尽くにならざるを得ないみたいだ。
そんな魔力が私にあるかと言えば、答えは否である。
この外界と切り離された“別荘”内部が私の総魔力容量をいつもより倍加させてるとは言え、それでも到底手が届かぬほどの絶望的な出力差がヒシヒシと感じ取れるのだ。
ならば私が挑むべきは呪いの術式……登校地獄の呪いを終わりなき縛鎖へと変容せしめているであろう根っ子の部分。
それを身体から残らず引きずり出して介入できる状態にせねば、私には治せない。
だからこそ全裸になって貰ってまで全身くまなく手探りさせて貰っているのだが……
これは？
普通の《登校地獄》の術式なら呪いの核は1つだけのはずなのに、4つ……いや5つの呪核が埋まってるのかな？
あまつさえ出鱈目極まる拘束術式のせいで、本来の用途とは異なる制限までもかかってるみたいだし。
術式を理解できてもいない適当な呪いを掛けるなんて、ほんっと迷惑な。
取り敢えず呪いの術式に介入し易いよう、呪核と拘束式を残らず全部体外に引きずり出して半実体化させてしまおうか。その程度なら私の魔力でも何とか可能だし。
でも5つ同時は手が足りないので……
「分身するので、ビックリして始末しないで欲しいです。……《別

魅》」

2体の分身を出したので、これで本体合わせて手は6本。

「分身だと！？　面白い術を使うじゃない…かっ！」

呪核全部を手でわしづかみし、一気に引っこ抜く！

少々患者さんに負担がかかるかもだが、これが一番マシな方法なので仕方無い。

「登校地獄亜種、患部露呈したです！　呪術式詳細分析開始するです！」

「くっ……」

「オイオイ、マジカヨ」

今のエヴァンジェリンは、棒立ちになっているところを両腕の上から太い鉄鎖でぐるぐる巻きに縛られており、その両端を半透明の麻帆良学園長とメルディアナ魔法学校長に握り締められているだけではなく、首には『キティちゃん』などと書かれた猫の首輪と頑丈そうなリードが、両足には一抱えもある鉄球が鉄鎖で繋がった鉄の足枷が左右それぞれに1つずつはめられているなんて状態である。

本当に『魔力だけは』超一流のサウザンドマスターの面目躍如な呪いだな。

「呪術式解析完了です！　デバッグツール出すです！」

呪いの現況から容易に推察される失敗原因はさて置いて、患部を露呈させ続けていられる間に何とかする為に、私はとっておきの手札を切る。

袖口から滑るように右手へ出した紙の呪符を手術用メスに変じさせ、狙いを定める。

八束家伝来の武器創生魔術で作り出されたメスは、魔力と気との相反現象を利用した集束効果で絶対的な出力不足を補ってくれるはずだ。燃費と引き換えにしてではあるが。

「いくです！」

先ずは顕現した呪術式のバグの集大成の一つたるメルディアナ校長の襟首を左手で下に引き寄せつつ、メスを右に左に閃かせて17

分割。身長が足りないのが少し物悲しい。
「オオッ、イイネ！　オレニモヤラセロヨ！」
後ろで何やらほざいてるのは無視して、次はエヴァンジェリンの肌を傷つけずに首輪だけを両断。17分割した校長が光の粒になって霧散して行くのを横目に、片膝ついて足首を縛める枷に斬鉄。足枷の一つを完全破壊する。
そろそろ魔力の限界が近いので、もう一つの足枷の破壊は諦め、メスで軽く撫でて術式に少々手を加えてから、メインの呪術核の一つである学園長へと向き直る。
切り裂いた首輪はリードごと光の粒に変じて霧散しているので、学園長の姿をした此れが最後の手付かずなバグのかたまりだ。
「はっ！」
一太刀、二太刀、三太刀…メスが閃く度に学園長の顔が愉快に変形したり、手足が切り飛ばされたりしているが、当然笑っている暇など無い。
メスを一閃する毎に、強引に寄せ集められた術式の隙間に私が急遽構成したパッチ術式を打ち込んで、今よりマシな状態に再構築せねばならないのだ。
光にして霧散させた呪術式は、綺麗に消滅させられた訳では無いので、放置すれば大部分が元に戻ろうとしやがるようにできてる為に、今のうちにそれを誘導して可能な限り無害なモノに作り変える道筋をつけてやらねばならないのである。
「ラストです！」
締めくくりとなる術式を刻み込み終えたところで、私の魔力が計算通りほぼ尽きた。
分身は霞むように消え、メスも砕け散って光の粒になって消滅し、ぜーぜーはーはー言いつつ尻餅突いて座り込む始末。
「お、オペは終了したです。お疲れ様でしたで…す……」
「おい、しっかりしろ！」
服を着る手間も惜しんで私を助け起こそうとしてくれてるけど、

呼吸も苦しい今だと正直言って距離を取って放置しといてくれた方が楽だったりする。

「大丈…夫です…から……離し…て…です」

周囲から魔力集めて回復しようにもエヴァンジェリンが邪魔で難易度が上がってるし。

もっと密着して貰って性魔術で精気吸わせて貰えれば一気に元気になれるけどね。

そう考えてる間に随分と楽になってはきたから、まあ良いや。

ウチの別荘よりも魔力濃度が濃いおかげかな、これは。

「そうは言ってもな」

「ご心配をかけて済みません。普通に動く分には、もう問題ないです」

流石に自分の為に魔力を倒れる寸前まで振り絞った相手は心配になったのだろうか。

悪を標榜してる割りには面倒見良さそうだしね。

「それより現状について話すです。もう服を着ても良いです」

「別にこのままでも良いんだが……。良し、着替えと茶を持って来い！　茶は応接室の方にだ！」

どうやら客として遇してくれる気になってくれたようで、従者人形に指示を飛ばしている。チャチャゼロのナイフはそのままだが、こちらは当然の用心だろう。

さて、向こうの用意が整うまで棚上げしておいた失敗原因の考察でもしてみるかな。

列挙すると頭痛してきそうではあるんだけどね。

「結論から言うと、今のエヴァンジェリンさんはちゃんと学校に通い続けていれば呪いが解けるようになったです。また、学校が定める拘束時間以外もしくは学校行事に随伴するなら麻帆良学園都市の

外に出られるです」
「やはりそうかっ！？」
趣味の良いティーセットに注がれた薫り高い紅茶で口を湿してから告げた心霊手術の成果は、真祖の吸血鬼の顔色を喜色で溢れさせた。
多分、自分でも呪いの状態を軽く調べてみたのだろう。
その明るい見積もりを肯定され、心に羽根が生えたのかもしれない。
「はいです。ただし、エヴァンジェリンさんには小学校から通って貰う必要があるです」
だが、しかし、小学校に通えと言われて途端に渋面になる。
気持ちは解るんだけど、仕方無いものは仕方無いと割り切って貰わないと。
《登校地獄》の魔法は元々が魔法学校に通う児童を対象に開発された魔法……つまり年齢的に小学生に相当する子供に掛ける魔法なので、それ相応の学校から通わせるようにした方が呪いの術式の修正部分が破綻してしまう確率が少ないのだ。
「ケケケ、イイジャネーカ。オニアイダロ」
「うるさい黙れ。……本当にその方法しかないのか？」
茶々を入れてくる従者を睨んで黙らせ、再度説明を要求されるものの……
「はいです。ただし、呪いに込められた魔力が膨大なせいで、小学校を卒業しただけでは呪いを解けない見込みです」
現実と言うのは無情なモノなのだ。
私にエヴァンジェリン並みの魔力と《闇の魔法》があれば、もっとマシな状態にはできたかもしれないが、無いものねだりしても意味が無いし、何度も再挑戦したら呪いが元の状態よりも更に変な方向に歪む恐れもある。
できれば現状で満足して貰えると有り難いと真剣に思ってたり。
「なるほど。解けるのは何時になる？」

「順調に行けば、中学校か高校の卒業時です。留年その他で伸びるです」

呪いを掛けたのが魔法学校中退者、つまりはマトモに学校を卒業した経験の無い男なせいで卒業処理関連の術式がグダグダの極致だった。

おまけに途中で呪文を何度か中断したのか呪核が何個にも分裂してたし、それでいて強引に術を発動できるぐらいの魔力を注ぎ込んでるから効果が歪みまくってもいた。

何とか修正に成功はしたものの、正直言ってもう下手に触りたくない。

「そうか。そちらの所見については解った。これ以上の話は、こっちでも詳しく調べてからだ。良いな？」

「はいです。連絡先を教えとくです」

こうして私は卒業後の修行にもメドをつけ、意気洋々ながらも青息吐息で帰宅した。

「ただいまです」

しかし、此処は本当に私の部屋だったろうか？

何か見た事も無いほど雑然とした有様なんだけど。

ゴミだらけとか着替えが床に散乱してると言うほどには酷くないけど、何処となくホコリっぽいのは気のせいでは無さそうである。

キッチンシンクに作り置きしていった料理の皿とかが放置したままだし、洗濯カゴに洗い物が溜まってるので、多分引越しまではしてないと思うけど。

「アスナ、生きてるです？」

返事は無い。ただの留守のようだ。

もう日が暮れてるので、お風呂か食堂に行っているのであろうか。

……私がわずか1週間留守しただけで、凄い荒れようである。

タカミチと学園長の親としての資質に疑問符を打たざるを得ない。

それより掃除してホコリを何とかしてから御飯にしよう。

いいんちょの家の人とかネカネさんみたいな料理上手な人の恩恵

が無い英国旅行は、食の楽しみが厳し過ぎて泣けてくる毎日だったからなぁ。

寮の部屋にキッチンがついてさえいれば、もう少し何とかなったものを……

おっと黒歴史を振り返るのは止め止め。

エヴァンジェリンの呪いを解きに行く前にやったハッキングの時に“別荘”管理用の分身は私に戻してあるから、自前の身体で食材取りに行かないと新ｓ

ん？　ガチャリ？

ドアを見ると久しぶりな気がするツインテールな女の子が一人。

「おかえりです、アスナさん」

「た、ただいま……。って、え！？　しばらく帰って来れないって聞いたわよ！」

どういう情報を聞いてたのか知らないけど、こちらに詰め寄って両腕を掴まれた。

彼女に対しては素の体力しか頼むものが無いので地味に痛いのが困りものだ。

「心配だったので、急いで用事片付けて帰ってきちゃったです。もう少しゆっくりしといた方が良かったです？」

「そんなはずないわよ！　とにかくおかえり！」

「ただいまです」

アスナがいるので普通に買い置きしてるのしか食材に使えないなぁ。卵と牛乳と魚は渡英する前に使い切ったし、葉物野菜も無いはずだし……冷凍にしてある薄切り肉を焼いて御飯に載せて、醤油と肉汁ベースの甘辛いたれをぶっかけて食べようかな。

ううん、先に食材出して置くんだった。食卓が微妙に侘しい。

今夜はタカミチにファミレスに連れてって貰ったと言ってたのに、私が作った料理までも一人前片付けたアスナは、もしかしたら大食いの素質があるのかも。

第１４話（後書き）

エヴァンジェリンの呪いに挑んではみましたが、直ぐさま完全解呪とは行きませんでした。今後の事については次話以降に叙述するかもしれません。

第１５話

〔ｓｉｄｅ：エヴァンジェリン〕

満月の夜でも無いのに“別荘”の外で魔力を練る事ができるのは久しぶりだ。

たとえ其れが触媒を使わねば呪文を発動できぬほどささやかなモノであれ、麻帆良に来て以来長きに渡って味わい続けている体調不良を改善するのには充分役に立つ。

あの馬鹿が力任せに掛けた出鱈目な呪いの術式の穴がかなり埋められ、正常に作用している《登校地獄》に近似した状態になったのが、改善の理由だろう。

私ですら力任せに引き千切るしか手立てが無いと見切りをつけたほどグダグダでダメダメな術式の呪いを、よくもまあ此処までマトモに近づけられたものだ。

しかし、症状は軽くなったとはいえど、私に呪いはかかったままなのには変わりない。

術式を解析した結果から見て、あの見習いが言った事が真実だと言うのは解った。

呪いを解く為には小学校から通い直す必要があると。

いや、それだけではない。

宿題を忘れる、赤点を取る、授業をサボる、正当事由無く休むなどの行為を行う毎に呪いが強まってしまう呪式が組み込まれていた事も今回明らかになったのだ。

何度も何度も何度も中学生をやらされるのに飽きてサボりまくっていたツケがこんなところに回っているとは、世の中侮れん。

あの馬鹿が約束通りに解きに来てれば、何も問題なかったものを。

だが、あの馬鹿は来ず、私は初対面の小娘に助けられようとしている……か。

如何にかなると思ってやらせた訳ではなく、断るのが面倒そうな

目をしてたから暇潰しと血をいただく口実のつもりでやらせてみた結果がこれとは、実に複雑な気分だな。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕

エヴァンジェリンから電話で学園長に面談に行くから付き合えと言われ、麻帆良学園女子中等部の校舎にある学園長室まで同行する事にした。

私の方も色々用事があるのでちょうど良いといえば良いので、喜んで随伴させて貰う。

「おはようございますです、エヴァンジェリンさん」

「おはようだ、小娘。……いや、何と言ったかな？」

「八束千歳です。名前を覚える気になっていただいて光栄です」

「ふっ、なかなか解っているではないか。良い心掛けだな」

軽い挨拶を交わしつつ、私は弾んだ足取りのエヴァンジェリンを追いかける。

手提げカバンを一つ携えて。

学園長室で待っていたのは、学園長と高畑先生だった。

まあ、エヴァンジェリン関連だとこの２人が出てくるのは必然かな。

軽く挨拶を交わした後、年長の同行者を抑えて口火を切ったのは私だった。

「学園長先生、メルディアナ魔法学校の卒業後の修行として指定された『強力な呪いに悩んでる人を助けること』を達成するべくエヴァンジェリンさんに頼み込み、彼女に掛けられてる呪いを軽減する事に成功したです。今後の彼女のため、麻帆良の小学校の何処かに編入してあげて欲しいです」

軽く頭を下げて頼み事を告げると、学園長の方から『ひょっ』と

いう妙な声が、高畑先生の方からは声高な驚きの声が上がる。
「そ、それは本当なのかい？」
「本当だ。私自ら確かめたからな、間違いない。……まったく、そうでも無ければ、この私がガキどもに混じって小学校に行くと言われて否定せんなど有り得んわ！」
口をへの字にして何かに堪えてるようだったエヴァンジェリンが吼えたのは、我慢の限界を超えたからだろうか？　それとも堪えてたのとは別件なのか？
まあ、それは追求しても仕方無いかな。
「それもそうじゃのう」
ともあれ、恐らく学園長は私がエヴァンジェリンの呪いをある程度軽減したのまでは昨日のうちに把握してる筈だ。
エヴァンジェリンが盗聴防止策の一つも使わず電話連絡して来たのが其の証拠である。
「小学校を卒業したら、中学校、高校と順繰りに進学できるようにはしてあるです。ただし、小学校の前に中学校を卒業させてしまうと術式に不具合が出るかもです」
其処まで聞いた学園長の瞳が一瞬光るが、直ぐに韜晦されてしまった。
うむむ。頭を下げたまま顔色読む人外技使ってるのにガード堅い。あ、腕組んで堂々としてるエヴァンジェリン対策かも。それなら納得。
「そうじゃな、ならばエヴァは三学期からちとせちゃんのクラスに転入させると言うのでどうじゃろ？」
「……私に異存は無いな」
「私は反対する気無いです」
これで第一の要件は概ね片付いた。
カバンに入れて来た卒業証書の出番は無かったが、悪くない結果である。
では次だ。

「ところで学園長と高畑先生。私が留守してる間、アスナの面倒を見てくれるという約束はどうなりましたです？」

顔を上げて二人の顔をじっと見ると、学園長は視線を逸らし、タカミチは露骨に狼狽して顔面を汗だくにし始めた。

あれ？　おかしいな。未だ睨みつけてさえいないのにね。

「掃除も洗濯もしてなかったですし、食事は寮の学食かコンビニかファミレスだけだったと聞いたです。小学校2年生のアスナの面倒を見て下さると言った割りには随分と手抜かりがあったように思うのは間違ってるです？」

強い口調で淡々と事実を指摘していくにつれ、2人の顔色が明らかに悪くなっていく。

「いや、申し訳ない。まさか高畑君がそこまでズボラだったとは」

「ちょっと学園長！　ずるいですよ其れは！」

「2人とも黙るです」

仲間割れして醜い争いを始めようとしたのを、低く抑えた声で制してみる。

あ、ホントに黙った。

「埋め合わせに、エヴァンジェリンさんの編入と元のクラスへの処置、全部そちらのお2人で遺漏無くやって貰うです。……良いです？」

「ひょっ！？　ちとせちゃんにやって貰おうかと…」

「い、いやそう言われても僕は呪文が使えないん…」

「良いです？」

グチャグチャ文句を言い出した2人を睨んで黙らせていたら、いつのまにやら身体をくの時に折って口を押さえていたエヴァンジェリンから笑い声が漏れ聞こえる。

そのＢＧＭに乗って承諾の返事を受け取った私は、『では失礼するです』と声を掛けて学園長室を辞した。

これで今回は一件落着。
……そう思っていた時も確かにあった。
「何が望みだ？　言ってみろ。気分次第では聞いてやらん事も無い」
だが、借りを借りっぱなしにしておくのを嫌う御方と話をつけるのを、当の御本人に改めて呼び出されるまで忘れてたんだから、気が抜けてるにしても限度がある。
とは言え、今のところ急いで貸しを取り立てるほど困ってな……ん？
そう言えば、あれがあったか。
「今後、敵に回らないで欲しいです」
タイムスケジュール繰り上げて接触した事での修正事項をすっかり忘れてた。
本来ならエヴァンジェリンとは超の後に会うつもりだったから、もうちょい別の事を頼む交渉材料にする予定だったんだよなぁ、呪いへの対抗処置は。
「良いのかそれだけで？」
「はいです。別件でお願いに上がるかもですが、その時は別途交渉させて貰うです」
意外そうな表情をされてしまったが、世界でも最高峰の技巧を有する魔法使いとの不戦条約と交渉チャンネルが持つ意味は決して小さくないと私は思っている。
今は頼み事が思いつかないけど、後々を考えれば友誼を結んでおいて損は無いはずだ。
「それだけで済ますのも何だな。……良し、お前には私が何かプレゼントしてやる。楽しみに待ってろ」
しかし、借りの方が大き過ぎると感じた為か、贈答品を約束して歩み去ってしまった。
何を贈られるのやら、今から楽しみなような怖いような。

魔法関連の用事が一段落して安心してたら、今度は表の用事が私を待っていた。

ウチの会社が雪広財閥傘下の銀行からの融資を使い、コンシュマーゲーム機“土星”の苦戦により株価が伸び悩んでいた製造販売元の“星雅遊興”社の株を約１３％買い集めるのに成功したとの連絡が飛び込んで来たのだ。

……雪広さんとこの銀行がお金を貸してくれたのって、もしかしたらいいんちょの弟さんの命を助けたお礼なのかもしれないけど。聞いた話だと元気に育ってるらしいし。

ともあれ、これで次世代ゲーム機“夢釣人”開発に口出しできる大前提が整ったのだ。

あとは後知恵をフル活用して、本来の歴史で発売された機体の問題を色々と解消した物を安価に安定供給できさえすれば、業績アップは決して夢ではない。

無論ながら簡単に実現できる事ではないが、開発期間さえ充分取れれば勝算はある。

よし、《別魅》で作り出した分身３体を“別荘”内の農園用魔法球の中に放り込んで存分にゲーム機本体と製造機器の設計を練り込んでおこう。

２段構造のおかげで外の１時間が中の６日間まで引き伸ばせるから、１週間もあれば２年半以上もの研究を行える為、頭数と経験に劣る分を埋め合わせて余りあるに違いない。

まあ、それぐらいしないと私の理想とする家庭用ゲーム機を開発する事なんてできないだろうけどね。

そういう訳で最近は、ほぼ常時３体の分身をゲーム機開発に、もう１体を“別荘”の維持管理に当てているので、自由に使える身体は私の本体のみだったりする。

普通の人と同じになっただけなんだけど、妙に心細いのは何故だ

ろうか？

ま、そんなこと公園で野良猫を思う存分もふもふするのに何ら関係ないんだけどね。

図書館島の地下書庫に挑んで魔法関係の資料集めに勤しむのを中止にしてたりとかの荒事関連では自重を強いられているんだけど。

魔導機杖“アリア”の演算処理能力の大半を分身の維持と自己保守能力に回してるせいで、私自身の魔法戦闘能力が落ちてると言うか素の能力分しか使えないからね。

学園警備の仕事は年齢的な問題で未だ割り振られてないから、一時的に戦力が落ちてもアスナとの勝負で負ける確率が高くなるぐらいの支障しか無いだろう。

最近は若干ながら負け越してるから、何か策を練っておかないと。

勝負に負け続けてアスナの好きな物ばかりを夕食に並べ続ける事になったせいで、栄養バランスを崩して体調が悪くなったとか言う事態はゴメンこうむるからね。

……八百屋の店先で掘り出し物探しながら考えてみよう、うん。

第１５話（後書き）

エヴァ解呪編終了～。独自考察の結果、小学校から通って貰う事にしました。エヴァが中２から小２に編入なんて滅多な作品では見られないはず（笑）。

第１６話

「私の名はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだ。長いだろうからエヴァとでも呼んでくれ。趣味は茶道と囲碁だ。よろしく」

三学期になり、我がクラスにエヴァが転入して来た。

何度も何度も中学生をループせざるを得なかっただけあって随分とまあ手馴れた挨拶だが、内容が麻帆良以外だとツッコミ所満載なブツなのは致し方無いだろう。

体格的にはクラスの皆に混じっていて違和感が無いのだけど、老成した雰囲気を漂わせているところは平均的な小学２年生を逸脱していると言える。

が、しかし、この逸般人揃いのクラスでは何ら浮く事無く初日から周囲に溶け込んでしまっているのは苦笑すれば良いのか、はたまた微笑ましく見守れば良いのやら。

逸般人代表の一人たる私が言うなというツッコミは来そうだが。

私自身が企業買収と合併で成立させた“八束技研”の小学生社長で、個人資産が有形無形合わせて３００億円超、里親希望者５０人超なれど全部を袖にし続ける孤児、数々の発明を世に送り出した最年少ノーベル賞候補の天才少女などなど……本当に色々と騒がれて辟易しているので、実のところエヴァよりも余程目立っていたりするのだ。

里親希望者にメガロメセンブリアの高官も混じっていたのは苦笑するより無いが。

私自身の生活サイクルも、最近は放課後の麻帆良大学病院と麻帆良大工学部への顔出しを週１回ずつに減らして社長業務を週平均２日やるという変化を遂げていた。

常務取締役に買収した企業の社長で一番人柄が信用できそうな人を据えてるので、普段の事務仕事はこれぐらいにしておいても問題無く会社は回るのだ。

念の為に書類を決裁する時、可能性を操作して幸運を呼び込む《祝福》の魔法を展開してるのも多少は業績向上の役に立っているとは思ってるが。

もっとも『社長には研究開発に専念していただいた方が我が社は儲かる』なんて意見が聞こえてくるからこそできる荒業ではあるんだけどね。一時期、私の特許料で社員達を食べさせていたも同然なので否定的な空気は今のところ無いし。

正しくチート万歳である。

でも、超鈴音が未来から飛来して来た後だと技術的優位がピンチになるかも。

何せ向こうは公式のチート技術キャラだしね。

ホント予断を許さないったら無い。

話は変わるが、私が所持している“別荘”では４基のダイオラマ魔法球が農園用として稼動し続けていたりするのは以前に触れた通りである。

乗算された時間加速効果により外部の３日で１年以上の生育期間を達成できる此の農園魔法球は、ガレージ付きの一軒屋にも似た管理施設を中心とした直径５０ｋｍの土地と湖沼などを内包しており、自作の作業用ロボットが田畑や果樹園や薬草園やジュース工場や製麺工場などを効率的に稼動させ続けているのだ。

まあ、自重しないで勢い任せに作ってたら、いつの間にかやり過ぎて自分とアスナが食べる分だけで済まない量の農作物を溢れんばかりに生産してしまっていたとも言うが。

同時平行して設置した食品保管用の魔法球も一応あるものの、貯め込める量には限りはあるし、外部の１年に１日分とは言えど鮮度が低下するのも避けられない。

そこで私は、日持ちがする食品類を学園長経由でＮＧＯに寄付したり、日持ちが余りしない野菜などを麻帆良市周辺の養護施設に寄

付したりと言う方法で在庫を整理した。
出所に魔法が関わっているので税金対策に回せないのが痛いと言えば痛いけど、社会的評判は上がってくれたので良しと言う事にしておく。
ちなみに作業用ロボットは、外見が機動戦艦ナデシコで出てきたコバッタと呼ばれる無人機械に似ていて、動力に４祈祷精霊エンジン、制御中枢に私の杖のアリアと同じく積層式集積回路と立体魔法陣の複合チップを採用した全長１ｍの魔導機械である。
モノがモノだけにいちいち私が手作りで作らなきゃいけないのと構成部品の歩留まりが悪いのが泣き所ではあるけど、“別荘”の維持管理用電脳の管制ＡＩ代わりに稼動させている私の分身の手足として働いてくれる優秀な働き手達であった。
安値で買い叩いて手に入れた満杯寸前の不燃ゴミ処理場を魔法でこっそり掘り返して採取してリサイクルした資材から作った代物だとは到底思えないほどの高性能機である。
もっとも、私の使える魔法のレパートリーの中に特定物質の抽出やら、元素転換などと言う便利極まる儀式魔法が並んでるおかげで、ゴミを良質の資材に変える事ができたからこそでもあるんだけど。
閑話休題。
まあ、そんな便利な代物を抱えていると短期間でワインを寝かせてビンテージ物に匹敵させるなんて裏技も使えるのだが、生憎と一流並みの酒造技術の持ち合わせは無い。
これは味噌や醤油の醸造技術にも言えるので、ワイナリーや醸造工場の施設情報や基本的な製作技術の情報は仕入れているものの、未だ施設を建ててはいなかった。
……試しに小規模生産してみたら、市販品に見劣りしたからだ。
代わりと言っては何だが、農園用魔法球の一つを冬に冷涼で乾燥した気候になる様に調整して素麺や氷餅なんかの製造をやっていたり、サトウキビから砂糖を、ジャガイモからでんぷんを作っていたりする。

しかし、これらも消費量が生産量に全然追いつかないので備蓄が溜まる一方である。

いや、足りないよりは全然良いんだけどね。

……それぞれ熱帯、温帯、亜寒帯、乾燥地帯に調整してある農園の一つを潰して魔法戦闘演習場にでもするかな。広範囲殲滅呪文の《千の雷》とか《燃える天空》辺りだと下手な所で試せないけど、習熟する為には何度も何度も何度も使う必要があるからね。

私が単独で《燃える天空》級の大呪文を使う為には、魔導機杖のアリアのサポートを受けた上、更に《別魅》で分身を2体以上作って3人分以上で陣を組んで詠唱しなきゃならないんだけど、全く使えない訳でも無いから練習はしておいて損は無いのだ。

まあ、儀式詠唱魔法なんて悠長な準備の要る攻撃手段じゃフェイト辺りの強敵相手には欠片ほども通用しないんだろうけど。

次世代家庭用ゲーム機“夢釣人”の開発に専従させている分身3体の手が空いたら“別荘”を大幅改装しようかな。

今は本気で手が足りないってか、忙し過ぎて目が回りそうだからね。

……自業自得な部分が大半なんで愚痴ろうにも愚痴れないけどさ。

と、まあ常人離れしたところはあれど、私もクラスの一員ではある。

なので、おこぼれ目当てで取り巻きになろうと近付いて来る子はひたすら困るのだ。

利益目当てでちやほやされるだけだと肝心なところで判断を誤りそうだし、取り巻き以外の人を遠ざけようなんて考えられても迷惑だしね。

そうして友達を選んでいたら、残ったのは原作でネギの教え子をやってた面々ばかり。

こういうトコも選考の対象になったのかなぁと学園長の慧眼に少

しばかり感心させられたのだった。……欠点も目立つ人ではあるけどね、悪ふざけが過ぎるとか。

「それでは校内を案内致しますわ」

「ああ、よろしく頼む」

などと思考を脇道に逸らしてるうちに、いいんちょがエヴァを連れて校舎内を案内する旨の遣り取りが聞こえて来た。

三学期の始業式と其の後のロングホームルームが終わった後だし、エヴァは初等部に通うのは初めてだから、何ら不思議の無い行為だ。

「それでは私達もそろそろ帰るです」

「そうね。今日はストリートバスケだっけ？　あれをやるって言ってたわね」

「そうよっ！　今日も勝ってオヤツ倍ゲットしてやるんだからっ！」

「言ったわね！　負けないわよ！　今日は助っ人も頼んであるんだし！」

「いいんちょはいないけど、ちとせっちと桜子だいみょーじんがいれば負けはないわ！」

アスナとゆーなが放課後にやる遊びの前に角突き合わせてるが、まあ細かい事である。

「じゃあ、先行くです」

私が今やるべきなのは美味しいお菓子とお茶を用意し、皆と一緒に楽しく運動する事だけなのだからね。

無論、私自身の為ですけど何か？

ちなみに本日の勝負は、アスナの助っ人に入った長身センター大河内アキラの活躍であわやと言う所まで追い詰められたものの見事に競り勝ち、審判役を務めてくれた和泉亜子と一緒に持ち寄ったお菓子の２／３を平らげる事に成功したと言う結果になった。

今日の夕食は青椒肉絲でも作ろうかな。たまにはピーマンも食べさせた方が身体には良いんだけど、未だ子供の舌なせいか普通に作ったんじゃ残されちゃうからね。

でも今日は私の方が勝負に勝ったんだから、残さず食べる約束を果たして貰うのだ。

……アスナが私が大嫌いな物の名前を知って、良く考えもせずに食べろと言って来ない事を祈るばかりである。エイの糞漬けなんて作りたくもないし、常識的に考えて。

日が変わって翌日の夕暮れ後。

隣町にある我が社の事務所から送迎用の社用車で麻帆良学園の外縁部まで戻って来た私は、そこで金髪幼女のお出迎えを受けた。

「待っていたぞ八束千歳。話がある」

そうとだけ告げて踵を返した後姿はやたらと堂々としてて、まるで私がついてくる事が当然とでも言ってるかのようだ。……まあ、ついてくけど。

「それじゃごくろうさまです」

運転手をねぎらって帰し、普段と違って電車の駅へでは無くエヴァが去って行った少し奥まった路地の方へと小走りで追いかけてゆく。

念の為に防御呪文5つと浮遊呪文、認識阻害魔法の待機は継続だ。ん？　ここの狭い路地は既に《認識阻害》済みだな。

「良く来た八束千歳。礼だ、受け取れ」

先客……言わずと知れたエヴァが、リボンでラッピングされた紙箱を渡してくれる。ふむ、お茶菓子か何かの食べ物類なのかな？

「ありがとうです」

とは言え今回の選択肢はただ一つ、受け取る以外無いんだけどね。

エヴァの用事はこれだけだったらしく、直ぐに《認識阻害》魔法を解いて帰って行ってしまった。……って事は魔法絡みの品かぁ。下手な所では開けられないな。

後で開封してみたところ紙箱には《ドール契約》と《仮契約》の魔法を発動できるスクロール……羊皮紙製の巻き物が1点ずつと取り扱い説明書が収められていた。

赤い紐で綴じられてる方が《仮契約》、青い紐で綴じられてる方が《ドール契約》だ。

どちらも使い捨てアイテムではあるものの、地味に有り難い代物である。

これを解析できれば、他人に頼らずに《仮契約》ができるかもしれないからだ。

まあ、解析結果次第では面白そうだから使ってみても良いけどね。

数日掛けて術式を解析してみたところ、変な呪いなどが組み込まれていないのと、《仮契約》と《ドール契約》のスクロールを作成する方法が確信をもてるぐらい判明した。

材料さえ調達できるなら、全く同じ効果の物を作り出す事もできるだろう。

なので私は、私のためだけに存在する特別製の従者を作るのを決意した。

魔導機杖のアリアは一応人型モードを備えているとは言え、種々の都合から身長は僅かに１５ｃｍ前後に過ぎず、家事仕事を手伝って貰うには余りに向いてないからだ。

そして、どうせ作るならば思い切り凝った高性能な代物をと張り切り、家庭用ゲーム機の開発試作に振り向けていた3体の分身に仕事の手を止めさせ、【まじしゃんず・あかでみぃ】に出てくるような自動人形筐体の製作に取り掛からせたのだった。

そして外の時間で2日はかかったものの、自動人形筐体は割りとあっさりと完成した。

かの“学園”ではゴーレムや自動人形や人造精霊と言った存在も、それを作る技術も比較的珍しいものでもないせいか、私のチート技

術の原典の一つたる“魔導師ファルチェスク”も其の技術を一通り修得していたからだ。

魔法駆動工学の教授で魔導操機術の専門家たる寒河江教授や其の弟子の御狩谷はるかには及ばないだろうし、ひょっとしたら茶々丸を作ったばかりの時点での葉加瀬聡美にも及ばない程度の知識かもしれないが、無いよりは断然マシなのである。

完成した自動人形筐体は、魔導師ファルチェスク最後の作品にして最高傑作の魔導機杖が人の姿に変じた時の姿を模した外観をしており、整備性と防御力を重視した設計にした為、内装武器や変形ギミックは敢えて搭載していない。

だが、機体に組み込まれた複合防御術式と幾つか用意しておいた専用兵装は、そんな些細な欠点を補って余りある程の戦力を発揮してくれるものと期待していたりする。

奇をてらったり有機部品を多用したりする技術力は無いので堅実一本槍になった筐体であるものの、《ドール契約》に用いる人形としては珍しい部類に入る。

普通は特に動力が組み込まれていないただの人形を使うからだ。

契約の儀式は、時間が捻出し易い会社への出勤日の帰り道に何処かのトイレに寄り、空間転移魔法（シフト・ポータル）で“別荘”に移動して行なう事にした。

カギと亜空間の座標情報さえ有してれば、麻帆良を覆う結界内の何処からでも別荘に入れるように調整済みなので、複雑な術の行使に備えて分身を止めてもアスナが不審に思う危険が少ないと言う事情もあるからだ。

と言う訳で、機会を作って“別荘”に来て早速に作業室に赴き、置いといたスクロールの青い紐を解くと、書き込まれた文字が光を発し、目の前の自動人形筐体を寝かせている無骨な作業台に魔法陣が展開される。

屈み込んで唇を重ねる事で儀式が完成。

互いの間に魔法的な回路が形成され、人形側に自我らしきモノが

形成される。
　これで《ドール契約》は終了だが、こんな先達が既に到達して安全確実な術法と成したモノを借りただけで終わらせては万能無限を志向する魔法使いの知識と力を受け継ぐ者の従者としては恥ずかしくて他人に紹介できたものではない。
　従者人形として目覚めた彼女を真の私の従者とする儀式は、寧ろここからが本番だ。
　もう一つ用意しておいた作業台の上に鎮座している高さ２ｍほどの板状の黒い石……モノリス型コンピュータであり、この“別荘”の維持管理用電脳に向けて、私はアリアの杖先を向けて呪文の詠唱を開始する。
「我が名と技を背にヤツカチトセが命ず　この物に宿りし御魂よ　我が織り成す器に宿りて姿を変えよ！　《精霊化（スピリチュアライズ）》！」
　学園式な体裁にまとめた呪文を唱えると、モノリスが煙に包まれ、其の中から先の自動人形筐体と似た姿をした手乗りサイズの精霊へと変身させるのに成功した。
　その彼女の胴体をむんずと掴み、《ドール契約》を結んだばかりの人形娘の胸部へと押し付けるようにズブズブと埋め込んで行く。
“幻獣朗”が有する心霊医術のスキルによる合成手術だ。
　人と獣、人と魔導具などを融合させる事を可能とする技により、相似形の姿を媒介に親和性を高めた２つの機械を合体させようと言う主旨である。
　それは見事に的を射たみたいで、機械人形のメタルスキンがより人に近い精霊体の肌に置換され、維持管理用電脳と別荘各所を結ぶ無線ＬＡＮが再接続された。
　どうやら私は無事に“別荘”のすみずみまで管理する忠実で有能な従者を手に入れるのに成功できたらしい。
　……合成手術の副作用が、私の想定内に納まってくれればの話ではあるが。
「よろしくです、フィーリア。今日から其れが貴女の名前です」

「はい～、よろしくです～」

こうして私は普段の日に常時展開する分身を1体分減らせる見込みができ、今までより若干は緊急時の対応力を向上させられる方向に歩み出せたのである。

しかし、それが転ばぬ先の杖なのか、はたまた蟷螂の斧に終わるのかは、いまだ未来と言う名の無明の闇の中にたゆたっていたのであった。

第16話（後書き）

これで小2期終了～。と言っても次話は小3の予定ですがｗ
いったい何時になったら原作時制に到達できるのやらｗ

第17話

人工知能プログラム未実装の自動人形筐体と《ドール契約》して出来たベースに、“別荘”の維持管理用に設置しておいたモノリス型高性能電脳を魔法で精霊化した付喪神を心霊医術で合成して作り上げた従者“フィーリア”の調整が終わったのは、小学3年生に進級して一ヶ月余りが過ぎた或る日の事であった。

そこまでにかかった苦労の数々なんて数えたくも無いぐらいである。

ただ、ダイオラマ魔法球の一つが破損して機能停止し、中から植物や機械が溢れて酷い目に遭ったとだけは触れておこう。

ちなみに既に修復済みではあるので、支障と言えば“別荘”の基本空間へ温帯地域に模した土壌や植物の種やらが流出して広大な草原地帯に化けてしまった事により、簡単な魔法ではクリーンルーム相当の作業場が確保できなくなった事であろうか。

高価なのが難だけど、ダイオラマ魔法球の増設を考慮する必要があるかもしれない。

フィーリアの存在意義が、合成により『私の“別荘”を管理し維持する人造従者』と言う足して2で割らないものへと更新されてくれたおかげで、今のところ4体しか出せない分身の1体を其の任に割り振らなくて済むようになってくれたのは嬉しい事だが。

調整終了後のフィーリアの外観は、年の頃は十代後半、おかっぱに整えられた翡翠色の髪と同じ翡翠色の瞳をした、やや童顔ながら端麗な容貌と均整の取れたプロポーションの美少女となった。

造作だけを見れば文字通りの人形然とした風情は、身にまとうやたらとおっとりのんびりふんわりした雰囲気がこれでもかとばかりに打ち砕いている。

また、やたらと複雑で布の面積が多い割りには露出度の高いドレスから覗く鎖骨からお腹の前面にかけてや頬の辺りには文字や模様

などがごく自然な感じで記されていた。
合成元の外観モデルとなったファルチェと瓜二つな姿である。
充填魔力総量は“学園”基準で約三万七千。ぶっちゃけ結界で制限されない私よりも多かったりするのだが、“別荘”の外だと私よりも魔力が弱くなるし、“別荘”自体も別の管理者を置かないと機能障害を起こすと言う弱点を抱えた従者だ。
まあ、フィーリアを“別荘”から出すぐらいなら新規にゴーレムや自動人形や従者人形を作成して運用した方が遥かに効率的ではあるんだけどね。
ついでに魔導機杖“アリア”の人型形態について触れておくと、身長は約１５ｃｍ、後ろ側だけを肩口ぐらいで大雑把に切った黒い髪、猫に似た瞳の黒い目、灰色の毛が生えた獣の如き長い耳、裾が短く簡素な白い貫頭衣と黒い腕抜きと黒い脚絆という服装をした少女の姿に仕上げてある。
現段階でのアリアの充填魔力総量は“学園”基準で約一万二千。これまた全力が発揮できる時の私を凌駕しているものの、私を支援するのに特化した術式を優先的に搭載したせいで単体での戦力価値も機動力も低い。魔力の回復速度が遅めなのも痛い点だ。
その為に保守点検や強化装備のテスト以外では殆どの時間を私と《融合》しっぱなしと言う有様で過ごしており、彼女の外見に思いを馳せるような機会は少なかった。
分解整備する時は精霊化を解いてメカメカしい短杖形態になってるせいもあるけどね。
アリアの外見の説明が今の今になるまで伸びてしまったのは、そんな訳だ。
ともあれ、そんな訳で手が空いた分身3体を元の仕事である次世代家庭用ゲーム機の開発作業に戻そうと思ったが、既にα版とも言える試作ハードができている事と、１年以内にネギの住んでる村が襲撃される可能性に気付き、未完成のまま放置してあるアリアのオプション武装などの個人用武器の開発と作成を急ぐ事にした。

私が強力な解呪能力を持っているのがメルディアナ魔法学校に知られた為、石化された村人の治療依頼が舞い込んでくる公算が危険なほど高いからだ。

しかし、断る理由も見つけられないし、治せないと嘘を吐くのも嫌と言うか自身の能力に悪影響を遺しそうなので治すしかないし、恐らくは治せるだろう。

だが、そうすれば今まで以上にメガロメセンブリア上層部の関心を引き、完全なる世界にも目をつけられてしまうだろう事は明白なのが困りものなのである。

かと言って、事前に対処する手は恐らくやるだけ無駄だろう。

何せ犯人が上部組織であるメガロメセンブリアの幹部どもなので、私如きの情報収集能力で事前に動きを察知するのは至難を極めるし、よほど注意して対応しないと向こうに動きを悟られて事態がかえって悪化してしまう危険が高過ぎるのだ。

それならば事後に動いて私が目をつけられた方が幾分マシな選択である。

私自身の安寧の為なら村人達が皆殺しの憂き目に遭ってくれる方が良いのだが、流石にそんな下種な事を願う訳にもいくまい。

私に出来るのは、私に治せる容態で済んでくれる事を祈りつつ時期を待つ事だけだ。

それを改めて確認して、私は一つ溜息を吐いた。

原作開始の数十年以上前に来れているか、戦闘力を優先したチート能力の一つでも用意できていれば、こんな悩みなど事象の地平に吹き飛ばしてしまえたものを、と。

さて、話題は大きく変わる。

携帯ゲーム機『卵っち』のヒットで傾いでいた屋台骨が持ち直った“盤大”は、今年の1月に発表した“星雅遊興”との合併をつい

先頃になって撤回した。

そのせいか彼等が取得するはずの株の一部がウチの会社に回ってきて、半ば心中体制とでも言いたげな雰囲気になってきたのは如何したもんだか。

発言力も高まったから、当たってくれれば大きいんだけどね。

なので、本来の歴史よりも早いのを承知で次世代家庭用ゲーム機の開発計画を生え抜きの開発陣と私直轄の開発班との競争試作体制で立ち上げさせてみた。

要求仕様は無論、他社の次世代機を抑えて市場を一定分確保できる性能と価格だ。

私が独自に“別荘”内で開発しておいた既存の市販部品を多用して作った試作機“夢釣人・α版”を開発班の双方に3台ずつ渡しておいたので、私ないし私の会社が有する技術を子供のままごとと侮る空気は薄れた。

試作品なせいもあってフルセットが1台で7万円以上かかってはいるものの、現時点でも本来の歴史での“夢釣り人”に“土星”の上位互換機能を搭載したのに匹敵するほどの高性能を見事に発揮できていたからだ。

まあ、そのせいで生え抜き開発陣が妙に刺激されて思い切り趣味に走った恐竜的性能追求に走りそうだったり、私の直轄が向けてくる視線が変にねっとりとしてるような気がするのは気がかりと言えば気がかりなんだけどね。

ゴールデンウィークが終わりを告げ、6月も終わりに差し掛かる頃に、今年も麻帆良学園都市最大のイベントである『麻帆良祭』が開催される運びとなった。

ウチのクラスの今年の出し物は、投票の結果、私・さっちゃん・エヴァ・いいんちょを主力として茶店をやる事に決定した。

ちなみに去年やったのはミニバザーで、それなりに好評を博していた。が、私がバザー会場の片隅を借りてやってた玩具の修理屋さんの方が賑わってた気もしなくもない。

閑話休題。

厨房担当者に私とさっちゃんとでお茶の淹れ方や饅頭や団子の作り方などを教授、いいんちょが中心になって接客マニュアルを作ってウェイトレス担当者を指導し、エヴァと私でウェイトレスの制服を仕上げ、当日配るビラのデザインは早乙女ハルナが担当する。

これで万全……と言う訳でも無いが、事前準備として恐らく上出来の部類であろう。

食材の仕入れと調理器具の調達には私が一枚噛んだのは言うまでも無い。

色々と試行錯誤を繰り返した結果、今ではダイオラマ魔法球を用いた農園で高級品に匹敵する茶葉や風味豊かな無農薬野菜や旨みたっぷりの小麦などが、ただ同然で生産できるようになったからである。

どれもこれも育成工程に魔法が深く関わっている為、間違っても一般市販できないのが残念無念ではあるが、こういう機会に供出するだけならば充分過ぎる備蓄があるのだ。

ならば使わない手は無い。農家にコネがあって原価に近い安値で仕入れられると言えば嘘とも言えないしね。

木霊や地霊や水精を学園式魔術のフォーマットで《精霊化》した方々に田畑や果樹園の世話をして貰う方法、思いついて良かった。見た目は少々不揃いだけど、コバッタだけで農作業させてた時期よりも確実に美味しくなってるからね。

ちなみに木霊や地霊や水精は農園魔法球内の植生や自然環境と同調してるので、現段階では外界で活動できないという魔法世界人っぽい性質をしているらしい。

……バルク品のＣＤ－Ｒを使ってプチネウスもどきも幾らか作っとこうかな。ドジっ娘機能を削っとけば、フィーリアや私の統制下

でコバッタでは手の回らない所をフォローしてくれる助手として活躍してくれるようにできそうだしね。

クラスの皆が頑張ったおかげで、茶店は見事なまでの大成功を遂げた。

私が関わらなくても充分な利益は出たんだろうけど、破格の仕入れ値は美味しいお茶とお菓子に可愛らしいウェイトレスが揃ってるおかげで盛況となった我がクラスメイト達のお財布を更なる効率で温めてくれる事になってくれたのだ。

私といいんちょが用立てた布と糸でエヴァに仕立てて貰ったお揃いのエプロンと和装風味な店員用制服は、記念品としてクラスの皆それぞれが持ち帰る事になった。サイズの関係で何時まで着られるか分からないけど、気に入ってくれたんだったら嬉しい。

あと、今後はエヴァとさっちゃんに茶葉と生鮮野菜を定期的に卸す事になった。

精霊達の力を借りて無農薬栽培した農産物は、滋養も風味も最近のモノに比べて格段に上だと彼女達なりの熱心さで頼み込まれるほどのモノになってくれていたからだ。

……実は少量だけど珈琲豆も栽培してるって知られたら、どんな顔されるだろうか。

前世では自分でも中毒を疑うくらい飲んでたけど、今生では余り飲んでないんだよね。

第17話（後書き）

学園祭イベントはごりっと省略。誰得風味で進む本作です（汗）。

第１８話

もう少し猶予があるものだと、私は勘違いをしていた。
できれば起こって欲しくなかった事が、既に発生してしまっていた。
恐らくは、何としてでも止めようと言う気概が湧かなかったのに加えて、私如きの情報収集能力では霞すら捕まえられぬ程に徹底した隠蔽措置がなされていた為に、数ヶ月にも渡って事件が起きた事にさえ気付き損ねていたのだろう。
もっとも、顔見知りが奇禍に遭った訳でも無い、遠い空の下での他人事だと思ってたせいで、真剣味が足りなかったのも察知し損なった一因ではあるのだけど。
だが、面倒事がいつまでも他人事でいてくれるとも限らない。
今回の事件が紆余曲折を経て私の人生に影響を及ぼす事になるだろうと告げ知らせる迷惑な便りが舞い込んできたのは、夏休みも間近な或る雨の日の出来事であった。
「ちとせちゃん。メルディアナから招聘状が届いておるぞい」
麻帆良女子中にある学園長室で聞かされた其の一言から、危うく心臓が止まってしまうんじゃないかと感じるほどの衝撃を受けてしまう。
……いや、心臓が止まったぐらいじゃ直ぐ死なないけどね、私は。
「なんの御用事です？」
「悪魔が掛けたらしい石化の呪いを解いて欲しいそうじゃ」
やっぱりと思いつつ、私は深い深い溜息を吐かざるを得なかった。
「解りました。出発は何時が良いです？　できれば高畑先生辺りに警護について欲しいので、先生のスケジュールが空いてる時期にして欲しいです」
タカミチが動けないならチャチャゼロに護衛を頼むつもりだけど、あの娘は扱いが難しそうなので、できれば彼に付いて来て貰いたい。

……こっちに彼を残してもアスナの面倒見てくれなさそうってのもあるけどね。長期休みに入ったら、放っといても出張に行っちゃいそうだし。

夏休みに入って直ぐ、アスナのことを学園長とエヴァに任せ、私は一路ウェールズにあるメルディアナ魔法学校へと赴いた。

……エヴァに頼むのはある意味高くついたけど、学園長だけじゃ不安だったからね。

「それでは護衛をよろしくお願いするです」

「ああ、任せておいてくれたまえ」

メルディアナ魔法学校地下に保管されているネギが住んでた村人の治療に行きたいけれど襲撃されかねなくて心配だと訴えるまでもなく、学園長にタカミチに護衛して欲しいと頼んだだけで付けてくれたのは僥倖と言うか何と言うか。

もしかしたら学園長が襲撃犯のきな臭い背後に気付いてくれてるからかもだけど。

半年ぶりに来訪した英国は、景色はそれなりだが、相も変わらずメシが不味かった。

こんな事なら治療用の魔道具を減らしてでも携帯口糧を持ってくるべきだった……などと後ろ向き過ぎる想いがこみ上げてきてしまうが、苦笑しながら噛み殺す。

食材への冒涜とも思えるが如き調理とも呼べぬ処理をされた代物とは言え、食えば腹が満ちて栄養になるだけマシであるとの諦観を抱いて。

うむむ、キッチン付きの部屋を借りて自分で料理するべきか。

そんな事を考えてるとは露知らず、難しい顔で唸っている私をタ

カミチが気遣ってくれるのに微妙に申し訳ない気になりながらも、夏休みで人気の少ないメルディアナの校舎を闊歩し、校長室へと向かう。

ノックして入室許可を貰い、何気に防御魔法の多重発動準備を確認し、タカミチに背中を守って貰いながらドアを開ける。

「お久しぶりです」

中にいたのは、以前にも見たメルディアナ魔法学校長その人であった。

「久しぶりじゃのう。来てくれて嬉しいぞ」

こっそりと起動しておいた霊視の魔法で見たところ入れ替わられてる様子は無くて少しホッとしたが、そこまで私が警戒されてると考えるのは流石に行き過ぎかと思い直す。

……ゴハンが不味いとロクな事考えないよね、我ながら。

「患者さんと其の御家族さんは何処です？」

温めるほどの旧交も無いので、早速に本題を切り出す。

こういうのは早ければ早いほど良いのだ。

「患者がいる所へは後ほど案内するが、家族の方はのう……」

「最低でも御家族の方が石化したのを見てる方は解呪に立ち会わせた方が良いです」

いかにも魔法使いらしい格好をした白ヒゲの爺さんこと校長先生に渋られるが、正直言えば其れは過保護だと思う。

「そうは言われてものう。未だ子供じゃから、できれば見せたくないんじゃよ」

「ならば尚更です。その子が見てないトコで石化を解除したら、治った人達を当人達だと納得できなくなるかもしれないです」

見せたらショックを受けるだろうけど、目の前で治さないとそっくりさん疑惑を持たれる恐れが高いと思ってしまうのは、私が心配性だからだろうか？

「む。そう言われると否定できんが、さりとてのう……」

でも指摘されたら唸ってしまっただけに、そう的外れな懸念でも

ないようだ。
……仕方無い。
「では試しに一人だけ解呪しますので、その後に呼んでいただけますです？　治せる見込みがあると教えればショックも幾らか和らぐはずです」
面倒で、かつ妨害が怖いけど、ここら辺りが互いの妥協点だろう。
対集団用の石化解除魔法を手札に隠しておけるけど、代わりに魔力消費と手術時間がハンパ無く増えそうで避けたかった方法である。
滞在時間的に。
「……良いじゃろう。治して貰えるなら後の事はワシらで何とかしよう」
校長先生も私とほぼ同じ見解に達したようで、気は進まなさそうな面持ちであるが協力は約してくれた。
まあ、これで断ったら容赦無く帰るつもりだったのを見て取ったせいかもだけど。
「お願いするです。では早速患者の所へ案内して欲しいです。先ず誰を治せば良いのかも知りたいです」
「よかろう。ついてきなされ」
私とタカミチが校長先生の先導で案内されたのは、封印された鉄扉の先の長い螺旋階段を下りた先にある体育館ぐらいはありそうな広い地下室であった。
「これで全員です？」
「そうじゃ。彼から治療してみてくれい」
パッと見でも２００名は上回っているのは確実な石像群……もとい、石化された村人達を眺め、私は少し気が遠くなった。
さっきから解除してない霊視魔法のおかげで石化の呪縛の術式構成が読めるので、どうやらエヴァの登校地獄の解除よりは万倍簡単みたいだと安心したのは良いのだが。
いかんせん人数が多い。
解呪魔法のブースターになる宝石を周囲に配置して全員一気に治

した方が楽だと判明したのに、敢えて一人一人治さなきゃならないなんて何ていう拷問だろうか。

しょうがない。これも私の実力を低く見せかける為か。

「では行くです。ロジカル・マジカル・テクニカル！」

左手にはダミーとして用意した樫の木製短杖、右手には純金製の縫い針を構え、最初の患者として指定された杖とマントを装備した若者の石像の前へと歩み寄る。

「テンペルム！」

私を中心に赤く光る星型の魔法陣が幾つも現れ、周囲を一時的な聖域と化す。

「ムンドゥース・インフィニ・トゥーム」

無限の宇宙からもたらされる秩序正しき力をイメージした魔力を我が身に集め、右手に持つ断面が正三角形をした黄金に輝く針へと流し込む。

「レディーレ！」

若者の腕にあたる部分を針でちょんと突くと、呪縛を破り元に戻そうとする魔力が、曲がりなりにも神の端くれである私の後押しも得て一挙に石化魔法を打ち破り、呪いの残滓である彼の表面を覆う石の薄皮がパラパラとはがれて落ちてゆく。

「おお！」

「これが…ちとせちゃんの……魔法か……」

校長先生とタカミチが感嘆を漏らしてくれてるが、実は光線状にして照射すれば数人ぐらいまとめて治せそうなんだよね、元ネタ的に。

ちなみに此の呪文は某ロボットアニメで主人公のライバルが使ってたもののオマージュで、私が最も強力だと思い込める状態回復呪文の文言を用い、ディル・リフィーナ系魔法や学園式魔法の方式も参考にして術式を構築したネタ魔法の一つである。

一人一人治すならメスで石化呪文の結節点を切り裂くって方法もあったけど、それよりはこっちの方が未だ目立たないだろうという

判断だったりする。ラテン語の呪文を唱える治療魔法だから、実態はともあれ傍目からは西洋魔法の分類に見えるだろうしね。

「ぼ…僕は……ここはいったい？」

あ、若者が目を覚ましたようですね。

「悪魔は去りましたです。生存者のうち石にされた方々は此処に収容されてるそうです」

「い、石!？」

「動かないでです！　石像を壊したら死んじゃいます！」

石にされる前の状況を思い出したのか動揺して激しく動こうとしたので、拘束魔法で取り押さえる準備をしながら強い言葉で制止する。

たくさんの石化した犠牲者が安置されているので、下手な動き方をするとドミノ倒しの如く犠牲者を続出させてしまいかねないと危惧したからだ。

まあ、粉々になっても一応蘇生できるんだけど、余計な危険は避けるのが無難だしね。

「落ち着くのじゃ！」

あ、校長先生も威厳ありそうな声で制止にかかってくれたみたい。

壊したら死んじゃうって警告が効いたのかな。

「とにかく、約束通り生き残りの縁者さんに来て貰うです」

「良いじゃろう」

校長先生が階段を登って行くのを、タカミチと助けた若者と一緒に見送る。

「戻ってくるまで少し休むです。高畑先生は警護の方よろしくです」

「ああ、任せてくれたまえ」

適当な柱に背を預けて目をつぶって座り込む。

正直言って余り快い環境でも無いし、ホコリっぽいけど休まなくちゃ持たないしね。

霊視魔法も解呪魔法も結構負担大きめの魔法だからなぁ。

タカミチが私の肩を揺らして起こしてくれた頃には、１１名ほど人が増えていた。
「ありがとうです、高畑先生」
「いやいや、これぐらいどうってこと無いよ」
その中にネカネさんとネギ坊主とアーニャちゃんとおぼしき外見の人物が混じってるのを見て、改めて気を引き締める。
もはや原作知識などという代物には頼れない未来に踏み出す覚悟をする為に。
「ではオペを開始するです。今日一日で全員は治せないですが、できるだけはするです」
「……治せるの？」
石化した村人達を見て案の定ショックを受けて呆然としてる赤毛の幼児の横で、これまた赤毛の可愛らしい女の子が目に涙を溜めながら上目遣いで訊ねてくる。
「お姉ちゃんに任せるです！　さ、そこの人達、こっちの絨毯の上に一人ずつ丁寧に運んで下さいです」
私が日本から持参した絨毯には予め魔法陣が織り込んであるので、ほんの少しだけ私の治療魔法の消費魔力が抑えられるという効果があるが、それ以上に石化が解けた拍子にドミノ倒しにならないで済むように他の石像から離すって意味合いが大きい。
倒れないよう咄嗟に魔法で止めるのも、倒れて砕けた石像を無事な状態に治すのも、結構大変だからねぇ、ホント。

石化魔法の治療はさっきと同じ様に着々と成功して行ってるけど、今回はさっきとは違う事がある。
「ああ、アーニャ！　アーニャ！」
「お母さんっ！」
「スタンおじいちゃん！」

「おお、ネギ。無事だったか」
などなど、感動の再会シーンが繰り広げられているのだ。
ネギ少年はスタンと呼ばれてた老魔法使いが石から生身に戻ったのを見た途端、飛びつくように抱きつきに行ったので、元の位置で治療してたらどうなってた事かとヒヤリとさせられた。別にネギ少年が悪い訳じゃないから怒る気は毛頭無いけど。
「そこの少年、そこからどいて元の位置に戻るです。患者はまだまだいるのです」
でも、なかなかネギ少年に抱きつかれたスタン氏が治療補助用魔法陣が描かれた絨毯の上から移動できないでいるので、彼には酷な話だろうが早く動くよう催促する。
ちなみにアーニャちゃんの場合は母親の方から抱きに行ってくれたから、久々の再会に水を差すが如き無粋な真似はしなくて済んだんだけどね。
「これこれ。そう急がなくても良いじゃろうに」
「この呪文は治療の間隔を空けない方が楽なのです。すなわち皆を早く治して上げられるのです。再会や快癒を喜ぶなら魔法陣から出た後にして欲しいです」
一人ずつ治すと決めた時点で、魔力の限界まで治して治して治しまくっても今日中に全員を治すのは無理だろうが、それに近付ける事は無駄ではない……はずだ。
「見てると良いです。敵を討ち払う力と対を成す、味方を助ける為の力の使い方をです」
それからは半ば流れ作業で村人の半分近くが石化から解放されたところで、私の気力と言うか魔力がほぼ尽きてしまった。
地下室から出たら空が赤く染まっていたのが、経過した時間を無言で伝えてくる。
「やはり1日でとんぼ返りとは行きませんでしたです。明日も護衛お願いです」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ、そう礼儀正しく頼まれちゃ断れないな」

断ってネギ少年辺りに会いに行かれたら私が困る。
今日やった事で敵が手を打ってくると言うなら、今より今夜、今夜より明日の方が危険が高いはずだし。私は治療で魔力がヘロヘロになるので、ただでさえ低い戦闘力がゴミ同然にまで落ちてしまう予定なのだから。

第１８話（後書き）

とうとう主人公が持つチート能力の一端が原作展開を大きく歪める時がやってまいりました。が、未だ原作時期にすらなってません。大丈夫か私？（笑）

第19話

『謀られたです！　あのクソジジイ！』

私は内心そう叫ばずにはいられなかった。

何故かと言うと、私の英国滞在中の宿所がスプリングフィールド家にホームステイに指定されてるのを土壇場になって知らされたからだ。

しかも宿泊先の方々がいらっしゃる前という、実に断り難いタイミングで。

ネカネさんの料理が英国人離れして美味しいんじゃなかったら、夕食後に即刻校長宅へ殴り込みに行くトコだったけど……命拾いしたな、私が。

え？　何で私が命拾い？

やだな、此処の校長なんて化け物に私みたいな一介の技術屋が、魔力がヘロヘロかつ怒りに我を忘れた状態で挑みに行って勝てる訳ないじゃないか。

自慢にも何にもならないけどね。

タカミチはスタンさんと現在絶賛酒盛り中。

いちおう抑え目に飲んでるみたいだけど大丈夫かな、アレ？

……学園長に出す報告書が辛口評価になるのは覚悟するが良いぞっと。

「すごかったです！　ミス……」

「チトセ。ヤツカ・チトセ（八束千歳）。ファミリーネームが前になる形式の名前です」

やたらとキラキラした目でまとわりついてくる赤毛の男の子が、恐らくは……

「そうですか！　僕はネギ。ネギ・スプリングフィールドです！」

あ～、やっぱり原作主人公君だね。既にイケメンの片鱗が出てるよ。

アーニャちゃんは別宅で久々の家族団らんを楽しんでいるらしいから、心の重石が取れてはしゃいだネギのストッパーをやってくれそうな人がそうそう見当たらない。

ネカネさんは今のトコ微笑ましそうに見てるだけだし。

「よろしくです、ネギ君。褒めてくれて嬉しいけど、ネギ君だって１０年ぐらい頑張れば私に負けないぐらい凄くなれると思うです。……戦う方を二の次にすれば、です」

取り敢えず説教モードと言うか人生の先輩として、治療場面を見せた事による負の影響に成り得る要素へと釘を刺しておく。

「え？　そうなんですか？」

不思議そうに上目遣いされてしまうけど、幾らチート頭脳な魔法開発者の素質持ちの可能性大とは言え、攻撃魔法ほどの適性が治療魔法に無さそうに見えるのも事実だからね。

酒飲み２人から漏れ聞こえる話からするにナギに憧れる坊ちゃんが、ポッと出の治癒術師の方に鞍替えするなんて有り得ないだろうし。

「戦う為の魔法も治療の為の魔法も、どっちも簡単には身に付かないものですから、優先順位を決めて取り組まないと結局何も身に付かないなんて事になりますです」

「で、でも……」

「ネカネさんとサウザンドマスター。其の御二人ともに追いつく努力と言われて、未だ簡単にできると思うです？　夢が大きいにも限度があるです」

あ、ようやく凹んだのか俯いた。

全く世話の焼けるガキだわ、コイツ。

どちらかと言うと育てられ方の問題の方が大きいだろうから同情もできるけど。

右手で肩を軽くポンポンと叩いてやって、こっちを見るように促してみる。

「大丈夫です。悪い所に気付けたんだったら直せば済む事です。い

つまでもウジウジ落ち込んで泣いてたら、ちゃんと凄い人になれなくなるです」

「でも、そんな事言われても……」

母性本能をくすぐられる仕草なんだろうが、私には余り効かないと言うか嫌悪感が勝るのは何故なのだろうと思いつつも、表情をつくろって手のひらを聞き耳立ててるネカネさんの方へと向ける。

「泣きたいなら胸を貸して貰って泣いておくです。私のは貸さないですが。その後で自分がやりたいこと、やれることをじっくりと見つけるです。その為に学校に通ってるって事を忘れないようにするです。そうしたら……」

「そうしたら？」

「そうしたら、きっと納得のいく自分自身になれるはずです」

あ～、ガラにも無く説教しちゃったよ。

気恥ずかしいから明日にでも治療終わらせて日本に帰りたいな。

だが、私は忘れていた。

縁者立会いを条件にしたせいで、彼等が到着するまで治せない患者が出るって事を。

結局のところ英国滞在は9日間に渡って続き、オフの日にはタカミチに付き合ってネギやアーニャとも遊ぶ破目になったのだった。

……無音拳で滝を縦に割る場面が直で見られるとは思わなかったなぁ。

それ以上に眼福だったのは、ネカネさんと一緒にお風呂に入れた事だけどね。

あと、何故かメルディアナ魔法学校に、私の絵姿が飾られる事になったらしい。

勘弁して貰いたいぐらい恥ずかしいのと同時に、意外と有用なん

で困るところだ。
私の敵の耳目を集めてしまうのは今更だから既に諦めてるけどね。
おまけに英国滞在の最終日にいきなり、在校生を集めた前でスピーチをしろなんて無茶振りまでかましてくれるとは。
どーしてくれよう、このジジイ。
「魔法は強力です。でも魔力が切れたら使えなくなるです。だからこそ、如何にして魔力を節約するかが重要になるです」
講堂に集められた魔法使いの卵達の前で、彼等と同世代のメスガキがしたり顔でＳＥＫＫＹＯＵかますのだから、果たして真面目に聞いてくれてる人がどれだけいるものか。
最初に此処の卒業生だと自己紹介したけど、果たして何人が信用している事か。
「方法は大きく分けて二つ、魔法を効率的に使えるようになるのと、魔法を使わずにできる事を増やす事です」
お、一緒に聞いてる先生達の目の色が変わったな。否定的な方と肯定的な方の両極に。
「魔法を効率的に使えるようになるには、練習あるのみです。幸い、皆さんには優秀な先生方がいらっしゃいますですから、どうしても自力で解らない事があったら教わりに行くと良いです」
ふむ、少し肯定的な視線が増えてきたかな。次でどうなるかは解らないけど。
「魔法を使わずにできる事を増やすには、身体を鍛え、本を読み、友達と遊ぶのが近道です。体力と知識は有って困るものじゃないですし、遊ぶのもコミュニケーション能力を育てると考えれば悪い事じゃないです。……無論ですけど、やるべき勉強を放り出してまで遊び呆けるのは感心しないですが」
あ、意外と否定的な態度取ってる先生は少ないみたいだな。
「使うのに体力が要る魔法もあるですし、高いコミュニケーション能力は精霊に助力を頼む時にも魔法を一般人に秘匿する時にも役立つです。適度に学び、適度に遊び、適度に休むことこそがマギステ

ル・マギへの近道だと私は思ってるです」
あんまり長々スピーチしても迷惑だろうし、ネタも尽きたのでここで切り上げる。
さてさて聴衆の反応は……
……余り良くないっぽいな、無理も無い。
無意識に魔法至上主義の選民思想に囚われた子もいるんだろうし、一部が聞いてくれただけでも御の字さね。
ちなみに校長先生は終始ニコニコしてて表情の裏が読めなかった。
伊達に校長をやってる訳じゃないようだが、果たして御気に召したのかどうか。
後で褒めてくれはしたんけど、どうも何かあるような気がして素直に受け取れないんだよなぁ。……単なる考え過ぎかもしれないが。

私の護衛と恩返しの為にって、石化していた村人のうち3家族10人が麻帆良に着いて来てくれる事に何時の間にか決まっていたらしい。
ちょっとびっくり。
ついでに、村人の皆様とタカミチが私にも気付かれないよう何度かこっそり襲撃を撃退していてくれたらしいのにもびっくりした。
自分ではもうちょい察知能力高いと思ってたんだけど……要対策かな、これは。
あ、付いて来てくれる人達の今後は、麻帆良の学園長預かりで納得して貰った。
秘書としても、護衛としても、正直言って能力的に心許ないからだ。
英国で田舎の村人をやってた普通の戦闘スタイルな魔法使いにそういうのを頼むのが間違っているので、当然と言えば当然なのであるが。
しかし、それでも麻帆良で魔法先生をやるには充分以上の腕は持

っているはずだ。
ならば普段は私が住んでる女子寮がある麻帆良学園都市を守って貰えれば有り難いと力説して、何とか解って貰えたのだ。
もっとも、麻帆良の外に長期遠征する時には連れてく約束はしてるんだけど。
……彼ら用のパワーアップアイテム、何か用意しておくべきだろっか。
今回の英国遠征では、エヴァのおかげで不自由を感じずに過ごせたらしいアスナの出迎えを受けながら、そんな事を感じた私だった。

ともあれ、開発計画は渡英前の予定通りに自分用武装を優先して行う事にした。
ただでさえ戦闘力が足りてないと言うのに、それすら満足に発揮できないなんて自衛の観点からすると論外な有様が続いており、改善は急務だったからだ。
とは言え此の身は８歳児。
将来はともかく、現状の体格で白兵戦に向いてるとはお世辞にも言い難い。
なので銃砲撃戦用の重甲冑をイメージした強化外骨格……つまりは射撃武器を内蔵したパワードスーツの開発に勤しむ事にしたのだ。
が、これが存外難しい。
魔力を材料にして作り出したミサイルを気で操って砲撃する〈魔導鎧砲撃〉スキルを活用する為には、魔力と気が相反して威力が減退してしまうと言う問題を技術的な見地の側から一定分までは解決しておかなければならないからだ。
私が咸卦法を使えれば魔弾の生成機構と射出装置の構造が比較的簡単にできるので話は早くなったのだが、使えないものを如何こう言っても仕方無い。

とは言え、私は“別荘”内の魔法球を利用して１日を１４４倍で使えるのだ。

問題を解決して一通りの装備を揃えるのに数ヶ月もあれば多分お釣りがくるだろう。

……実戦証明を果たすには、また別の問題を抱えなきゃならないだろうけどね。

第１９話（後書き）

今回はＳＥＫＫＹＯＵ回になってしまいました。
あと、ネギが住んでた村の人の戦闘能力は、平均的な魔法先生並みであるとしてます。なので今後に大きく関わるような事は無いと思われます。

第２０話

人気の無い廃墟が並ぶ町並み。
ぼんやりとした明るさの曇り空と視界を阻む霞。
音は乏しく、生きているモノが皆無な世界。
そんな中、突如ゆらりと廃墟の暗がりから瓦礫だらけの表通りへと現れた黒い影。
「サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス！」
影、影、影。
「てえっです！」
《魔法の射手》の呪文により放たれた３本の光り輝く矢が影を貫いて霧散させ、更に続けて現れた影達も推進炎を吐き出して吶喊する魔弾を多量に殺到させる《連砲撃》の攻撃スキルで、爆炎の彼方へと放逐される。
それらを撃ち出したのは、無骨な漆黒の甲冑に身を固めた小柄な少女だ。
その彼女の視界に、またもや黒い影が忽然と現れる。
「アリア、カートリッジロード。コーラス２、ディレイ３、キャスト２」
「みっ！」
ガシャコンとカラクリが動作する音が鳴り、赤い輝きが少女を包む。
「フラグランティア・ルビカンス！「インケンディウム・メルカーナ！」」
効果上昇支援を受けた上に短縮詠唱で二重詠唱された対単体攻撃呪文の火線が、黒い影だけではなく其れがあった場所の地面までをもガラス状になるまで溶かし去る。
「威力はなかなかですが、撃つ前後に少し隙ができるのが気になるです。無詠唱で二重詠唱するのは精霊さんが混乱するので無理っぽ

いですし」

呪封筒に封じ込めておいた魔力と幻術を利用して2つの攻撃呪文を同時に唱えて同じ目標に命中させる技は、少女と其の補佐たる魔導機杖の処理能力を多大に占有してしまうので、それ以外に対して注意散漫になりがちだと彼女は自省していた。

火力自体も中級攻撃魔法の《紅き焔》と《メルカーナの轟炎》なので、今現在での少女の魔力では残念ながら二重掛けしても竜種や魔族や鬼神兵などの強敵に大きな損害を与えるほどとまではいかないだろう。

それを易々と成せるであろうフェイトやラカン達が出鱈目過ぎるだけとも言うが、其処を指摘しても少女の慰めとはならないのは御想像の通りである。

ちなみに《紅き焔》は熾烈な炎で対象を焼き払う火属性の西洋魔法で、《メルカーナの轟炎》はディル・リフィーナの火炎系秘印術のうちの一つを西洋魔法風に呪文詠唱をアレンジした概ね同格の威力のものだ。

「アリア、カートリッジロード。コーラス3、ディレイ3」

「みゅっ！」

今度は二重詠唱は無し。アリアのオプションとして追加装備したカートリッジ・システムに5発が装填された呪封筒のうちの1つを開封して得られた爆発的な魔力を自らの魔力に上乗せし、少女は普段は使えないでいる魔法の行使ができるようになる。

「ユディキウム・アウエラ！」

呪文を唱えるや否や、少女が前に伸ばした手から光り輝くソフトボールぐらいの大きさの魔弾が飛び出し、廃墟の一つに命中。

命中した箇所だけを丸く抉り取るが如く消し去り、光球もまた消え去った。

こちらはディル・リフィーナの純粋系秘印術の一つ、《アウエラの裁き》と呼ばれる高圧縮光子球弾を投射する単体攻撃魔法を西洋魔法風にアレンジしたものであり、少女が継承したチート能力の中

では最も高火力な攻撃魔法でもある。
「《重砲撃》です！」
黒い全身甲冑の肩部と脛部の装甲がズレて見た目にも物騒な砲口…魔弾射出装置…が露呈し、魔弾生成機構が使用者や周囲から集めて作り出したミサイル多数を連続発射。
気を用いた遠隔操作で先程《アウエラの裁き》が当たって穴の開いた廃墟のビルへと全弾が誘導され、着弾。爆発の渦に沈めて原形を留めない瓦礫の山に変えてしまう。
「《制圧砲撃》です！」
今度は連射された魔弾が少女の前方５０m以遠に散らばって着弾して炸裂、魔力の爆風がおおよそ３００m四方を吹き荒れる。……まあ、攻撃方法の都合上ちゃんとした正方形という訳にはいかないのだが。
「とりあえず鴨撃ちだと此れぐらいはできるようです。……実戦でやれるかどうかは未知数ですが、急いでやりたい事でも無いですし、後回しにするです」
麻帆良学園都市を守る退魔結界の効力範囲外である演習用に自作したダイオラマ魔法球内で、新規に自作した追加装備である“カートリッジ・システム”と“漆黒の魔導鎧”を搭載した魔導機杖アリアを全力使用すれば、標準的な魔法使い１個小隊並みの火力は出せるだろうと言う水準まで達した事を、少女は自分の目と耳で確認した。
ここで貪欲に敵を求め、己の牙を砥ぐべく研鑽を積もうと考えないのが、才能以上に彼女の戦闘能力を頭打ちさせている要因なのかもしれない。
「さて、後は形状記憶機能がちゃんと働いてるか確かめるだけです」
実は此の廃墟。廃墟の姿をした射爆演習場であって、そこらの地面にも廃墟にも形状記憶魔法が組み込まれており、時間が経てば自動的に元の姿に戻るようになっているのだ。
もっとも、限界点を超えて破壊し過ぎたら戻らなくなってしまう

のだが。

ちなみに今回の場合はと言うと……

「石ころが一つ二つ直っただけじゃ意味無いです！　構成術式の見直しです！」

失敗だったらしい。

麻帆良にある関東魔法協会にとっては本国であるメガロメセンブリアの上層部に、私の事が学園長の秘蔵っ子として知れ渡ってるらしいと言う嫌な話が耳に入ってきた頃……

秋の東〇ゲームショウに“星雅遊興”から試作α版の“夢釣人”が出品され、関連企業であるウチの会社の株も一気に値上がりした。

我が社の株を半分以上握ってる私の資産も凄い事になってきてるものの、未だ星雅遊興の株を買い集めた時の借金が残ってるので、納税額は穏当な額に落ち着くとは思う。

ともあれ個人用武装の開発も一段落した事だし、先行量産型である試作β版の開発に注力すべきかとも考えたのだが、実のところ私が担当する部分の仕事については既に8割方終わっていたのに気が付いてしまった。

残っている課題はと言うと、如何にして性能を下げずにコストを下げて量産できるかの追求で、これは意外かもしれないが私にとっては不得意分野なのだ。

普段は人外な工作技能と魔法を当たり前の如く縦横無尽に活用しているせいで、どこまでが魔法の秘匿に関わる禁忌の境界線なのか把握に苦しんでしまうからであるのだが。

ん？　と言う事は、もしかして、差し迫って対策に奔走する必要が無い？

いや、魔法世界を救う為の計画の準備や、アスナに裏の事を教えないように気をつけながら鍛えるって言う用事は一応あるけど、それでも比較的手が空いてると言っても良い状態じゃないのかな、今の私は。

良し。今のうちに色々と自分用のアイテムを作っておく事にしよう。

何が出てくるか解らない仮契約のアーティファクトを当てにするよりも、自分で作ってしまった方が比較的安定した効果が得られる分だけ得なはずだ。

作るのに魔法が関わってるだけに確実とは言いかねるのも確かなんだけどね。

そして今回、自分用のアイテムで真っ先に作り出した物はと言うと、ダイオラマ魔法球の原理を応用した超大容量収納ベルトポーチである。

合成皮革製のフタ付きポーチ本来の空間を利用した八畳間ほどの小型人造異界と電子精霊式の機能管理ＡＩを組み合わせたセットは、その気なら大き目の家電機器でも出し入れできる優れもので、なおかつ普通の魔法使いに見せても大丈夫な技術で作った代物だ。

……超鈴音が未来から時空転移してくるのを察知できるセンサーが、麻帆良は何かと時空震や結界などの観測を妨害する要因が多過ぎて開発を断念したと言う苦い思い出もあるのは敢えてキニシナイ。週に１度以上は麻帆大工学部詣でをやって地道に情報収集してるので何とかなると良いなぁ、うん。

現実逃避と希望的観測は棚の上に置いて話を戻す。

ベルトポーチの次に作ったのは、“別荘”内でのお手伝いとしてＣＤ－Ｒに魔法術式を焼き付けて生み出したミニサイズの人造精霊達だ。

外装はどれも身長３０ｃｍ前後で、プチネウス（黒犬獣人なメイドさん）、リリス（四枚翅の小妖精）、チビルリ（銀髪金瞳で遺伝子操作された少女のＳＤ版）、チビーナ（某怪力正義神官似の人型植物）、ナンドラ（萌え系人型植物）の5柱を用意してみた。

思った以上に役に立ってくれてるので、気が向いたら増やすかもしれない。

で、その次に用意しようと思ったのが“別荘”の防衛用戦力である。

私の従者と管理ＡＩを兼務するフィーリアだけでも相当の戦力だとは思うが、備えが充実してて困る事は余り無いだろうと判断したのだ。

これには当初【まじしゃんず・あかでみぃ】の世界で学園防衛用の戦力として運用されていた戦闘用重機動ゴーレムを候補として考えていた。

が、しかし、モノがフル装備で１個中隊も揃えれば高位の神魔とも互角に戦えるであろう強力な兵器なので、若干畑違いな私の技術では製造するにも維持するにも洒落にならない苦労と費用を費やす破目になってしまうと言う試算が出てしまった。

その為、幾分か性能のランクを落としてコストダウンしたもので妥協する事にした。正面戦力偏重で兵站ごと潰れた常冬な侵略国家の轍は踏みたくないしね。

と言う訳で製作したのが、同じく【まじしゃんず・あかでみぃ】の世界で学園の秩序維持や雑用などに使われている風紀ゴーレム……その劣化コピーを基に手を加えて造り出した体高３．８ｍほどの自動立像７体である。

ボディはただの土くれではなく合金と樹脂からできており、各種内蔵魔法や魔法動力の他にも非常用の電力駆動モードも備えた本格派だが、私の魔法駆動工学の腕のせいで連続稼働時間が純正品よりも２０％ぐらい短くなっているのが痛いところだ。

この機体の名称を『風紀ゴーレム改』にするのは流石に安直過ぎ

て嫌だったので、1号機の起動を6日ほど遅らせてまで悩んだ結果『アルカス』と名付ける事にした。
ちょうど7体いるので、7つの星から成る小熊座の伝説にあやかったのだ。
……もっとも、正直名前負けしてそうな気もしなくもないが。
ともあれ、他の細々としたアイテムに加え、アルカス用の予備部品と装備類を一通り用意したところで余裕ある日々は終了した。
それを告げ知らせる使者は、関西から転校して来た黒髪の美少女の姿をしていた。

第２０話（後書き）

今回は1話丸々準備話で潰してしまいました。好きなんですけど、自重しなきゃですね。

風紀ゴーレムの正確な大きさが分からなかったので、絵でだいたいの大きさを掴んで其れと似たサイズのロボット兵器と同様な体高に設定しております。別作品のですが。

そのロボット兵器（乾燥重量が６．４ｔ）より風紀ゴーレム（重量４００ｋｇ超）の方が圧倒的に軽いのですが、恐らくは素材の違いと魔法の力による影響だと思われます。

一部の方にはサイズがＡＴで、比重がエステバリスと言うとイメージし易いかも。

第２１話

年は１９９８年3月の中頃、学校行事的には春休みに入って間もない辺り。

「初めましてやわー。ウチは今日から同室になる近衛木乃香やえ。よろしゅうなー」

ウチの会社でのお勤めから麻帆良学園初等部女子寮にある自室に帰還した私を待っていたのは、間違いなく初対面なのだが何処か見覚えのある、はんなりした黒髪美少女の丁重なご挨拶だった。

「これはご丁寧にどうもです。私は八束千歳言うです。こちらこそよろしくです」

何となく眼福的な気分で脊髄反射的に会釈して挨拶返しをしながら、木乃香が同室になるならアスナはどうなるんだろうと思案する。

「あ、おかえり～」

だが、その疑問は私を出迎えるアスナの声であっさりと解消された。

つまり学園長は、この超重要人物な御二方の護衛とお世話係を務め上げるお仕事を問答無用の事後承諾で押し付けてくれちゃった訳だ。

これはアスナと同室になった時点で困難極まりない状態になり、ネギの住んでた村の人達の石化を治した時点でビルの上から針の穴に水滴を通すぐらいまで難易度が上がった私の平穏無事ライフ獲得計画が修正不可能なまでに木っ端微塵になり、割りと根本的な段階からの見直しを余儀なくされたのを意味していた。

おのれ学園長、この恩はアンタの孫娘に色々と支払って貰うからな。

ネギまの登場人物中で私の心の嫁ランキングをしたら首位争いしてた娘さんを、知らぬとは言え同室にしてくれたんだから。

実物は漫画の絵よりも更に可愛らしくて魅力的に見えるし…イテ

ッ！

「ダメやよー。何か知れへんけどー」

心の声に木のトンカチですかさずツッコミを入れてくるとは、さすが。

「木乃香さんって可愛いなと思ったり、親密になりたいなって思っただけです。……いけないです？」

やたらと勘が鋭そうな子だから、いっそ正直に本音を真正面からぶつけてみる。

一応私も女の端くれには引っ掛かってるし、容姿も何とか美少女に分類される程度には整ってるので、度が過ぎなければ多分大丈夫とは思うんだよね。

ま、それで警戒されたら、された時だ。

「そんな事あらへんよー。びっくりはしたけどなー」

顔色はあんま読めないか、まあ気長にお近付きになるしかないかな。

「夕食はどうするです？　もう食べたんじゃなきゃ私が今から作るです。アスナもそれで良いです？」

「あ、千歳ちゃんの分も作ってあるえ」

「そうですか、それじゃゴチになるです」

アスナにも簡単な料理を始めとする家事は教えてあるけど、果たして西の姫様の手並みは如何に。場合によっては現在私が一手に引き受けてる料理を分担して貰えるかも。

さて、献立は……麦と玄米を混ぜて炊いた御飯、サクラマスの塩焼き、ホウレンソウのおひたし、豆腐と葱の味噌汁……見た目のイメージ通り純和風で美味しそうな料理だ。

？　なんか『美味しそう』って考えた辺りで木乃香の手元に一瞬だけトンカチが見えた気もするけどキニシナイ。

「いただきますです」

「いっただきまーす」

「いただきますやわ」

三者三様に食前の祈りを捧げ、箸を皿へと伸ばす。
「ん、美味しいです」
「確かに美味しいわね」
「それは何よりやえー」
小学４年生への進級を控えてる年齢では、かなり上手いと思う。
流石に店が開けるレベルの味とまでは言わないけど、主婦としてなら既に充分な腕前じゃなかろうか。
「それじゃ明日は私の手料理を振舞いますので、余り期待しないで待ってて下さいです」
「とか言っちゃってるけど、私より断然料理が上手いのよね」
ぬ、あんまり期待値上げないように企んだ意図を粉砕してくれるとは。
「そういや、木乃香さんの好物とアレルギーの有無は教えておいて下さいです。既に聞いてるかもですが、私は食品アレルギーは無いです」
「そら良かったなー。ウチも無いんよ」
ちょっと行儀は悪いけど歓談しながらの食事は楽しく過ぎ、夜も何事もなく終わった。
……間取りを考えると、もう一人ぐらいなら住めそうな気がするな、この部屋。

翌朝のトレーニングは6時前起床と言う時間設定も手伝ってか、木乃香の飛び入り参加は起こらず、普段通りに1時間ほど汗を流す事になった。
それから帰宅して料理を始めようとしたところで、物音に急かされたのか木乃香が寝台から身を起こしたらしいのが見える。
「まだ寝てて良いです。御飯できたら呼ぶです」
「んーわかったえー」

ちなみにアスナは此の部屋付属のシャワーへ直行、寝汗と運動の汗をササッと流しにかかっているのが音で分かる。

今朝の献立は、甘口な出汁入り白味噌をつけて食べる刀削麺にポン酢醤油系のタレで煮た白菜と大根とニンジンと言う割りとシンプルなものにした。其の感想はと言うと……

「なんやろこれ、箸が止まらんえー」

「でしょ。運動してなかったらどうなるか怖くて想像もしたくないわ」

「ウチも運動始めた方がええかもなー」

どうやら木乃香の口にも合ってくれたらしい。

朝粥とか、カルボナーラとか、トーストとベーコンエッグとかも考えたけど、そろそろ麺を削らないと腕が鈍りそうだったので、戦々恐々としながら付き合って貰ったのだ。

結果的に好評だったので、どうやら目付きの悪い某料理人が夢枕に立って寝苦しくするなんて嫌なイベントは回避できたようである。

「ごちそうさまっ！」

「ごちそうさまやわー」

「お粗末様です」

食後はまったりなんて贅沢は自分に許さず、食器と調理道具を手早く洗って元通り仕舞い終えたら、シャワーで一汗流すのが私の日々の日課となっている。

魔法で汗は多少処理してるんだけど、それだけで済ますんじゃ怪しまれるか汗臭いと思われてしまうので、ちゃんと洗い流す機会を設けるようにしているのだ。

とは言え、学校のある日は髪を乾かす時間の確保が至難だったりするんだけどね。

始業ベルが鳴るのが8時なので、カラスの行水の後に急いで身支度したら走って乾かすと言った男らしい所業にならざるを得ないのだ。

しかし、本日は春休みであるから差し迫った用事が無ければのん

びりできる。
　春休みなのにも関わらず容赦なく出された宿題は何時も通り初日に殲滅済みだし、副業の社長業務の方も春の東〇ゲームショウに出展した“夢釣人”の試作β版は、ウチの開発班謹製のヤツと本社生え抜きの開発班の入魂作との両方に対する評価アンケートの集計が未だ終わってないそうなので緊急の案件は無いし、魔法生徒としての業務も犬の予防接種は先日参加して片付けたばかり。
　何も急ぐ事は……っと、そうだ。木乃香がまとう雰囲気のせいでなし崩しにのんびりしてしまって忘れてしまいそうになってた。
　その木乃香の事だ。
　今現在の彼女は、原作知識以外の手段で私が知り得た知識から類推しても非常に危うい立場に立っているのは間違いない。
　東洋最大の魔力と溢れんばかりの術師としての才能は、控えめに見積もってすら彼女が属した一派の勢力を容易に押し上げてしまう可能性を秘めている。
　しかも、それが西の長の娘で未婚だとなれば、微妙な均衡で保たれている西の旧家間の派閥力学を致命的に崩壊させる騒乱の種である事と想像するには余りに容易い。
　だからこそ彼女の父である近衛詠春は、自らの立場が悪くなってしまうのを百も承知で愛娘を其の祖父の庇護の下へと送り出したのだろう。
　自らが宗家を務めている神鳴流を我が子に伝えるのでさえも、西の管轄下でやってしまえば木乃香に更なる価値を付与して騒乱を煽ると言う結果に繋がってしまうのだから。
　しかしながら今回の件は、親心からなした行為であれ、残念ながら木乃香に己を守る力を修得する為の貴重な時間を浪費させ、表面上の平和と言う猶予期間を楽しませておくに過ぎない愚行と断ぜざるを得ない。
　故に私は其れに加担したくないと思っているのだ。
　また、最近はアスナの記憶を封じたままでの修行に行き詰まりを

感じてもいる。
私にもっと体術や白兵戦の才能があれば別だっただろうし、彼女に己を鍛えるべく励む強い理由が何かあれば手の打ちようが未だあったのだが、無いものねだりをしても無いものは無いのに変わりは無い。
なので、そろそろ向こう様の意志を確かめておくべきであろう。
麻帆良女子中学にある学園長室の後頭部が異様に長い主の腹積もりを。
最悪、一戦を交える覚悟で。

電話で面会の予約をしようとしたら、今日の午前中ならば構わないとの返事を貰ったので、早速学園長室へ会いに行った。
「何の用じゃな、ちとせちゃん」
決裁の最中だったのか分厚い書類の山が執務机の上に４つ積まれているが、多分あれは処理前のと承認分と棄却分と要訂正で突っ返す分だろう。
っと、そんな事より此方の用事だ。
「単刀直入に聞くです。アスナの記憶の封印を解き、木乃香に家の事情を教えたとしたらどういう処分になるです？　正直言えば彼女らをこのまま放置するのは、彼女らにとってマイナス面が強過ぎて私が嫌です」
この古狸を相手に化かし合いをしても一方的に惨敗するのは想像に難くないし、私の気分もよろしくないので、真っ向からの正面口撃に踏み切った。
アスナも木乃香も広義で言えば魔法関係者なので、魔法の存在をバラしてもオコジョ刑に問われるかどうかがグレーゾーンと言う背景もあるし、いざとなれば彼女らと仮契約を結んでしまえば魔法使いの掟に関しては無問題に持ち込める。
「アスナちゃんについてはタカミチ君からくれぐれも頼まれておる

し、木乃香についても婿殿から魔法の事は知らせないで欲しいと聞いておる」

それでも保護者の意向の問題は、険しく立ち塞がるのであるが。

「そう……ですか」

仕方無い。エヴァの力を借りて少しばかり強引にやるしかないのかなぁ。

原作に近い筋書きに無理に合わせようとネギが来るのを待ったせいで、私の存在が故に彼女らが奇禍に遭うのは避けたい事象なのだから。

「……じゃがな、タカミチ君や婿殿はちとせちゃんに随分と大きな借りも引け目も作っておる。とだけは言うておこうかの」

とか何とか内心悲壮感を溜め込んでいたら、何やら意味深なほのめかしが。

「ありがとうございますです！」

原作ではネギを、今生では私を2人の姫君と同室にした事から類推するに、学園長自身は立場上彼女らの現状に直接手を出せないのを苦々しく思っていたのかもしれない。

流石に私を暴発させて処断するつもりは無いだろうし、今回の会談は私の体内に融合してるアリアが念のため録音してるから、もしもの時は学園長も連座させるしね。

「ああ、ちとせちゃん。魔法の秘匿にはくれぐれも気を付けるんじゃぞ」

「はいです！」

聞き様によっては別の意味にも取れる発言に感心しながらも、私は軽くなった足取りで学園長室を後にした。

どうやって2人に魔法の事を打ち明けようか、その方法を考えながら。

第２１話（後書き）

常識的に考えて学園長にアスナと木乃香に魔法バラす気が無ければ、あのネギを同室にしないですよね。今回はそんな考察から生まれた話だったりします。

第２２話

アスナと木乃香に魔法の存在を教えるのに、どうやってバラすのが良いのかな？

早めに話した方が良いのは確かだけど、アスナはともかく木乃香は知り合ったばかりなので、打ち明け話をしても不審に思われかねない気がするんだよね。

教える内容が、彼女が関西呪術協会の長の娘であり、魔術師として得難い資質を持ってると言う様々な意味で狙われている存在だって事なんだから。

下手したら彼女を狙う有象無象と同一視されかねない。

当たらずとも遠からずな面も無いとは言い切れないので、強くは否定できないしね。

なので、心ならずも計略を練り、罠を幾つか張り巡らしておく事にした。

罠と言っても怪我をしたり呪いがかかったりと言うものではなく、自ら魔法の世界に足を踏み入れてしまいそうなキッカケに成り得る私物を幾つか彼女らの目に付く場所に置いておくと言う方法なので、勘で回避すると言う訳にもいくまい。……と言うか寧ろ積極的にかかってくれそうな気もする。

今回の機会を利用して貰う事こそが、彼女ら自身の自由意志と安全の双方を守るのに最も適した道にできるのだと確信しているからだ。

作戦に必要となるであろう小道具を揃えるのに、体感時間で一ヶ月ほどが過ぎた。

とは言え準備は“別荘”内に設けた工房魔法球でやったので、現実時間で過ぎたのは５時間前後でしかないのだが。やはりダイオラマ魔法球はチートである。

さてさて、上手くいってくれれば良いんだけど……。

〔ｓｉｄｅ：近衛木乃香〕

おじいちゃんの学校での寄宿生活がどうなるか心配やったけど、どうやら大丈夫かもしれへんなー。

同室の子達……アスナんは、宿題のプリントを前にうんうん唸ってるから勉強は苦手みたいやけど、ウチが嫌がりそうな事はやらへんように気をつけてくれとるみたいや。

もう一人の千歳ちゃんの方は、ウチの事をちょっとえっちぃ目で見る時もあるのが少し気になるけど、それ以外はええ子みたいやなー。用事で出かける日でも出張やなかったら家事当番はきっちりやってくれはるそうやし、私物の棚にホンマもんみたいな勾玉と神棚を飾っとるぐらいやから話も合うかもしれへん。

そういや、暇やったら机と本棚の本読んでもええ言うとったな。題名からしてウチが読んだ事の無いオカルト本みたいなんが混じっとるから、選り取りみどりやなー。

んー、今日は机の上に置いてあった『オカルト入門～あなたの知らない世界～』って文庫本にしよか。

薄い本やから、千歳ちゃんが帰って来る前に読み終えられるはずやからなー。

『本書の内容は危険に満ちています。御覚悟の無い方はそのまま本を閉じて下さい』

のっけから、こうくるんか。

なかなかツボが分かった作者やなー。

続きは、次のページかー。

『あなたの知らない世界の扉を開く呪文を唱えて下さい。“光あれ”と』

「光あれ？　ちょお場違い…」

いきなり目の前が眩しい光で包まれてもうた。

「な！？」
なんやの、いったい。
「ようこそー、いらっしゃいましたー。わたくし、当別荘の管理神格のフィーリアと言いますー」
目が見えるようになる前に凄く落ち着いた女性の声が聞こえてきはった。
どうなっとんやろー。
ドッキリやるゆーてもウチみたいなんにやってもしょーがあらへんと思うんやけどー。
まあ、ええ。先ずは挨拶し返さんとなー。
「ウチは木乃香や。よろしゅうなー」
「よろしくお願いしますー。マスターから近衛木乃香様を御案内するよう言付かっておりますけどー、御本人様で間違いございませんかー」
ようやく見えてきたフィーリアさんって人は、前が開いた随分と大胆なドレスを自然に着こなしてはる。曰くありげな模様を身体に描いてるのもポイント高いと思うんよ。
「せや。ところで其のマスターって人の名前聞いてええ？」
「八束ー千歳様ー。わたくしをお作りになられた偉大なる御方ですー」
やっぱりそうなんかー。社長やっとる言うとったけど、道楽に使う金が多過ぎるでー。
「ではー、1名様御案なーい」
「うわー」
今度はいきなり真っ暗闇かー。凝った演出やねー。
ん？　今度は直ぐに見えるようなったなー。
みょーなロボットみたいなのが立ってるけど、あれウチより大きいかもしれへん。
お金かかっとんなー。
「ようこそです。藤原家直系の術者の系譜を継ぐ者にして、関東魔

法協会の理事の孫であり、関西呪術協会の長の娘である近衛木乃香さん。ここに来たからには覚悟を決めたものとして真実を伝えさせていただくです」

千歳ちゃんが、ウチの実家で使うとるのとは少し違うデザインの巫女装束で現れた。

何言うてるかはよー分からへんけど。

「魔法の実在と木乃香さんの立場をです」

こん時、背筋が震えてもーた。

ああ、ウチはもう今のままのウチではいられなくなってまうんやなーと。

それだけは何故か解ってしまったんや。

案内された場所は、どうやらこぢんまりとした東屋みたいやわ。

壁が無くて景色がよー見えるけど、林の中なんであんま見通しは良くない。

「いちおう言っておきますと、ここにいるのは《別魅》って言う分身で、本体の方は仕事に行ってますです」

「そういう事にしとくえー」

「とりあえずどうぞです。フィーリア」

「了解ですー」

席を勧められるけど、これって変形の掘り炬燵やなー。

フィーリアって娘が退席するのを入れ替わりで、ちっちゃな犬耳メイドさん人形が大きなお盆に食器とティーポットを載せて、んしょんしょと運んで来はった。

かわええなー。

「ありがとです、プチネウス」

千歳ちゃんがお盆を受け取って、流れるような手つきでお茶を淹れていく。

むむっ、できる。

見るからに美味しそうな香りやわー。

「さて、そろそろ話すです。あんまり聞きたくない話も混じってるとは思うですが、要点だけなので把握していて下さいです」
「了解やわー」

ウチは知らへんかった。
本物の魔法が普通の人に隠されている理由も。
せっちゃんがウチの護衛をする為に父様のお弟子さんになっている事も。
その父様は、京都神鳴流って言う悪霊や妖怪を調伏する為の剣客集団を束ねとって、其の力を背景に陰陽師や呪術師がぎょうさんいてはる西を束ねているんやって事も。
おじいちゃんが東の魔法団体の重鎮で、ウチが此処に預けられたのは父様が部下を抑え切れてないせいって事も。
そして、千歳ちゃんの両親が死んだのも、父様の部下やった人が暴走したのを止められなかったせいなんやって事も。
ウチは知らへんかった。
ウチは知らへんかった！
「ご…ごめっ……かんにん、かんにんやぁ」
目から熱い物が止まらへん。
父様のせいで、千歳ちゃんの親は殺されたようなもんや。
父様にもっともっと力があれば、こんな事にならずに済んだはずや。
「気にしても仕方無いです。過去は覆りませんです。それに私は嬉しいです。こうして木乃香さんに話を聞いて貰えたですから」
え？
「魔法の秘密を話せた同年代の子って、木乃香さんが初めてなのです」
何時の間にか隣に座って寄り添って来た千歳ちゃんに抱きついて、ウチはわんわん泣いてもうた……らしいんやわ。

記憶がないからよー分からへんけどなー。

「これから木乃香さんには幾つか選択肢があるです。
一、魔法の事も実家の事情も一切合財忘れて、裏の事情に巻き込まれてしまうまで一般人として生きてゆく」
ウチが落ち着くのを待っていたらしい千歳ちゃんは、再び口を開き始めた。
「巻き込まれるのは確定なんかー」
いきなりツッコミ入れてもーたけど、多分ウチは悪くない。
「巻き込まれる前に死んでなければ確定です。脅威の存在も知らないのに回避し切れる訳も無いのです」
「なるほどなー。納得やわ」
「二、魔法の存在や実家の事情を知った上で、敢えて一般人として生活する」
「それもありなん？」
「非常に難しいとは思うですが、ありです。いざという時に自衛手段が無いのでオススメできないですが、それでもやりたいなら止めないです」
「千歳ちゃんが守ってくれるとか無いん？」
「残念ですが私より強い相手なんて一杯いるのです。私の本領は戦闘じゃないので、多分守り切れないのです」
凄く真剣な眼で真っ直ぐ見詰められたので、思わずドキっとした。
何やろ？
「次行くです。三、実家に戻って関西呪術協会所属の旧家の誰かと婚約でもして父親の政治基盤を固める役に立って上げる。まあ、父親にも親友にも大反対されるでしょうが」
「なんで反対されるって分かるん？」
「木乃香さんが麻帆良に転入しに来てるってだけで理解するに充分です。ついでに言えば今の関西には、木乃香さんを任せても大勢を

納得させられる人望と力量を兼ね備えた適齢で未婚の男性がいないと言うのも解るです。そういう人がいるなら、木乃香さんを婚約させておけば混乱を回避して地固めができてるはずです」

「なるほど、ホンマ色々考えてるんやなー」

「性分なんですー。あ、口調うつった。では次行くです」

「お願いやわー」

「四、麻帆良に関東魔法協会の支部があるのを利用して西洋魔術師になる。西洋魔術師は裏の世界で一番人数が多いから、世界のどこに行ってもそれなりに支援が受けられるのが利点です。魔法世界って言う異世界でも西洋魔法が主流です」

「利点ばっか並べてるけど、欠点もあるんやろ？」

「勿論です。先ず第一は木乃香さんの実家の関係者との仲が悪化してしまう事、第二は西洋魔術の発展性の低さ、第三は古典ラテン語や古代ギリシア語を学ばねば強力な魔法が使えない事です」

「ず、随分な酷評やなー」

「全ては無知蒙昧な某一神教の馬鹿神官どもの愚行と、当時から連綿と続く魔法使い達の愚昧な思い込みのせいです。魔女狩りと宗教裁判のせいで一時期『古い時代の知識の方が優れていた』状態になってたからって、そこで認識が凍ってしまっているのです」

「千歳ちゃんって西洋魔術師が嫌いなん？」

「嫌いって訳じゃないですよ。ただの客観的な評価です」

バッサリと切って捨てたのは、ある意味嫌ってるよりも酷いと思うわ。

「では次です。五、麻帆良にある書物などで日本古来の術……陰陽術や呪術や剣術や忍術なんかを修得してみる。学園長は確か陰陽術が使えたはずですし、神鳴流の剣士の方もいたはずですから、何とかできる可能性はあるです」

「欠点は師匠になってくれそうな人の少なさやろか？」

「それより、国内の旧家がうるさくなるのが痛いです。関東は西洋魔術師が主流とは言うものの、古くからの流れを汲む術師がいない

訳じゃないですから、木乃香さんみたいな将来有望な女性が日本古来の魔法を学ぶとなると鼻息が荒くなりそうです」

「ウチってそんなに騒動の種なんか？」

「木乃香さんのせいじゃないです。ただ、馬鹿は何処にでも転がってるのです」

こうして並べられてみると余りの評価に溜息が漏れてきはるが、ウチのせいじゃないと言ってもらえて少し肩が軽うなった。

ちょっとだけ感謝せんとあかんなー。

「次の選択肢が最後で、東西の魔法の良いとこ取りを狙う。私が色々混ぜた術法体系を用いてますですから、基礎を教えるのもアドバイスもできるです」

「そんな都合の良い事ってできるん？」

「学園長が陰陽術と西洋魔法を併用してるらしいですし、魔法は西洋魔法を主体にして武術は神鳴流を主体に学ぶみたいな手もあるです。やり方は幾らでもあるです。欠点は自分で自分用の魔法を組み上げる事になるから、普通より覚える手間がかかる事です」

「なるほどなー」

色々聞いたはええけど、そろそろ頭ぐるぐるなってきたわ。

直ぐに返事せななんのかな？

「どんな選択をするのかは、また後で聞くです。魔法の事を漏らさないでくれると約束してくれれば、好きな時に部屋に帰して上げられるです」

「約束しなかったらどうなるん？」

「どの選択肢にするかの返事を貰うまでは此処にいて貰うです」

「ウチが嘘ついて出てくって考えないんか？」

「木乃香さんはそういう事をする人には見えないです。だからきっと大丈夫です」

ちょっとくすぐったい気持ちになりながら魔法を口外しないと約束を交わし、ウチはウチらが住む女子寮の部屋へと戻して貰えた。

けど何やろう？　ここは何故か不思議な気配がいっぱい詰まっと

る気がするんは。
早く返事をしないと、えらい損をしてまう気がするんは。
ウチの気のせいなんやろうかな？

第２２話（後書き）

今回は木乃香への説明編です。オリジナルの設定が混ざっていますが、多分不自然ではないと思っております。

あと主人公は気付けてませんが、木乃香が学園長の薦める縁談を受けると言う選択肢もあります。婚約相手が裏にも影響力のある表側の実力者なら、魔法を教えなくても木乃香に迫る危険はそこそこ防げる……かもですが、どう考えても東西戦争の起爆剤ですよね。

第２３話

麻帆良女子初等部では、何時からの伝統か伝わっていないが春休みにも宿題が出る。

夏期休暇や冬期休暇よりも短い期間である事に配慮して相応に少なく、１年間の学習成果が充分に身についていれば然程難しくも無い難易度の物だ。

かてて加えて持ち帰りであるからには教科書や辞書などを参考文献にしても、電卓なぞを動員したとしても咎められる事は滅多に無い。

しかし、それでもなお宿題の束を前にして苦悶する人物と言う者は存在している。

神楽坂明日菜、記憶ごと本名を封じられた少女は、不幸ながら其の類に属していた。

「ったく、せっっかくの春休みだってのに宿題全部片付けなきゃ一学期中おやつ半減なんて、千歳ったら鬼よっ！　悪魔よ！　人でなしよっ！」

余白が僅かに埋められただけのプリントの上に、髪を両側頭部でまとめた可愛らしい少女が力無く突っ伏す。

全身で勉強したくないと訴えかけているかの様な風情である。

「まーまー、アスナんもそう吠えんと」

黒く長い髪と抜けるように白い肌の少女がまとう雰囲気に相応しい穏やかな声音でなだめようとするものの、新学期からの転入ゆえに宿題を出されてる訳でも無い娘からの言葉では今一効果が薄いらしく、小さく唸って伏せったままだ。

もう一人の同居人への恨み言をぶつぶつと呟き続けるぐらいなら、その分の時間を宿題を片付けるのに使う方が建設的なのだが、そんな真っ当な考えが煮詰まってしまった彼女の頭に残っているかどうか。

「あー、もー、ちょっと走ってくる！」
とうとうストレスが限界を超えたアスナは、バンッと炬燵の天板に手を突いて立ち上がると、そのままの服装で勢い良く部屋を出て行った。
彼女の宿題が無事に提出できるのか、それは現時点では甚だ心許ない確率であった。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕
星雅遊興生え抜きの開発班との次世代ゲーム機の競争試作は、春の東〇ゲームショウや社内で行ったアンケートの結果、私が率いる開発班に軍配が上がった。
現行機との互換機能を捨てたシンプルな構成と大容量の特殊ＣＤ－ＲＯＭでコストダウンを計りつつ、ヴィジュアルメモリと呼ばれるミニゲーム内蔵メモリを装着できる新型多機能コントローラーとインターネットに接続する為の通信モデムを標準搭載した向こうの試作機の予定価格は￥２９８００。キーボードとマウスは専用のが別売りになる。
こちらの試作機は、現行機との互換機能のせいで割高になるところを専用チップ化でコストを抑え、ＤＶＤ－ＲＯＭとデータ記録のみのシンプルなメモリカードと現行機に似たコントローラーで構成された本体の予定価格が￥２７９００。小型カラーモニタと震動装置を内蔵した多機能コントローラー、キーボード、マウス、通信モデム、ハードディスクドライブは別売りだ。
フルセット揃えるとこっちの方が高価だが、普通にゲームを遊ぶだけならこっちの方が安上がりだし、ＤＶＤの鑑賞もできる按配なのが功を奏したのかもしれない。
もっとも、向こうの試作機のオプションを全部装着したコントローラーが重くて楽に遊べる姿勢が限られるとか、長時間耐久試験で

ＣＤ－ＲＯＭのモーターがヘタれるなどの欠点を見せてしまった事の方が勝敗を左右したのかもしれないが。

ともあれ、これでウチの社員のクビを切らずに済みそうだ。

本来の歴史で致命傷の一つになったグラフィックチップの歩止まりの改善策は日本電機と提携する際に渡してあるし、ソフトメーカー各社向けに販売する高機能開発ツールの準備もできてるので心配ないとして、残る問題は……広告戦略かな。

星雅遊興の油河専務がテレビＣＭに出演するのはともかく、私にまで出演要請が来てるのは何の冗談だろう？

……断るに断れない我が社の財政事情が辛い。

ブルーレイＤＶＤが共通規格の内容を業界各社で交渉してる段階なので直近の利益にならないせいもあり、１０月に初出荷予定の“夢釣人”がコケたら甚大な損害を受けるのが確実だから、打診を受けざるを得ないんだよなぁ。

あ、あと現行機の“土星”の生産中止も決定した。

互換機能のある新型が登場するのが、止めを刺したせいだ。

ほぼ完全なエミュレーションを実現できた上に、現行機用のメモリから新型機のメモリにデータを転送するアダプタキットもウチの会社から別売りで用意するので需要も途絶えそうだしね。

……上手くウチの利益が上がってくれれば良いけど。

余談だが、向こうの開発班が作ったゲーム機の基幹部分はアーケードゲームの筐体用に流用されたそうだ。無駄が無くて何よりである。

〔ｓｉｄｅ：神楽坂明日菜〕

最近、木乃香も朝夕の鍛錬に参加し始めた。

私や千歳みたいに重りを装備してはいないけど、３日で私達の走るペースに追いついて来たのには少し驚かされた。

木刀を振るうのも初めのうちは身体が泳いでいたりしたけど、今はもう綺麗なフォームで素振りができている。
おまけに家事の半分ぐらい任されてるってのに、新学期の準備もバッチリみたい。
千歳といい、木乃香といい、少しは頭の良さも分けてもらいたいわよ。
春休みが1週間も残ってないってのに相変わらず宿題進んで無いし、千歳は仕事で忙しそうにしてるから勉強教えてって頼むのも気が引けるし。
おやつ半減……かぁ。
量を半分にするんじゃなくて、1日おきにしか作らないってんだからタチ悪いわ。
そんなの絶対嫌よ！
買い食いでごまかそうにも、おサイフが直ぐに息切れしちゃうに決まってるんだから。
何とかしないと、って言っても正攻法じゃ無理ね。
自慢じゃないけど半分でも終わる自信はないわ。
他に方法は……ある。
気はスゴク進まないけど、ある事はある。
千歳と木乃香が留守にしている間に、本で重しをしてほったらかしにしてる彼女の宿題をこっそり丸写しさせてもらう手だ。
面と向かって見せてって言っても断られそうだから、それしかない……のかなぁ？
なにか他に良い手がないかな？
って、何この本？
『5分間で頭が良くなる方法』
って、5分ぽっちで頭が良くなるんなら誰も苦労しないわよ！
でも……
でも、もし、本当だったら……
本当だったら、カンニングしないでも宿題が片付けられるように

なるわ！
　では早速……
『左手に外気、右手に内気、ボーッとしながらそれを混ぜる』
んーと、こうかな？
ボッ！！
なにこれ！？
いつもよりスゴイ気が出てるんだけど！
っと、続き続き。
『ほどけろ、記憶の封印。つなげ、糸を知識に、知識を糸に』
口にする前に、何故か知らないけど少しだけためらってしまう。
でも、えーい言っちゃえ！
『あらわれよ、黒歴史』
黒歴史って何よ！？　黒歴史って！？
って、え？
なんで知らないはずの場所で、知らないはずのおじさんが倒れてるのが目に浮かぶの？
なんで、そのおじさんが私の名前を呼んでるの？
なん…で……

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕
アスナがとうとう私の撒いておいた罠の一つにかかった。
まあ、罠と言っても魔力と気の合一たる咸卦法で増幅したアスナの魔法無効化能力を自分自身の記憶を封じた魔法に向けさせるってだけの内容を、彼女にしか見えないように魔法で隠して本に載せといただけなんだけど。
　私が正攻法で副作用が出ないように治療するなら何ヶ月かかけて封印を削らないとならないぐらい強固な封印だったってのに、これだから公式チートどもは……

ともあれ、これでアスナの昔の記憶は無事に復活したはず。
麻帆良に来た後の記憶も多分大丈夫なはずだけど、一度診察してみないと確信は無い。
なので、強制転移で“別荘”内にご招待だ。
同時に念話で本体に連絡して、分身を残して帰って来て貰うよう促す。
アスナが暴れたら、所詮は《別魅》な私では一溜まりも無いのだ。
……本体でもアスナが咸卦法全開で暴れ出してしまったら殺されかねないのだが、それでも何もできずに瞬殺されるよりはマシだろう。
願わくは少しでも理性的な話し合いができますように。
念の為に私の記憶のバックアップを“別荘”を統括管理する私の従者のフィーリアに預け、私自身は本体の来援までアスナの世話をする事にしたのだった。

そして、目が覚めたばかりのアスナが寝床から伸ばした手に襟首引っ掴まれてガタガタ揺らされた瞬間に儚くも霧散した。……のが、記録された分身の記憶の最期である。
自社の社長室で分身を作って後を任せシフト・ポータルで麻帆良の外縁部まで転移、認識阻害と光子歪曲場で透明化しつつ浮遊魔法で内外を隔てる水路を超え、途中を阻む結界はメスで一部くり貫いて一瞬だけ抜け穴を穿って其処を通過、結界通過の影響が皆無なのを簡潔に確認してからシフト・ポータルを開いて“別荘”内に転移。
ここまでで所用時間は３０秒に届いていないのだから自分でも呆れる他は無い早業だ。
留守を任せた分身の急報から数えても1分を超えてすらおらず、“別荘”内の時間が外の２４倍で流れるとしても充分に間に合うはずと計算していた。
だが、それでも遅かったようだ。
「それでー、どうしましょうかーマスター」

緊急事態とはとても思えぬ、のんびりとした口調で管理ＡＩ兼務の従者フィーリアが私を出迎えてくれるが、挨拶が省略されているところを見ると彼女なりに焦っているのかもしれない。

何せ今の彼女は手当たり次第に周囲の物に当り散らし、ゲストハウスとして建てておいた洋風の屋敷内を破壊して回ってるのだから。

……本物の古物や美術品を置いてないのがせめてもの慰めやね。

ともあれ、さっさと行かないと。

“別荘”そのものの環境調整機能まで壊されてしまったら、中の人がアスナ含めて死んじゃうからね。

「アスナは私を殺す気です？」

混乱してるせいなのか何を目的としてるのか良く分からない破壊活動を身一つで行ってるアスナを見つけた私は、先制のジャブとばかりに淡々と質問した。

「どうしてそうなるのよ！？」

それによりアスナの方も漸くこちらを認識し、言いがかりだと反問してくる。

が、実のところ語るに落ちてるのだ。

「首を掴んで強く揺さぶるのは重い障害を出させるやり口です。さっきは幸い分身だったから辛うじて殺されずに済みましたが、生身にあれをやられたらただじゃ済まないです」

私の《別魅》と言う分身の術は普通の打撃でも消し去る事ができるのだが、それには少なくとも私が大怪我を負うほどのダメージが要るからである。

そしてフィーリアから受け取った記録を分析するに、アンチマジックで私の防御結界と身体強化が剥ぎ取られた上、身体強化を発動させたアスナが私の首をガクガク揺らして怪我をさせたのが分身が消えた原因で間違いがない。

……下手をしたら私の本体でも致命傷だったかも。アスナの能力

って、半ば以上魔法生物な私にとってはとてつもなく危険だからね。
「う……。って、それより、何処よ、ここ！？」
ガレキのホコリにまみれたアスナを口ごもらせる事には成功したものの、先ずは自分の方の疑問が優先だとの態度はカチンとくるが、質問には答えてやろうか。
「ここは私の別荘です。万一の為にこっちに運んで看病してたですが、この有様だと正解だったみたいです」
何せアスナを寝かせていた部屋は、私達が住んでる寮の部屋のコピーだからね。
こちらに連れて来なかったら死人が出ててもおかしくない……いや、世界樹の加護があるみたいだから大怪我はせずに済んだかもしれないけど。
「ううっ……」
更に旗色が悪くなったアスナの顔色が青くなるが、謝るまでは容赦しない。
「そうだ！　あの本って何よっ！？　アレのせいでこんな事になったんじゃない！」
あ、私への攻撃点を思いついたのか開き直って責めて来る。
「アレはアスナにかけられた記憶の封印を自力で解く手引書です。封印されてる限り、覚えた事の全てが物凄く思い出し難くなるです。学校の成績が悪いのも実はそのせいです」
「え？」
初耳だと言わんばかりに一瞬呆けたアスナの顔は、ハッと引き締まった。
「アスナと一緒に生活していると、何か大事なものを無理矢理奪われてると気が付いたです。ようやく治療の目処が立ったので、おせっかいをしてみたです」
「なんで、なんでそんなことしたのよ」
「友達だからです。友達だから訳の分からないまま危険に首を突っ込んでいくように考え方の根っこが歪められてるアスナが放ってお

けなかったです」
放置してたら厄介事の種になるのは確実だし、3年以上の付き合いで情も移ってるから何とかしてあげたかったのだ。
「とも…だち？」
再び虚を突かれたのか、アスナの目の焦点がぼやける。
何事かと思ったけど、もしかしたら彼女の記憶の奥底に沈められてた友達と言っても良い人々…恐らくは“紅き翼”…の事を思い起こしているのかも。
咸卦法が使えたと言う事は、幼い時分から心を空っぽにするのが得意になるぐらい孤独を味わわされていたって事でもあるから、友達少なさそうだしね。
「はいです。私じゃ嫌ですか？」
「そんな事無いっ！　そんな事無いけどっ！」
だから私が友達だと明言したのを嬉しく感じてくれたのかも。
そうなら私も嬉しい。……凄く嬉しいとまでは言えないかもだけどね。
「……千歳は死なないよね？」
しばらくの沈黙の末にポツリと呟かれた問いは、ガトウ氏の死と次々去ってゆく仲間の事でどれほどに彼女が傷ついたかを物語ってるような気はする。
「できるだけは努力するですが、私はメガロメセンブリア元老院や完全なる世界どもに目をつけられてるはずです。絶対死なないと約束するのは難しいです」
だが、安易にうんと答えられないのは私の弱さの故だ。
死なないと言ってあげるべきかもしれないが、私如きの戦闘能力で豪語するのは虚偽も良いところなので、口に出した途端に嘘とバレてしまうだろう。
それなら現実を突きつけた方がよほど親切だ。
「守るわ」
苦笑しながら我が身の危険を伝えたら、アスナが決然として宣言

した。
「へ？」
状況の急変を把握できない私に向かって。
「千歳は、私が守る！」
私の事を守って下さると、自身が『黄昏の姫御子』だと思い出したであろう亡国の姫君は、これ以上無いんじゃないかとばかりに真剣な表情で言い切ってくれたのだった。

第２３話（後書き）

台詞書いてたら、何時の間にかこんな流れに。アスナって漢前が似合うのかも（笑）。

第２４話

「ほな、明日から先生って呼ばせてやー」
アスナが私を守ると宣言してくれた翌日、木乃香もあっけらかんとのたもうてくれた。
「了解です」
つまり私の指導で東西の魔法の良いとこ取りをする事に決めたのだ。
主観時間で2週間を超えた“別荘”でのオカルト談義を交えての事前説明を経て木乃香用に選んだのは、神鳴流を基にした薙刀術と西洋魔法を下敷きにした詠唱魔術である。
父親譲りの武術の才能と東洋最大の魔力総量に恵まれているらしい彼女が短期間で身を守る術を身につけるには、それが一番良さそうだとの結論に達したのだ。
まあ、上達具合が順調なら呪術や符術も覚えて貰うかもだけど。
呪術の基礎だけでも身につけられたら祟られた時の防御が多少楽になるし、符術を覚えておけば大呪文を使う時の補助なんかで役に立つだろうしね。
アスナの方は、神鳴流を彼女に合わせて色々と改変した我流剣術を主軸に据え、補助手段として魔法道具の扱い方を覚えて貰う事に割りとすんなり決まった。
彼女は体質的に西洋魔法や陰陽術への適性が低いみたいなので、戦闘に関してならば咸卦法を含む魔力や気の直接運用法を活用した方が遥かに効率的だと思われるからだ。
もしもの時の為に認識阻害や人払いなどの魔法の秘匿を守る為の術を発動できる護符を入れたお守り袋を2人に渡し、私は今後の予定を大幅に組み直した。
訓練に“別荘”を利用したとしても、2人の見た目の年齢が表向きの年齢と乖離し過ぎないようにする事ができる道具の完成を急ぐ

為に。

一面の荒野を足下から土ぼこりを上げて駆ける、合金と樹脂で出来た甲冑戦士。

その右手には竹刀が、左手にはビニール傘に似た物が構えられている。

対峙するのは、オレンジ色の長い髪をツインテールにまとめた軽装の少女戦士だ。

鈍色の片刃直剣を携え、碧い瞳で隙をうかがう様は、少女の全身からほとばしる気炎のゆらめきもあって、既にして熟練の剣士が如き風格をかもし出している。

だが、尋常の立会いにしては身長差がどうもおかしい。

甲冑戦士の上背が、どう見ても少女より2倍以上高いのだ。

しかし、それは或る事に気がつけば容易く説明できる。

すなわち、甲冑戦士の中に人がいないと言う事を。

そう。

いかにも頑丈そうな装甲に全身を固めていたのは、身の丈に見合った以上の力を内包した自動立像……ゴーレムなのだ。

駆け抜けざまに勢いを乗せて振り下ろされる竹刀は、もはや殺人兵器の域。

少女が構えているのが鋼鉄製の真剣と言えど、正面から受け止めるのは分が悪過ぎる。

ならばマトモに受け止めなければ良いとばかりに剣を横薙ぎに当てて身体の右側へと逸らし、返す刀で左前方へと踏み込みながら足下を払う。

しかしながら、幾層も重なって展開されていた防御魔法は切り裂いたものの、特殊合金製の強固なすね当てが斬撃をあっさり弾き返した。

刺突もできる刃の付いた殴打武器である西洋式直剣なので、中身が普通の人間であればそれなりのダメージを受けたであろうが、合金の骨組みに特殊樹脂の肉と特殊繊維の外皮をまとったゴーレム相手では毛ほどの損害にしかならない。

「ま〝っ」

ビニール傘……いや、柄の先に展開された半透明の円錐形防御力場を振り回して殴打しようとするが、少女は辛くも鋼の剣を盾にしつつ飛び退るのに成功した。

「うそっ!?　消せない!?」

何やら企んでいたようであるが、それが魔法消去であれば残念無念である。

魔法と見紛うほどに現代科学離れした技術ではあるが、魔力にも気にも頼らない力に対しては、少女の持つ固有技能《魔法無効化》は効かないのだ。

「ま〝っ!」

驚きで足が止まってしまった瞬間を狙い、少女に竹刀がブンと投げつけられてくる。

「ちょっ!」

剣を振るって衝撃波を放ち、竹刀の軌道を変えて事無きを得る少女。

「え?」

しかし、ゴーレムは其の隙に両肩に装備されている大盾の裏に設けられたハードポイントの左腕側に搭載した自動小銃っぽい形状をした物を外し、右手に構えていた。

「ま〝っ!」

そして当然の如く発砲。

慌てて避けた少女がいた場所に黄色いペイントの花が咲き乱れる。

しかし、風切り音はともかく、炸裂音や硝煙の匂いは全くしてこない。

代わりに唸りを上げているのはモーター音、つまり巨大な電動ガ

ンなのだ。
ちなみに撃ち出してるのも市販玩具用のペイントＢＢ弾であるが、銃身に刻まれた呪紋が小口径拳銃弾以上の速度に加速しているため、非常に油断ならない代物である。
「た、性質わるっ！」
それでも究極技法とまで謳われた咸卦法で己が身を強化し、瞬動と呼ばれる歩法で高速移動をし続ける少女を捉えるまでには至らない。
しかしながら、弾幕の雨を振り切れるほどの速度は未だ出せていない。
相手が単体ならばともかく、訓練場の統括ＡＩをも務めるフィーリアから情報と魔法で強力な支援を受けて凄みの桁を数段かさ上げしたゴーレムを楽々と倒せる技量には至っていないのだ。
だが、ゴーレムの方でも少女を仕留める決め手を欠いていた。
もはや少女の気力か体力と、ゴーレムの弾薬のどちらが先に尽きるかの消耗戦だ。
結局、今回は１０分を超える銃撃回避の疲れで足を滑らせると言う僅かなミスをやらかした少女がペイント弾の洗礼を浴びて勝負あった……と思われた。だが、少女がまとう咸卦の気による防御は１連射されたぐらいでは欠片も貫けず、反射的に放たれた気の飛刃により銃が右手首ごと切り飛ばされた事で摸擬戦の幕が下りた。

「既にして熟練兵の中隊でも返り討ちにできそうな勢いですね、アスナは」
【まじしゃんず・あかでみぃ】の風紀ゴーレムの劣化コピーを基に改造して作り出した自作の自動立像“アルカス”。その６番機である“スティグマ”を支援魔法で大幅に強化してすら屠り去られたのを目の当たりにし、私は溜息が止められなくなった。

計算通りなら7体全部投入すれば高畑先生相手でも割りと良い勝負ができるはずの性能を発揮できるはずなのに、今のアスナ1人にすら負けてしまったからだ。

ちなみに、この強化モードは種々の都合から“別荘”内での訓練でしか使用できる条件が揃えられないので、実際のアルカスの強さは7体がかりでもアスナにけちょんけちょんにされてしまう程度なのは残念な現実である。

まあ、アルカスが弱いと言うよりアスナが強いのだろうけど。

とは言え、このままだと私じゃ訓練相手が務まらなくなるのは目に見えている。

……やっぱりエヴァにでも頼むしかないかなぁ。

砕くと魔力が回復する効果を発揮する魔力石の比較的安定した調合には成功したし、前に私の生き血と引き換えに頼みごとをした時に作った吸血鬼化抑制薬の在庫も充分残ってるから、報酬の支払いは何とかできる見込みはあるはずだ。

もっとも、今開発中の肉体の加齢を抑えつつ体力トレーニングの効果は反映させる道具が完成してからの話になるだろうけど、ね。

宿題を早々に片付けた勢いで摸擬戦の相手も片付けたアスナがシャワーと着替えを要求してるのを横目に、私はもう一度大きく溜息を吐いたのだった。

余談だが、先のアスナと同条件で私がアルカスと摸擬戦をしてみたら、フル装備で臨んでも3分と持ち堪えられないと言う結果に終わった。

次回の挑戦をやる余裕が出来たら5分以上を目指そうと思う。

「最近、千歳ちゃん自重せえへんようになってきはったなー」

ズンドウ鍋で作った飲めるラー油で作った赤い炒飯を匙でハフハ

フ言いながら賞味しつつ放たれた木乃香の口撃は、私の繊細なハートをグッサリと抉ってくれた。

「便利だから良いのです」

いやまあ、同居人に魔法バレしたのを契機に家事労働に分身をフル活用したり、仕込みに時間がかかる料理を“別荘”で済ませたりしてるのは確かに私だけど。

「私なんて殴りあいしかできないってのに。千歳の魔法ってホント便利よねぇ」

やはり隣の芝生って青く見えるものみたいです。

はっ、今身体に心が引きずられてた。気をつけないと二度と戻れなくなる。

「ほんま一家に一人いると楽でええわー」

「褒めていただいてどうもです」

本体は米の甘味と特製ラー油の香り高い辛味を堪能しながら、分身の一人に針仕事をさせつつ、他の分身に初心者用の呪文書を要約させ、それらと同時に木乃香とアスナ用の防具を分身に製作させると言う離れ業を披露していたりするので尚更否定できないけど。

ちなみに防具はテジャスみたいな人格付きの糸状可変魔道具……糸の総量の範囲内で自由自在に姿を変える着用者支援機能搭載の服ではなく、こちらの世界での常識で高級な魔法の品と判断される程度に機能を絞った服にした。

魔導師ファルチェスク謹製のアイテムを完全模倣できたとしても此の世界で正常稼動するとは限らないので、技術的な限界を模索する様な状況でもなければ比較的堅実な性能の物にするべきだとの自分なりの拘りが機能を絞っている理由である。

それでも６１式戦車の装甲並みに高い耐久性と自動修復機能、服と皮膚に沿って恒常的に展開される簡易防御魔法術式、冬は温かく夏は涼しく過ごせる体温調節機能、光触媒による半自動洗浄機能は盛り込んであるんだけど。

……なんか自分のアイテムメイカーとしての技術力の出鱈目さに

唖然としてきた気もしなくもない。此れだけの機能を詰め込んで破綻無く仕上げる事ができるってのは。

なお、形状は麻帆良学園女子初等部指定制服と指定ジャージは3人共通、プライベート用の私服仕様の物は夏冬2着ずつ……1人毎に4着を用意してるが、サイズ調整機能の盛り込みには失敗したので毎年仕立て直す破目になるだろう。

中身男のTS女が女性に手作り衣服、それも下着込みで贈る事になるとは何ともはや。

武器の方は、2人には護身用に魔法の木製ペーパーナイフを渡してある。

担い手か私が手に持って合言葉を唱えると、アスナ用は鋼鉄製の片刃長剣に、木乃香用のは穂先が鋼鉄製の薙刀に変形する機能が組み込まれている魔法武器で、別の合言葉で元のペーパーナイフ形態に戻せる仕様だ。

仕込んでいる機能は変形の他には強度増強と自動修復のみだが、ダイヤモンドよりも更に硬く、トラック用の板バネよりも更に折れ難く、刃こぼれしても瞬時に直るようにはしてあるので多分問題は無いだろう。下手に対魔力機能とかを組み込んでおいたら、魔力や気を刀身に通す時に邪魔になりそうだしね。

とまあ、一応取り敢えずの装備は渡しておいたけど、この世界で魔法に関わるなら考慮しておいた方が良いことがある。

西洋魔術師と其の従者との間で結ばれる主従契約によって使用できる様になるかもしれない『アーティファクト』と呼ばれる超高性能マジックアイテムの数々だ。

私が思ってもみなかった視点で選ばれたアイテムが入手できる可能性は無視するには惜しいものであるし、契約カードを媒介にして使える魔法機能は色々と有用なので、やって損は無いだろうと思われる。

仮契約だと本契約より弱いみたいだけど、その分だけ拘束事項はきつくないしね。

エヴァ譲りの契約魔法用の文言と魔法陣を思い出しつつ、どうやって2人に仮契約について切り出そうかと私は頭を捻り始めたのだった。

第２４話（後書き）

ガトウさんが草葉の陰から、詠春とタカミチはガチで泣きそうな状況です。

原作ネギパーティーでは要の２人が魔改造されてますが、彼女らがネギのパートナーになるかどうかはネタバレなので伏せさせていただきます。

第２５話

「「パクティオー？」」

とある春休み中、夕食後のまったりとした時間帯に私から提起した議題は、同室の２人にニュアンスが違うながらも同じいらえを返させた。

「はいです。仮契約なら制限も緩いですし、後での解約も比較的楽にできるです。修行とかにも使えるですから、早期の戦力アップを狙うなら見逃す手は無いです」

何が出るか不明と言えどアーティファクトは今の私が短期間で作れるアイテムよりは強力な可能性が高いし、従者召喚機能は万一の時の見せ札で使い易いとの理由もあるが。

「確かに一考の余地はあるわね。女同士だからノーカンだし」

私が今の時点で仮契約（パクティオー）の話を持ち出した理由を説明すると、取り戻した記憶から概略を思い出したアスナがなるほどと肯いた。

魔法世界では割りと気軽にやられてる便利な習慣扱いだしね。

でもノーカウントと発言した割には、アスナの頬がうっすら赤く染まって、視線を少し逸らしてる辺り意識してない訳じゃ無さそうだけど、それは言わぬが花か。

「んー？　何の話やー？」

「パクティオーで一番簡単かつ一般的な儀式にはキスが要るです」

とりあえず木乃香の疑問にちょっとだけ答えておく。

一般的でなく簡単じゃない方法にはキスをやらない方法もあるんだけど、私としては是非とも接吻でやりたいものである。

「キスかー、千歳ちゃんとアスナんならええでー」

同性ゆえの気安さか、安易に許可を出してくれる木乃香。

いや『私達なら』って辺りを考えると同性だからと言う理由だけじゃないかもだけど。

「じゃあ早速始めるです。先ずはアスナと木乃香からで良いです？」

……とは言え、先ずは普通に仮契約して貰うとしよう。
「問題ないわ」
「それでええでー」
さてさて、この2人のお姫様の仮契約で出てくるのはどんな代物だろうか。
「魔力が大きい方が主になった方が後が楽なので、アスナが従者、木乃香が主って事で良いです？」
木乃香がネギの従者になったせいでアーティファクトの制御が不安定になったと言う設定を見た覚えがあるので、木乃香は基本的に主側に回って貰うよう推奨してみる。
「問題あらへんよ」
「わたしが魔法使いの従者か……って、魔力が大きい方が主になるって事は千歳はどうなるのよ!？」
原作で登場した木乃香のアーティファクト代わりは私が穴埋めするとして、と皮算用してたらアスナから鋭いツッコミが入った。
「私の魔力は木乃香は勿論アスナにも及ばないですから、どっちとも私が従者ですね」
論理的にはそうなるのは仕方無いけど、ずるっこしてるように見られそうなのが少し残念かなぁ。
「それだと木乃香はアーティファクト無しになるけど良いの？」
戦力アップにはアーティファクトを手に入れるのが最も手っ取り早いから、入手できる可能性を手放すのは不利ってのも確かなんだよね。
「んー、そうやなー。何も無しってのはアレやから千歳ちゃんが色々作ってくれへん？」
とは言え、契約カードに備わっている主従間の念話機能と従者への魔力供給機能と従者召喚の機能が使えるだけでも充分以上に役に立つんだけど。
「分かったです。では始めるです」
目の前でアスナと木乃香の唇が触れ合った瞬間……

「パクティオー！」
魔法陣を展開し、呪文で精霊を喚起し、２人の間に霊的なパスを繋ぎ合わせた。
それに呼応して私の手元に魔力で構成された１枚のカードが顕現する。
ごつい大剣を両手で保持したアスナの姿が描かれた物だ。
漫画原作通りの契約カードが出現したのを確認し、マスターカードから従者用のコピーを魔力で模写して顕現させる。……本名隠蔽用の術式の追加は一応成功したらしい。
「うわ、綺麗やなー。触ってもええ？」
一連の作業は既に身体を離した２人に見物されていたので、契約カードはそのまま彼女らへと手渡す事にした。
「こちらが木乃香が持つマスターカード、こちらがアスナ用のコピーカードです」
興奮してためつすがめつカードを弄ってる木乃香に簡単な扱い方を教えると、さっそく額に当てて念話を試して心からの笑顔を見せている。
根っからこういうのが好きなんだろうなぁ。
「では、今度は私とアスナでやるです」
魔法陣は足下に予めセット、呪文は条件付きの遅延発動を仕込んで予め詠唱済みと無駄に高い技術力を駆使して御膳立てを整える。
「……千歳、目ぇ怖くない？」
「おっと、いけないのです。真剣になり過ぎたです」
この期に及んで尻込みされては、せっかくの機会が水の泡。
劣情を隠すように愛情や友情を表情の表に……出せるのかな？
まあ良いや。
幸い深く考えずに目をつぶってくれたので、一安心。
では、いっただきま～す。
唇に温かいモノが触れた瞬間、アスナの頭を私の両腕で抱え込む。
同時に機工女神の能力と一緒に手に入れた性魔術を発動させ、唇

経由でアスナの体内に私の魔力を流し込んで攪拌する。
今更むーむー呻いて手足をじたばたさせようとするが、もう無駄だ。
明確な悪意や敵意の含まれていない精神に作用する魔法に、アスナの魔法無効化体質が反応し難いのは記憶封印の一件で実証済みである。
彼女の唇を割り開いて舌で口腔内を味見させて貰いながら、右手でアスナの背中を抱きかかえ、密着度を高めてゆく。
「うわー」
観客に徹してくれているらしい木乃香の感嘆を聞きながら、元から力がロクに出せていなかったアスナの手足が一瞬ピンと硬直した後にダランと弛緩してしまうのを堪能する。
恐らくは軽くイッたのだろう瞬間に流れてきた魔力の奔流を私自身に馴染ませる課程において、活性化されたチャクラが私の身体をも軽く火照らせてしまう。
流石は神殺しセリカが己の存在を維持するエネルギーを得る為に採った方法と同種の手法だけに甘美で強力な魔力が味わえたってトコか。
ふざけたフリして無理矢理襲うとか、寝込みを襲撃するとかだと返り討ちになるような気はしてたから、ようやくの事での賞味達成である。
さて、余勢を駆ってもう一つの本丸攻略といきますか。
……逃げてなければ良いけど。
目は焦点が合ってなく、口はだらしなく開いてよだれまで垂れ、ぐったりと身体を預けてきているアスナを《別魅》……分身に任せてベッドに運んで添い寝させておこう。
魔法陣、仮契約呪文再展開。
「さて木乃香、キスの時間です」
「ま、待ってーな。こ、心の準備がなぁ……」
さっきのを見せられて怖気づいてしまったのか、若干視線に険し

さが混じってる気もするけど、それでも逃げてないって事はＯＫのサインと解釈する。異論は認めない。
両手で木乃香の両手首を掴み、彼女の背を部屋の壁に軽く押し付ける。
「あ……」
「好きです」
告白の直ぐ後に返事を封じるかの如く唇を塞ぐ。
予想外の発言を聞かされて頭が真っ白になったらしい木乃香はあっさりと私に身体を委ね…って、既に身体が軽く火照ってるって事は、さっきのキスで当てられてた？
それとも性魔術使ってた余波をモロに感じてしまったのかな？
木乃香ぐらい魔力が強い娘だと余波程度なら自分から受け入れでもしない限りは無意識に弾くはずなのに。
まあ、そこらはどうでも良い。
「ん……」
木乃香の足が止まってた理由が好奇心と打算が大半占めてたとしても関係無い。
打算と欲望なら、こっちにだって売るほどあるからね。
何となく『仲間外れにされるんはいやや』とか『せっちゃんの次でええなら、なんて言えるわけないやん』って心の中で呟いてるのが聞こえた気もするけど、空耳かも。
って、舌を絡めてくるとは侮れない娘だ。
反撃反撃反撃だーっ！

気が付いたら朝になっていたと言うか、普段鍛錬を始めてる早朝に目が覚めた。
どうやら、あのまま寝てしまっていたらしい。
「ん、おはよーさんやぁ」

「おはようございますです」
硬い床の上で寝てた割りにはスッキリした表情と声だ。
かく言う私も身体は軽いが、床掃除とシャワーと着替えは切実にしたい。
「おはよー」
二段ベッドの下の方から、もぞもぞとアスナと私の《別魅》が起き出して来て、分身は私が機工女神の力で融合して記憶と経験を吸収す……ほうほう、どうやら昨晩は随分とお楽しみだったようだ。
常日頃から覗き見防止用の幻術を含む多層結界を部屋に張ってないと色々と拙い展開になっていたかもしれないが、今更気にしても仕方無いだろう。
学園長や図書館島司書長が本気出して覗いてないのを祈りたい所である。
「仮契約カードの事は後回しにして、身だしなみと鍛錬と朝ご飯の支度を優先するです」
「そうね、異議無し」
「せやなー。アスナんのシーツも洗濯しといた方がええ？」
「お願い」
おお、マッパになるとは木乃香って大胆な。
……単に感覚が常人とズレてるだけかもだけど、この部屋にいるのは女性だけなんで不思議に思うほど変な行動とも言えないかな。
アスナがシャワー浴びてる間に汗とかでベタベタする服を着ていたくは無い気持ちは良く分かるしね。
私も脱衣して裸エプロンで調理とか挑戦してみよっかな。
予め耐熱呪文を掛けとけば、コックコート着てるのと見た目以外は大差無いからね。
今朝の御飯は、ハニートースト、塩胡椒を効かせたベーコンとカ

ブの炒め物、スクランブルエッグ、ポタージュスープと言う洋風仕立てにしてみた。

ベーコンと鶏卵と牛乳以外は自家生産した食材なので、素材の新鮮さは折り紙付きだ。

食肉・魚介・卵・乳製品・酒類は自前で作るより買った方が良い物が手に入るので、目利きを鍛える程度で抑えてはいる。

だが、調味料は別だ。

先日作った飲めるラー油の他にも、独自配合のＸＯ醤、本醸造醤油、手前味噌各種なぞを試作しては味見し、作成技術の練度を高めようと日々努力していたりする。

うん、努力はしてるんだけど、まだ納得のいく物は多くなかったりするのだ。

私の料理能力の複写元となった“秋山醤”の舌と、妥協を知らぬ料理への執念に多少引きずられてるような気もしなくもないが、より美味くなるなら其の方が良いのも確か。

また我が社の社内食堂へ流すか、それとも私が包丁振るって賄いを作ったりして少々微妙な出来になった調味料の在庫を減らしにかかるべきか。

……っと、思考が脇道に逸れてる間に私含めて全員が完食していたようだ。

我ながら恐ろしい所業よ。

「それで結局千歳ちゃんの契約カードってどうなったん？」

「これです」

質問に答えて懐から出したカードは計４枚。マスターカードが２枚と、そのコピーが１枚ずつ、カードの絵柄は２種類だ。

「アスナんとウチので絵柄が違うんやねー」

級は「ＶＵＬＣＡＮＵＳ　ＡＬＡＴＡ」、翼ある鍛治神とでも解釈するべきか？　鍛治の大神ウルカヌスの名を頂くのは名誉だけど筋違いだよなぁ。性質的に近似の単語を当てはめてるだけかもしれないけどね。

木乃香のカードに描かれてる私の手には古風な金属製の鍵が、アスナのカードに描かれている私の手には手槌が握られている。
見た目で能力が全然分からないどころか、アーティファクト・カードかどうかすら見当つかないって正直どうかと思う。
「ともかく、アスナのを含めて試しに出してみるです。危ないから別荘に移動するです」
「賛成っ！」
アスナのは身の丈超える大剣だからなぁ。絵に描いてある得物がそのまま出てくるとしたら、この部屋で出しちゃうと、お部屋がお部屋が大ピンチになるもんね。

「ハ、ハリセンっー！！？」
別荘に転移してくるやいなや早速アーティファクトを顕現させてみたアスナの手に握られているのは、木刀や竹刀と同じぐらいのサイズをした大振りなハリセンであった。
「見事なハリセンです。もしかしたら大剣モードとハリセンモードを使い分けられる特殊な武器かもしれないです」
どうやら“エンシス・エクソルキザンス”、和名を“ハマノツルギ”と呼ばれていた破魔の剣が彼女用のアーティファクトとして登場したと見て間違いないらしい。
「そう。じゃあ試してみる！」
あれこれ試行錯誤しつつ『剣変われー』とか念じているアスナを横目に、私も自分用のコピーカードを1枚……絵柄から見て木乃香が主のヤツを手に持った。
「アデアット！」
カードが金属製、多分鉄で作られた鍵に変わる。片手で持てる工具…ホームセンターとかで売ってるドライバーとかと大きさや重量は大差無いだろうか。
で、肝心なのは此のアイテムの効能だけど、何だろうか？

機工女神の神力を少しだけ発揮して探ってみると、アイテム名と使い方と効果が理解できた。できたんだけど、これを作った奴と選んだ奴の顔を拝んでみたい気は凄くする。

マスター用のカードのうち木乃香のヤツを“鍵”で触れて念じると、カードの隅に記されていたローマ数字が黒字から白抜き文字へと変化した。

「木乃香、とりあえず此のカードを持って『アデアット』って言ってみるです」

「了解やえー。あ、あであっと」

私の手から軽く頬を赤らめてカードを受け取った木乃香が其の言葉を口にした瞬間、木乃香の服装は上品そうな和装に変わり、両手には扇子が1張りずつ握られていた。

「え？」

恐らく、あの扇は“コチノヒオウギ”と“ハエノスエヒロ”、原作で木乃香が使っていた負傷完全治癒&完全状態回復の魔力を秘めたアーティファクトだ。

どうやら私の『アルマメンタリウム・ウルカヌス（鍛治神の武具庫）』は、物凄く厄介で貴重な能力を秘めたアーティファクトらしい。

まさか、主がアーティファクト相当のマジックアイテムを使えるようにできるとは。

……相互不可侵の協定が無いと、エヴァに知られた途端に従者にされてるな。

この調子だとアスナがマスターの奴も妙な効果を持ってるのかも？

「アデアット！」

出てきたのは片手用のトンカチだけど、効果の程は……え？

と、とにかく試してみよう。

「大地の子等よっ！」

右手に持ったトンカチで左の掌を軽く打つ。いや、地面とかでも良いらしいけど。

「うわー、メルヘンやー」
地面から生える様に出てきたり、物陰から現れたりなどして集まってきたヒゲ面でずんぐりした身長１ｍぐらいで作業着姿の筋肉質な男達は合計７名。
ハンマーや斧、スコップやツルハシなどを携えている逞しい職工精霊達だ。
『セプテム・ナーニー（七人の小人）』ってアイテム名は伊達じゃ無さそうである。
「良く来てくれたです！　つまらない物で恐縮ですが、今からお近づきの印を持って来るですから待ってて下さいですっ！」
見た目がドワーフって事は多分お酒が好きだろうから、以前に作った市販品には風味で劣ってそうな自作の密造ビールとエール、ワインにブランデーもどきでも持って来よう。
ちなみに、今後末永くお世話になりそうな彼等が有する能力とは、壊れてしまった物品の修復と、物品を製作する際の作業補助だ。
……戦闘の後始末とかで東奔西走させられる未来が見えるような気がする品ではある。
だが、どちらも私にピッタリなアイテムなのは言うまでも無い。
ドワーフ達の野太い歓声を背にして私が向かったのは倉庫エリア。
時間を遅延させて新鮮さをできるだけ保つダイオラマ魔法球と、その近くに建てた時間経過がプラスに働く食材を保管しておく倉庫群がある場所だ。
「在庫のお酒の半分とジョッキ１０個を持って来るです」
直ぐに揃えられた樽や瓶の入ったプラスチックケースを身の丈３．８ｍのゴーレム“アルカス”の背中に装着した荷台に手早く積み込み、来た道を迅速に戻る。
「お待たせです！　我々の出会いを祝して乾杯するですっ！」
売り物にするには少々以上に考え物ではあるが、一応飲める味ではあると自負している自作の地ビールをジョッキに注ぎ入れて皆に配っていく。

「ちょっと、これお酒！」
「「「「「「「「「「かんぱーいっ！！」」」」」」」」」」
アスナの突っ込みを敢えて盛大にスルーして、私と木乃香とドワーフの皆様で杯をぶつけ合い、ゴクゴクと音を鳴らして咽喉の奥へと酒精分を迎え入れる。
「甘酒と大差ないれすから～、らいじょうぶれすよ～」
「全然大丈夫に見えないじゃないっ！」
大丈夫ですよ、本当に。単にろれつが回って無いだけで頭の中身はクリアだし。
あ、木乃香はイイ笑顔で職工精霊達にお酌されてるし、アスナも諦めてジョッキの中身を一気に飲み干したみたいだ。
酒宴の最中にシラフでいるのも辛いだろうから良い事である。
日本の法律的には駄目だし、一気飲みは少々問題だけど、そこは気にしないのが吉！
ドワーフとの親睦は酒か腕力と相場が決まってるんだし（偏見）。

この時の歓待のおかげか、はたまた定期的にドワーフ達と酒宴を開くようにしたせいなのか、それはもう目覚しい働きをしてくれるようになるのだが、彼等の活躍についてはまたの機会にと言う事で。

第２５話（後書き）

オリジナルのアーティファクト登場です。あと、お酒は２０歳になってからですよｗ

◎アーティファクト『鍛治神の武器庫（アルマメンタリウム・ウルカヌス）』

鍵型のアーティファクトで、予め契約相手のカードに触れておく事でアーティファクト級の武具を利用可能にする。この武具は契約カードが姿を変える事で通常のアーティファクトと同様に顕現できる。なお、この武具は鍛治神の武器庫の担い手には使えない。

◎アーティファクト『七人の小人（セプテム・ナーニー）』

小槌型のアーティファクトで、物体の修復や製造補助をしてくれる職工精霊７体を召喚できる。職工精霊は小柄でヒゲ面のずんぐりした気の良いドワーフの姿で現れる。

第２６話

春休みを１日残したところで“別荘”内における肉体老化を防止する護符が完成したので、心霊手術で木乃香とアスナの身体に移植しておいた。

動物実験では悪影響は出なかったし、自分で使って試してみた分でも全く問題無かったので、機能的にも副作用的にも多分大丈夫だとは思う。

なので、最後の１日は“別荘”にこもってサルのようにさかってみた。

まあ今回は『今度こそ千歳をなかせてやるわっ！』『ほなウチもやるえー』って２人がかりで押し倒されてしまったのがキッカケで始まったんだけど。

学園側に露呈しても問題が少ない方法での戦力の早期大幅底上げを狙った仮契約と、その際に出現するアーティファクトの格上げを狙った性魔術の行使は、他人の魔力や気を供給したら快感を覚える人もいると言うネギま世界の法則で性魔術の効果が増幅された可能性を鑑みるに迂闊だったかもと自省するが、もはや完璧なまでに後の祭りである。

事前に実験するって性質の事でもないからなぁ。

ともあれ、ウジウジ悩んでいるよりは良いだろうと開き直る事に決め、幻術で身体を成長させてみたり、私の股間に男のシンボルを屹立させてみたりと保護者の皆様には到底お知らせできない有様で全身マッサージに耽る日々を過ごす事になった。流石に子作りは今やると問題が多過ぎるので避けたけどね。

そのおかげで、３人の親密度と魔力操作の腕前を向上させるのには非常に有益な結果となったのは、倫理的なアレコレを棚上げすれば色々な意味で満足すべき事なのだろう。

まあ、性魔術の初歩の初歩は２人にも修得されはしたけど。

こんな短期間の実践経験で、無茶な修行のせいで普通の肉体的快感を覚えなくなって久しい私がなかされてしまったのは本気で予想外と言うより無いが。

魔力総量の素質に任せた力押しで技術を凌駕できるとは、やはり公式チート恐るべし。

「しっかし、こげなイケズな魔法を覚えてはるなんて、千歳ちゃんってすけべぇやぁ」

一緒の布団を被って甘ったるい声でしなだれかかってるのは、一糸まとわぬ木乃香だ。

彼女の幼馴染であれば鼻血を噴いて卒倒してるかもな光景だが、私の“別荘”内のレストハウスでは日常茶飯事になりつつある寝起き姿であった。

まあ、内輪の面々以外の目があるかもしれない普通の場所で過ごしてる時は、互いに自重し合うって事で話はまとまっているんだけどね。

私の迂闊と矜持が原因で暗躍して程々の平穏を手に入れる計画が破綻してしまい、思い切って私自身の欲求の充足も目標に据えた路線に踏み切ったせいで、現時点で彼女等の保護者や世間様に知られたらただじゃ済まない実状なのは確かだし。

「否定しないです。だから人数増やしたいとも考えてるです。マンネリは敵なのです」

「まーた、直ぐに浮気を正当化する！　いいかげん私達だけで満足しなさいよ！」

正直に本音をぶっちゃけて己の欲望を肯定する私に猛抗議してくるアスナだが、そもそも『私達』なんて発言している時点で相当私の価値観に毒されている訳で。

上手く誘導していけば遠くないうちに何とか丸め込めそうな気はする。

……こういう事を考える時点で『正義の魔法使い』としては完璧に失格なんだろうね。

もっとも最初からマギステル・マギを目指す気なんかまるで無いんだけど。

「木乃香は大事な友達が会いに来てくれたら、こういう気持ち良い事したくないです？」

でも、それなら尚更に外堀埋めが大切だよね。

「ちょ…」

「せやねー。したいっちゃしたいかなー」

世間知らずのお嬢様が大事な友人と気持ちよく親密になれると聞けば、否やと答えるとは考え難いとは思っていたけど、期待以上に躊躇いの無い返事をありがとう。

これも調ｋｙ…ゲフンゲフン愛ｂ…ゴフンゴフンしつｋ…ケホンケホンの賜物かな。

「なら仲間に入れてあげれば問題無いです」

「それはええ考えやなー」

刹那さん南無。

あなたの身柄は、あなたの大切なお嬢様に売られたも同然である。

まあ、多分主観的には幸せにはなれると思うけどね。

「大問題よっ！」

うむむ、意外とアスナの常識は頑固ですね。

「どうせ女同士3人組って時点で世間的には色々拙いのです。この上2～3人ぐらい増えたところで大した違いは無いのです」

「大違っ…！」

反論を実力行使と言うか、感じるところを攻めて悶えさせて封じる。

本来の１０歳の身体ならまだしも、昨夜から年齢詐称薬で１５歳相当の肉体になっているままの今のアスナには堪える攻撃なはずだ。

「アスナんの１５歳ボディ感度えーみたいやなー」

「普段は感度落としてるのが勿体無いぐらいです」

ま、感度落とさないと一般生活送るのなんて無理過ぎるから仕方無いんだけど。

リミッターかけとかないと１０歳ボディでも私の顔見た途端に身体が勝手にエッチな気分を盛り上げ始めるまで仕込んじゃったのは、我ながら自重し損なったなぁ、てへっ。

まあ、私がやり過ぎたんじゃなくて、性魔法を無意識に咸卦の気で発動してるせいで快感が増したのが原因だったりしたら、アスナが自分の感覚を制御できるようになれば解決する問題なんだけど。

ともあれ、斯様に思う存分ただれた時間を過ごせたおかげでだろうか、それとも親にも言えない様な秘密を共有するようになった連帯感からだろうか、新学期に突入する頃には３人とも至って普通に仲が良い態度でいられるようになっていたのだった。

木乃香は持ち前の温和な雰囲気と明るい気性のおかげで、転入初日からクラスの仲間に溶け込んでしまった。癒し系美人恐るべし。

春休みの間にも続けてた週１回の仮設動物病院に付いて来ていたせいか、其処での犬猫や野鳥との触れ合いを求めて顔を出していた子……大河内アキラなんかとは一足早く顔を合わせて仲良くなっていたみたいだけどね。

溶け込んだとなれば、毎度毎度ルームメイトと一緒とか帰宅部まっしぐらとはいかなくなるもので、私と交友が浅めの級友と何処かに行く事も多くなった。

ま、武術と魔法の鍛錬と、魔法に関しての秘匿、麻帆良の外に行く際の護衛の手配さえちゃんとしてたら文句は無いけどね。

そこまで前置きして何が言いたいかと言うと、木乃香が早乙女ハルナや宮崎のどか…原作だと図書館探検部仲間となる面々と意気投合したらしいのだ。

そういや最近、図書館島地下３２階の特別書庫へのタイムアタックはやってない。

折を見てアスナと木乃香を誘って挑戦してみるのも面白いかも。

取り敢えず予習を兼ねて図書館島2階の隠し書庫には案内しておいた。
ここ麻帆良学園は、薄皮一枚で非日常の世界が隠されている所だと見せる為に。
中身の書籍……魔法学校の教科書や参考書などについては、伝統もへったくれもなく要約した実用一辺倒の抜粋を渡してあるので、読む価値は余り無いが。
そうして図書館島がただならぬ秘境であるとの認識を共有してから後日挑戦……としたかったのであるが、残念ながらそうもいかなくなってしまったかもしれない。
「初めましてお嬢さん」
全ては此の隠し書庫に入室して来た胡散臭いローブ姿の優男のせいだ。
アスナの頭に手を伸ばそうとした途端、振り返りざまの肘打ちを食らいそうになって半歩だけ後ろに下がりはしたが、余裕の笑みは全く崩さない。
「おや、久しぶりだと言うのに随分とつれないですね。でも人形みたいだったあの頃よりも元気で良いと思いますよ」
ここまで胡散臭い人物は図書館島の司書長の他に心当たりが無い。
恐らく正体は、紅き翼のアルビｒ…
「私はクウネル・サンダース。クウネルとお呼びください」
内心吐いた台詞にツッコミ入れるとは、微妙なトコでスペック高いな。
「もしかしてアル？」
「クウネルです」
あ、アスナが記憶が回復してるのを自爆で暴露してるけど、さて如何出てくるか？
「八束千歳です」

「近衛木乃香やえー」
簡潔明瞭に名乗りはしたが、警戒は全く解かずありとあらゆる攻撃と奇襲に備える。
彼の目的で最有力なのはイノチノシヘンによる人生蒐集、次点は精神干渉魔法、その次が話術でこちらを攪乱しての情報収集だろう。
このうち人生蒐集と精神干渉には多分対応できる。
【ディル・リフィーナ】の性魔術の基礎は体内外の気のコントロールと精神領域での戦いの心得だし、【まじしゃんず・あかでみぃ】の魔導師としても呪術対策を施しておくのは常識的な心得なので、既に主従3人全員に対策済みだったりする。流石に過去に蒐集された分を使われるのは防げないだろうが、エロイことやってたのは伊達ではないのだ。
……すまん、見栄張った。今回に対策が間に合ったのは怪我の功名さね。
「しかし、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグがあなたをタカミチ君に託したのは失敗かもしれませんね」
やれやれとでも言いたげに両手を軽く上げて首を横に振られると、流石に腹が立つな。
エヴァ相手とかで挑発慣れしてるせいかもしれない流石の熟練度だ。
「何でよっ！」
あ、アスナが引っ掛かった。
木乃香が比較的冷静なのは刹那が槍玉に上がってないせいかもだけど。
「いかにも友人に恵まれてない」
「そんな事無いっ！　千歳はね…」
「アスナ、良いです」
激昂して掴み掛かろうとしたアスナの肩に手を置いて止める。
どうせマトモに殴って効くような身体で来た訳じゃないだろうしね。

「友人と連れ立って大量殺人やらかした挙句、本国にいられなくなって潜伏中の御仁に言われたくは無いです。記憶封印状態のまま過ごさせるのは見殺し同然です」

彼等とは別の視点からの容赦ない指摘でも顔色一つ変えないとは、流石は英雄殿。

精神の耐久値がハンパじゃない。

「これは手厳しいですね。ですが見殺し同然とは聞き捨てなりませんね」

軽く怒ってみせて口論に持ち込んで情報を引き出そうとしてるのでしょうから、こちらも自分に不利にならない程度に少し話しておこうかな。

ムキになって敵対されると色々と厄介な相手だからねぇ。

まともに武力勝負したら、現時点での3人がかりじゃ勝てない確率高いし。

「アスナの身元が隠蔽できるのは、せいぜい今の学園長の代までです。記憶が無ければ其の時点で為す術なく敵に捕縛されて利用されるのがオチです」

代替わりの際に調査されてメガロメセンブリア本国にバレれば、それで終わりだ。

戦略兵器として活用するべく身柄を拘束しに来るのは想像に難くない。

「それを防ぐには記憶を戻して鍛えるしかない、と言う事ですか？」

自分が一兵卒だと思ってるのと、自分が狙われるかもしれないと知ってるのとじゃ守り易さが段違いだし、正体を誤魔化す手管を覚えるのにも真剣みが違う。

「はいです。それに記憶封印のせいで精神系の魔法への耐性が落ちてたですし、学校の成績も残念な結果に貶められてたです」

あまつさえ、これだ。

「それホントっ！？」

加えて同学年の女子児童に何の疑問も無くおさんどんして貰えて

る時点で、アスナの麻帆良を包む大結界の影響による判断力低下を疑わざるを得ない。
　完全魔法無効化能力があれば、そんな悪影響は本来受けないはずなのだ。
「本当です。だから、ああいう事をしてでも記憶を取り戻して欲しかったんです」
　そして不可思議を変に思えなくなれば奇襲を受け易くなるのは必然。
　麻帆良は、アスナを敵の目から隠すには得難い環境なのは確かであるが、護衛の努力だけで守り切るには不向きな面も多々あるのだ。
「そうやったんかー。千歳ちゃんって意外と優しいんやなー」
　そして、それは自分にも適用される事だと気付いたかどうかは知らないけど、木乃香が私のやらかした強引な行為に理解を示してくれる。
「訂正させていただきましょう。どうやらアスナさんは良いお友達をお持ちのようです」
　ふむ。引き下がってみせたって事は、アスナの記憶を戻した件について了解したと言う事か。はたまた此方の油断を利して奇襲を目論む気か。
「当然よっ！」
「では、これ以上お邪魔するのも何ですし、これで失礼しましょう」
　とは言え、向こうが如何いう考えでいたとしても、結局のところ私の方針は今まで通りと変わりようが無いんだけどね。
　表向きは魔法に関わってるのは私だけと言う事にして、アスナと木乃香には自衛の為の牙を砥いで貰い、今後やってくるであろう面倒事へ対処する準備を積み重ねる日々を今後しばらくは送り続けると言う既存の行動指針を動かすほどの意味は、今回の邂逅では生じなかったはずなのだから。
　瞬く間も無く姿を消したアルビレオ・イマの見事なまでの引き際に感心しつつ、私は今後の予定方針の大枠を再確認したのだった。

第２６話（後書き）

とうとう登場した変人司書長です。実は地下３２階の特別書庫の扉の鍵が開くと召喚されるように仕掛けをしてたけど、主人公が毎度毎度壁を切り裂いて出入りしてたので作中への登場が遅れたと言う裏話もあったりします。

第27話

アスナとの仮契約で得られたアーティファクト『七人の小人』のおかげで、割りとギリギリに近い水準で見積もっていた私の予定はとんでもなく楽になった。

麻帆良学園都市のみならず、周辺各市町村とも関東魔法協会経由でゴミ処分場の再利用化と利用可能年数延長についての契約を結び、魔法的手段を以って廃棄物を資源へと変えてみせる計画に必要不可欠な“リサイクル・プラント”の作成は、彼等の協力が無ければ恐らく実現不可能だっただろう。

また、“別荘”内に新設した常温核融合式魔力転換炉の試作品も彼ら無かりせば完成まで1年は余計にかかっただろうし、修行場や工房や資材倉庫などの目的で増設した5基のダイオラマ魔法球も完成どころか着手すらできなかったに違いない。

まずまず順調と言って良い状況ではあった。

好事魔多しと言うことわざもあるだけに油断なんぞ更々できないのであるが。

ともあれ、ここらでアスナと木乃香以外の私の交友関係について再確認してみよう。

先ずは私を担当してくれている魔法先生の弐集院先生だ。

そろそろ私にも学園の防衛任務を見習いの立場で経験させてくれると言うので挑戦してみたら、今のところ敵勢が弱目のところを割り振ってくれてるらしく、私の実力でも何とか歯が立つ相手ばかりでホッとしている。

「無詠唱で《魔法の矢》を3本出せたら充分即戦力だ」

仰せ、ごもっとも。

ともあれ、徐々に普通の魔法生徒としての仕事を回してくれるみたいで、その窓口を兼ねた監督として振舞ってくれるつもりらしい。

ちなみに魔導機杖アリアや別荘の存在、アスナと木乃香の従者をやってる件は、色々と拙い問題を孕んでいるので弐集院先生には秘密にしてある。学園長とエヴァと図書館島司書長はある程度知ってるんだろうけど。

次は“いいんちょ”こと雪広あやかだ。

政財界のパーティーに呼ばれた時などで良く遭遇する彼女は、我がクラスの学級委員長を務める傍ら順調にブラコンの道を邁進しており、このまま長じれば弟より誰かを優先する事など有り得ない姉馬鹿に進化するのではないかとすら危惧している。

学園長の思惑次第では、下手をすればA組メンバーにならないかも。

……私がアスナや木乃香と3人まとめて某英雄のお孫さんのチームに編入する狙いでA組へ配属されて別れ別れになるかもだが、そうだったとしても大して困らなかったり。

彼女自身よりも彼女のご両親の会社との付き合いの方が深いしね、実は。

“ゆーな”こと明石裕奈は、裏の魔法事情に関わらず、普通のスポーツ少女として私やアスナや木乃香、大河内アキラや佐々木まき絵や椎名桜子らと遊んだり、持ち寄ったお菓子を食べたりする付き合いだ。

正直なとこ、明石教授も諦めて娘に自衛手段を持たせれば良いのにと思う。

素質は高いとは言え、一般人としての人生を望めなくも無い立ち位置の娘だから、危険から遠ざけたいと願うのは解るけど……。原作知識の色眼鏡抜きで見ても、どうしても説明も無しに大人しく引

っ込んでてくれる性格には思えないんだよね。

大河内アキラは、木乃香や椎名桜子と並んで週1回の特設動物病院を楽しみにしてくれてる観客の一人でもあり、助手をしたいと申し出てくれてる娘でもある。

気性的にも意欲的にも問題ないんだけど、私の方が獣医としてはハンチクなのが痛い。

普通の手段だと初歩的な応急手当て以外は教えられないからね。

しばらく様子見て、魔法の存在に気付くようなら考えてみても良いかも。

早乙女ハルナ、長谷川千雨、宮崎のどかは、顔と名前は知ってるけど親しくはない。

ハルナは同じクラスなので面識が幾らかあるが、それまで止まりだったりする。

それに勘が鋭くて潔癖な娘が以前から私の事を敬遠してるってのは、私の性癖と性根などを鑑みれば仕方が無いって面もあるしね。

“さっちゃん”こと四葉五月とは、色々とレシピを交換する仲だ。

彼女の料理の腕も然る事ながら、人徳とでも言うべきものと意志の強さ、観察力の鋭さと心配りには、いつも感心させられている。

料理の腕そのものならともかく、食べる人の事を考えて献立を用意する事では、私は彼女に一生勝てないかもしれない。

エヴァとは好意的中立を続けている。

人間並みの能力に限定したメイド人形1体程度ならログハウス内で運用できる仕掛けを自力開発したらしく、別荘の外でも随分と優雅で文化的な生活を送れているようだ。

買い物は自力でやるか通販頼りだが、それでも格段の進歩と言えるだろう。

そして、最も最近になって知り合ったのが……

「お願いです！　私に高性能ＣＰＵを譲って下さい！」

麻帆良大学工学部に顔を出した際に、いきなり頭を下げてきた大きな丸眼鏡をかけた小柄な女の子。

何処から如何見ても葉加瀬聡美である。

うむむ困った。

アリア達にも使ってるＣＰＵを渡しても良いんだけど、茶々丸搭載の量子コンピュータと比べたら性能は格落ちしそうな気もするしなぁ。

かと言って、量子コンピュータの製造も其れのダウンサイジングも魔法抜きじゃ私には今のところ無理だしね。

こんなところで蝶がはばたいてるとは予想外。

ともあれ、聞くべき事はただ一つ。

「要求仕様と予算を言うです。ただ単に高性能ＣＰＵじゃ話にならないです」

眉を寄せたまま務めて冷静に指摘すると、葉加瀬の顔がさっと朱色に染まった。

「そ、そうですね。私とした事が。大きさが一般ＰＣ用の2～3倍以下で並列処理に優れた可能な限り高クロックなのを。予算は５０万なら直ぐ出せます」

小学生の身で５０万円を捻り出すとは豪気だけど、残念ながら話にならない。

「５０万円じゃ無理です。なので用途を話すです」

「え？　あ、はい。漸くロボットの試作に取り掛かる許可が下りたのですが、私が求める動作を実現するにはＣＰＵのパワーが不足していまして、先輩に相談したところ千歳さんを紹介されたのです」

何故に用途を訊かれるのか判然としてなさそうながら、ここで黙り込めば断られるのは理解できたのか饒舌に私のところに来た経緯を話してくれる。

「先輩方が作った試作品でも足りないとなると、自律行動式の人間大ロボットです？」
「はい！　私の夢なんです！」
キラキラとしているが、何処か底意が読めない視線を向けられ、私は大きく肯いた。
「解ったです。ロボットの開発に一枚噛ませてくれれば試作機に必要な分は譲るです」
「本当ですかっ？」
途端に襟首掴むように縋り付いて喜色を露わにされるが、いかんせん互いに１０歳未満の起伏の少ない女児では息苦しいだけだ。
「ただし、私が作るつもりの物は『工芸品』なので量産が利かないです。作る工程も見たければ1週間後の放課後に此処に来るです」
なので、葉加瀬の両手を手で外させつつ提案する。
工学部所有のクリーンルームのブースの予約やら材料やらの用意があるから、他人の目がある所で直ぐには制作に着手できないからね。
「解りました！　絶対来ます！」
しかし、その言葉を吐いた事を彼女は1週間後に後悔する破目になったのだった。

「は、半導体をメスで加工するなんて……非常識です！」
初めて私のメス捌きを見る人にありがちな叫びを聞き流し、銀系の合金でムカデ足を付けたシリコンの薄板に極薄く筋彫りを施し、上に薄い金箔を重ねる。
筋彫りに沿ってくり貫いて配線として埋め込み、もう一枚のシリコンの薄板にメスで細かい穴を開けてゆく。
「静かにするです」
短く言い捨てて、配線した板の表面と、もう一枚の板の表面をメスで極薄く削り均して重ね合わせて溶着する。溶接などと言う無粋

な手段を採るまでもなく、完全鏡面に加工された2つの物質が吸い付くように1つへと合体したのだ。

「え？」

更に筋彫りして金箔を……と工程を重ねること3時間弱、数万もの階層状構造の集積回路に冷却用のサーマルアースをも配線した、制作と動作に魔法を使わないと言う条件を課した中では過去最高のCPUが完成した。

「よ、ようやく完成ですか……」

会話も殆ど無し、見る以外の行動も禁止され、細か過ぎて単純作業にしか見えなかっただろう工程を延々見続けるのは流石に辛かったらしい。

だが、これで量産は不可能だと言った意味は理解して貰えたと思う。

「素晴らしい技術です。これを再現するには現状のロボット工学では無理です。サーボの遊びがナノ単位でもあったら致命的ですが、それが無ければ今度は磨耗が……」

ぶつぶつと自分の世界に浸って考え事を始めた彼女を置いといて、完成させたCPUを手際良く厳重に梱包してゆく。

……葉加瀬が我に返ったのは、クリーンルームから連れ出されて私が使わせて貰ってる研究室へとお持ち帰りされてから2時間以上も経ってからだった。

流石は科学に魂を売り渡したと既に公言してるだけはあるマッドっぷりである。

後日、ほぼ同型のCPUを搭載したモバイル型スパコンをプレゼントしたら感激の余りかキスの雨を降らせてくれたので、お返しに性魔術で軽く天国の扉を覗いて来て貰った。

折を見て疲労回復に良く効く上に気持ちも良くなるマッサージも試してみようかな。

場合によってはアスナや木乃香に話を通した上で。

第２７話（後書き）

今回は葉加瀬が登場しました。そして自重してないです、ウチの主人公（笑）。

第２８話

「嬢ちゃん、悪いが」「捕まって貰うぞ」「召喚主様の御注文でな」
今、私を囲んでいるのは金棒担いだ大鬼３匹。
上空は烏天狗みたいなのが数匹飛んでおり、時折急降下で突っ込んでくる。
本来なら頼みになるべき弐集院先生は、引き離された挙句に錆びた矛を構えた骸骨の群れに包囲されてて此方に援護を飛ばす余裕は殆ど無さそうである。
今夜は何時に無く攻勢が強いと思ったら、どうやら私が目当てらしい。
「お断りです！」
言い放ちざま無詠唱で《紅き焔》を真正面の赤い大鬼のどてっぱらに撃ち込み、全身に巡らせた気で強化した速度で其の横をすり抜ける。
「サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス・カプトゥーラエ！」
振り返りもせずに放った光属性の《魔法の射手》は、左右の大鬼に３本ずつ、上空で旋回している烏天狗５匹に１発ずつ命中し、彼等の自由を一時束縛した。
烏天狗は４匹が墜落し、そのまま光になって送還されてゆく。
……どうやら打ち所が悪かったらしい。
「ぬうんっ！」「なんのっ！」
あ、大鬼相手の拘束には役者が不足してるか。
「サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス！」
敵に向き直ってから、今度は破壊力特化の《魔法の射手》を１１矢、短縮詠唱で撃つ。
何本もの魔弾を食らった鬼達が次々と送還されてゆく。
……ちっ、１鬼残っ…「たあっ！」
真後ろから虚を突いて伸びて来た火閃に押され、思わずつんのめ

らされる。
なので、寧ろ勢いに逆らわず前転。
途中でスカートの中身を晒してしまう体勢でゴロゴロと転がされるが、用心の為にアンダースコートぐらいは着てるので慰めぐらいにはなる。
実ダメージの方も《風楯（デフレクシオ）》《炎衣（カペラ・イグニス）》《光鎧（アダマス）》と言う3属性の防御呪文重ねがけを撃ち貫けなかったらしく、殆ど無いし。
嫌な気配がしたので転がる途中で強引に右に方向転換して立ち膝になると、直ぐ左をバチバチ言いながら閃光が通り抜けて行った。
多分雷撃魔法だろう。
身体ごと振り返りつつ立ち上がると、数えるのも馬鹿らしいほどの妖魅どもが思い思いの武装で遠巻きに待ち構えていた。
いったい何人寄越して来てるものやら。
弐集院先生も当てにするのは酷な戦況だから、ここは切り札の1枚2枚は切らなきゃ援軍来るまで持たないかもね。
「メー・アルメット・フェリルル！」
魔導機杖アリアの拡張機能である魔導鎧フェリルルに相当する漆黒の甲冑を《装剣》魔法で身にまとい、ついでに家伝の術符から転じさせた小太刀を右手に握る。……あ、今回出したのは割りと出来が良さそうだ。
「やれいっ！」
まだ諦めるつもりが無いと見て妖魅どもがけしかけられるが、残念ながら一手遅い。
「《制圧砲撃》ですっ！」
漆黒の甲冑の肩部やすねの部分から顔を出した投射器から放たれた多数の魔弾は、馬鹿な術者の命令に逆らえない哀れな化け物達の群れの真っ只中で一斉に炸裂し、その多くを火だるまに変えた。
って、まだ突破して来るっ？！
プスプスと煙を上げながら突っ込んでくる2m級の青い大鬼が振り下ろす金棒をかわしながら、高めた気を小太刀に集束して逆袈裟

気味に振り抜く！
かわされた！？
「なかなかやるな。だが、ワシには通じんっ！」
上体が泳いだ隙を突かれて脇腹に衝撃が走り、ボールのように軽々飛ばされる。
其の後を追って、件の大鬼が……って拙い！
「ぬおっ！」
初っ端でも使った無詠唱《紅き焔》で突進の勢いを削ぎ、追い討ちで放った単発の魔弾で牽制している間に何とか体勢を立て直す。
視界の隅を誰かが麻帆良内に向かって侵入して行くのが見えるけど、目の前のヤツを優先しないと殺されるか誘拐されるかの二択しか有り得ない。
「ト・テイコス・ディエルクサストー　サギタ・マギカ・コンウェルゲンティア・イグニス！」
小太刀に魔法障壁突破効果を付与した火属性の魔法の射手を１１本束ね、気による身体強化をも最大限発揮しつつ横薙ぎに胴体へと切りかかる。
「面白いっ！」
大鬼も真っ向勝負。勢い良く振り下ろしてくるトゲトゲの金棒は、無策無防備で受けてしまったら甲冑ごと肉餅にされるに違いない。
ならば、更に半歩《瞬動》で踏み込む。
「がっ！！」「くうっ！！」
結果はほぼ相打ち。
向こうの攻撃の打点をずらし、此方の斬撃を集束炎矢と共に叩き込んだのは良いが、ずらしたとは言え手だれの大鬼が振るう金棒の威力は凄まじく、それなりに大きいダメージを受けて動きが止まったところに捕縛用の呪符を多数打ち込まれて私も殆ど行動不能にさせられた。
「やれやれ、手間をかけさせてくれる」
「麻帆良に侵入する余力が無くなったじゃないか」

「お嬢ちゃんの会社にはたんまり身代金を払って貰わないとねえ」
凄い身勝手な事をほざきつつ顔を見せるのは、和装の術者が１０名ほど。
恐らく未だ隠れて警戒してる奴等もいるんだろう事を考えると割りと大部隊だ。
不動金縛り系列の捕縛呪文と封魔呪文を幾重にも掛けられたらしく、手足どころか声帯すらピクリとも動かせない。
が、惜しむらくは詰めが甘過ぎる。
『アリア、カートリッジロード。斉射３連』
『みっ』
私が呪文を紡ぐ手段は肉体のみに非ず、ついでに退魔呪文慣れしてるどころか麻帆良の退魔結界を一部逆用して魔法抵抗力を上げてるから、並みの術者が使った簡易式の封魔呪文如きで魔法能力を抑え切られるほど柔でも無いのだよっ！
「ぐわっ！」「なにっ！」「バカなっ！」
私がまとう漆黒の甲冑に内蔵されたギミック頼りで無誘導射出した魔弾による弾幕で敵を射竦めて時間を稼いでる間に、カートリッジシステムの恩恵……呪封筒に込められていた魔力の後押しを受けて半ば強引に金縛りを引き千切る。
「おしおきの時間ですっ！」
対大型妖魔戦用の野太刀を構えた剣士もおっとり刀で参戦して来たようだが、火属性と光属性の《魔法の射手》、魔導鎧からの炸裂魔弾による弾幕、それに呪符の小太刀の代わりに大容量ベルトポーチから出したキャリコピストル型電動ガンから放たれる呪紋加工済みＢＢ弾を雨あられと大盤振る舞いされる前では防御姿勢を余儀なくされる。
ただし、こんな無茶な攻勢は５分と持たせられない。
それは向こうにも見抜かれてるのだろう。
強行突破されても確実に数人は殺せる弾幕密度で牽制している事もあり、向こうの連中は無理をせず息切れを待つ戦略に出ているよ

うだが、実のところ其れは私の思う壺だ。
ようやくに敵を倒して駆けつけてくれた弐集院先生と麻帆良最強戦力である幼女吸血鬼の援軍を得て、馬鹿どもに泣き目を見させるには、それから3分も経たなかった。
あー、死ぬかと思った。

ちょーっと色々やり過ぎてたかもしれない。
今朝未明に起きた敵襲に伴う私自身の誘拐未遂事件を振り返って、そう思う。
犯人だったチンピラ術者どもは、義憤に駆られた麻帆良の魔法先生達の手で記憶を強引に抜かれた挙句に息の根が止められた……らしい。
流石に今回の事件は派遣元の組織でも庇う気を無くしたみたいで、届いた抗議もかなりおざなりな内容だったせいのようだ。
『そのような連中は我々の与り知る者ではありません。言いがかりは止めて下さい』
つまりはトカゲの尻尾切りである。
だが、残念ながら話はそれで終わらなかった。
彼等の暴走を招いた一因である私の今後を如何するかが問われざるを得ないのだ。
今まで通り学園警備に就くのか、他部署に回されるのか。
そもそも今後も麻帆良に居続けて良いのか否か。
色々と糾弾されるのも覚悟で望んだ学園長との面談は……
「千歳ちゃんの好きにすると良いぞい」
あっさりとフリーハンドをいただけてしまった。
むう。判断に困るが、ここは大事を取って前線から一歩引いておくべきか。
「では内勤の方に回らせて貰うです」

今回の事件では軽い怪我だけで済んだとは言え、次こそは私や弐集院先生がただで済まないかもしれないしね。
「ふむ。では弐集院君と明石君に話を通しておこう」
「お願いするです」
こうして私は実戦経験を積む機会を失い、後方勤務へと回ったのだった。
まあ、治療と電子戦と現場復旧は私の十八番だから、適材適所とは言えるのかも。

〔ｓｉｄｅ：？？？？〕
口さがない者達が泥水と侮蔑する液体、その渾名をせせら笑う如く芳醇な香気が白磁のカップから立ち昇り、白皙の少年の鼻腔を快く刺激する。
今回彼が飲んでいる珈琲の出所は、関東魔法協会から魔法世界の難民キャンプで活動しているＮＧＯ団体宛てにコンテナごと封印箱に入れて送られて来た救援物資だ。
もっとも彼は自分達で消費する分は魔法世界で仕入れた物と入れ替えて、実際に難民の手に渡る物資を減らさぬよう配慮してるだけ随分と性根がマシなのだが。
何故にこんな面倒臭い真似をしているのかと言うと……
「相変わらず此処の豆は美味い。麻帆良のじゃなかったら是非ともまとめ買いしに行きたいところなんだけど、あそこは監視がきついからね」
と言う訳だ。
独り言で思わずボヤキが出るぐらいだから、よほど風味が違うのだろう。
たっぷりと魔力を含ませた作物と言うだけでも魔法世界の住人にとっては充分以上の甘露になるのだが、これに一流料理人の舌を持

つ主の目にかなう味を実現するため頑張って育てようとする農作経験豊富な精霊達に、気象条件自由自在の農園用ダイオラマ魔法球までが連携してるのだから当たり前の結果かもしれないのだが。

例えれば魚沼産コシヒカリを難民にただで配ってるが如き所業である。

「彼女を我等が『テラ・アルバ（白き大地）』に勧誘する訳にはいかないんですか？」

そんな少年に話しかけて来たのは、見た目が同年代の少女だ。

もっとも魔法世界は長命種や短命種がゴロゴロしてるので、外見年齢は余り当てにならない事も多いのだが。

「危険過ぎて接触は無理だよ。僕らの事が敵に知られるのは避けたいからね」

「残念です」

果たして少年達が『彼女』と呼んだ人と巡り会えるのか否か、はたまた『敵』と呼んだ相手に察知されてしまうのかどうか、それは現時点では誰にも解らないのであった。

第２８話（後書き）

最後に出て来た連中の正体や今後の出番については秘密です（笑）
。

第２９話

麻帆良学園都市警備の最前線から外れた私が最優先で着手させて貰ったのは、電子防諜網のソフトウェア面……つまりは電子精霊と攻勢防壁の改良だった。

まあ、ウチの“別荘”の管理ＡＩでもある従者フィーリアから提供された防諜用電子精霊旅団の１年前相当の経験データを移植してやっただけなのだが。

しかし、それで取り敢えずの底上げにはなったはずだ。

何せ強化された電子精霊達は、私が発見していた学園側の回線の防備に開いていた穴の大半をがっちり塞ぎ、残りに厳重な罠と警備を敷いたのだから。

……ハードウェアの方も任せてくれれば、逆襲用プログラムを待機させたミニサーバーやら最終安全装置たる回線の物理切断機構とかも色々と組み込んだんだけどなぁ。

次いで着手したのは、アーティファクト『七人の小人』のダミーとなる修復作業用小型自動人形である。アスナとの仮契約を表沙汰にするのは拙いが、他の警備の人がやらかした戦闘跡を復旧するのに彼らを使わないのは非効率極まりないので、影武者として多少の修復作業補助ができる彼らを新規に作ったのだ。

だが、それが後々面倒事の種になると私は気付いていなかったのだった。

〔ｓｉｄｅ：？？？？〕

いや～ホントまいったネ。

過去の麻帆良祭への時間跳躍には一応成功、学園祭の雑踏に紛れて地下構造物へ潜入するのも、そこに取り敢えずの拠点を作るのも

成功したガ、そこからが全然だヨ。
　未来で調べた資金稼ぎ用の相場情報も、戸籍取得の為も兼ねて集めておいた親中国派の与野党代議士や高級官僚の汚職情報も、調べてみたら色々食い違いがあったネ。
　これじゃ予定通りの資金は用意できそうにないし、麻帆良への入学も危ないヨ。
　麻帆大工学部や学園のデータベースの警備も予想より堅くなてたシ、葉加瀬が現時点で人型ロボットの製作を順調に進めてると言うのも事前調査に無い出来事ネ。
　ここはホントに私の過去の麻帆良なのカ？
　航時機の副作用は先刻承知だたガ、予想以上の窮状ネ。
　先ずは情報収集に徹しないと、この先動きようがないヨ。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕

　学園祭も中間テストも終わり、我等がクラスも騒がしい平穏を取り戻した。
　木乃香やアキラと一緒に野良猫さんや野良犬さんや野鳥の皆さんに囲まれてモフモフぬくぬくを味わっていると日常の有難味が良く解る。
　週に一度の贅沢な癒しと言うところだ。
　具合の悪い子を治療するって代金払ってるけどね。
　麻帆大病院でのお茶会も相変わらず週に一度は続けているが、参加する顔馴染みが櫛の歯が抜けるように一人また一人減ってゆくのは寂しいものである。
　戦争に出征した時の武勇伝を語ってくれたお爺ちゃんも、故郷の郷土料理について教えてくれたお婆ちゃんも、もう二度と会えない人になってしまった。
　あと何年続けられるか解らないが、続けられるだけは続けて行き

たいと思う。
　ここの御老人達に教えられて脳内図書館にファイリングした事柄も多いし、私自身まともな係累のいない人なので茶席を囲んでると不思議とホッとするからね。
　麻帆大工学部通いも続けてはいるが、最近では其の時間の８割ぐらいを葉加瀬と一緒に過ごしている様な気がしたりする。
　いや、人型ロボットの協同研究をするだけでなく、彼女の生活習慣にはツッコミどころが多過ぎるので、ついつい家事全般や体調管理まで面倒を見てしまっているからだ。
　それでも超らしい女の子が接触して来てるかどうかは気を配っているんだけど、彼女が様子見に徹してたら発見できる自信は無い。
　とは言え、過剰に気にしても仕方無いんだけどね。いるとは限らないし、いたとしても私が想定している彼女と同様な存在である保証も無いし。
　アスナの学校での成績は春休みを挟んで一気に上昇局面を突っ走り、今では上位陣にすら食い込む勢いで、担任の弐集院先生を戸惑わせつつ喜ばせている。
　戦闘に関しても《魔法無効化》能力の攻撃的応用である《無極而太極斬（トメー・アルケース・カイ・アナルキアース）》を会得し、一般的なマジックアイテムの使い方と整備方法も一通り把握し終えているので、技能的な面では免許皆伝の状態だ。
　なので、今の彼女に必要なのは地力の底上げと戦闘経験の上積みだと思う。
　とりあえず魔力と気を全開にすると日常生活レベルで何とか動けるが、それ未満ではピクリとも動けなくなる手枷と足枷のセット『吸縛枷』を渡して咸卦法の運用効率向上に取り組んで貰っている。性魔術が効率よく出来る条件が毎日整うならば、別にこんなアイテムに頼らずとも訓練が行き届くんだけど。魔力と気の総量もついでに増えるし。
　戦闘経験の方を稼ぐのは、麻帆良学園の警備をさせるのは拙過ぎるのでエヴァに頼むのが一番良さそうな気はするけど。……私単独

じゃこっちの主力攻撃手段と防御手段がアスナにほぼ無効化されるので、ほとんどマトモな相手ができないんだよね。

木乃香は、神鳴流の基本と其れとは別流派の薙刀術の基本については既に修め、術理の考察とすり合わせをやる傍ら、魔法の方も着々と覚えつつあったりする。

陳腐な表現だけど、恐るべき才能とでも言うべきだろうか。

吸縛枷は渡してあるけど、日々の訓練で消耗する分が多いので未だ使うまでも無い。魔法学校で習う必修呪文を覚え終わるまでは、効率向上に特化した修練は時期尚早なのだ。

ちなみに私自身の鍛錬は遅々として進んでないと言うか、殆ど伸びた実感が無い。

魔法先生や魔法生徒の皆さんに配布する用に開発した量産ポーションであるミニペットボトル入り治療薬や魔力回復薬の製作に加え、学園長経由で国から依頼された低レベル放射性廃棄物処理用魔法装置の開発などで忙しかったからだ。

ううう、最近純粋に自分の趣味だけで選んだ研究も積みゲーもできてない。

憂さ晴らしはちょこちょこしてるから、ストレスで爆発するほどじゃないけどね。

さてさて、今日もお仕事だ。

……警備の皆、最近は修復作業サボってんじゃないかな？　前回のシフトなんか一晩で17箇所も直さなきゃならなかったんだし。

アスナと仮契約して『七人の小人』に助けて貰えたから何とかできたんけどね。

などと油断をしてたのがいけなかったのか、認識阻害と人払いと記録阻害の魔法、ついでに道路工事用のカラーコーンに守られてダミーゴーレム達と共に戦闘被災現場の復旧作業をしていた私は、それに気付くのが決定的なまでに遅れてしまったのだ。

そのツケは、その翌朝の教室……今、支払う事になったらしい。

「Ｏ－１（おいち）に記録された画像に映ってたアレは何なんです

！？　対比から言って人間で無いのは明らかです！　まさか実用レベルの小人型ロボットを作ったのを黙っていたのですか！？」

何時に無く激しい葉加瀬の剣幕にたじたじとなるが、途中で無詠唱《認識阻害》を発動させ、周囲の者達には話の内容が当たり障りの無いものに聞こえるよう細工する。

こういう咄嗟の時にコイバナ的ネタしか誤魔化し方が思いつかない私が憎い。

「あれはロボットじゃないです。詳しい事は昼休みに話すですから、今のところは自分の教室へ戻って下さいです」

「わかりました千歳さん。絶対ですよ」

何故に対生物用の《認識阻害》と対機械用の《記録阻害》と言う両方の妨害魔法をすり抜けたのか解らないけど、０－１は葉加瀬が手掛ける夢の第一歩となるべき第一号試作人型ロボットの名前だ。

彼女に関する記憶を忘却させるとなると、下手をすれば一時期のアスナ並みにパーにしてしまうほど強力な記憶封印が必要となるかもしれない。

覚悟を決めねばならないだろう。

魔法について打ち明け、容れられねばオコジョとなる覚悟を。

場合によってはアスナや木乃香をも交え、前世を含めた全てを語る覚悟を。

ついでに覚えの無い色恋沙汰の噂を立てられる覚悟を。

葉加瀬への打ち明け話は、昼休みの中庭に《認識阻害》と《隔離結界》の魔法を用いて作った内緒話用スペースにて始まった。

「まず語らねばならない事は、現代科学で有効な仮設を未だ立てられてない伝統技術『魔法』が実在する事です」

そう言いながら幻術《別魅》で２人になって見せると、葉加瀬の目は眼鏡の奥で真ん丸になった。

「こ、これは!?　良く出来たホログラフ？　いえ、今の技術ではこれほど精巧な投影像を日向に出現させる事など不可能なはず！って、これは実体があるっ!?」

ペタペタと私と分身の両方に触って感触を確かめているが、消滅するほどのダメージではないので分身は仮想的な実体を保ち続けていたりする。

「私が使える魔法には他にもこんなのがありますです」

そう言いながらポケットから取り出すのは仮契約カードに似せたダミーゴーレム召喚用のキーアイテムだ。

「あであっと、です」

起動用キーワードにより呼び出されたのは、7体のドワーフ型ウッドゴーレム。

「恐らく此れがO－1に記録された人型の正体……魔法で動く木の人形です」

「な、なるほど……どうして黙ってたのか聞いて良いですか?」

分身の術の現物に加えてダミーゴーレムの実物まで間近で見せた結果、ロボットでは無いと言うのは理解して貰えはしたが、当然の如く湧いた疑問もぶつけられてしまう。

ま、ここまで言った以上は最初から答えると決めてる範疇の問いだけどね。

「魔法は本来秘匿されるべきものと定めた連中がいて、その影響なのです。まあ、どこぞの一神教が馬鹿をやったせいで表に出るのを嫌がるようになったです。日本でも明治維新の時に西洋魔法が入ってきたせいで魔法を秘匿させられるようになったです」

ちょいとばかり毒を混ぜているのは、魔法が秘匿されてなければ日本は未だ列強の一角を占めている可能性が高かったからである。

物理的な物量ならまだしも魔法文化の質は二流三流の米国如きが、ガチで二千年を遥かに超えた呪術文化を連綿と伝えつつ外国から更なる力と知識を取り込んで魔改造を重ねて凶悪化した日本の伝統呪術に勝てる訳が無いのだ。

「そうですか。でも、そんな事を私に話して良かったのですか？」
おっと、妙な方向に思考が流れてた。修正修正。
「本来なら良くは無いです。なので取り引きをして欲しいです」
ここからが私にとっての本題である。
葉加瀬ほどの娘を処分してしまうのは本気で嫌だし、下手したら超鈴音まで敵に回す危険を考えたら懐柔一本槍だけが私の取れる選択肢だ。
「黙っていろ、さもなくばと言うやつですね」
脅迫なんて後が怖くて選べないが、幸いにして良心に訴える以外の駒が手持ちにある。
「いえ、葉加瀬にも充分メリットがある話です。私の手持ちのマジックアイテムに、中で過ごす時間が最大で１４４倍になる研究施設があるですが、そこの一画を葉加瀬が自由に使えるようにすると言うのはどうです？　オマケで加速した時間の中にいる間は歳を取らないアイテムもプレゼントするです」
科学に魂を売った彼女ならば無視するのは限りなく難しい誘惑。
「くっ、そ、それは……」
自分専用の研究室での研究三昧な日々を普通では叶わない程たっぷり贈呈するとの条件を耳にして、葉加瀬は明らかに心を揺らされていた。
「更に私の計画を手伝ってくれるなら、私が持ってる魔法と魔導工学の知識を教えても良いです」
そこで更なるダメを押す。
「その計画とは何をどうするものですか？」
「滅びの危機に瀕してる魔法世界を救う計画です。理論的には既に完成してるですが、他人の意見や手助けが欲しいのです。一人だとどうしてもミスに気付き難いです」
人道的な観点からは反発を覚えないであろう目標を掲げた私の計画への助力を条件にした更なる未知の知識の提供だ。
しばし沈黙の中で見詰め合う私と葉加瀬。

「解りました。魔法を秘密にして、計画に協力すれば良いんですね」
「そうです。無論Ｏ－１の制作にも今まで通り協力するです。魔法は工芸的側面が強い技術ですから量産に向かないので、彼女の開発は充分以上に意味があるのです」
２人の間にたゆたっていた静けさは破られ、今ここに契約は結ばれた。
「そうだったんですか……。こちらこそ歓迎します」
こうして私は同志を増やすのには成功したけど、アスナへの説明どうしよう？　木乃香は割りとさらっと受け入れてくれそうな雰囲気あるけどねぇ。

放課後まで悩みに悩んだ末、結局は真正面から紹介する事にした。だが、それが功を奏したのか、すんなりと話がまとまったのは僥倖と言えよう。

第２９話（後書き）

またまた新たに謎の人が登場しましたけど、正体はまたもや秘密です（笑）。

あと、Ｏ－１はＯｒｄｅａｌ－ｏｎｅ、試金石の一番目と言う感じの意味です。

第３０話

稼動実験中の試作人型ロボット１号“Ｏ－１”に《認識阻害》と《記録阻害》の双方が効かなかった理由は、その後の調査で彼女が精霊化しかかっていたせいだと判明した。

純粋な機械でも無いが生物や精霊や魔物でも無いと言う中途半端な状態になっていたのが、あの面倒な状況を生んでしまったらしい。

ついでに言えば精霊化を促したのは、葉加瀬が注ぐ莫大な愛情と熱意に世界樹の魔力が私と言う導管を通して作用した結果みたいな形跡も無くは無いみたいであった。

幾重もの理由で私のミスとも言える事態である。

それが葉加瀬の仲間入りと言う結果に繋がったのは、もっけの幸いであった。

しかし、毎度毎度幸運を期待する訳にはいかない。

もっと実戦的な術式への改良と周囲への警戒の強化に務めなくては。

「ｓｉｄｅ：神楽坂アスナ」

千歳が見覚えの無い女の子……葉加瀬聡美を連れて別荘に転移して来た時にはビックリしたわよ、もう。

でも話をしてみて魔法の秘密を漏らしそうにない性格みたいなのと、マッド入った時の千歳と同じ空気背負ってるの見て納得したわ。

機械弄りで暴走してる時の千歳をこの子に押し付ければ楽になりそうだなーと。

仮契約でも何でも好きにすれば良いじゃない。

どんなアーティファクトが現れるか、ちょっとは興味あるしね。

「アスナ、木乃香、葉加瀬、話があるです」

思い詰めた顔して何の話があるんだか。
少し気合い入れてやらないと拙いかもね。
「実は、私には前世で男だった記憶と、この世界に私がいなかった場合にどうなるかの大まかな知識があるです」
え？
「へー、そうなんかー」
「千歳さんの知識の出所はそれでしたか、納得です」
ええっ？　２人ともそんなあっさり。
「今まで秘密にしてて、ごめんなさいです」
とは言え、向こうの方から先に謝られたら許すしかないわよね。
今の今まで隠してたとは言え、ちゃんと千歳から打ち明けてくれたんだし。
「別にええよー。言い難い事なのはウチにも解るし」
「身体は女の子だもんね。そりゃ言い難いか」
「それより千歳さんの存在が歴史に影響してると言いたげな台詞が気になりますね」
「そう言えばそうね」
「むしろ『私がいない歴史』の流れから外れようと企んでると言った方が正確です。滅びかけてる魔法世界を救うです」
魔法世界を救う！？　まさか千歳が！？
「コズモ・エンテレケイア（完全なる世界）！？」
ガトウさんやナギさんの敵だったの！？
「あんな古典魔法至上主義の化石と一緒にして貰ったら困るのです」
でも怒りを叩き付けたはずの千歳の眉は思いっきり寄って、おまけに明らかに演技とは思えないぐらい頬が盛大に引きつっていた。
「へ？　どういうこと？」
確かあいつらも『世界を救う』とか言ってた気がするんだけど。
「魔法世界の危機は、要するに魔力不足です。ウチの別荘でも使ってる魔力転換炉を改造して大規模に設置すれば、犠牲無しに解決可能な問題なのです。『世界を終わらせる』儀式なんて物騒なものは

百害有って一利無しの愚行なのです」
良く解らないけど、千歳が自信満々で言うって事は勝算があるって事よね。
それに魔法世界の命運って言うなら私にとっても他人事じゃない。
「私にできる事ってある？」
なら、手伝うのが友達ってもんよね。
「アスナも、木乃香も、葉加瀬も、協力してくれるって言うなら仕事はあるです。でも協力してくれなくても何とかするですから、自分の身の安全を最優先して下さいです」
なのに千歳ったら相変わらず水臭いんだから。
「協力するに決まってるじゃない！」
「ウチも千歳ちゃんを手伝いたいわー」
「私も既に協力すると約束してますから、今更ですね」
こんなとこで尻込みするなら、自分から魔法に関わる訳無いじゃない。
「ありがとうございますです。改めてよろしくです」
スッキリした笑顔の千歳と私達は、こうして改めて友情を誓い合う事になった。
予期せぬ波乱が待ち受けてる事を気付きもせずに。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕
きっかけは不幸な偶然と、自らにとっての最良を求める決断の積み重ねだった。
大河内アキラが瀕死の重傷を負った子犬を見つけたこと。
アキラが私や木乃香の友達だったこと。
近くに獣医も私もおらず、動物病院も近場に無かったこと。
その代わりに木乃香がいたこと。
今にも死んでしまいそうな子犬に対して、木乃香が私から習った

治療魔法の使用を躊躇わなかったこと。
そして……
「なあなあ千歳ちゃん、どうしたらええん～!?」
木乃香が思っていたよりも遥かにアキラの精神抵抗力と子犬への愛情が強く、認識阻害にも記憶を操作して魔法を使った事を忘れさせるのにも失敗したばかりか、虚ろな目でヘラヘラ笑って口の端からよだれを垂らす有様に追い込んでしまった事だ。
これは、後で猛特訓が必要かな?
ともあれ、今は……
「このままにしておく訳にもいかないです。認識阻害が効いてるうちに運ぶです」
ちゃんとした措置ができる場所に連れて行かないと本気で拙過ぎる。
早く治療しないと取り返しのつかない事態になりかねないからね。
一命を取り留めるどころか完治していた子犬を近くの芝生の上に移させてから、私達は物陰に隠れて起動したシフト・ポータルで私の“別荘”へと急いで移動する。
そうして人目を気にせず魔法が使えるようになってからが、いよいよ本番だ。
「シス・メア・パルス・ペル・デケム・セクンダス　ミニストラ・コノカ・チトセ・ヤツカ」
木乃香の莫大な魔力に私単独で対抗するのでは手遅れになる危険が高過ぎるので、１０秒間だけマスターである木乃香の魔力を借りて治療にのぞむ。
正式な仮契約なのに１０秒で抑えてるのは、私の技量が彼女の全力発揮に余裕を持って長時間耐え切って施術するには足りないと言うだけの話である。性魔術の訓練で彼女の気と魔力の総量が増えているとは言え、私が彼女の成長に追いつけてないのは情け無い。
ともあれ、アキラの頭の中に埋め込まれていた木乃香の記憶消去魔法を左手をズブリと側頭部から差し込んで引っ張り出し、右手に

出したメスでさっくりと切除する。
　当然、患者の精神に毛ほどの傷もつけず、それでいて呪いの術式は欠片も残さない。
「ひゃー、相変わらずあざやかな手つきやわー」
　契約執行開始から約5秒半、幻獣朗の技で補助しても此の結果ではドクター・モヒカンの手練にはほど遠いと言わざるを得ず、まだまだ要精進だと自覚させられる。
「ともあれ、この件での記憶操作はもう無理と思った方が良いです」
　アキラまで裏に関わらせるのは気が進まないんだけどなぁ。
「あう。ウチ、オコジョにならなあかんのやろか」
　政治的な意味で其れは拙いので、下手をすればアキラの方が闇に葬られたり、無理に記憶を消して廃人に追い込まれる危険の方が高いと予測しているが、それは言わぬが花か。
「誠心誠意謝ってから、魔法の事を黙っていて貰うのに失敗したらそうなるです。その時は御一緒するです」
　もしくは私が木乃香の罪を全部被らされてオコジョにされ、魔法世界にあるオコジョ刑務所に収監されてしまうか、かな。
　ま、そういうドロドロとした損得勘定抜きで説得に応じてくれたら万々歳だけど。
「ありがとうなー。でも、ええよ。これはウチの責任やわ」
　魔法を知るのは危険な事もあるけれど、その分できる事だって多くなるからね。

「ホンマごめんなー。ウチ、取り返しのつかない事するとこやったわ」
　三つ指ついた見事な土下座を披露しているのは木乃香で、わたわたと困惑して周囲に助けを求めるが如き視線を彷徨わせていたが、私を見つけて少しだけ嬉しそうに微笑む。

でも安心するのは未だ早い。
「アキラの友人であり、木乃香の師匠であり従者でもある身として、弟子であり主でもある御方の不始末を深くお詫びするです」
こちらも目が合った次の瞬間には上体を斜め３０度に前傾させたお辞儀を照覧して貰わねばならないのだから。
「ど、どうしたの２人とも。それより子犬は？　ここは？」
案の定困ったか。
そりゃ目が覚めたら見知らぬ場所に連れてこられてて、友人が２人して自分に謝罪してるなんて状況じゃ驚かない方が不思議だろうしね。
「子犬は助かったです。でも助け方に問題があったです」
続けて詳しい説明を述べようとした私を遮って、木乃香が後を引き受けた。
「あん時ウチが使った魔法は内緒にせなアカンかったんや。せやからアキラに忘れて貰う魔法かけたんやけど……かけたんやけど、失敗してしもてなー。危うくアキラが大変な事になるとこやったんよ」
頭を一切上げぬままで、声の震えを極力抑えようと努力して。
「良かった、助かって……。八束も木乃香も気にしないで欲しいんだ」
ホントお人よしと言うか何と言うか。
だから助けたかったし、特設動物病院に関わるのも許してるんですし。
……私以上に動物達の方が気にするのですよ、そういうのは。
「せ、せやかて……」
微妙に木乃香は納得できてなさそうだけど……
「木乃香、そう言ってくれてる以上、気にしないようにするのが礼儀です」
「そうなんやけどなー」
「相手の居心地を悪くしても仕方が無いのです。で、ここからがお願いと提案です」

謝罪が一段落したばかりで悪いけど、こっち側の都合に付き合って貰わなくては。
「なにかな？」
「魔法の事を黙っていて欲しいのです」
「良いよ」
我ながら虫の良いお願いだったが、即答で諾意を告げてくれたのは嬉しい。
「ありがとうございますです」
「おおきになー」
アキラの性格なら、これで多分口止めは大丈夫だろう。
もう一度深々とお辞儀をしてから、あの時に木乃香が説得ではなく記憶消去を選んだ理由に関わるだろう提案へと移る。
「で、アキラには3つ選択肢があるです。1つ目は魔法を見なかった事にすること、2つ目は私達から魔法を学ぶこと、3つ目は魔法は学ばず私達の庇護下に入る事です」
魔法の伝授役を麻帆良学園に頼むのは論外と言うか、それをやったら黙っていて貰う約束が台無しになるので、アキラが心身健常で過ごすには此の3つ以外無いはずだ。
「ただし、どれも程度の差はあれ危険な道です。魔法は大きな力ですから、誰かを助ける力にもなりますが、容易く誰かを傷つける力にもなるのです」
「どれ選んでもウチらがアキラを守ったるからなー」
ううむ、こういう時の木乃香って強いなぁ。
私じゃ言えないような台詞を本気で吐いてくれるし、それが実現できそうな頼もしさも自然と醸し出してるんだから。
「考える時間を貰えるかい？　正直いっぱいいっぱいなんだ」
あ、それもそうか。
人生そのものに関わる選択を直ぐに答えろってのは流石に酷だよなぁ。
「決心したら、人の耳が無さそうなとこで私か木乃香に言うです」

なら、少々厄介でも猶予期間を作ってあげるのが友達の務め、かな？

「それでええのん？」

「何とかするです」

急いで身を守る力を得ないと麻帆良から外出するのにも危険が伴う私達とは状況が違うから、影から見守って護衛するだけでも如何にかはなるはず。

彼女の護衛に回すリソースぐらいは身を削ってでも捻出してみせようじゃないか。

「ありがとう。良く考えてみるよ」

木乃香と私に向けてくれた底意の無さそうな笑顔に心をくすぐられながら、私達は“別荘”を出て現実空間へと帰還する。

うちの異相空間を利用した別荘は、ダイオラマ魔法球より出入り時間の制限が緩くて実に便利なものだと、こういう時にはしみじみ思う私だった。

第３０話（後書き）

危険が一杯な裏に関わらせたくない親切が、かえって逆に働く事もあると言う話。

そして前世ばらしイベントです。まあ全部は語ってませんが、これでも充分な気も。

第３１話

「この子達の治療にも魔法を使ってるの？」
特設動物病院に集まった猫達に擦り寄られながら、微妙に頬を赤くして問い掛けてくるのは大河内アキラ。
先日起きた事故で魔法の存在を知った一般人だ。
「そうです」
「そう。……なら私にも魔法を教えて貰えるかな？」
簡潔明瞭に答えた私に、アキラは先日保留していた重大な選択の結果を返してくれる。
「了解です」
それは私と木乃香が提示した選択肢の中では最も望んでいたもので、同時にできれば選ばずに済んで欲しかったと言う矛盾した想いを抱いていた回答であった。

これから魔法や魔法工学技術を教え込むとなれば、アキラも最近仲間に引き入れた葉加瀬聡美も十二分に魔法関係者の仲間入りであり、裏の関係者間の不文律で標的から除外される一般人の枠組みをはみ出す事になる。
だが、一人前の技量に成るまで防備の堅い麻帆良学園都市にこもり切りでいると言う訳にもいかないのが浮世に紛れる魔法使いの在り方の難儀なところだ。
人里離れた田舎に魔法学校を設けて未熟な者達が最低限の自衛を出来るようになるまで教育する例が多いのには、それなりに深い意味があるのである。
ならば最善は可能な限り早急に自衛手段を獲得させる事であるのは自明の理。
その為に採れる手段の候補は２つ。仮契約とマジックアイテムに

よる補強だが、今回は併用するのが好ましいと思われる。
仮契約には例えアーティファクトが現れなかったとしても、主から供給される魔力を用いた強化と言う有用な武器が手に入るのと言うだけでも大きな意味があるからだ。
仮契約カード以外で同様な魔力強化ができるアイテムを麻帆良で使ってしまうと悪目立ちするってデメリットもあるので、代用品の用意が難しいってのもあるしね。
と言う訳で、さっそく皆を呼び出してキスを…もとい、仮契約を行う事にした。
原作漫画ではアーティファクトが未登場な2人の物だけにどんな物が顕現するか楽しみだと思いながら仮契約の魔法陣を敷き、呪文を唱え、女の子同士のキスを見守る。
今回は木乃香とアスナと私の3人が葉加瀬とアキラのマスターをやり、葉加瀬とアキラは直接仮契約で結ばない事にしている。……将来は不透明ではあるが。
で、木乃香とアスナを主として出現した物はと言うと……
葉加瀬は『オルビス・センスアリウム・ピクトクス（世界図絵）』、原作漫画では綾瀬夕映の物として登場した魔法関連知識の書籍型データベース。
アキラは『カリス・サルース（医薬女神の杯）』、健康をもたらす薬を湛えた杯の形態を取るアーティファクトで、1日に治せる分に限度はあるが傷病共に有効な逸品。
と言う、割りと規格外な代物が並んでいたり。
心なしか皆の息が荒いみたいだけど、取り敢えず気にしない事にしておく。
「次は私とです」
はてさて、私との仮契約でどうなるやら。
「3枚あるなら1枚ぐらい研究に回しても……」
キスを堪能できるだけでも大歓迎だけどね。
脱ぐと意外と凄い小柄な葉加瀬を左腕を背に回して抱き寄せ、右

手をあごの下に添えて顔を近づけてゆく。仮契約魔法陣を足下に展開、無詠唱呪文待機完了。

そして唇を鼻の頭に寄せてペロリと舐める。

「なっ！？」

仮契約呪文発動、スカカード1枚生成。仮契約魔法陣再構成、儀式続行。

これで研究用に回す分は作ったので、今度はしっかり唇に。

最近の食生活改善でしっとりとしてきた肌触りを楽しみつつ、粘膜越しに性魔法を用いて互いの間に精気の循環を起こす。

くてっと脱力して身を預けて来たのと仮契約の成立は、ほぼ同時だった。

「さて、次はアキラです」

ペロリと口の周りを舐めて葉加瀬の味を反芻しながら目を合わせると、私より遥かに高い背を丸め、広い肩をすくめ、オドオドとしてるように見えながらも熱っぽさをも感じさせてくれる視線をチラチラと向けて来た。

「ほ、ホントにやるの？」

まるで小動物の様な可愛らしさに微笑ましさを覚えながら、容赦無く止めを刺す。

「やるです」

ここまで来たら私だけ仮契約しないのはアキラが不利になるだけだし、今後の修行にも支障が出てしまう。性魔術は治癒魔法を掛ける時の魔力コントロールを鍛えるのに最適な訓練手段だと言う自己欺瞞気味な理論武装もあるしね。

今度は私の方が上を向いてのキス。

爪先立ちでも足りない背丈の差は浮遊術で誤魔化して、舌と魔力を朱唇の間にねじ込んで思う存分蹂躙させて貰う。って極上のクッション材のせいで密着度が少し足りないな。

声にならない悲鳴を噛み殺させて貰いつつ背中を抱き寄せると、彼女もまたぐったりと脱力して女性独特の芳香を強く放ちつつ仮契

約を成立させる。
　カードの絵柄から見て2人ともアーティファクトが出たらしいけど、其れの名前や効果を調べる前に、アスナと木乃香も交えてのお楽しみの時間が始まるようだ。
　……私の方もスイッチ入っちゃってるしね。

　後ほど調べた結果、私を主として仮契約した葉加瀬のアーティファクトが『スケプトルム・ウィルトゥアーレ（力の王笏）』で、アキラの物が『カストルム・マギカ（魔法の要塞）』と言う名前だと解った。
　力の王笏は、原作漫画では長谷川千雨の物として登場した逸品で、電子戦に滅法強い。
　魔法の要塞は、４人用テントぐらいの大きさなのに中で十数人が楽々と生活でき、認識阻害や魔法障壁などの防御手段をも備えた、出し入れ自在の凄く頑丈な石造の砦……まさに携帯式要塞とでも言うべき物だ。
　どちらも何気に希少度が高そうな物なのは、儀式に性魔術を併用した恩恵だろうか。
　後は私やアスナや木乃香の物と同様、制服や腕時計やアクセサリーに護身機能や魔法の補助機能を持たせた物と、別荘へ出入りする鍵にもなる一時的に老化と成長を止められる魔法具を私が作って渡せば当座は大丈夫なはずだ。
　それ以上の重武装を携帯してしまうと学園側からも警戒されるし、それ以前に日常生活に支障が出てしまうほど取り回しが面倒臭い事になるからなぁ。

　そして時は流れ１１月２６日。

この日は、私の誕生日を友人達が初めて祝してくれた記念すべき日となった。

「ったく、もっと早く言ってくれれば色々やったのに」

みんなの誕生日はともかく、自分のはすっかり忘れてたからなぁ。

「ありがとうです。私の初めての誕生日パーティーに来てくれて嬉しいです」

今回は学園長と弐集院先生などからはメッセージカードを貰っているけど、会場にはほぼ児童のみの内輪メンバーばかりが集まってくれている。

会場手配はいいんちょさん、料理担当は木乃香とさっちゃん、設営担当は残りの皆と言う感じで役割分担したらしいのは何となく解る。

……エヴァまで何だかんだ言いつつ参加してくれているのは意外だったけどね。

誕生日プレゼントは、会場に来てくれた人はパーティーそのものが、ここに来てない人はそれなりの物を用意して届けてくれてるみたいである。でも、見るのは後にしよう。

今は皆と楽しむのが礼儀ってものだろうからね。

自然と下がる目尻に困りながら、私はジュースが入ったコップで乾杯の音頭を取った。

学園長からのプレゼントは、今日に限っての女子寮の門限延長許可……まあ、要するに気兼ねなく長々と騒いでても余り心配しないで良いという配慮だった。

地味に有り難い一手である。

弐集院先生からは3人分の食事券だが、ここは確か結構評判の店だったはず。

……機会を見て点心ものか何か差し入れして、お返ししようと思う。

タカミチからは高そうなと言うか事実高価な洋服一揃いが贈られて来た。精霊との交渉能力に問題がある彼の為に、魔力操作ができれば使える呪文を幾つか載せた教本を誕生日プレゼントにかこつけて渡しておいたのがそんなに嬉しかったのだろうか？

……学園式魔法などの技法を導入して試しに作ってみた呪文が私以外の人にも使えるかどうかの実験の一環だったなんて真実は、墓の下まで持って行く事にしよう。

いいんちょさんの父親、雪広の親父様からのプレゼントは甲賀の里への紹介状……今のウチの会社の防諜態勢が頼り無いと言いたげなのがありありと分かる代物だ。

今でも雪広財閥の仲介で甲賀の下忍を何人か回して貰う契約は結んでるけど、それでも足りない分は私の個人技能で補ってるのを危惧しての配慮だろうか。

……雪広さんとこでウチの会社の株を持ってるせいなのかも。

病院でのお茶会仲間の皆様からは、お菓子の折り詰めと遺言書の束……気持ちは分からないでもないけど、遺族差し置いて私に遺産半分とか書いてる人は本気で拙いから。身寄りの無い御年寄りの財産狙いって陰口叩かれるのも少し堪えるけど。

そして一番異彩を放つのが、何故か混じっていた『果たし状』らしき代物である。

期日は明日早朝、場所は森林地区の一角、差出人は不明で逆探知は失敗。

それ以外は『ここに来られたし、雌雄を決しようじゃないか』とだけ記された、どう考えても怪しい手紙ではあるが、私は相応の準備をして行ってみようと思う。

本来なら学園長に通報してから無視するのが賢明なんだろうけど、不思議と学園側を介しないで会っておいた方が良さそうな気がするんだよね。

第３１話（後書き）

お気に入りに登録して下さったユーザーさんの数を見てひっくり返りそうになるぐらい驚きました。本当にありがとうございます。

葉加瀬のアーティファクトが原作で他人用に出た物になりましたが、別に彼女に含むところがある訳じゃなく、単に彼女に合うアイテムが何かを考えた結果です。

第３２話

私の誕生日を祝う贈り物の中に紛れ込まされていた呼び出しの手紙。

麻帆良学園側には知らせず其れに応じる事にした私は、隠密裏に投入する事が可能な全戦力を以ってして我が身を護る手段を講じる事にした。

私の魔導機杖アリアを携えてゆくのは勿論、不可視化装備を追加搭載した武装自動立像アルカス７機全部に加えて、私の『魔法使いの主』たるアスナと木乃香、『魔法使いの従者』たる葉加瀬とアキラまでにも支援要員として隠れて待機して貰う念の入れようで。

贅沢を言えるならエヴァとチャチャゼロにも参戦して貰いたかったのであるが、彼女らは学園側から緩やかながらも監視されている危険が高いので、今回の件では最初から呼ぶのを避ける事にした。

ここまで事前に用意しておけば、下手を打たない限り、例え相手がフェイトやデュナミスやザジ級の強さだったとしても再起可能な状態で全員が撤退できるはず。

こちらの警戒ぶりを察知して会談を破棄する程度の相手であれば、そもそもわざわざ話し合いをする必要すら感じないしね。

そんな事を思いながら、常人の目と感覚ではただ一人で指定された待ち合わせ場所である学園都市外縁の森林地区に佇んでいたら、学園側から認識阻害効果を付与されたと思しきフード付きのローブで顔を隠した人影が近付いて来た。

だが、私には一目で見当がついた。

それと同時に今回の選択の正しさを半ば確信した。

「初めましてネ。本日はわざわざ来てくれて嬉しいヨ」

フードの奥に隠れていたお団子ヘアーの美少女は、紛れも無く超鈴音だったのだから。

もう原作漫画の描写と現実の顔の差分修正も無意識にできてるの

で間違いない。
「こちらこそ初めましてです。貴女に会えて嬉しいです」
私の計画における最大の不安要素にして、最高の盟友と成り得る可能性を持つ少女。
彼女が、私の知る彼女と同様な目的で動いているのかどうか。
そもそも今の時期に麻帆良へと飛来していたのか否か。
知りたかった答えの半分を得て、私は確かに嬉しさを感じていた。
「早速だガ、私の同志になってくれないカナ？」
「何を目的としてるのか言いもしないで、いきなり其れと言うのはどうかと思うです」
早速の牽制球を慌てず騒がずブロックしておく。
こんな質問を仕掛けた彼女の意図は……
「おや、もう既に掴んでるのではなかたカ」
やっぱり、こっちが何処まで知ってるかを探る気だったか。
「今、目の前にいる女の子の目的が何かの確信は無いです、超鈴音」
「やはり只者ではなかたカ」
「未来火星人としてはイレギュラーである私の存在が気になるのは解るです」
「そこまで知られているとはネ。隠れてる子達も知てるのカナ？」
「超さんの正体はともかく、私の正体は一応教えてるです」
怒涛の質問攻勢を、無視できなさそうな情報を惜しみなく晒して迎撃する。
なお、予めかけておいた嘘感知呪文への反応は無し。
今のところは互いに嘘を吐いていないようだ。
しかし、私謹製の不可視化装置でも隠し切れてないとは、未来科学恐るべし。
「そちらの目的があるなら聞かせてくれて良いカナ？」
「先ずは其方の方から聞かせて貰えますです？」
「それもそうだネ。……私は全世界に魔法の存在を公開し、今も世界中で起こり続けているありふれた悲劇を減らしたい」

ふむ。想定通りの答えだが、多分それには裏の意味もあるはず。
……学園祭騒動を私なりに客観的な分析を加えて求めた推論を問うてみるべきか。
「“最初の超鈴音”が過去への旅を選んだ世界は、完全なる世界が勝利した世界で間違いないです？」
ハッと目を見開いた彼女は、ニヤリと口元に不敵な笑みを浮かべた。
「そこまでわかってるなら、これ以上の説明は不要なハズネ」
「では時間も押してるので、私の方の目的です。……魔法世界の半永久的な延命と其れによる星間戦争回避です」
アルカス達を周囲に配して展開させている範囲型認識阻害と対探知迷彩封鎖結界で学園側の警備陣を誤魔化せる時間は、そう長くも無い。
彼等が動き出す前に必要な話を終わらせねばならないと判断した私は、いきなり今の私が抱く主な行動目的の一つを開陳した。
生まれてまもない私を受け入れてくれた麻帆良が戦火で焼かれるのは嫌だ、とも言う。
ちなみに、もう一つの主要な目的は大きな声では言えないが、好きな娘達と末永くよろしく過ごす事だったりする。
「手段の方はどうなってるネ？」
「今のところ実証用の常温核融合式魔力転換炉が稼動中です」
「なるほど、その手でくるカ。盲点だたネ」
「超さんが先祖に拘らなければ自力で気が付いた方法だと思うです」
「……私が貴女の同志になた方が犠牲が少なくて済みそうだヨ。やれやれダネ」
超さんの理解力は正しく天才だけど、それだけに私ですら話の展開についてくのにギリギリまで思考力のリソース食われかねないんだよねぇ。
撤収して“別荘”に場所を移して落ち着かないと、私自身が整理できてないかも。

皆への説明も其の時だね。
「撤収です！　皆、各自の判断で帰還するです！」
ともあれ、会談は此れにてお開き。
超を連れて“別荘”に通じるシフト・ポータルを開く前に、存在係数を圧縮して手で持てる人形に縮小したアルカス達を回収し、何箇所かを転移門で中継して逃走経路を誤魔化しておかないと。……今回は少しばかり派手にやっちったからね。
学園長が誤魔化されたフリをし続けてくれれば良いんだけど。
幾ら何でも全然気付いてないと言う事は無いだろうから。

場所を私の“別荘”内にあるレストハウスへと移した私達は、ティーテーブルを囲みつつ改めて互いに自己紹介をする事にした。
「初めまして、私が超鈴音ネ」
認識阻害魔法に酷似した力場を発していたローブの下には、案の定軍用強化服が隠されていたが、当然の用心の範囲で済まされるだろう。……と言うか、警備用ゴーレム7体と身内の魔法関係者４名を現場に伏せておいた私が非難できるような行為ではない。
「私が八束千歳です。改めてよろしくです」
こちら側で真っ先に挨拶をしたのは私である。
魔法使いとしての序列順だとアスナが最上位で木乃香が其れに続くが、今回の場合は実質的な主導権を握ってる者が前に出た方が話をスムーズに進められると判断したからだ。
「神楽坂明日菜よ」
「近衛木乃香や。よろしゅうなー」
「葉加瀬聡美です。その服は中々興味深いですね、後で調べさせてください」
「お、大河内アキラだ。よろしく」
仮契約関係にある皆に続いて『四葉五月です』と小さいが良く通

る声で挨拶が続く。
どうやら未来から流れ着いた超が真っ先に接触したのが彼女だったらしい。
葉加瀬や私よりも前と言うのは、彼女に対する超の全幅の信頼を窺わせる一事だ。
そして、
「私がー当別荘の管理神格のーフィーリアですー。皆様よろしくお願いしますー」
挨拶のトリを務めるのは此処の管理を任せた我が娘だ。
葉加瀬と私が協同製作したガイノイド“０－１”は自衛力に乏しい為、こういう裏には関わらせない予定なので、これで関係者全てが挨拶したと言って良いだろう。
「では情報と状況を整理するです」
私と超は何となく状況を掴んでるとは思っているが、誤解が無いとも限らない。
今のうちに互いの認識を確認しておくに越した事は無いのであった。

超が未来から航時機で飛来した目的は、魔法を全世界に公開して戦争のリスクを管理するのと、彼女の先祖であるネギに『自らの信じる正義の為に、他人にとっての悪を為す覚悟』を持たせると言う２つの未来を派生させる事だった。
ネギが学園祭での戦いと言う経験を経ずに魔法世界における決戦に首を突っ込んだならば、あるいは父親の手がかりが魔法世界にあると言う情報を得る前にゲートポート破壊テロが起きていたならば、完全なる世界の勝利は疑いない。
そして其れが上手く行くかと言えば、答えは否。
超の例を見て解るように幼子に呪紋回路を刻んで生体兵器に仕立て上げる技術がある時点でマトモな世界じゃなくなるのは目に見えているが、さもありなん。

魔法という武力を個人で所持した人々を強引に拉致監禁し、際限なく欲望をかなえられる幸福な夢と言う麻薬に長年浸からされた挙句に、吸う空気や飲み水にすら苦労する火星の荒野に放り出されたら、どんな凄惨な光景が現出するか想像に余りある。

魔法世界崩壊によって魔力構成物ではない中身があふれ出た後、火星の弱い引力でどこまで空気などを留め続けられるかも疑問だが、それは取り敢えず何とかなったのだろう。

そして、完全なる世界が上手くやれる確率は皆無だ。

恐らくは魔法世界の大規模修復の際に用いる緊急避難手段の流用だろう其れを理想世界とうそぶいてる時点で彼等の計画に望みを託すのは絶望的と言えてしまう。

一方、私の計画は単純である。

科学的手段で生み出した電気を魔力に換えて供給する事で魔力不足を解消し、魔法世界の崩壊を防ぐと言う物だ。

加えてグレートグランドマスターキーを入手して魔法世界そのものの術式を保守管理できるようになれば、細やかな問題などへも楽に対処が可能となるだろう。

多分これが最も犠牲者が少ない計画だと私と超双方の意見が一致したが故に、今後の大方針としたと結論を述べたところで、皆からも賛同の拍手が湧いた。

ここまで長々と討論した甲斐があったと言うものである。

そうして意思統一されたところで、私と超とアスナの正体、木乃香の立場について言及する暴露大会へと突入し、更なる結束が図られる事となったのであった。

第３２話（後書き）

いよいよ超鈴音登場。そして、いきなり仲間にｗ

完全なる世界失敗については独自考察なのですが、超が『ネギの子孫の未来火星人』と名乗ってる事を鑑みて外れてはいないと思っております。……公式では違うかもですがｗ

第３３話

超鈴音を仲間に加えた私と葉加瀬は、さっそく彼女の魔改造に着手した。

「この呪紋回路って気を無理やり魔力に変換して魔法を発動させてるですから、魔力濃度が充分なこっちだと単なる足枷です。除去手術して普通に魔法と気功術覚えた方が遥かに強くなれるです」

魔法学校で悠長に兵士を養成してる余裕が無かったのか、魔力が薄い環境で初心者に魔法を修得させるのが難しかったのか、どちらかの要因……あるいは両方が呪紋回路と言う呪われるべき技術を生んでしまった土壌なのだろう。

「そう言われてしまうと痛いところダネ。でも、できれば消したくないヨ」

しかし、そんなモノでも消したくないと言うのは、彼女の故郷との絆みたいなモノだと感じているからなのだろうか。

「経絡が狂ってるのを見て放置しろって方が酷です。打刻されてる呪文は全部読み取って呪文書にまとめとくですから納得して欲しいです」

しかし、医療に携わる者の端くれとしては単なるイレズミどころか性質の悪い病巣にも等しき邪法が巣食っているのを認めるわけにもいかなかったりする。

そもそも初心者以前のド素人を即席魔法兵に仕立てる為の仕掛けでしかないので、身体に悪く様々な面で成長を阻害すると言う最大の欠点以外にも、呪文詠唱の短縮化ができないと言う欠陥もあり、戦力的な観点から見たとしても除去こそが最善手なのだ。

「そうか……わかたヨ。千歳の言う事はもっともネ」

こうして説得されてくれたのは、それらの欠陥が自分でも良く解っていたからだろう。

呟くように、自分に言い聞かせるかのように答えたのが、不思議

と印象深かった。
　ちなみに此の議論の最中、葉加瀬が超の軍用強化服に隠してあったデータストレージと懐中時計型航時機に夢中になって見入っていたりするのは実に彼女らしい。
「呪紋回路を除去するついでに、火星育ち基準になってる骨格と筋力と経絡を地球重力基準まで補強しとくです」
　全裸に剥いて打刻されてる呪文を書き写す方が、呪紋回路を除去するよりも面倒なのは私が心霊治療のスキル持ちなせいか。……幻獣朗のスキル、マジ便利。
　攻撃魔法5種と障壁呪文しか記されてない呪文書に頭痛を覚えつつ素手で掴んで呪紋回路を除去、愛用のメスで取り残しを切除。其の後に刃先で気脈をちょこちょこ整える。
「とりあえず人工呼吸程度に思っておくと良いです」
　最後に唇に唇を重ね、私の体内にある精気を、私の体内に融合してある魔導機杖アリアの力を借りて増幅し、自分の命に別状が無い範囲で思い切り吹き込む。
「むっ！」
　意志の力で相手を屈従させる精神戦は避け、ただ相手を想う気持ちと欲情とを送り込んで精気を活性化させて気脈を巡らせ、代謝機能を一挙に刺激する。
「むむうっ！　むっ！」
　ぷはっと唇を離した私を物凄い脱力感が襲うが、これは当たり前だ。
　元気と言う元気は、ついさっき超に譲り渡したんだから。
「けほっ……って、どうしたネ！？　凄い顔ヨ！」
　意外と早く我に返った超が、手術の為に寝かされていた固めの長椅子に寝たまま心配げな声を掛けてくるが、大丈夫問題ない。
　ただし、事前の予想通り分身を維持できそうな余力は残って無いけどね。
「想定内です。私は寝るので、超は御飯でも食べてゆっくりするで

す」

この部屋にもう一つ用意してある長椅子に寝そべった私は、多分きっとやり遂げた漢の顔をしてるに違いない。

ねむ……

その後、主観時間で1ヶ月ほどをかけ、超鈴音の骨格と筋力の強化は何とかなった。

代償として5kgほど体重が増えはしたが、一流アスリート並みの身体能力と、強力な魔力と気を身につけられたのだから安いものだろうとは思う。

魔法についても呪紋回路に刻まれていたモノは既に修得が済み、今は《火よ、灯れ》などの魔法学校で学ぶ必修魔法を次々と体得して行っている最中だったりする。

おまけに気の扱いと魔力による身体強化の基本を教えただけで、既に軍用強化服を着ていた時に匹敵する身ごなしができるようになっているのは冗談か何かだろうか。

……これだから公式チートキャラってのは洒落にならん。

葉加瀬は葉加瀬で、超が着てた軍用強化服を複製してみたり、私が提供した魔導技術や近未来科学技術の知識と照らし合わせて色々妄想してたりしてるみたいなので、放置しとくとミイラになってそうで少しばかり怖かったりする。

……何度か超の相手で乏しくなってしまった私の生命力を振り絞り、葉加瀬に精気を分けて蘇生する破目になったのは、ここだけの秘密だ。

心配して工房魔法球の中まで様子を見に来てくれる木乃香の柔肌が私を癒してくれなければ、私が干からびて死んでいたかもしれないと真剣に心配したのも内緒の話である。

「千歳ちゃんは気持ちえーから好きやでー」

……若干ながら心配とは別の動機があったように思えるのは気の

せいにしておこう。

ともあれ、そんなこんなの事態のせいで想定外の問題が発生した。
「既に超の身体能力は軍用強化服を使う方が弱体化するレベルになってるです。強化服を新規開発するか、別の強化手段を考えた方が良いです」
超が未来から持参した軍用強化服が彼女の強化された能力に全く追従できず、深刻な性能不足を露呈してしまっていると言う問題だ。
下手に増力機構が搭載されているだけに事態は深刻で、下手をしたら重い金属甲冑を着ているのに等しいほど体捌きが鈍るとなれば、対策に迫られるのは必然と言える。
「私としては新規開発を推しますね。ちょうど試したいプランが幾つかあるんですよ」
キラリと眼鏡を光らせて、己が希望を述べる少女。
「こちらとしても強いに越した事はないヨ。使える手札になれば御の字ネ」
それにニヤリと不敵に微笑む当事者の少女が、遠慮なく拍車を入れる。
「では新規開発で行くです」
無論、私にも否やは無い。
金も手間も惜しまず、今の私達が作れる最強のパワードスーツを用意しよう。
それこそが我等の矜持と言うものなのだから。
自然とつり上がる口元を自覚しながら、そんな事を思った私であった。

そして幾つもの試作機が無様に失敗したり、性能不足で日の目を見なかったり、コンパクト化に失敗して使いどころが難しくなったりで、累々と屍が積み重ねられてゆく。
自分達が求める物に少しずつでも近付き続けている実感を味わい

ながら。

だが、強化服だけが超の武装では無い。

彼女の為に整えておくべき武装は、まだまだ他にも色々と存在していた。

学園祭騒乱の際に猛威を振るうはずだった強制時間跳躍弾は後回しにするとしても、浮遊砲座と其のコントロールシステム、呪紋回路を除去した事で必要になった魔法発動体などなど、種々様々な物を用意しなくては彼女の戦闘力が生かしきれないのだ。

もっとも、其れは私達の腕の振るい所が多いと言う意味でもあったりするが。

「強化服を開発しながら“ブレイジングハート”を作ってたのにも驚いたガ、指輪型とは言え普通の西洋魔法使い用の杖も作れるのは意外だたヨ」

ブレイジングハートは超にプレゼントした私謹製の魔導機杖で、待機状態と浮遊砲台群と大口径魔砲の３形態に変形させて運用でき、仮契約カードを参考にした戦闘服への早着替え機能と一時的に魔力を底上げできるカートリッジ・システムを搭載した自信作だ。

これが短期間で完成したのは《別魅》で分身して作業したからなのは言うまでも無い。

閑話休題。

「表沙汰にできる杖も作れないと不便だから当然なのです」

切り札となるべき魔導機杖が凝った物になった代わり、見せ札にする彼女用の指輪型発動体は耐久性最重視でシンプルな機能に抑えてあるんだけどね。

「納得ダヨ。杖以外のアイテムの製作も急いで貰って構わないカナ？」

ちなみに超の装備製作を急いでる理由は何故かと言うと、彼女には早急に魔法世界へと渡り、自分の身元と我々の活動を支援する組

織の地盤を確立して来て貰いたいからだ。
「了解です。できるだけ急ぐです」
元々の彼女の予定からして魔法世界で身元を作り、自分の計画の為に動かせる組織の地盤を築く予定だったそうなので、そう大した予定変更ではなかったりするそうだが。
だが、それでも油断の一切が禁物なのは、私達皆の共通認識なのであった。

異層空間に設けられた別荘の中の加速された時間で行われていた事以外にも、それなりに記しておくべきだろう事は起こってはいる。
表側の出来事と言えば、先ず魔法使いの主従の絆で結ばれた同窓生である私達が優秀な成績で2学期を終えられた事と、宿題の早期殲滅を果たした事を挙げるべきだろうか。
これで大いなる自由を獲得したと喜んだのもつかの間、メガロメセンブリアやアリアドネーから招聘状なんて物が届いて辟易する破目になりはしたのだが、まあ此れは表の出来事とも違うので後で触れるとしておこう。
他の公開できそうな出来事には、星雅遊興から発売された“夢釣人”の大ヒットと、其れに伴う注文の殺到と生産ラインのフル回転を挙げるべきだろう。
……ゲーム機本体の確保に失敗したからって、ＣＭで顔が売れてしまった私に直接ねだるクラスメイトまでも出現したのはマジメに計算外の出来事であったのだが。
それはさておき、“夢釣人”の月間販売台数が祖兄興行の“遊駅”を上回ったのが逆鱗に触れたのか、向こうでも次世代ゲーム機の開発が本格的に急がれているようだ。
ゲーム業界の雄たる認店導の動向が不明なのが少々不安であるが、

概ね予定通りの収益が上がってくれているのは従業員の給料的に有り難い出来事と言えよう。

他社製の夢釣人用ソフトを買い取って星雅遊興の販路を用いて流通させる制度も幾つかのタイトルで試験的に導入したのが概ね成功したので、ソフトメーカーさん側からの希望があれば適用できるよう社論を誘導するのは難しくない見通しである。

流通面で雪広財閥の手も借りられそうだから、史実より更に条件がマシだろうし。

後は調子に乗って無節操に工場を増やそうと企む馬鹿重役を抑え、保守部品生産用を除く旧式機の生産ラインの切り替えを遺漏無く済ませ、新作ソフトの発売後一定期間の中古販売自粛協定が無事に締結できさえすれば当座は大丈夫なはずである。

裏側……つまり魔法関係の出来事としては、木乃香に続いてアキラが魔法医として最低限の技術を修め終えて公園デビューならぬ『動物のお医者さん』デビューをようやく果たし、目尻が下がりっぱなしな一日を過ごせた事を真っ先に挙げたい。

これでアキラに留守を任せられるようになると言う事よりも、彼女が魔法を習う動機となった夢を果たせたのが嬉しいからである。

とは言え、使える者は使うのが正しい姿勢であるので、学園長が苦り切った表情で手渡して来た招聘状に応えて魔法世界訪問をやってる間の動物達の世話をお願いした。

「任せて」

と言葉少なに豊かな胸を張ってくれた彼女がひたすら頼もしく有り難かったり。

しかし、まあ、どんな面の連中が私みたいな技術屋を呼びつけるつもりなんだか。

できれば一生知らずにいたかったと言うのは、贅沢な望みなんでしょうかねぇ。

第３３話（後書き）

超鈴音魔改造の回です。そして何故か発生したプロットにない魔法世界行き。……どうしてこうなった（汗）。

第３４話

学園長の政治力を以ってしても断り切れなかった魔法世界の軍事大国メガロメセンブリアからの招聘状は、何と元老院が出所だったらしい。

本当に迷惑な事しかしない老害どもめ。

救いは魔法学術都市アリアドネーからも招聘状が来てるので、上手く使えば辞去する契機にできる事だけど、それでも最低数日は滞在しなきゃならない予定だ。

どうせ敵地なら巫女さんパラダイスで目の保養ができる西の総本山の方がマシだと本気で思うものの、それを言っても状況が好転する訳じゃないので我慢するしかない。

今回の護衛はタカミチとネギの村から来てくれた魔法使いの方３人にお願いした。

アスナや木乃香やエヴァは政治的な問題で連れて行けないので、残念ながら此れで精一杯なのだ。まあ、タカミチに来て貰えてるだけ随分とマシなんだけど。

護衛の彼らの為に西洋魔法と現代科学で作れると言う条件で、私が納得できる出来の装備を作って渡し、別行動で魔法世界に行く超への餞別を作ったところで時間切れ。

心ならずもイギリスにあるゲートポートへとトボトボと向かわされるのであった。

寝起きが悪かった気がするのはアスナが隣にいないからか。

微妙に神経がささくれ立っている気がするのは木乃香と挨拶できなかったからか。

新しい発明品を考えてる最中に少し物足りないのは葉加瀬の姿が見えないからか。

いまいちスッキリできないのはアキラと一緒に走れないからか。
私以外男だらけな旅路は、私から色々と削り取りつつ続いていたりする。
心ならずも、大本の理由すら解らずに。
ストーンヘンジ状の施設から近代的なターミナルビルへと転移し、近代的っぽい摩天楼群と空中を行き交うモノ達が織り成す景色を見ても、私の気分は一向に上向かない。
実験として麻帆良に置いて来た分身とのリンクが世界間転移の際に切れても、作り笑顔を顔面に貼り付ける程度の虚勢は未だ保ってるけどね。
ともあれ、メガロメセンブリア・ゲートポートにて向こうの案内の人達と合流。
１個小隊規模と少ないながらも儀仗兵に守られ、飛空艇に乗って移動開始。
さてさて何処に案内されるものやら……。

〔ｓｉｄｅ：超鈴音〕
中国の現状も私が未来で調べた情報とは若干違たガ、雲崗と崑崙ゲートポートの警備体制はほとんど変わりなかたカラ助かたヨ。
おかげで予定通り魔法世界に来れたし、人気の無い場所を見つけて麻帆良を発つ時に貰た封印箱の中に入てた餞別を確認する余裕もできたネ。
……中から１０人は乗れそうな新品の飛空艇が出て来たのは驚きだたけどナ。
改良型強化服と当座の物資と資金と千歳特製農場魔法球も入てたカラ、直ぐにでも派手な活動ができそうダヨ。
でも、しばらくは地道に同志集めを兼ねて紛争地帯巡りネ。
千歳が失敗したり裏切ったりした時の用心はしておかないといけ

ないからナ。
もし用心が無駄になたら別の使い道があるから何も問題ないネ。
……裏切られずに済む事、切に祈てるヨ。

〔ｓｉｄｅ：八束千歳〕
連れて来られた場所はメガロメセンブリア中央病院とか言う立派な建物だった。
さぞかし腕の良い魔法医がたくさん常駐しているのであろう。
「ようこそメガロメセンブリアへ。小さな英雄よ」
「ありがとうです」
眼光だけは恐ろしく鋭い長衣をまとった頭髪に乏しくガリガリの爺さんの挨拶に短く返し、周囲の様子を観察する。
儀仗兵が最敬礼をしてるところから見て、かなりの権力を持った人物であろう事は想像に難く無い。
「早速だが此処の医者で手の施しようが無かった患者の治療を頼みたい。必要な物があれば此方で手配しよう。何でも言ってくれ」
ふむ。私の治癒魔法や解呪魔法を解析して対応策を練ろうとでも考えてるのかな？
はたまた治療で疲弊した私をどうにかしようと企んでるのか？
……逃げる為の布石で一応まほネットの何箇所かに情報爆弾を埋めてあるから、後は手札の見せ過ぎに注意しつつ護衛の皆様の奮闘に期待するべきだろっかな。
「私に治させる患者のカルテを全部寄越すです。準備ができた患者から施術するです」
ともかく、此処は堂々と対応するのが吉なはずだ。
自分の技量を鼻にかけた思い上がったガキとでも思わせておいた方が後で楽だしね。

肩甲骨辺りまで伸びた黒髪を後ろで一本に束ね、純白と緋色の二色で彩られた和装…巫女装束と表現すると理解され易い其れをまとった少女が、榊の枝ではなく樫の短杖と黄金の針を両手に構え、朱唇から祝詞ならぬ呪文の響きを詠ずる。

「アニマ・クーラティオー」

左手の杖から《癒しの息吹》と名付けられた中位治癒魔法の光を注がれ、患者の男を冒す病魔の所在が暗い斑点として明らかにされた途端

「えいっ。クーラ」

斑点に右手の金針が血の一滴すら流さずに深々と突き刺され、其れを通して初歩的な呪医魔法である《治癒》が流し込まれてゆく。

本来病気には効果が無いはずの治癒呪文を短縮詠唱で二重掛けして不治だったはずの病魔を鮮やかに駆逐してゆく手並みに、施術に立会っている呪医達の口がポカンと開いたまま固定され、マスクの端からはみだしてしまっている。

従来の魔法治療の常識をくつがえす、古代の御技の再現を見る心地かもしれない。

巫女服の少女が更に別の3箇所に浮き上がった斑点に金の針を刺して《治癒》を繰り返すと、患者の身体全体が淡い金色の光にまんべんなく包まれてゆく。

「これで峠は越したです。後は栄養と静養を充分とって経過を見るです」

立て続けに5人の重症患者を治してしまったとは到底思えぬ落ち着いた口調で事後の指示を出した少女は、続いて真にもっともな要求を突きつける。

「魔力の余裕が無いので今日はこれまでです。私と護衛の皆さんが泊まる所まで案内して下さいです」

無論ながら少女の要求は容れられ、高級ホテルへと案内された。

だが、それは同時に少女の自由な動きを拘束する手段でもあった。

その事実を少女が気付いているかと言えば……

『割りとバレバレな手です。監視の気配が消し切れてないのです』

『みっ』

……割りとあっさりバレていた。

『誰か解らない視線が風呂場やトイレの中まで覗いてるのは不愉快なのです』

『み～』

『かと言って幻術で目を塞ぐのも手の内晒すから得策ではないですし、部屋に仕掛けてある盗聴器や盗撮カメラを処理するのも自分がやるのは拙いです。……ストレス溜まりそうです、此処は』

どこぞの馬鹿のせいで最高級と銘打ったホテルのグレードが少女の中で安宿未満に急降下したのを知る由も無く、メガロメセンブリアでの夜は更けて行くのだった。

結局、少女が割り振られた患者を全員治した後で開催される予定だった晩餐会への誘いも断固断り、メガロメセンブリアを後にしてアリアドネー船籍の客船に乗る2日後まで用便すら全くせず、入浴と洗濯も独自作成した洗浄呪文で着衣のまま簡易に済ませると言う神経質な行動をしたのは監視を命じた元老院議員にも誤算であったろう。

『わざわざ無理やり呼んで病人治療させといて、ロシア並みの監視って冗談ポイです』

しかし、誤算は少女の方でも大いに一緒だったのである。

もう少し礼儀か節度か賢明さのどれかは持ち合わせているものだと思った、と。

アリアドネー船籍の客用飛空艇がタイミング良くメガロメセンブリアに来たのは偶然でも何でもなく、まほネットに『旧世界から強引に招聘された少女魔法医が精神的虐待を受けているらしい』と言

う噂を流しておいたからであろう。
何処から流れた噂か解らないようにして風呂とトイレにまで録画機能付き監視カメラが仕掛けられていた情報も流しておいたから、私の宿所を手配した人とホテルの評判は大変な事になってしまっているだろうが、其処は努めて気にしない。
睡眠と風呂とトイレを邪魔した上に食事まで不味く、あまつさえロクな謝礼も寄越さない国の名誉なんてクソ食らえなのだ。
ったく、私の手持ちの術式全部の公開と向こうの息がかかった人間を弟子として受け入れるのを断っただけで手のひら返すなんて器量が知れる。
流石はアリカ女王を陥れた腹黒どもが巣食う腐れで、アカの手先に操られてソ連に莫大な援助を注ぎ込んで欧州と日本を叩き潰した往年の米国並みの道化を晒した国家だ。
こんなのが麻帆良の上位組織だなんて嫌でたまらないが、正直仕方無い。
未だ私達は状況を好転させるに充分なだけの力を持ち合わせていないのだから。

アリアドネーでの扱いは悪くなかった。
変な方向にも厳重な監視は無く、術式提供の強要も無い。
私の拉致を強行しようとして護衛のタカミチ達を煩わせる事も無い。
実に理性的な対応に加え、御飯が普通に美味しいと言うのは素晴らしい事だ。
皆がいてくれて、果たすべき目的が無ければ、いっそ永住しても良いくらいである。
しかし、残念ながらそうじゃない。
故に私は皆の待つ麻帆良へと帰らねばならないのである。

主として私自身の為に。

……ゲートポートで地球に帰れる時期になるまでなら、病人の治療や私独自の治療法の一部を講義するぐらいは引き受けても良いけどね。

第３４話（後書き）

イレギュラーな魔法世界渡航編でした～。ちなみに筆者から見たメガロメセンブリアの気風は米国と末期ローマを足して、英国とロシアの腹黒さを隠し味に加えた感じです。

オリジナル設定が多分に含まれてますので、原作とは違う部分もあるかもしれません。

第３５話

盗撮天国メガロメセンブリアへの入国を避ける為、アリアドネーの仲介でヘラス帝国にある転移ゲートを使い、私は旧世界……地球へと帰って来た。

出現地点はイースター島、モアイで有名な南太平洋に浮かぶ島である。

ここから直接日本へ帰国するのは魔法使い用の裏ルートを駆使しても厳しいので、幾つかの国を経由しての旅程となったが、私が実演までした新機軸の治癒術を教授したアリアドネーが報酬とは別に旅費を全額負担してくれてたりするので懐は痛くない。

かのメガロメセンブリアを始めとするメセンブリーナ連合の上層部どもにも見習って欲しい大度ではある。

ともあれ、これで迂闊に私へ手を出すリスクは身に染みただろうから、まほネットに仕込んでおいた情報爆弾の残りは、いずれ表に出す機会の為に全部消去しておく。

こうして私の初めての魔法世界旅行が終わりを告げた。

だが、それの爪痕はしばらくは消える事が無いであろう。

とか格好付けはしたものの、私にとっての爪痕とは、皆と会えなくて寂しいってのと研究と製作のスケジュールが狂ったと言う事に他ならない訳だったり。

最大で２４×６＝１４４倍の効率で時間を稼げる別荘の存在を込みで予定を立ててるせいで、わずか半月たらずで年単位の時間を損させられてる計算になるからだ。

準備する物資とか計画の細部とかを再検討して、できるだけ早く再開させないとなぁ。

でも、どちらを優先する事になるかと言えば、お肌の触れ合いの方だったりする。

分身して４人分頑張るので、普通の人よりかは短くて済むだろうけどね。
また、タカミチが心労からか風邪で３日間寝込んでしまったり、護衛として随行した他の３人が格段に強くなったらしいと耳に挟んだりしたが、それらは全くの余談である。

そして時は流れた。
あれから私達が麻帆良学園女子初等部を卒業するまでの間、メガロメセンブリアなどの組織が私を悩ます様な行動はしてこなかったらしい。
あの時起こった盗撮騒動で、あの時泊まったホテルの経営は傾き、警護担当者とかのクビが飛んだらしいから、強引なアプローチには懲りたって事なんだろう、多分。
それなりに派手な結果になる反撃をこっそりやった甲斐があったってモノである。
ともあれ、２年以上も過ぎれば身長や体重以外にも色々と変化するものだ。
実際に戦闘をした経験こそ少ないが、摸擬戦なら数える気も無いぐらい豊富にやらかしているし、魔力や気の燃費向上や制御力の上達、熟練による呪文詠唱の省略、スキルのより正確な把握による使い勝手と応用力の向上…などなど、実力が増したと実感するには充分な成果は各々得られている。
ま、現在のところは身内で最強格なアスナですら、本気を出したタカミチやエヴァには未だ勝てないだろうけどね。
予定していた各種の装備についても準備が大幅に進んでおり、大物中の大物以外は試運転待ちの物が殆どと言う段階まで漕ぎ着けられたのは大変に喜ばしい。

私のチート能力は治療と物作りにかなり傾斜しているので、本分たる装備の用意で遅れを取るのはプライドと存在意義に関わるのだ。

そして物作り特化の度合いでは私をも上回りそうな天才少女の葉加瀬は、遂に戦闘も家事もこなせる汎用ガイノイドの試作機を造り出す事に成功した。

その名は“絡操双葉”。

非戦闘型の姉機“Ｏ－１”こと“絡操御市”と私が作った自動立像“アルカス”の稼動データを参考にして、私と超から学んだ技術を盛り込んで作られた葉加瀬の愛娘だ。

双葉の主人は、学園側が私の身内で唯一正式に魔法生徒として認知している私こと八束千歳だが、これは彼女の学籍を得る一番楽な方法を選んだ結果である。

学籍も戸籍も無いと、単独行動時に学園内を警備してる魔法先生とかが不審物と看做して破壊しても文句を言えないんだよねぇ、面倒な話だけど。

性能はともかく外観は茶々丸と瓜二つなので、双葉にも親切で健気で優しい娘に育って欲しいと願うのはワガママなのだろうか？

……まあ、全く同じに育つはずは無いんだけどね。

表稼業の方では、ゲーム機“夢釣人”が堅実に業績を伸ばした一方、焦って早期販売に踏み切った対抗馬“遊駅２”が不具合と性能不足でシェアを減らす結果となった。

遊駅サイドに付いていた有力サードパーティの幾つかがこっちでもソフトを販売してくれるようになったおかげで、星雅伝統のマニア受け狙い傾向が緩和されたからでもある。

と言う流れで現在のところ家庭用ゲーム機ではシェア１位を何とか確保したものの、携帯ゲーム市場は認店導が殆ど独占状態と言う結果となっている。

祖兄興行は家庭用ゲーム機市場での苦戦を新型携帯ゲーム機の開発で取り返そうとしているらしいが、果たして上手く行くのかどうか。

ちなみにウチは携帯ゲーム市場では戦わない経営方針を打ち出させてたり。

欲を言えば認店導と組みたいところだけど、向こうの出方次第かなぁ。

他にも天候に左右されない水耕野菜工場は割りと収益が上がってるけど、直接的な利潤よりも日照時間の短い地域や乾燥地帯などの田畑が作り難い国の一部で現地資本と提携して商売している方が大きい意味を持っているかもしれない。

食糧事情の改善に従事している企業には悪感情が向けられ難い的な意味で。

だが、更に特記すべき事柄が起ころうとしていたのを、私は知る由も無かった。

「甲賀中忍　長瀬楓でござるよ、雇い主殿」

糸目の忍ばない忍び少女が、私とアスナの引っ越し先である麻帆良学園中等部女子寮の部屋の中にいたのに正直言って私は驚かされた。

扉の向こうからでは全く気配が掴めなかったからだ。

「八束千歳です。これからよろしくです」

恐らくは私が防諜用に雇っている甲賀忍の皆様の上官か、連絡役と護衛の兼務だろう。

……もしかしたら囮役なのかもしれないが。

「給金は契約の通り、装備品は希望があれば割引価格で提供するです」

ちなみに彼女らの給金は契約金＋年俸＋出来高と言うどっかで聞いたような制度で、情報漏洩や社員への被害が起きない場合が最も出来高が高くなる方式を取っている。

「了解でござる」

なので人柄と能力を確認して仲間に引き入れたとしても遠征に連

れて行くのは厳しいと思われる。留守番役の警護を任せられる娘が何人かいると有り難いから、それはそれで有りなんだけど、彼女のアーティファクトとして出現する確率が高い『天狗之隠蓑』は長期遠征に便利なので少し惜しかったり。

適切な資材と充分な時間さえあれば同等な性能の物でも作れるけど、アーティファクト級以上の高性能アイテムを普通に作るとアホみたいな製作費と時間がかかるんだよなぁ。

どうしても彼女が欲しい任務なら、甲賀の里に短期の援軍派遣を要請して留守にしてる間の防諜体制を補強するのを考えておくべきか。

ともかく皆との顔合わせを行い、今後3年間住む事になるだろう女子寮の部屋割りを確認し、楓を新入生の1人に組み込むべく学園長と交渉し、更に交渉の際に私が関係する新入生が1人増える予定を伝えて本日の予定外スケジュールは終了した。

しかし、予定外どころか予想外の事態が起こったのは其の日の夜の事であった。

その想定外を告げてきた知らせは一通のエアメール。

具体的な事態の内容は『私とネギ坊主の見合いの日取りと場所が決まった』である。

あまつさえ学園長が悪乗りして既にOK出してるのはどうよ。

……ホント、シネバイイノニ。

年度末の忙しい時期だってのに飛び入りで何て予定入れやがるんだか。

案の定、タカミチ達みたいな魔法先生の皆様に護衛を頼むのは無理状態だし、見合いの日程と向こうまで行く飛行機のチケットの手配すら済んでるし。

しかし、入って来た情報は悪い物だけでは無かった。

近日中に色黒巫女傭兵ガンナー龍宮真名が麻帆良入りするのを掴んだのだ。

彼女と楓と双葉が警護についてくれれば滅多な相手には遅れは取らないだろう。

しかし、そう考えても悪寒が消えてくれないのは何故だ？

私は何を見落としてる？

奇妙にすっきりしない頭を振りつつも、私は声を大にして言いたい。

８歳未満のガキと見合いをさせるなんて、お前ら正気かと。

第３５話（後書き）

またもやプロット外のイベント勃発です。どーする私ｗ

第３６話

「前払い分は気に入りましたです？」
「ああ。見事な菓子折りだった」
なんて遣り取りで龍宮真名への護衛依頼は成功したが、長瀬楓に英会話を修得させるのと、絡操双葉のパスポート取得を今回に間に合わせるのは失敗した。
よって今回は初顔合わせから間もない真名と２人旅での英国行きと相成ったのである。
その分だけ後顧の憂いが減ったと前向きに捉えておくしかあるまいか。
しかし、私は気付いていなかった。
楓と双葉による護りは堅いが、それは基本的に外敵へ向けられるものであるのだと。
その時は気付いていなかったのだ。

心中を過ぎる真っ黒な予感は仕方なくさて置いて、私と真名は心ならずも恒例になってしまった感のある英国旅行へとジェット旅客機で御招待されてしまった。
今回の装備は魔法のベルトポーチに武器弾薬や警備用ゴーレムだけでなく、２週間分の食料と大型冷蔵庫と中華鍋と中華包丁までをも詰め込んだサバイバル仕様である。
真名は拳銃型エアガンを隠匿用の呪符で隠して持ち込んでる他にも１０ペンス硬貨の束を持ち込んでいるらしいが、私が軽く見た程度では何処に携帯しているか解らない。
……考え過ぎで終われば笑い話になる、のかな？
ともあれ、そんなこんなで退屈な空の旅は腹が立つほどゆっくり

と過ぎて行った。
余談ではあるが、魔法で毒見と魔法探知をしてから周囲の敵と飛行機の状態に気を配りつつ食べた機内食は、どれもしみじみと不味かったのを記しておこう。
……舌が肥えてしまうと、こういう時に嫌になるほど厳しいなぁ。
ロンドンで私らを待ち受けていたのはドネット・マクギネス女史。明石教授の知人らしく、私から見れば確実に1回り以上歳の離れた綺麗な御婦人だ。
思考してる途中で微妙に悪寒を覚えたのは置いておく。
ともあれ、列車に乗り換えてウェールズまで移動。
毎度思うが、前回と今回は特に移動に費やす時間が勿体無いとの感を拭えない。
とは言え不用意に長距離転移技術を公表なんてできないし、難しい限りの話である。
今回で呼び出しが終われば良いがと溜息を吐く私なのであった。

一方その頃、麻帆良学園都市では……
「お嬢様、お待ち下さい！」
「いややっ！」
綺麗な着物で着飾って髪まで結った木乃香が、サングラスを掛けた黒服の集団に追い回されていた。
「どうするでござる？」
それを木立ちの物陰から見守っている2人の少女。
彼女らが浮かべている表情から察するに、心情的には木乃香の味方をしたいようだ。
「あれでも一応表側の人間なのよねー。学園長の実家の人達らしいけど」

裏……魔法関係の連中相手になら躊躇い無く忍んで無い忍者娘に助太刀しに行くよう促していただろうが、昼日中に一般人相手に立ち回らせるのには些かの問題はある。

「分かったでござる。何とかするでござるよ」

しかし、それでも何とか助けてみるとの返事だけを残し、相方の隣からシュタッと忍者娘……長瀬楓が姿を消す。

その途端に木乃香と黒服達がモクモクとした煙に包まれていた。

恐らくは煙幕玉でも使ったのだろう。

どうやら自分の出番は無いらしいと踏んだツインテールの少女は、懐に入れた手で掴んでいた1枚のカードを離し、ホッと一息吐いたのだった。

が、悪い時には悪い事が重なるもので。

「なっ！？」

気を抜いた途端に何処からか飛んで来た殺気混じりの真空刃を避け損ね、ツインテールの少女が背にした木ごと彼女が着ていた服の左袖が深々と切り裂かれてしまう。

もしも微動だにできなければ、左肩から斜めに胴体を真っ二つに切り裂く軌道だったので、少女を殺すつもりで放たれた一撃なのは明らかだ。

だが、少女の身体には傷一つついてはいない。

何故ならば、少女の名前は神楽坂アスナ。

完全魔法無効化能力を有する亡国の王女だからである。

「何なのよ、いったい！？」

普段から装備している魔法道具を用いて人払いと認識阻害の魔法を発動させ、得物を用意する隙を窺うが、眼前の敵は其れを許してくれそうに無いほど気配が刺々しい。

「お嬢様を狙う奴は、私が討つ」

大太刀を右肩に背負う様に構えた剣士の姿にどこか既視感を覚えつつ、アスナは無手で戦う際の心得を必死で思い出そうとする。

だが、大きく切れ込みが入れられた木がゆっくりと倒れ、煙が晴れて木乃香の姿が消えてるのが見えると、少女は大太刀を持ったまま残像を残すほどの高速で戦場を離脱した。
「どういう事？　……って木乃香の護衛しか無いわよね。頭痛っ」
意図してのものかどうかは分からない連絡の不備。
それが如何なる事態を引き起こすのか少し想像してみただけで、アスナは激しい頭痛に襲われてしまうのだった。

「血筋と才能だけで結婚相手を選ぶ気は無いです」
お見合い会場に着くや否や相手側の親族に向かって開口一番こげな台詞を吐く小娘。
間違いなく反感は買っただろうが正論のうちであろう。
「ましてネギ君は未だ子供です。今から政略結婚の枠をはめるのは可哀想です。アーニャさんにも悪いですし。……なので今回の話、私はお断りさせていただきますです」
頭は下げず、堂々と容赦なく宣言して踵を返す。
我ながらネギ少年に会って行く気など毛頭無いと全身で表現しているかのようだ。
ちなみに私の眼前に立っているのはメルディアナ魔法学校長とネカネさん。見合い会場となっている料理屋の席で待っているネギ少年の世話はスタンさんがやっているらしい。
「そうか。そこまで言うんじゃ仕方なかろう」
引き際は案外あっさりしていたと言うか、今回の御膳立てが彼の発案では無かったと思わせる安堵みたいなものを感じて少しだけ首を傾げる。
「では帰るです」
挨拶もロクにせず、せっかくの歓待の用意をもふいにしてしまうのに抵抗はあるが、それよりも今は一刻も早く麻帆良に戻りたい。

この時期は超の帰還と刹那の入学があるから目を離したくないってのに……

おのれ学園長、許すまじ。木乃香のトンカチで叩かれるが良いよ。

帰り道は案内の人がいない正真正銘の2人旅になった。

日本ほど精密なダイヤで動いていない列車に揺られロンドンまで戻る。

……ちなみにあそこで決裂させた影響で帰路の旅費は自腹だったり。

そんな列車の中で、微かに空気が変わった。

「真名」

「了解」

騒ぎは起こしたくないし、できれば素通りして欲しいところである。

「初めましてと言うべきだね、ミス・ヤツカ」

が、そういう訳にもいかなかったようだ。

できれば現段階で接触したくなかった人物の一人、白皙の美少年が其処に立っていた。

「初めましてです。フェイト・アーウェルンクスで良かったです？」

事も無げに挨拶をしてみたら、何故だか驚きの表情をされてしまう。

真名と私への警戒を解くほど動揺してないっぽいけど、何をそんなに驚いてるんだか。

「その名前をどこで知ったんだい？」

「支援物資を送ってるＮＧＯの事は幾らか調べてるのです」

「なるほど、道理だね」

原作知識などと言うアレな理由ではなく、非常にまっとうで妥当な説明を受け、とことん分かり難いながらもホッとした雰囲気を若

干帯びるフェイト。
　イスタンブール魔法協会所属の西洋魔術師でＮＧＯ『白き大地』の中核メンバーの一人と言う比較的表に近い顔はともかく、テロ集団『完全なる世界』の幹部って正体を知られていたら流石に色々と拙い事になるしね。
「用は何です？　人払いで誤魔化せる時間には限度があるのです」
　そんな彼が私にわざわざ挨拶してくるのにロクな用事が無いのは確かだが、かと言って引き伸ばすのは更なる面倒事を呼び寄せてしまうフラグでしかない。
　速やかに聞き出して対処するのが、最も最悪から遠いはずだ。
「是非、僕達に協力して欲しい」
「嫌です」
　ばっさりと一言で叩き切る。
「逆なら考慮するですし、援助物資についても幾分は考慮するですが、その誘い方でうなづくほど軽率じゃないです」
　が、いきなり殺気めいたモノを向けてき始めたので、なだめる意味もかねて語を繋ぐ。
「それなら僕の方から聞くけど、何に協力して欲しいのかな？」
「魔法世界の崩壊を防ぐ計画です。理論的には千年以上寿命が延ばせるです」
　ピシリと空気が凍る音が聞こえた気がする。
「どうやってだい？」
「科学的に発生させた電気を魔力に換えて経年損失分を補填するです。魔法世界を包む大結界を術式解析してのメンテナンスも考えてるです」
　フェイトがポカンと口を開けたままの図は正直見物だ。
　いまのうちにアリアに私の視覚情報を記録しといてやろう。
「即断できないなら持ち帰っても良いです。敵対されなければ気にしないです」
　自分達の計画を話そうか否か迷ってるように見えたフェイトに助

け舟を出してやり、今直ぐ彼等に襲われる確率を私に出来得る限り低下させる。

ん？　何気に人形を逸脱し始めて無いか、こいつ？

「分かった。では、別の用事なんだけど……」

どうやら迷いは晴れたのか、真っ直ぐに真剣な瞳で見詰めてくるフェイト。

殺気は感じないが、妙な気迫を感じるのは気のせいか？

やっぱ人形の枠に収まって無いな、こいつ。

「君のところの珈琲豆を売ってくれないか？」

……今度は私が驚きを晒してしまう番だった。

そんなに気に入ったのか、あの豆が。

「長く置くと味が落ちるですから、まほネット経由で売って差し上げます」

「ありがとう」

しかし、彼とこんな関わり方して良いんだろうか？

足下すくわれたり、フェイトの従者達に敵視されたりしなきゃ良いんだけどね。

第３６話（後書き）

あちこちで色々陰謀が動いておりますが、今回はこんな感じです。
刹那が狂犬っぽくなってますが、彼女の視点だと無理も無いんですよねぇ。
学園長が刹那に何か余計な発言をした可能性も大いにありますがｗ
原作での学園長が木乃香にお見合いをさせるのは、裏にも影響力がある名家と婚約させる事でネギの仮契約候補から外させる目的があったんだとすれば少し同情できそうです。
木乃香が逃げたければ逃げられる辺りの手緩さにも意味があるような気もしますが。

第37話

「どないしたらええんやろー。せっちゃん、ウチが近付くと逃げてまうんよ」
「なら、私とアスナと双葉で捕獲してしまいますです。お話するのはそれからです」
なんて会話の後、私の本体が英国から帰国したのを待って計画は始動した。
近衛木乃香の幼馴染で神鳴流剣士の桜咲刹那、彼女を我等の仲間に引きずり込む為に。
途切れたと思い込んでる絆を、しっかりと繋ぎ合わせる為に。
……イレギュラーを起こしたせいで西からの刺客とかに変わってないと良いけど。

作戦的には割りと単純。
予め結界や罠を用意しておいた人気の無い森の中まで、隠れて護衛しているつもりの刹那を木乃香が我が身を餌に誘き出し、私とアスナを仮契約カードで召喚する。
アスナは刹那を牽制、私は双葉をドール契約カードで召喚しつつ、隠し武装を展開した木乃香と協力して退路を断ち、主従4名が協力して捕縛を行う。
言葉にすればこれだけであるが、実際の効果は抜群だった。
マトモに戦えばエヴァですら楽勝とはいかぬ刹那を、あっさりと捕縛できたのだから。

「ごめんなー。ホントはこんなことしたくなかったんやけど、せっちゃんウチの話、全然きーてくれへんやんかー」

戦場跡の復旧をアーティファクト『七人の小人』の力を借りて手早く終わらせ、捕獲した刹那を連れて一足先に“別荘”へと場を移した皆に追いついてみれば、今まさに木乃香による説得の真っ最中であった。

「そ、それはその……」

強引な手段を使われたにも関わらず、刹那の反発は酷く弱々しい言葉だけだ。

さんざん逃げ回ってた負い目の分だけ自縄自縛に陥っているのだろうか。

「だからウチ頼んでみたんよ。せっちゃんと話し合えるよーにって」

尋常な話し合いを避けていたのは事実なので、唇を噛み締めるばかりの刹那。

涙を堪えて口を噤む彼女を縄で拘束しているのはイジメてるような気がして変に興奮してしまいそうになるが、ここで手を緩めると彼女の為にならないんだよなぁ。

「他ならぬ木乃香の頼みです。全力でかなえるのです」

故に木乃香の味方をするのが正しいと私が決めた。文句は言わせん。

「魔法も勉強したし、せっちゃんが普通で無いのも分かるよーになった。せっちゃんと一緒にいるのに後何が必要なん？」

切々と訴える木乃香が注ぐ真摯な視線に耐えかね、刹那が虚空に視線を彷徨わす。

「あ！　えっ！？　そんなっ！？　お嬢様と私みたいな化け物が釣り合う訳が…」

おまけに狼狽して自己卑下しまくるが……

「そんなことあらへんっ！」

そうは問屋が卸さない。

木乃香が其の程度の事で友達を嫌いにならないのは私で実証済みだからね。

「妖怪の血が混じった人間なんて古今珍しくも無いです。掟を気に

し過ぎなのです」
それに学園長を思い起こせば近衛家に妖怪の血が混じってても不思議ではない。
多分、烏族の掟は自分達の種族を守る為の手段だったのだろう。
「そうやでー。……せっちゃん、ウチのそばにいてくれへんやろか」
しかし、そんな理屈はポイである。
木乃香は勿論、私も、他の皆も気にしないに違いない。
「はい」
告白への返事は予想通りの諾。
村八分扱いされてた故郷より、親しく遊んでいた友を選ぶのは理の当然。
まして、その友を守る為に剣を磨き、裏切り者の汚名に甘んじているのだ。
「よかったえー」
木乃香の誘いを刹那が断れる訳は無いと見切ったのは正解だと証明された。
後は……
「では親睦会に移るです。主賓の刹那さんは楽にしてて下さいです」
少々過激で過剰な密着スキンシップをやらかすのみだ。
いやはや楽しみ楽しみ。
私達も直接参加させて貰えるかどうかは刹那と木乃香次第なんだけどね。

詳しく描写したら年齢指定が入って掲載場所が変わってしまうだろう汁まみれの刹那歓迎パーティーが行われてから1週間ほどが過ぎ、たわいない嘘を吐く日がやってくるのと同時に彼女は帰って来た。
「いや〜、久しぶりネ。ちょっと手間取ったヨ」

ボストンバッグ一つを片手に魔法世界から帰還し、向こうで中国からの留学生と言う表向きの身分をこしらえて来た超鈴音である。
バッグの中には、向こうからの土産どころか飛空艇“星詠號”までをも収容したダイオラマ魔法球がクッション材に包まれて入れられていたりするので、見た目の身軽さは全く当てにならない。
「間に合って良かったです。超がいてくれると成功率が上がるです」
「そんなに持ち上げなくても、しかり協力するヨ」
利害と目的が一致してる有能な協力者と言うのは素晴らしいの一言だ。
何せ……
「では、仮契約は何時にするネ」
私が未だ言い出していない事でさえも読み取って提案してくれるのだから。

と言う訳で開催された仮契約会。
今回の新規参加は超と刹那の2人だ。
ちなみに楓にも声を掛けたが、彼女は不参加である。
多分、限界ぎりぎりまでは自力で頑張って鍛えたいのだろう。
その気持ちは理解できなくもないので、さっそく明日から《百話法》と名付けた言語早期習得技術をみっちり仕込んで差し上げると通達したら泣いて喜んでいた。
「そりゃないでござるよ、とほほ」
……単なる泣き言だったような気もするが、気のせいと言う事にしておこう。
閑話休題。
光り輝く魔法陣の上で交わされた刹那と木乃香の濃厚なキスで顕れた仮契約カードが転じたアーティファクトは、魔力で雷光の剣身を生み出す石剣『建御雷』だった。
刹那がアスナや超と仮契約した事で現れたアーティファクトが『

匕首十六串呂』な事を考えると、木乃香と刹那の絆の深さが窺えそうな事実である。

木乃香との儀式の後で刹那が緩み切った笑顔でよだれを垂らしながら木乃香の腕に抱かれて惚けてたせいで仮契約会が一時中断したのは見なかった事にしてあげよう。

ちなみに刹那と私の仮契約で出現したのは『護法童子』。防御結界の展開と維持を肩代わりしてくれる仏像風ミニゴーレム型のアーティファクトだ。一度に一箇所しか護れないものの、自分から離れた場所にも結界が張れる優れたアイテムである。

変わったアイテムが出てきたのは多分、私と刹那の絆が特別と言うよりも、私の体質が妙ちくりんなせいだろうなぁ、うん。刹那の唇が柔らかくて美味しかったので、ついつい不足気味だった精気を分けてあげて真っ赤にさせたのは恐らく関係ないはずだし。

葉加瀬とアキラは、私達と違って刹那を主としての仮契約を行った。

しかし、それで出現したアーティファクトは2人とも何と驚きの『匕首十六串呂』。

そんなに刃物との縁が強いんだろうか、刹那ってば。

次に決行したのが超鈴音の仮契約だ。

木乃香を主とした仮契約で出現したアーティファクトは『時之大河（ホーラリア・フルフイウス）』。周囲一帯の時間操作を不可能にするという皮肉が利いたアイテムである。

アスナを主とした仮契約でも『破魔之拳甲（カエストゥス・エクソルキザンス）』というレアアイテムが出た辺りは、流石はネギの子孫だと思うが……良いのかなぁ？

そして私と刹那と葉加瀬とアキラは従者としての仮契約を結ぶ事になった。

刹那は前述の通りだが、私は『七人の小人』、葉加瀬は『力の王笏』、アキラは『医薬女神の杯』に変じる仮契約カードを新たに獲得できた。

契約主が違うアーティファクトは頑張れば同時使用できるので、

どれも当たりと言えるアイテムなのが心憎いと言うか何と言うか。
……戦闘シーンが乏しいせいか、活用してる場面が殆ど描写されてないのが残念なぐらい良質なアーティファクト達である。
って、メタで謎な怪電波は巨大な棚の上に置いといて。
ついでなので以前は見送っていたアキラと葉加瀬の間での仮契約も決行した。
ジャンケンでアキラが主と決まり、『カペラ・アルバ（白き衣）』と言う隠しポケットに物を収納しても外からは分からないと言う機能の白衣が新たな葉加瀬のアーティファクトだと知った時には、思わず選定者にＧＪと賞賛を浴びせたくなったり。
『こんな事もあろうかと』と言うのに便利そうだからなぁ、私も作ってみよう。

そして原作の状況を生み出す土台を多大に揺らがせたり傾がせたりしつつ、いよいよ私達の中学校生活がスタートする。
果たして私の学校生活は上手く行くのだろうか？
私達が進めてる計画は上手く行くのだろうか？
それは“造物主”でも与り知らぬだろう、鬼が笑いそうな出来事であった。

第３７話（後書き）

ここまで話数を重ねても未だ原作冒頭の時間まで１年以上……。

第３８話

新学期が始まり１－Ａの一員となった私は、計算外を幾つか発見した。

一つ目は、私の霊視魔法で相坂さよが視認できなかった事だ。

エヴァなら分かるのだろうけど、流石に彼女に借りを作ってまで助ける気にはなれないので、可哀想だが彼女の姿が見えてくるまで問題を放置する事にする。

二つ目は、クラスの構成人員の違いだ。

最大のイレギュラーである私、結局建造されなかった茶々丸の代わりに葉加瀬謹製のガイノイドで私の従者である絡操双葉の両名が組み入れられたのは予想の範疇内。

しかし、ブラコンになったせいで外れるかと思った雪広あやかは残留し、その代わりなのか鳴滝姉妹の姿が無かったのには少々驚かされたものだ。

……楓の立場が原作とは違う事による影響だろうか。

三つ目は、大河内アキラが水泳部ではなく、さんぽ部に入部した事だ。

魔法を知り修行を重ねて大幅に身体能力を伸ばしたせいか、普通に練習しただけの皆と一緒に記録に挑戦する気にはなれなかったらしい。それよりは比較的自由に散歩して麻帆良学園都市中の野生動物達の様子を見て歩ける方を選んだのだそうだ。

四つ目は、神楽坂明日菜が新聞配達を始めず、美術部入りもしなかった事だ。

私の護衛に専念してくれるそうなんで、夜のお礼を少し増量しておこう。

……などなど色々と細かい変化が有りはした。

とは言え、その程度の変化で此のクラスの騒がしさが減じる訳も無い。

苦笑と溜息を噛み殺しつつ、私は新しい中学校生活を満喫し始めるのであった。

あっと言う間に時は流れる。

学園祭を機に露天料理店“超包子”がいよいよ始動したのに喜び、祖兄が巻き返しの為に発表した新型ゲーム機“携帯遊駅”に対抗して直ぐさま“認店導ＤＳ”の試作機の情報が流れて来たのに戦々恐々とし、我等の担任たる高畑先生の出張の多さに頭を抱え、魔法世界を含む世界各地から来訪する患者の治療に追われ、梅雨時のうっとうしさに苛立ちながらも時は無慈悲に過ぎて夏休み。

花も恥らう女子中学生の身でありながら、今は青春を謳歌する暇などは有り得ない。

護衛が手薄な状況でフェイトと交戦すると言う危険を回避する為とは言え、こちらの計画の大目標を向こうに知られた為、どんな事態になるか全く読めなくなったからである。

こちらへの襲撃ならまだしも、世界の終わりと始まりの儀式なんて大虐殺テロを前倒し実施されたら挽回不能になる危険が高過ぎて困りものだからなぁ。

なので、“別荘”と其の中に設置した工房魔法球、アーティファクト『七人の小人』を同時起動して顕現させた１４名のドワーフ達、自作の作業ロボット達に加え、私と私の分身と、超と葉加瀬までをも総動員した突貫工事で建造に従事したモノ。

それは夏休み最終日の８月３１日になって、ようやく竣工に漕ぎ着けられた。

有史初の惑星間有人航行艦『アタランテー』を。

アタランテーは劇場版マクロスのメルトランディ軍中型高機動砲

艦を模した外形で、全長は１２０ｍと麻帆良学園都市内では運用が難しいサイズの武装宇宙船だ。
主動力には単核子炉と言う強力で高効率な物を2基、念の為の副動力に常温核融合炉を2基用意して豊富な電力を無補給で長期間得られるだけでなく、電力を魔力に換える魔力変換器をも搭載しているおかげで魔法装備を何処でも自在に使用できる。
肝心の主推進機関は予備を含めて４基の重力制御装置だ。これは、自力だけで地球重力圏を軽々と脱出可能にする夢のエンジンである。
副推進機関には当初は核パルスエンジンが考えられていたものの、派手な推進炎は隠れるのに不向きだと言う理由で魔法装備の精霊機関が搭載された。
また、武装としては艦首に固定式主砲として高出力短射程誘導集束ビーム砲を１門、船体各部に副砲として精霊砲を搭載、更に重力場を利用したバリアーや多段魔力障壁と言う防御まで施してあるので既存兵器で武装した軍隊に負ける気は更々無い。
……それでも出鱈目な個人に対して油断できないのがネギまクォリティであるが。
勿論ながら光学迷彩、電子欺瞞、認識阻害は標準装備。
おまけに高度な管制コンピュータの搭載により、それを統御可能な人間ならば単独でも運用が可能で、ダイオラマ魔法球を利用した艦内工場や艦内農場により自給能力もある。
ぶっちゃけ水さえ有れば、致命的損傷を受けるまで延々と活動できると言う現代の科学的常識と魔法的常識の双方に喧嘩を売っている化け物なのだ。
未来人の超でさえも最初に詳細なスペックを聞いた時はこめかみが引きつっていたのを言えば、コイツの無茶苦茶さ加減を少しは理解して貰えるだろうか。
しかし、まだ我等の“計画”を進めるには時期尚早である。
竣工したばかりで細かい初期不良の洗い出しが終わってないのに加え、計画に必要であろう物資の製造が未だ全部終わって無いから

だ。
　それが終わるには早くて一ヶ月、学校や友達付き合いなどを疎かにしないと言う条件だと三ヶ月余りは費やしてしまいそうだが、それは仕方が無い。
　焦れば全ての努力が水泡と化すと自らを戒め、日常生活と裏工作と必要最低限の鍛錬を掛け持ちする疲労で泥の如くベッドに沈む日々を送る私達であった。

　細かい事件はあれど致命的な事件は起きず、ちょっとした爆発事故は起きても大怪我をする人は出ず、年老いた友人達を見送る事も無かった日々が続き、冬休みが到来した。
「学園防衛網掌握しました。欺瞞情報への書き換え完了です」
「学園上空３０００m、障害物無し。進路クリア……で、良いのかな？」
　留守番として残ってくれる葉加瀬とアキラの出撃管制と情報秘匿活動のバックアップを受けつつ、私達は船出する。
　ちなみに彼女等の護衛には真名を雇って当てているので多分大丈夫だろう。
「機動戦艦アタランテー離床！　ステルスコート展開！」
“別荘”の基幹部分に用意した係留設備から重力制御で浮いた未来的外観の船が、幾重もの魔法幻影をまとって透明に変わる。
　光学迷彩、電子欺瞞、認識阻害などの複合幻影魔法たる《ステルスコート》を展開する魔法装置を作動させた事による恩恵だ。
「ステルスコート展開確認。量子通信機コンタクト正常」
　外部から各種センサーでステルスコートに穴が出来てないかを確認し、透明化装備の使用中でも維持が可能な量子通信のラインが途切れていないのも再確認する。
　ここまでの手順は夏休みの最終日から今まで何度も練習した。

本番はこれからだ。
「ビックゲート・オープン！　アタランテー発進っ！」
大型機の出入りを主眼に新規設置した直径２００ｍの大型シフト・ポータル……異層世界間を繋ぐワープゲートの出口が麻帆良学園都市上空３０００ｍに出現し、同時にステルスコートが其の大門の姿を覆い隠して誤魔化す。
そして、重力場推進によって推進炎も飛行機雲も引かぬ飛行物体が通常空間に現れた。
「アタランテー遷移完了！　ビックゲート・クローズ！」
「南へ！」
そのまま一気に天空遥か高みへ……とは行かないのが世の常だったり。
具体的には燃料問題だ。
如何に水の質量の大部分をエネルギーへと変換できるに等しい単核子炉とは言え、相応な量の燃料が無ければ長期宇宙航行なんてものは土台無理だ。
なので、いったん船も飛行機も滅多に来ない海域に出て海水を拝借するのである。
ついでに海水塩も補給できるので一石二鳥と言えよう。
「針路２－１－０に修正」
航空機とのニアミスは極力避け、貨物船や漁船なども避け、高度３０００ｍをひたすら南下し、南鳥島西方海上の日本領海内へと着水した。
天気晴朗にて波高しって言葉が似合いそうな天候だ。
「燃料と飲料水の補給が終わったら出発するです！　各員周囲に注意するです！」
着水中は光学迷彩の効果が落ちるし、対ソナー用に気泡で船体を包むマスカーの用意は無いので潜水艦や対潜艦艇が相手だと発見されてしまう危険がある。
残念ながら暖かい海で一泳ぎして遊ぶと言う訳にはいかない。

熟練の水測員相手にいつまでも誤魔化し切れると言えるほど対策打って無いし。

「アタランテー発進！　目標、宇宙！」

とは言え、今回はこっちが離水するまで横槍は入らなかったんだけどね。

「補助エンジン、メインエンジン出力半速。成層圏まで1分」

「いよいよかー。地球ってどんな風に見えるんやろー」

「テレビで見た映像とどう違うか楽しみね」

「アレは実際見てみないと説明が難しいネ」

「流石に宇宙は拙者も行った事が無いでござる」

ちなみに今回の長期遠征は、木乃香とアスナと超と刹那と双葉と楓に私を入れた7名に加え、警備ゴーレム“アルカス”7機とコバッタ型汎用作業用ロボット２０機と農園作業用人造精霊3体と言う精鋭陣で臨んでいる。

この陣容で挑んで失敗するなら、私には魔法世界の救済を一生成功できないであろう。

流石に実力不足や準備不足じゃなく、原作主人公補正や世界の悪意の実在などによる因果律補正による反発を疑わざるを得なくなるだろうしね。

第３８話（後書き）

ネギま原作の魔法世界編より少人数での作戦決行となりました。準備期間と用意した物資は比べものになりませんけど。彼女らが先ず何処へ向かうのかはネタバレにつき秘密と言う事で。

単核子炉は、別名のモノポール反応炉と言う名前で知ってる方もいらっしゃるかもしれませんが、ちょっと古めのＳＦに登場した優秀な動力源です。

第３９話

視界が青と黒の二色に大まかに色分けされた頃、唐突に歌声が聞こえて来た。
「さらば～地ｋｙ」
「宇宙戦艦乙です」
これ以上歌わせる訳にはいかないので、叩っ切るのは勘弁して貰いたい。
思わず歌いたくなる気持ちは分かるんだけど、古い歌を持ち出して来たなぁ。
木乃香は数分前に刹那に話しかけた後は、飽く事無く見入っている。
アスナを始めとする皆も景色が気になって他の事が手につかないようだ。
ワンマンオペレーション艦で良かったと、しみじみ思う。
「月の裏側までは通常航行、そこからワープ航法に移るです」
ツッコミも復唱も無いのは少し寂しいけど。

隠蔽装置の力場に隠れて月軌道へと遷移している最中に、楓から声を掛けられた。
「ところで、拙者を連れて来て良かったでござるか？」
かなり手遅れっぽい質問を。
とは言え、ここで私の存念を彼女に伝えておくのは悪い事ではないだろう。
「問題無いです。信じると決めたですから良いのです」
これまでの付き合いで彼女の人となりが信頼できそうなものだと分かったので、こちらから歩み寄って秘事の一端を明かす事にした

のだ。
「そうでござるか。では拙者もその信頼には応えねば」
そろそろ彼女に隠し事をしたままで護衛の任を続けて貰うのが苦しくなってきたと言う事情も背中を後押ししてくれやがってるのもあるしね。
姿を晒してる時は悪目立ちするとは言え、彼女は凄腕の忍者なのだ。秘密を秘密のまま隠しておくのは困難だった……とだけ触れておく。

月の裏側上空、念の為に月と言う巨大な遮蔽物を探知阻害に使えるような位置に私達の宇宙船が楽々と通過できるシフト・ポータル……時空転移門を創り出す。
「艦載シフト・ポータル発生装置稼動正常。転移門出口周辺域クリア」
「《ステルスコート》はばっちりやー」
「ステルス観測衛星、月周回軌道に放出したネ」
双葉、木乃香、超から次々上がる報告を耳に入れ、私は遂に宣言する。
……実を言えば口頭での報告は雰囲気作りと解説を兼ねた措置なのだが。
「では、敢えてこう言いますです！　『ワープ！』」
超光速跳躍航法の伝統的掛け声を叫び、我等が機動戦艦アタランテーは１０天文単位ほど先である土星軌道の外側へと瞬間移動を果たした。
後は目的の物がある地点まで観測と転移を繰り返せば良いだけだ。
シフト・ポータルを用いた移動速度と量子暗号通信を用いた通信速度はともかく、遠距離観測については情報収集速度が光速に拘束されるので、未知の場所へ超長距離の移動をするのには高いリスク

が伴うって懸念が無ければ一気に跳躍できるんだけどなぁ。
　ま、それもこれも醍醐味とでも思っておいた方が精神衛生には良さそうだ。

　半日ほどをかけ、古典的カイパーベルトよりも若干外側へと到達した。
　かつては惑星とされていた冥王星を含む氷でできた天体が多く存在している、彗星の起源の一つと目された地帯だ。
　無論ながら、みっしりと氷や小惑星がひしめいてる訳では無いので、ちゃんと動けば充分な余裕を持って航行が可能である。
　何故に私達がこんな外縁惑星の外側まで来たのかと言うと……
「採取しても目立たなさそうな氷塊をピックアップするです」
　木星や土星の大気にダイブするより、遥かに楽に燃料が回収できそうだったからだ。
「ピックアップは終了したネ。効率的航行ルートの選定も終了したヨ」
「燃料回収装置、準備完了」
　直径が数十ｋｍ単位の岩塊でも楽々と異層世界に回収できるシフト・ポータルの魔法を応用して運搬できるからこその力技ではあるが。
「ステルス偵察衛星……いえ、偵察惑星放出です」
　いずれまた来なくてはならなくなった時の為に備え、量子通信機を積んだ偵察機を公転軌道に乗せておく。想定寿命が２０年なので、１５年もしたら交換に来よう。
　大鬼が顔を真っ赤にして笑い転げそうな事を思いつつ、私はぼうっと作業を見守った。
　小説などでおなじみの突発的なイベントは起きなかったが、平和が一番である。

そして、一部の人間以外は退屈極まりない氷塊回収作業は3日目で終了した。
燃料倉庫として維持をしてる異界倉庫の充足率は約7割だが、整形もしていない塊を此れ以上詰め込むのは困難だと言うのが切り上げた理由である。
決して其々の方法で退屈を訴えて来たアスナと木乃香に屈した訳でも、自分達が随行した理由に疑義を持ち始めている刹那と楓の溜息に慌てた訳でも無い。
無いったら無い。
「月軌道上ステルス衛星とコンタクト。周辺索敵情報取得開始」
量子通信により光ですら5時間以上かかる距離を結び、ほぼリアルタイムで月軌道付近の情報を取得する。
それをアタランテーの艦載コンピュータで分析して、デブリと接触する心配が無く、なおかつ月の裏側に出現する地点を割り出す。
「『ワープ！』」
帰路は一瞬よりは長かったが、一秒よりは短かった。

「遷移完了。ステルス衛星、所在確認」
「《ステルスコート》正常作動中ネ」
「針路火星っ！　メインエンジン両舷原速です！」
ちなみに原速は海軍用語で、私は長距離巡航用の推力を指す用語として使っている。
地球と火星の大接近から半年以上経ってるので最短距離とは行かないが、それでも1週間もかからずに火星の衛星軌道上まで到着できる予定だ。
「原速？　全速じゃないの？」
「全速だと《ステルスコート》が維持できなくなるです」
聞き慣れない言葉に言い間違いを疑ったのかもしれないが、そこ

はそれ。
　語意の説明を求められなきゃ面倒臭いので放置である。
「なるほどやわー」
　なにせ火星に着くまでにやる事は意外と多い。
　カイパーベルトで回収した氷隕石の調査記録の作成、火星表面を媒介に成立している人造異界『魔法世界』の観測、火星近傍空域などに防衛機構が隠されてるか否かの捜索。
　いよいよ今回の旅の佳境が訪れようとしているのだ。
「確かに拙者は目が良いのが自慢でござるが、肉眼では限界があるでござるよ」
「これが延々続くってのは気が滅入るわ」
「間違い探しに動体視力は関係ないですしね」
「そうなんかー。でも何か楽しいわー、こうしてせっちゃんと一緒におると」
　取り敢えず火星近傍空域を写した映像を大きく引き伸ばして罠や監視用魔術や守護者が配置されていないか、メンバーを総動員して肉眼での捜索を行っている。
　そしたら、受動式の探知魔法やレーダーでは捕捉出来なかった魔法の仕掛けが幾つも発見できてしまったので、推定有効範囲内に入る前に全てを見つけ出さねばならない。
　……最悪の場合は強行突破に踏み切るけど、それで魔法を隠蔽し切れるかの自信が無いので出来ればやりたくないんだよね。

　しかし、状況はもう少し容赦が無かった。
　向こうの監視衛星の探知手段がこっちと同様に受動的であるか、それともこちらが受信できない類の探知波を使っているだろうとの分析結果が出てしまったのだ。
「これでは強硬突入するしかないネ」
「見つかると決まってる訳じゃないので《ステルスコート》と魔力

障壁を張って、大回りして地球から見て陰になる方向から突入するです」
「重力場障壁はどうしますか？」
「迎撃されてから展開するです」
目立ち易くなるのを避ける為にメインの防御バリアーが張れないのは心細いけど、穏便な通過を企図するのに必須そうならば仕方無い。
「アタランテー、前進強速です！」
先ずは火星衛星軌道上に布陣してる敵防衛線を、こっそり抜かせて貰うとしよう！

と、思ったけど無理でした。
「フォボスに魔力反応多数。召喚魔法と推定」
センサーからの報告を双葉が冷静に読み上げてくれる。
どうやら呆気無く罠にかかってしまったらしい。
「重力場障壁展開です！」
「針路と速度はどうするネ？」
「そのままで行くです！」
「了解ネ」
「召喚魔６６６体の顕現を確認。こちらに向かっています。接敵まで３４３秒」
認識阻害と対探知魔法をまとったコウモリの羽根の生えた石像…ガーゴイルと呼ばれる魔法兵器が追いすがってくるが、５分半では手遅れだ。
「魔法世界の境界線を確定できたヨ！　データ送るネ！」
「主砲発射用意およびワープ準備です！　精霊力付与装置も起動です！」
「了解ネ！」
「わかったえー」

尖った艦首が2つに分かれて横にスライドして形成された半開放型砲身に、パリパリと放電が幾筋も幾筋も走る。

短射程誘導集束ビーム砲のプラズマエネルギーに、光と火と雷の精霊……いや、《魔法の射手》の集束矢を１９９本ずつ上乗せした、私達の最強一歩手前の攻撃だ。

私と超と木乃香が唱えた《魔法の射手》を精霊力付与装置を介して主砲の威力に上乗せして一点集中すれば、如何に強力な結界でも揺らがぬ筈が無い。

……まあ、アスナの咸卦法を付与した方が対魔法効果は強力なんだけど、それだと結界に露骨な穴が開いた上に直らなくなりそうなんで、今回はパスだ。

「召喚魔、速度上昇。接敵まで４２秒」

「主砲発射です！　シフト・ポータル展開、最大戦速です！」

魔法世界全体を火星の大地を媒介にして人造異界に築いているのだから、ダイオラマ魔法球と同様にある種の結界で境界が覆われているのは必然。

その境界に主砲から放たれた強力な光の柱……プラズマビーム砲と言う大エネルギーを叩きつけ、破綻しかけた所に無理やり転移門を築いて不正規な出入り口を造り出す。

「ポータル維持限界、あと２５秒。敵第一波来ます」

石像の口から吐き出された６６６発の光線がこっちに殺到するが、アタランテーの重力場障壁は、見るからに物騒な光線をことごとく逸らしてくれる。

「重力場障壁、出力３１％ダウン。復帰まで２４０秒」

残念ながら完璧に無傷とは行かなかったようだが。

「コース修正、突っ込むです！　精霊機関も起動するですっ！」

さっきの攻撃で微妙にズレた針路を補正、もう幾ばくも持続時間が残っていない転移門の真ん中を音より十何倍も速く通過する。

火星の薄い大気でさえ充分過ぎる抵抗となってバリアごと船体を揺らすのは無視だ。

「第二波来ます」
そんな中での着弾、バリアが門の縁をこすってガリギリガリと不快な轟音を立てる。
「逆噴射最大です！　艦首起こすですっ！」
「バリアー全開ネっ！」

その日、魔法世界のどこぞに巨大な隕石らしきものが落ちた。

第３９話（後書き）

と言う訳で、変則的に魔法世界編突入です。
何処に落ちたのか、どうなったのかは今のところ秘密です（笑）。

第４０話

砂漠に一直線に３ｋｍほどのミゾが穿たれ、一方の端にはクレーターが出来ていた。
すり鉢状に抉られた穴の底には金属製らしき物体が力無く横たわっている。
他に動くものは近くには見当たらない。
しかし、幾つかの有力な勢力がクレーターへの調査隊の派遣を検討し始めていた。

だが、そんな事を知る由も無い者達までもが蠢き始めていたのである。

「つっ……」
急減速の末の硬着陸は、思ったよりは上手く行ったらしい。
時速２０００ｋｍを超えた状態で接地したバリアは、ブレーキの役目を果たしてくれたのと引き換えに配線やら魔法回路やらが焼け付いてしまってはいるが、艦橋で着席していた乗組員全員が命脈を保っているので、上々の結果と言えるだろう。
腕や足や肋骨の一本や二本、内出血の三箇所や四箇所ぐらいは何でもない。生きてさえいてくれるならば私が治せるのだから。
《別魅》で分身を３体生み出し、皆の診察と応急手当を早急に実施する。
私自身を含めたブリッジクルー７名全員の手当てが終わるまでに１分も要らなかったのは、クルーの皆の能力が尋常じゃない証拠でもあると私は思う。
「再起動完了しました」

「ヤレヤレ。酷い目にあったネ……」
「自分で受け身を取れないのがこんなに辛いなんてね……」
「わかるでござるよ、その気持ち」
「このちゃん、大丈夫ですかっ！」
「ウチは大丈夫やー、せっちゃんはどないやー？」
誰一人重傷すら負っていないのだから呆れるより他は無い。
分身に見に行かせたところ、警備ゴーレム“アルカス”は整備架台に固定していたので7名全機が無事。コバッタ型汎用作業用ロボットは２０機のうち３機が大破、９機が中破してしまっているが中枢部分が無事なので修理は可能と言う按配である。
人員的被害は最小限に抑えられたと言って良いだろう。
「ダメージリポート行くです」
ともあれ、人員が無事ならば今度心配になるのは船の方だ。
魔法世界と現実世界の双方で最強を目指した機動戦艦アタランテーとは言え、ムチャな硬着陸の影響は決して軽くないであろう。
「右舷主動力炉緊急停止中、中のモノポールは無事ですが早急な修理が必要です。障壁発生装置、メイン・サブ共に大破。重力制御装置全基作動不能。精霊機関は出力５４％までなら短時間出せます。シフトポータル発生装置中破、ただし異層世界倉庫は無事です。艦首主砲大破、副砲群は残存が左舷後方の１基のみです」
「農園魔法球、工房魔法球は無事だったでござる。中の精霊殿も元気でござった」
「梱包してた資材は全部無事だったネ」
「なるほどです」
要するに独力ではロクに逃げも隠れも戦えもしない有様と言う訳だ。
こんな状態で敵対的な艦隊と遭遇したら、ひとたまりも無いであろう事は明白。
ならば……
「「「「ロジカル・マジカル・テクニカル　我が前に開け異界の門

！」」」」」

中破したシフト・ポータル発生装置の代わりに私が分身達と協同で氷隕石を保管している異空間への転移門を開き、補助エンジンでよたよたと飛ぶ満身創痍のアタランテーを避難させるのが上策と言うものだ。

ちなみに船に留守番で残るのは双葉。

私の従者である彼女ならば、コバッタ達と共に艦の修理を進めてくれるだろうからだ。

最初のうちは私と私のアーティファクトも修理に参加するけどね。だが、修理の為とは言え此処に留まるのは下策だ。

全員で異界倉庫に逃げたところで、目標とできる適切な物が無ければ元の座標に復帰するよりなく、其処に監視や罠が置かれてたら致命的である。

故にこそ……

「後は任せたです」

「了解。任されたヨ」

以前に超へと贈呈した高速飛空艇“星詠號”が、同じく彼女への贈答品のダイオラマ魔法球の中から魔法世界に引き出される。

このフネで仲間達に目的地まで移動して貰い、満足に動けぬアタランテーごと積載した機材と物資を送り届ければ、当座の問題については解決可能と言えよう。

「閉じよ、異界の門！」

シフト・ポータルを閉じながら、私は愛しい旅の仲間達の無事を祈る。

次に此の門を開く時には、我等が艦をもっとマシな状態に直しておくと心に期して。

謎の隕石騒動に対して最も行動が素早かったのは、メセンブリー

ナ連合の偵察艦隊でも無く、アリアドネーの調査隊でも無く、ヘラス帝国の諜報員でも無く、遺跡荒らしや山師などとも蔑称されるトレジャーハンター達であった。

しかし、その彼等とて、着の身着のまま現地へ向かえる者など皆無である。

普段から食料と水と消耗品を遠征に必要なだけ揃えているなんて変人は、この魔法世界でも極少数派なのだ。

だから、たまたま別の探索行に赴く準備を整えていたパーティが予定を変更して調査に向かえた事は、落着現場近くに偶然いたのを除けば最速に近い行動と言える。

しかし、それでも彼等がお宝を手にするには遅過ぎた。

現場に残されていたのはクレーターと墜落時に本体から剥離してしまった部品の残骸ぐらいで、これに価値を見出すのは国家の調査隊か解体屋ぐらいと言えたからだ。

彼らはそれでも諦めずに謎の隕石を求めてクレーターを乱暴に探し回り、翌日に到着したメセンブリーナ連合の偵察艦隊に拘束されてしまう事になるのだった。

西の砂漠を飛び立ち、魔法世界の大洋を事も無げに横断し、僅かに残った浮き島を利用して築かれたメガロメセンブリアの信託統治領の橋頭堡たる新オスティアを迂回した飛空艇“星詠號”は、持ち前の快速と隠密性を生かして、魔法世界到着から僅か2日間で早くも目的地へと辿り着こうとしていた。

「目的地の旧ウェスペルタティア王国の首都、廃都オスティアだヨ」

そこは魔法世界を二分した上に滅ぼしかけた未曾有の大戦が終結した地域にして、その爪痕たる魔力消失現象の影響が色濃く残る難所中の難所だ。

だが、常温核融合炉で得た電気を魔力に換えられる星詠號ならば

何の問題もなく航行できるので大した障害にもならなかったりする。
「いよいよ私の出番って訳ね。案内なら任せて」
胸を張っているのはウェスペルタティア王家の遺児、神楽坂明日菜だ。
そもそも彼女の能力を無理やり悪用された結果がこの魔力消失現象であるので、ここで彼女の魔力が制限される事はありえない。
おまけに記憶が戻ってるので、王家の秘事に関する情報もばっちりである。
その秘事を狙ってアリカ女王を陥れて社会的に抹殺し、国土を掠め取った当時のメガロメセンブリア首脳部達が知ったら嫉妬で身を焼きそうな現実だ。
「拙者らの出番はここからでござったか。なるほど、腕が鳴るでござる」
魔力の減衰が激しい地域なので、戦闘での主力は自然と気の使い手になる。
竜種の様な危険なモンスターも生息しているとあれば、楓の様な有能な使い手を麻帆良で留守番させるのは勿体無いと思うは人情と言うものであろう。
「例え竜でも、このちゃんには指一本触れさせません」
同じく主力の一角を担う刹那は、羽根によって天然で空戦能力を得ているので魔力消失地帯でも竜と同様に飛べると言う特徴がある。
対大型魔物用の剣術流派である神鳴流との相性も考えれば、本当にドラゴンでも圧倒しそうな気迫を垣間見せているのが何とも頼もしい。
「ありがとなー。でも、せっちゃんも皆も気ぃつけてなー」
魔力を主体とする戦法を基礎としている為に此処では戦力として一段も二段も落ちる木乃香であるが、大出力の精霊機関をフルに動かす為に魔力を垂れ流しにしている星詠號の近くであれば魔法剣士としての実力も、癒し手としての実力も発揮し得る。
そのため彼女は、フネの防衛役を超と共に任される事になってい

た。

黄昏の姫御子たるアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア姫の道案内で、ウェスペルタティア王家の末裔たる超鈴音が操船する飛空艇が旧王都を往く。

それは、並みの人間では追跡する事すら叶わぬ険しい道行きであった。

が、諸事万端整えている彼女らにとっては朝飯前の散歩に等しい道程である。

然して大きな問題に遭遇する事も無く、墜落して廃墟と化した空中王宮深奥部の隠し部屋に厳重に封じられていたグレートグランドマスターキーを回収、同じく墜落していた墓守人の宮殿へと達する事に成功していた。

しかし……

「流石にここまでやては目立つのも仕方無いネ」

とうとう彼女らの動きが敵に捕捉される時がやって来た。

「向こうが空中艦隊を投入できないのが救いでしょうか」

恐らくは新オスティア経由でやって来たメガロメセンブリアの尖兵達である。

「魔導甲冑も魔法使いも此処では役立たずです。その分だけマシです」

良かった探し的なコメントを吐いたのは、何時の間にか異層空間から出て来て合流していた巫女服姿の千歳だ。恐らくは仮契約カードを通じて状況を把握したのだろう。

「では、どうするでござるか？」

ちなみに空中艦艇も魔導甲冑も戦闘用魔法も使えないメガロメセンブリア軍は実力の2割も出せれば良い方だし、ここらみたいな危険地帯で部隊運用する兵站負担も重い。

「叩きのめして追い返すです。あ、もし神鳴流剣士が混じってたら直ぐに報告して下さいです」

少女達は多分に一方的になるであろう戦闘を更に有利に運ぶ為、

合金と樹脂で出来た忠実で勇壮なゴーレム達を１／４８サイズから本来の身長３．８ｍへと戻し、バッテリー駆動モードで前衛に立つするよう指示を出した。装備は、電動式機関砲の“強襲突撃砲”と非魔法防御力場を傘状に展開するロッド“力場盾”をそれぞれに１つずつ。

本領が発揮できない状況の騎士団にぶつけるには明らかな過剰戦力であった。

「ウェスペルタティア王家の名において、この場より即刻退去せよっ！　さもなくば実力をもって排除するわっ！」

魔力消失地帯にも関わらず魔法で拡声されたアスナの宣告が、新オスティア総督府警備連隊第二騎士中隊２００名弱にとっての悪夢が開幕した瞬間であった。

火蓋を切ったのは騎士団側が魔力消失地帯での対ドラゴン用に持ち込んでいた旧世界製だろう銃火器類による射撃と、徒歩なので軽装な騎士達による白刃閃かせての突撃だ。

しかし、甘い。甘過ぎる。

「攻撃開始ですっ！」

皆に指示を出しつつ、体内に融合したままの魔導機杖アリアの拡張オプションの一つである魔導鎧を起動すると、巫女服の上にメカメカしい具足が展開される。

前衛に立つ現代的な装甲を施されたゴーレムであるアルカスの防御力は、防御魔法抜きでも下手な装甲車よりも上なので、対戦車兵器が直撃でもしない限りは大丈夫。

そして、彼等が手に携えた電動ＢＢガンの魔改造品から一本の蛇の如く見えるほど盛大に吐き出される直径６ｍｍの合成樹脂弾は、銃口を出た途端に魔力を失うものの与えられた慣性が消える訳でもなく、騎士達に当たれば容赦の無い打撃を与えていた。

付与されていた擬似的な質量が元に戻って軽くなっているので弾

速の割りには威力は低いし、球形弾ゆえの集弾率の悪さと言うマイナス材料もあるが、それでも小口径拳銃弾をばらまかれたぐらいにまで抑制できたに過ぎない。

だが、それを防ぐ騎士団側の鎧はパワーアシストも騎乗用生物も無いせいで、比較的重装備の者でも要所のみを板金鎧で護り、他の部分を鎖帷子で補っている有様である。

その結果は、全くもって無傷のアルカス達と、辛うじて気による防御が間に合った数名を除いた騎士中隊の全員が銃弾に倒れてしまうと言う明暗を導いた。

ぶ厚い弾幕とは、かくも偉大なのだ。

そして、生き残った彼らも……

「《重砲撃》ですっ！」

私の魔導鎧から撃ち放った、契約執行でアスナの魔力を少し借りて魔力消失地帯の影響を受けなくした誘導魔弾による集中砲撃の爆発に巻き込まれた挙句、

「ろ・は、二刀っ！」

「試射試験の的になって貰うネ」

刹那が急所を狙って飛ばしたアーティファクトの匕首と、超が自律浮遊砲台から撃った極太の火線に貫かれて、力無く崩れ落ちた。

要するに退却も降伏も交渉もしなかったのが運の尽きだったと言う事だ。

魔力消失地帯でなければ封印魔法や石化魔法で済ませても良かったんだけどね。

「アルファからイプシロンまでは残敵掃討、スティグマとゼータは戻って警護です」

人を殺しておいて胸を痛めるなんて脆さを露呈する事も無く、アルカス達のうち5機に捕虜の回収を行なわせつつ、致命傷を負った者に止めを刺して回るよう指示を下す。

そもそも彼等なぞに構ってられる時間も魔力も人手も多くないので、アタランテーに載せて来た封印具の予備を用いて回収した捕虜

達を氷柱に凍結封印し、艦内に備えてある特殊合金製の業務用冷凍庫に放り込んでおくなんて安易な拘束手段を使っているが、多分そう大きな問題にはならないと思われる。

エヴァの《こおるせかい》に近い特性を持つ凍結封印を破って暗殺などができるほどの達人ならば、先の戦いであれほど一方的にはやられなかっただろうからだ。

しかし、それでも残心と周囲への警戒を忘れず、斥候兵狩りをしてる楓と落ち武者狩りをしているアルカス達に深追いしないよう通信機で指示をしてから、私は残りの皆と宮殿前に駐機してる星読號まで戻ったのだった。

第４０話（後書き）

賛否両論出そうな無双シーンですが、私は不殺に拘ろうとして窮地に陥るのは間抜けだと思っております。そういう信念を貫く大馬鹿者は好きなキャラの場合も多いのですが。

第４１話

廃都オスティアの魔力消失地帯では隠蔽魔法が働かないとは言え、メガロメセンブリア騎士団の襲撃は私達の予想以上に早く、規模も大きかった。

ウェスペルタティア王家の名を出したにも関わらず問答無用で攻撃して来た事も加味して考えると、新オスティアの総督は親アリカ派で神鳴流剣士のクルト・ゲーデルではないのかもしれない。……彼が本当にアリカ女王の信奉者だと言う証拠も無いが。

「遅かれ早かれ激突するとは思ってましたが、侮れない連中なのです」

緒戦は私達が勝ったが、向こうにとっての悪条件が多過ぎる中での激突なので今後も勝てると確信できないのが実情である。

特にヘラス帝国が派兵に踏み切って龍樹を投入して来るとか、バグの中のバグたる傭兵ラカンが介入して来るとか、完全なる世界のフェイトとデュナミスが襲って来るなんて悪夢すら想定しなきゃならんのだから、現時点で勝ったと思い込むのは馬鹿の所業だ。

ならば、皆を此処に連れて来た責任者としては、勝てる状況に持ち込まねばならない。

「修理は完了してないですが、仕方無いです」

仮契約カードを通してアスナと木乃香と超の魔力を借り、分身３体を形成。

本体も合わせて４つの口が、声高らかに呪文を詠い上げる。

「「「「ロジカル・マジカル・テクニカル　我が前に開け異界の門！」」」」

地面に直径２００ｍの円形の穴が出現して、其処から墜落当初よりは少しはマシに見えるものの激しく損傷したままの機動戦艦アタランテーが浮上。

『魔力変換器最大出力、広域散布モードです』

『了解』

ドール契約のパスを通じて艦の制御を握っている双葉に念話で指示を飛ばし、魔力消失地帯が散逸させるよりも多量で濃厚な魔力を溢れんばかりに放出させる。

単核子炉に封入されたモノポールで水を陽子崩壊させて発電し、その電気を魔力に換えると言う迂遠な方法ではあるが、手間隙かけて採取した大きな氷隕石は伊達じゃない。

多少の効率の悪さなど問題にしない勢いで、墓守り人の宮殿周辺の魔力濃度を魔法世界基準での正常なものへと戻し始めた。

「「「「閉じよ、異界の門！」」」」

アタランテーがシフト・ポータルの境界面から上に船体の全てを出し終えたのを見計らい転移門を再び閉鎖。

「直ぐにフネに乗るです！　どっちでも良いです！」

次に必然的に起こるであろう現象に備えるべく警告を発するが、時既に遅く皆は飛空艇の船上ないし船内へと避難済みであった。

素早いって言うか冷たいって言うか。

なんとなく気分で分身含めて４体でアタランテーへ避難、星詠號と並んで急速上昇。

虚空瞬動って素晴らしい。

『魔力濃度、閾値を突破。浮き島、震動開始』

予想通りの現象が予定通りに始まったとは言え、かつての大戦で地に堕ちた島々が再び空へと舞い上がる光景はスペクタクルと言うより無い。

……見物人に余裕さえあればの話だが。

『メインエンジン、補助エンジン、現状の全開です！　缶の焼け付きは私が何とかしますです！　アデアット！』

分身だけじゃなくアーティファクトで呼び出した１４名のドワーフにもお願いして重力制御装置と精霊機関を動かしたまま間に合わせで応急措置を施してゆく。

だが、それでも間に合わずガダンと大きく揺れたのを最後に静か

になった。
フネが浮き島に追いつかれ、その上に不時着させられたのである。
『出力落とすです。艦のバランス維持優先です』
最悪の危機は一応脱したらしいと見て、ドワーフの皆に礼を言って戻って貰い、分身を回収し、艦橋に顔を出して星詠號と墓守り人の宮殿の位置関係を確認。
予定との齟齬は、多分修正範囲内だ。
「後を頼むです」
「はい、お任せを」
アタランテーを双葉に任せ、私は皆と合流して宮殿の上空を目指す。
其処こそが今回の旅における真の目標地点なのだ。
一世一代の大博打、それこそを打つ為に。
失敗した時の保険となる策を皆に頼んであるとは言え、負けられない賭けに臨む為に。

何の因果か、この世界に生まれ出でる事が出来た。
アスナの助力でここまで来れた。
木乃香が私を支えてくれた。
超が未来を譲ってくれた。
葉加瀬の手伝いが私を強くしてくれた。
アキラが心配を減らしてくれた。
刹那がモフモフさせてくれた……もとい、木乃香と私を結ぶ契機となってくれた。
楓の助力が私達の道を拓く助けになってくれた。
双葉が、魔導機杖アリアが、別荘で留守番してるフィーリアが……
私の大切なものたちが、幸せで過ごせるよう。
そんな願いと思いを込めて。
造物主の掟の最高位階たるグレートグランドマスターキーを構え、

木乃香を始めとする契約主とアタランテーの動力炉から供給される魔力を背にし、声高らかに唱える。

「ロジカル・マジカル・テクニカル！　創始の血筋と最後の鍵に掛けて！　復活せよ、造物主（ライフメイカー）！　我が血肉は汝が血肉なりっ！」

目の前に展開された曼荼羅っぽい感じの複雑な立体的魔法陣の中心に現れ出でた、召喚されたか復元されたかは解らない黒いローブをまとった人影……造物主であろう存在を両腕でしっかりと抱き締める。

同時に幻獣朗のスキルと機工女神の特性を発動し、私と人影とを1つに融合した。

「くっ……」

このプレッシャーと流れ込む記憶の量から考えて本物の造物主だな、彼女は。

意識をしっかり保ち、造物主に消し飛ばされて乗っ取られないようにしないと。

彼あるいは彼女の２６００年の絶望なぞ、古代の聖地を次々破壊して魔力供給量不足を引き起こした挙句に知識の断絶までやらかして、だと言うのに魔法技術の常識だけに凝り固まって事態の解決ができなくなった馬鹿どもに振り回されただけの話なのだから。

私が生まれる際に追体験した地獄が如き経験、主にドクター・モヒカンと名も無き機工女神が味わい尽くした辛苦に耐えた私が堪え切れぬはずがないのだから。

例え国家からの過度な干渉の阻止と魔法世界の保守管理をやるのに此れ以上の良い手を選ぶ時間的余裕と武力が私に無かったからだとしても、それでも私なりに納得して選択した道なのだから。

ここで私が負ける訳にはいかないのだ。

『なるほど、ではやってみるが良い』

造物主の意識が私の心の奥底に引っ込む直前、そんな言葉が聞こえた気がした。

造物主の復活と継承の儀式が終わり、魔力の多量散布の効果が現れてくると、魔法世界で一般的に使われている軍用艦艇でも旧オスティア空域での行動が可能になってくる。

つまりは敵艦隊多数接近中って事だ。

要衝の地の奪回作戦とは言え、実に素早い対応に思わず敬服してしまう。

楓からの報告によると、大型艦が１０隻前後、駆逐艦などの小艦艇が５０隻、杖や箒などで自力飛行している魔法使いが２０００以上と言う内訳らしい。

それに対する味方は、高速艇と大破中の戦艦が一隻ずつと１個小隊にも満たぬ人数。

おまけに諸般の都合で此処を明け渡す選択肢が選べないときてる。

いっそ笑えてしまうほど不利に見える有様であった。

だが、負ける気など毛頭無い。

連中が考えているほど此方は不利じゃないのだ。

何故なら

「ロジカル・マジカル・テクニカル！　出でよ、守護獣たちっ！」

造物主の権限により召喚された魔法世界を護るガーゴイルの大軍団が敵勢の数的な優位を覆し、物量を生かした飽和攻撃を封じてくれるからである。

とは言え、この大規模召喚で私の魔力の残りは微妙な領域に落ち込んだ。

誰かから魔力を供給して貰わないと魔法のまの字も使えないどころか、現在進行形で進めている、以前に破綻させられたままの結界の破れ目の補修と其処に落ちた人々の救出活動すらもままならない。

何かが引っ掛かってるおかげで破れ目が広がっていないようだが、それでも早めに直さないと不味い事になりそうなので、怖くて救助も補修も後に回せないのだ。

「木乃香は私のサポート、刹那は私達の護衛、超はアルカス達とアタランテーの護衛、アスナと楓は遊撃を頼むです」
墓守り人の宮殿が修復されてるんだったら其処にこもるって手も…
アレ？　マスターキー持たせてあるはずのガーゴイルも混じった守護獣の群れを盛大に薙ぎ払った放電混じりの横殴りの竜巻って、なんぞ？
「性懲りも無く蘇えりやがったか、造物主っ！　待ってろ！　殴り飛ばしてやるっ！」
「待て馬鹿者っ！　状況を良く見てだなっ！」
「お師匠、アリカを頼むっ！」
聞き覚えは全く無いが、心当たりが有りまくりな会話が竜巻の起点から聞こえて来る。
「食らえっ！　サギタ・マギカ・セリエス・フルグラーリス！」
宙を蹴って此方に跳んで来る赤毛で美形の魔法使いから、短縮詠唱にしては出鱈目な数の強力な雷属性《魔法の射手》が飛来するが、大規模儀式魔法を行使してる最中な私に避ける術など欠片もありゃしない。
造物主の掟も、今は不完全な『完全なる世界』に囚われた人達のサルベージに能力の殆どを回している為に防御に使うのは無理。
魔力障壁だって、木乃香から回して貰ってる魔力で自動的に発生する分以外はカットして儀式に注ぎ込んでるからアルミの５ｍｍ板ぐらいの強度があれば良い方だ。
結論、私は死ぬ。
「はあっ！」
助けが来ない限り。って、今回ギリギリだったなぁ。
走馬灯代わりで打開策の検討してたけど、結局アスナがハマノツルギで魔矢をまとめて薙ぎ払って消してくれるまで死亡フラグ立ちっぱなしだったしね。
標的になった私が自分で対処し切れない攻撃に離れた位置から間に合うなんて真似ができるとは、今のアスナの速さってナギ級以上

って事か？
かなり早い時期から手段を選ばずに鍛えてきた成果ってヤツかもね。
「何やってるのよ、ナギっ！」
「あー、もしかしてアスナか？　いや～、悪そうなヤツを倒せば何とかなるかなぁと」
とても頭の悪い発言は、流石は魔法学校中退者の貫禄だ。
褒めてないけど。
実質は小学校を自主中退と言うと更に格好悪いけど。
英雄様が取り敢えずやった攻撃で滅ぼされかけた魔法世界、乙。
おっと、気が強そうな美女と小柄な男性の二人連れが追いついて来たな。
「お初にお目にかかるです。私の名は八束千歳、またの名を当代の造物主と言うです。救助作業が終わるまで対応がおざなりになるのは勘弁して下さいです」
「フィリウス・ゼクトじゃ」
私の名乗りに応えたのは爺むさい少年の方で、もう一人である美女はアスナの方を見て凍りついたように動きを止めていた。
「お…お姉ちゃん？」
あ、アスナの方まで固まった。
彼等の説明と説得、大変そうだなぁ。
ま、取り敢えずやる事は一つか。
「敵艦隊後退に合わせてこっちも宮殿内に退くです」
防衛拠点をまとめてしまわないと人数的に長期戦はきついのだ。
しっかし、なんで此の３人が今のタイミングでやって来たんだろう？
メガロメセンブリア先遣艦隊の残存艦は、浮き島群の外縁部にあ

る新オスティアへと退却したらしい。新オスティア総督府の戦力と併せれば、未だ最低でも旅団クラスの戦力は残っていると見るべきであろう。

おまけに要塞橋グレートブリッジから陸路で援軍が送り込まれて来る恐れもある。

戦力の質はともかく、量の方では圧倒的な敗勢と言えるかもしれない。

「造物主の掟が気軽に戦闘目的で使えるようなアイテムだったら簡単だったです」

魔法世界を保守管理する為のメンテナンスツールを逆用して世界に歪みを起こし、強力な戦闘力を振るうのが『造物主の掟』での主な戦い方である。

それが意味するところは、節操無く大きな現象を起こせば魔法世界が破綻し、崩壊させてしまう危険があると言う事であった。

住人の全てを拉致し、夢と言う麻薬浸けにしてしまうのでなければ多用は禁物なのだ。

かと言って、造物主の掟を使わずに大量の召喚魔を戦線投入するには其れ相応の消耗を強いられるのは必定なので、こういう準備期間の短い事態でアテにするには不向きである。

結果として物量差を見せ付けられそうな破目になっているのだった。

「そうではないのだから、前向きに作戦を立てるべきだナ」

「それより先に事情を聞かせて貰えるか？　こちらとしても態度に困るのじゃが」

具体的な作戦会議へ移ろうとした超を、ここまで同行して来た３人の意見を代表するかの如くアリカ女王が私達に疑問をぶつけてくる。

ちっ、なし崩しに巻き込む作戦は失敗か。

ならば簡潔明瞭に説明してみよう。

「魔法世界の延命に成功し、それに賛同した先代造物主から譲位さ

れたです。でも其れをメガロメセンブリア元老院が狙ってるので、我が身と此の地を守る為に戦うです。此の地を守る理由は、此処が魔法世界を維持する要石だからです」

三行で。

「なるほど。だからメガロメセンブリアの占領統治から脱してウェスペルタティア王家を復活させたいと言う事じゃな？」

「はいです。既にアリカ女王へ罪科を着せて処刑した事件を始め、当時のメガロメセンブリア執政官一派がヘラス帝国の急進派の一部と手を組んで大分裂戦争を始めさせた事、政敵で穏健派のマクギル議員を暗殺させた事、アリカ女王の父王を洗脳して彼等の思い通りの駒として戦争原因を作らせた事を、まほネット及び魔法世界の各国各メディアに暴露してあるのです」

「十中八九、元老院は黙殺して派兵してくるだろうガ、大義名分にはなるネ」

「アリカ女王の汚名の一つとされた奴隷法も、元老院が難民を字義通りの奴隷階級にしようと言う計画の先手を打ち、実質的な労務契約にした策だったと広めておきました」

更に私、超、双葉の順にこちらの情報工作の現況をすらすらと。

あ、ナギとゼクトには絶句されてる。

紅き翼は情報戦苦手そうだから仕方無いかも。アリカ女王は苦笑してるけど。

「こちらとしては、墓守り人の宮殿の使用権と原則的な行動の自由さえ貰えれば問題ないです。国王役は専門外なので引き受けてくれると助かるです」

私が女王役の切り取り強盗やって僭主呼ばわりされるよりも外交的に楽だしね。

その場合はアスナを嫁にして最低限の体裁は整えるんだろうけど。

「……引き受けよう。元より、ここは私の国じゃ」

しばしの沈思黙考の末、アリカ女王は私達に協力してくれる事になった。

造物主の力を両大国のどちらかに渡したら洒落にならない事態になると言う私の懸念を共有してくれたかどうかは不明だけどね。
そして、その決断は更なる連鎖反応を引き起こす。
「よっしゃ！　そうと決まったら俺も手伝うぞ！」
「この世界を滅ぼさず救い続けると言うのなら、ワシが手を貸さんはずあるまい」
おおっぴらにアリカを処刑しようとした連中と戦えるので血が騒いでそうなナギ・スプリングフィールドと、彼の師匠たる大魔法使いフィリウス・ゼクト。
前大戦で最強を謳われたツワモノ2名が、今度もまた世界を守る為に立ち上がった。
とは言え、アリカ女王もナギもネギって言うアキレス腱があるからなぁ。
独立戦争が本格化する前に、お忍びで迎えに行って貰うべきだろうか。
「墓守り人の宮殿の機能回復にアタランテーの修理、王宮跡のゲート確保、戦力拡充に宣伝工作……事前に軍需物資の用意が終わってなかったらと思うとゾッとしないです」
他の懸念材料にも思いを巡らせて、私は自身で選んだ運命ながら少しだけ後悔した。

第４１話（後書き）

オリ主のチート化加速中（笑）。ネギが麻帆良に来る前に彼の両親が助かったＳＳって割りと異例だと思います（爆）。石化した村人が助かったヤツなら見たことあるんですけどね。

原作だと造物主がナギボディになってるみたいですが、本作では主人公が融合する為に造物主を召喚した際にナギが完全なる世界に放り出されたとしております。

また、本作では出す機会が無くなりましたが、主人公の意識が乗っ取られた場合は造物主ごと封印する計画でした。

第４２話

魔法世界の崩壊を止める事とアスナを助ける事を両立させる為に我が身を生ける人柱と為していたアリカ女王と造物主を封じる人柱となっていたナギ・スプリングフィールドの２人は、その役目から解放された翌日に旧オスティア空中宮殿にあるゲートを使って麻帆良学園地下へと転移した。

地球側からネギとあの村に住んでた住人達を連れて来て貰う為だ。

あの悪魔襲撃事件がメガロメセンブリア元老院主流派の密命による陰謀だと話せば、それなりの人数が来てくれるかもしれない。楽観は禁物だけど。

超と双葉は機動戦艦アタランテーの修理、アスナと木乃香とゼクト氏は墓守り人の宮殿に備わっていた防衛機能の復旧で手助けをして貰っている。

刹那と楓、それに背にフライトユニットを追加装備した警備ゴーレム“アルカス”は新オスティアに集結中らしいメセンブリーナ連合艦隊を牽制しつつ警備中だ。

小型艦なら単独でも潰せるし、大型艦でも２～３名で連携すればあっさりと撃沈できてしまう面子に出張って貰っているので、彼女等を抑えられるほどの質か量が用意できないと積極的に攻め気を見せる気になれないのだろう。

こっちはこっちで王都オスティアの一角と其処に住む市民を盾にされてるも同然なせいで気軽にもぎ取りに行く訳にもいかないんだけど。

明らかに手が足りないのだ。

なので、宮殿内で冬眠させられていた３名の守護者を活動状態に戻すのと並行して、とある人物達に手持ちのツテを辿って連絡をつ

けてみた。
「あの時の女の子が百合ハーレムに走るとは。薄々そんな予感はしてましたよ」
そのうちの一人、薄笑いを浮かべフード付きのローブを愛用する爽やかで胡散臭い青年の言い草は失礼な口調だが事実なので、にこやかに出迎えておく。
「良く来てくれたです。アルビレオ・イマさんと呼んだ方が良いです？」
「クウネルとお呼び下さい、造物主」
お互い目までは笑ってないけどね。
「協力していただけると考えて良いです？」
「ええ。こんな面白そうな事は見逃せません。私自身あの結末には思うところがあったりもしましたし」
長く苦しい戦争の果てに更なる辛苦を民草に強いるのを良しとしなかったアリカ女王の為に矛を納め、彼女を処刑場から救出しただけで済ませたのは当の紅き翼である。
だが、不満を全身で表現した挙句に飛び出したクルト少年ほどではないにしても、やはり彼にも何かしらの不満が鬱積しているのだろう。
彼の口元に浮かんでいた笑みは、酷く冷たいものに見えた。

次に面談を行えた人物への接触は、多少のコネはあったにも関わらず苦労した。
「君から僕に連絡が来るとは意外だったよ」
「私の方は予定通りです、地のアーウェルンクス。いえ、フェイト」
表向きの活動をしてるＮＧＯ団体へ援助物資を送っていたルートが未だ生きていたとしても其れが当局に察知されてる恐れは濃厚だったので、級友のザジさんに手紙を届けて貰うよう頼んだのが功を奏したようだ。

それを見たフェイトが様子見の偵察に来たつもりだろうが、ただでは帰さない。
「私が造物主を継いだです。私に協力するです」
一瞬だけ造物主としての威圧感を解放して見せると、どこか余裕を漂わせていた彼の背筋がピンと伸び、慌てて右膝を付いて頭を垂れる。
「わかったよ。いえ、わかりました造物主様」
主命に従う人形としての在り方が骨身に染みているらしい。
造物主の記憶によれば、忠誠心のパラメータを操作して上げてはいないらしいけど。
「以後は造物主との呼び方は控えて欲しいです。言葉遣いも公務の時以外は崩して構わないです。堅苦しいのは苦手です」
「わかったよ。じゃあ、マスターって呼ぶって事で良いかな？」
「それで良いです。フェイトには完全なる世界から私に従う者達だけを集め、こちらに合流させると言う任を与えるです」
「……僕の知ってる限りだと１０人にもならないと思うけど、それで良いのかい？」
「欲得ずくで戦争を起こしてた連中なんて要らないのです。そいつらが私の事を知れば身柄を狙ってくるに違いないので、対処が面倒なのです」
「確かにそれはあるかもね。わかった。さっそく話をしに行くよ」
「頼んだです」
こうして『完全なる世界』の中核、原理主義派とでも言うべき『造物主の命令を尊重する連中』への調略の第一段階は終了した。
後はデュナミスと、ザジの姉で魔族のポヨ・レイニーデイを説得すればどうにかなると信じたいが、フェイトの従者の少女達へのケアも何か考えとかないと駄目かもね。
ま、それは後で会った時にでも考えれば良いか。
しかし、私は気付いていなかった。
フェイトにマスターと呼ばせているせいであらぬ誤解を招く事と、

色々な人間に対して私を造物主とは呼ばせないようにする事に失敗してしまう未来が訪れてしまう事を。

そうやってエース級の戦力拡充に努めていた訳ではあるが、戦争は正面戦力を担当する精鋭部隊だけで出来るものではない。

前大戦での決戦の舞台となった墓守り人の宮殿の近くで戦い《世界の始まりと終わりの魔法》に飲まれてしまった兵士達を救出し、その一部を新生ウェスペルタティア王国軍や義勇軍に編入できたものの、全く頭数が足りていない状況ではあった。

では何故助けた全員を仲間にしていないのか。

所属国への忠誠心が旺盛で寝返りの危険が否めないと言う人もいる。

家族や恋人がいるであろう国と戦いたくないと言う人もいる。

しかし、それよりも多かったのが『自分の思い通りになる夢ばかり見続けたせいで、現実に対処する能力に欠ける』と言う問題だらけで使い物にならない人達だった。

是非ともポヨ・レイニーデイ女史に見せて感想を聞いてみたいものだ、と原作での彼女の台詞を思い起こしながら考えるが、それは今はどうでも良い事だ。

閑話休題。

と言う事で、質・量ともに兵員の拡充は急務と言うのが我々の共通認識であった。

だが、元々からしてウェスペルタティア王国は多くの強兵を養える国ではなく、歴史と伝統だけが売りの小国とされてきたのだ。

普通の方法で魔法世界最強を謳われる軍事国家メガロメセンブリアを中核とするメセンブリーナ連合の強兵に対抗できる兵士を徴募できるはずがない。

故に採るべきは普通じゃない方法である。

具体的には、造物主になった事で遥かに遠くまで動かせるようになった私の分身を麻帆良学園に派遣して、私達が旅立った時から今まで延々頑張って造り続けられた戦闘用のロボット軍団８００体と５０m級武装飛空艇２隻を葉加瀬の手から受け取った事だ。

整備用の予備部品を含めた全部を超から借りてきた携帯用ダイオラマ魔法球に突っ込めば輸送も簡単にできるので、これで当座は一息吐ける見込みが出てきた。

戦闘用ロボットは稼動し始めてから間もないせいか、姉機である御市や双葉ほどの自律判断能力は未だ備わっていないが、下っ端の雑兵として見れば十二分に強力だからだ。

それに比べると武装飛空艇は魔法世界の軍隊で使われてる同級艦と総合的には大差ない性能なので見劣りするけど、それでも輸送手段としては有用だから助かるしね。

かてて加えて、どうせなのでウェールズの村から私に恩を返す為に麻帆良へと来てくれていた魔法使いにも声をかけてみたら、そのうちの１名……ジョン・デイカーと言う名前の人が参戦を約束してくれた。有り難いものだ。

あ、そう言えば私達は賞金首になったらしい。

麻帆良の学籍までは消されてないものの、余り表立って歩いていたら学園長でも庇えなくなるだろうとのこと。

ウチの会社はメガロメセンブリアのクソ野郎が私の持ち株とスイス銀行に預けてる以外の口座を、私の個人預金含めて差し押さえしようと企んだらしいが、葉加瀬が電子戦で普通に撃退しておいてくれたらしい。

闇に隠れて他人の金を掠め取ろうなんて所業の何処が『正義の魔法使い』なのだか実行犯に聞いてみたい気は凄くするが、まあそこはそれ。

長居するとロクな事にならなさそうなので、今までに溜め込んでいた多量の糧食や武器弾薬や修理用資材をダイオラマ魔法球に詰め込んで、麻帆良地下のゲート経由で旧空中王宮へと分身を帰還させ

た。
造物主だからか、魔法世界と地球を結ぶゲートの動作を多少は操作できるのだ、私は。
そうして連れて来たロボット軍団８００体と一挙にドール契約を結ぶと、何故か“機工女神”の下位端末ユニット“機工天使”として私の配下に納まってしまった。
造物主の力を継承した事で私の中の神としての因子が強化されたせいだろうか？
マイナス面が無さそうどころか、幾分強化されただけだから良いけど。
……この子達のデータ採取しておいて、後で葉加瀬に見せないと拗ねられるかも。

現在の私達は、女王と王配な英雄不在の上、国土の殆どを占領している強大なメガロメセンブリア軍に半包囲されている。
とは言え、向こうとしても攻めあぐねているだろう事は想像に難くない。
旗揚げの時からの１２日間で、数次に渡って行われた小規模ながら激しい攻勢をゼクトの《千の雷》や超の《燃える天空》と言う戦術級の広範囲魔法で挫き、潜入して来たスパイや破壊工作員や勇者気取りを楓と刹那とクウネルとでことごとく撃滅し、大規模な悪魔の群れによる奇襲攻撃もアスナと木乃香が中心となって調伏して見せたからだ。
だが、それでも向こうの守備は破綻する気配を毛ほども見せず、故に反転攻勢の契機を掴むには至っていなかった。
こちらにも強力な援軍を用意できる当てがある以上、ここで無理押しして代替の利かない人材……いやアスナや木乃香や刹那や双葉や超や楓を失うわけにはいかないのもある。

心情的にも政治的にも純軍事的にも。
だが、忍従の日々も今日で終わりだ。
「待たせたな、みんなっ！」
「ご苦労じゃった、皆の者。造物主様もお変わりなく」
「お、お久しぶりです千歳さん」
英国まで生き別れの息子を迎えに行っていた国王一家一行が、幼少時にネギが育った村の元住人の半数近い１３５名の魔法使いを連れて帰還してきた事。
「やれやれ、千の呪文の男と共闘する破目になるとはね」
「それが造物主様の御命令ならば仕方なかろう」
テロ組織『完全なる世界』を解散したフェイトとデュナミスが、フェイトの“魔法使いの従者”５名を率いて私の配下に加わるべくやって来た事。
墓守り人の宮殿に封印されていた守護者、アーウェルンクス・シリーズの残り3体である“火のクウァルトゥム”“風のクウィントゥム”“水のセクストゥム”の開封と、造物主を継承した私に従属するかどうかの確認が終わった事。
葉加瀬謹製のロボット軍団あらため機工天使軍団の再編成が終わった事。
そう。
つまり、こちらの戦力が整え終わったのだ。
現状で揃えられる限りの範囲内でと言う但し書きが付くにしても、であるが。

これらの戦力を以って、
私達は、
新生ウェスペルタティア王国軍は、
我欲の為に魔法世界を滅ぼす計画に協力した外道から主権を奪還すべく、
我等が国土を占領し続けているメガロメセンブリアへの反撃開始

を号令した。

第４２話（後書き）

準備関連で、またまた１話消費です。これでも色々と省いてますけどね。

ロボット軍団は原作の田中さんや量産型茶々丸や多脚戦車などとは違う形状に設定してますが、詳しくは後の話の中で触れたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3257x/

我が道を行ったら明後日の方向だった

2011年10月20日01時05分発行